

奇譚クラブ

1957年 8月号

告白 恋する夫人への手紙 麻生 和夫
小説 続・潰滅の前夜 土路 草一



8月号

昭和三十三年七月三十日印刷 (第十一卷 八月号 第九十七号) (毎月一回一日発行) 昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

奇譚クラブ

昭和三十三年八月号

8

奇譚クラブ

昭和三十三年七月三十日印刷 八月号 (第十一卷 第七号)
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)

定価二百円

(送料八円)

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



IBM. 2805

奇譚クラブ最近号主要目次

昭和三十年

○十月号(復刊第一号)

【定価二百円(千16円)】

口絵	美しいドアー	四馬	孝・画
頭立二馬車	都築	数久画	
水中の女	都築	峰子画	
緊縛フォト・オンパレード	川辺砂登子		
黒のシユミーズ	伊吹真佐子		
緋のシユミーズ	萩 千恵子		
どういふポーズを	萩 千恵子		
とるの?	加賀利江子		
ボリウム	須川 令子		
ながし目	須川 令子		
朝日を浴びて	加賀利江子		
うつつ	藤田 節子		
着せ	藤田 節子		
旅の縛られ女優	藤田 節子		
悪	藤田 節子		
女性の下着について	水上流太郎		
鼻いじめの写真	北谷 英二		
奈落の欲情	久利須照雄		
洗腸器と共に	久利須照雄		
二個のイチシク洗腸	花村恵美子		
女性緊縛寸考	宝塚三三夫		
完全なる隷属	坂田 信治		
サティズム雑感	村岡 助治		
乗馬ズボンの女腹切	藤山 秀緒		
女性刑務所体験記	田辺 愛子		
少年自虐の方法	三根 耕二		
男性自虐の方法	岡村 文雄		
アブ追求三〇年の回顧	山田 正実		
幽囚十ヶ月	山田 正実		
女性切腹面に憑かれた男	伊藤 和彦		
案定礼讃	高原 正夫		
新しいコルセット	一柳真砂子		
あるマゾヒストの手帖から	沼 正三		
私の洗腸論	九州 正男		
アクロバット通信	森本 愛造		
残酷なる女性達	森本 愛造		

昭和三十一年

○四月号(復刊第三号)

【定価二百円(千16円)】

口絵	苦痛の夢	四馬	孝・画
第二次会の披露宴	宮崎昭平・画		
戦国夜盗	都築 数久・画		
ナイロスのレインコート	萩 千恵子		
「こんなポーズで？」	佐賀美智子		
お気に召すかしら	佐賀美智子		
一手首が痛いから早	加賀利江子		
く解いてエ!	加賀利江子		
黒人少女の飼育	黒岩 肇		
成る切腹マニヤの恋文	等原孫之介		
幽囚十ヶ月	菅田 一郎		
キヤルマタの美	菅田 一郎		
魔の味	菅田 一郎		
ドストエフスキイの嗜虐性	野中 愛三		
女性乗馬考	馬場 喬次		
サジスチンの独白	原 美智子		
女剣士の切腹について	青山 芳樹		
少年矯正院体験記(みせしめ)	獄 収一		
私は断るアブ・放談	水上流太郎		
完全なる隷属	坂田 信治		
鼻のアレリユード	北谷 英二		
映画の緊縛断片	緑 猛比古		
マニア誕生	坂野 上信彦		
体験告白記 お臍の研究	須藤 律夫		
残酷なる女性達	森本 愛造		
切腹願望と臍	沢 清克		
縛られた女優達	小村 金吉		
あゝこの恍惚境	小村 金吉		
シソーラ責め	永井 昇次郎		
洗腸雑記	狩井 麗作		
洋面に於ける緊縛場面	佐巻 洋策		
蜂の胸にこたえて	佐巻 洋策		
「話の肩籠」	辻村 隆子		
玉穂落穂集	松井 集		
赤い花は泣いている	松井 集		

○五月号(復刊第四号)

【定価二百円(千8円)】

口絵	素晴らしいシヨ	四馬	孝・画
モデル嬢の表情(緊縛写真集)	須川 令子		
佐賀美智子	萩 千恵子		
加賀利江子	萩 千恵子		
源やかな令嬢、メイドの拘束服	宮崎昭平・画		
スチユアードの晒し	宮崎昭平・画		
赤い花は泣いている	松井 集		
幽囚十ヶ月	松井 集		
魔の味	坂田 信治		
完全なる隷属	坂田 信治		
戦慄怪談屋敷	岸本 信治		
体験断片	岸本 信治		
築王やしき(異常体験記)	相沢 松一		
灰色のノート	矢崎 竜一		
箱 嚙	多山 美皓		
奴隷に与える手紙	森山 美皓		
奇妙な種	森山 美皓		
責めとフェチズム	加賀利江子		
魔の白鳥	加賀利江子		
お臍の研究(二)	須藤 律夫		
生理め願望	長岡 俊一		
陰花への憧憬	青山 伸夫		
玉穂落穂集	編 集		
アブノーマル・モノローグ	辻村 隆子		
拷問に笑う女	辻村 隆子		

○六月号(復刊第五号)

【定価二百円(千8円)】

口絵	美貌の屈辱	四馬	孝・画
御島の捕われ人	アメリカ雑誌		
佐賀美智子ボーズ集	愛宕羅華の萌芽		
私室のアレイ	須川 令子		
深夜のホール	四馬 孝・画		
修道院の神室	宮崎昭平・画		
大衆文学に現れた賣の描写	藤見 郁子		
赤い花は泣いている(第三回)	松井 集		
幽囚十ヶ月	春田 一郎		

○七月号(復刊第六号)

【定価二百円(千8円)】

口絵	奈子の自己愛について	門田 奈子	
洗腸問答	門田 奈子		
奴隷に与える手紙	青山 三枝吉		
私のアイディアと回想	森山 美皓		
サティズム小説で湯	菅田 一郎		
コルセットの魔力	林 義明		
マゾ・スクラツア帳より	菅田 一郎		
甘美なる被虐の幻想	菅田 一郎		
脱腸に対する私見	菅田 一郎		
小説 虐妻日記	菅田 一郎		
現代マゾヒズム芸術時評	菅田 一郎		
お仕置遊戯	菅田 一郎		
フェチシズムの文学ノート	菅田 一郎		
緊縛女性雑考	菅田 一郎		
「種」先生	菅田 一郎		
最近の縛り時代劇映画から	菅田 一郎		
お臍の研究	菅田 一郎		
玉穂落穂集	菅田 一郎		
映画に現れたムツキ	菅田 一郎		
サティズムイシクな漫画	菅田 一郎		
道化者の集まり(アメリカ雑誌より)	菅田 一郎		
ネルソン提督	菅田 一郎		
女士官	菅田 一郎		
新人モデル嬢紹介	菅田 一郎		
パイアの馬	菅田 一郎		
馬を御す令嬢	菅田 一郎		
大衆文学に現れた賣の描写	菅田 一郎		
奈子の自己愛について(二)	菅田 一郎		
幽囚十ヶ月	菅田 一郎		
お灸を据えた女の魅力	菅田 一郎		
赤い花は泣いている(第四回)	菅田 一郎		
私のコレクシヨンより	菅田 一郎		
「責め」の芝居雑考	菅田 一郎		
少年禪記	菅田 一郎		

読者原稿募集 (皆さまの共同広場建設のために)

【研究発表】

アブノーマルに関する研究や発案、小論文等、平易にして本誌の読者に興味を持たすようなもの、十枚迄、採用分には本誌三月分を贈呈いたします。

【創作】

異色ある題材を現れて立つ野心ある新人の出現を期待します。枚数は三十枚迄、未発表の作品に限る。採用分には本誌三月分以上贈呈致します。

【体験告白手記】

皆さまの偽らざる真実の叫びを募ります。枚数は三十枚程度掲載分には一篇につき千円乃至三千円の賞金を呈します。誰でも人々には一篇位は直ぐ書けるものです。生々しい体験や告白を是非お寄せ下さい。

【ポケット告白】

文体や用紙などは一切問いません。十枚以内の短い告白物を気軽に書き下さい。採用分には本誌三月分を贈呈いたします。

【映画、雑誌通信】

映画や雑誌の中で特に興味をお持ちになった事項についての通信をお待ちします。出処は必ず明記して下さい。掲載の分には本誌二月分乃至三月分贈呈いたします。

【口絵並に挿絵】

画材はサド、マゾ、流腸、切腹等御自由です。優秀なる作者には継続的に御依頼いたします。

【編集者或は執筆者への公開状】

編集者執筆者或はモデル嬢等に対しての読者の皆様からの公開状を募ります。適当なものは本誌上に掲載の上、回答を求めることとします。本誌三月分贈呈。

【私のイメージ】

熱烈奔放なイメージをどしどしぶっ放して下さい。どんな荒唐無稽なものでも奇抜なものでも結構です。採用分には本誌三月分以上贈呈します。

【実写写真】

御自身写されたものに限りません。裏面又は別紙に説明とデータをお忘れなく。採用分には相当謝礼。

【アイデア】

将来本誌にて企画すべきものの全般につき出来るだけ詳細に、掲載の如何に拘らず優秀なものには千円迄の謝礼を呈上いたします。

【私は訴える】

皆さまの胸に持っておられる誰にも云えない諸々の悩みや御意見主張等を発表して下さい。本誌ならではの取り上げないような内容のもの。採用のものには本誌二月分以上贈呈。

【レポート】

新聞記事の切り抜き或は見聞等、皆様の興味をお持ちになった事件等につきお知らせ下さい。掲載分には本誌二月分贈呈。

【読者通信】

編集者、執筆者、投稿者等への便り、前号の批評、希望、或は編集や雑誌のあり方等に関して忌憚なきお便りをお寄せ下さい。ハガキにても結構です。つとめて誌上に紹介します。

【読者交歓室】

読者相互間の文通呼び掛け、応答等の頁を新設いたしますから御遠慮なく御活用下さい。文章はなるべく簡単明瞭にお願いします。○締切は別に定めません。到着順に最近号に掲載します。原稿の第一頁には応募の種目を明記しておいて下さい。

○本誌月極購読料○

一月分一冊(送料八円)二百円
三月分三冊(送料共六)六百円
半年分六冊(送料共千二百)千二百円
一年分十二冊(送料共二千四百)二千四百円

本誌は一切書店売りは致しませんので、購読御希望の方は、直接発行所へお申込み下さい。一月分一冊、お申込みの方は必ず送料八円の御加算を願います。半年分御申込の方には景品として手札型写真三枚、一年分お申込の方には景品としてキャビネ型写真三枚を贈呈いたします。

奇譚クラブ

第十一巻第七号
毎月一回一日発行
定価二百円
(送料八円)

八月号

昭和三十三年七月三十日印刷
昭和三十三年八月一日発行

編集人 箕田 京二

印刷兼発行人 吉田 稔

大阪市阿倍野区晴明通一丁目八五番地

発行所 天 星 社

振替口座大阪五〇〇四二番

本社に対する御送金は、振替用紙を御利用の上、受領証をお送り下さい。確実に早くて大変便利です。振替用紙御入用の方は、お申込次第お送りいたします。(但し御注文品と同送しない時は、八円切手の封入を願います)

(開放した誌面を御利用下さい)

奇譚クラブ編集部

〔奇譚クラブ最近号主要目次〕

玉稿落穂集……………高村民子
被縛の切腹幻想……………高村民子
或る下着マニアの告白……………古井成太郎
潰滅の前後……………土路草一
マゾヒズム断想……………天谷盛英
H氏の奇妙な告白……………北谷英二
サデイズム小説 いで湯……………多磨義明
私はおしめマニア……………鳴竹成太郎
乙女の腹切抄……………

〇八月号 (復刊第七号)

定価二百円 (〒8円)

口絵 美しい床の間……………四馬孝・画
すべりだい……………(秋千恵子嬢)
米誌にみた緊縛面歐米式新スタイル……………北原純子・画
華々しき私刑……………藤見郁
大衆文学に現れた責めの描写……………京洛吾生
無惨絵マニア……………才昭
二等兵時代の思い出……………高村民子
被縛の切腹……………渡辺乃介
縛り絵マニアの回想……………川中敏夫
一読者としての公開状……………川中敏夫
元禄女腹切り……………真鍋四十七
「鼻」と「変型しほり」……………真鍋四十七
幽囚十ヶ月……………東田一郎
自決する従軍看護婦たち……………東田一郎
奈子のA感覚について……………門田奈子
賭けられた洗腸……………矢崎竜子
最近の縛り映画から……………嵯峨美也子
赤い花は泣いている……………松井龍子
私のコレクシヨンより……………角間幸吉
統一少年軍記……………山口幸吉
潰滅の前後……………土路草一
緊縛映画速報……………千葉栄一
最近の映画から……………白石栄一
春日ルミ様まいる……………白中友三
玉稿落穂集……………編中友三
新聞紙上に出た切腹実話……………藤森集
探偵小説新考……………東田一郎

蜂胸完成……………藤間洋子
とりこの白人娘……………藤木仙治

〇九月号 (復刊第八号)

定価二百円 (〒8円)

口絵 美しい飼育物の調教……………四馬孝・画
吊りを加味したアイデア……………北原純子・画
緊縛フット二題……………須川耀子・画
ナイフ投げの的……………BIZARより
女学生……………北原純子・画
欧米式新スタイル二題……………(2)
洗腸とおむつ……………月岡映子
恋の脱殻……………松井龍子
文学に現れた同性愛……………藤見郁
私の「ふんどし」……………松原三千代
「被虐欲」其の後……………真金殿十郎
マニアの女生徒の手記……………池田ふみ子
奈子の恋愛について……………門田奈子
沼正三の手帖……………沼正三
お灸を据える女性雑誌……………松原正三
映画に現れた拷問場面……………左巻健策
現代マゾヒズム芸術時評……………東田一郎
探偵小説新考……………本田由郎
芝居の責め、紅血欠皿……………白石春夫
最近の映画から……………菅原春夫
悦びに關する一考察……………菅原春夫
「切腹の歴史」……………松原春夫
私のコレクシヨンより……………角間幸吉
玉稿落穂集……………編中友三
最近の縛り映画から……………嵯峨美也子

〇十月号 (復刊第九号)

定価二百円 (〒8円)

口絵 北原純子十月集、壊れ易き獲物……………北原純子
刺青師の部屋、和蘭陀屋敷の謎……………現代マゾヒズム芸術時評参考資料
引廻し……………春日ルミ嬢、伊吹真佐子嬢
米誌に見た緊縛写真欧米式新スタイル……………サデイズム・シーン詳察、藤木仙治
お灸の女王コンクール……………岩瀬祥一
大衆雑誌と責め……………青山三枝吉

私の洗腸プレイ……………ラフマン
受刑生活の思い出……………福村光治
現代マゾヒズム芸術時評……………原忠正
「ますらお派出夫」の犯罪……………青山三枝吉
泥棒に縛られた話二件……………池田正一
エスキモー娘の切腹……………本間正宏
ある夢想家の手帖から……………沼田正一
「洗腸」に關するレポート……………沼田正一
締めつけられた女優達……………古賀信司
泥棒に入られた南田洋子……………古賀信司
責め絵の今昔……………伊藤晴雨
「一男色者の手記」……………矢野重八
私のアイデア「晒し台」……………矢野重八
緊縛映画速報……………千葉栄一
探偵小説新考……………藤見郁
サジスチンの半生記……………藤見郁
読・乗馬ズボンの女腹切……………藤見郁
最近の映画から……………白石秀緒

〇十二月号 (復刊第十号)

定価二百円 (〒8円)

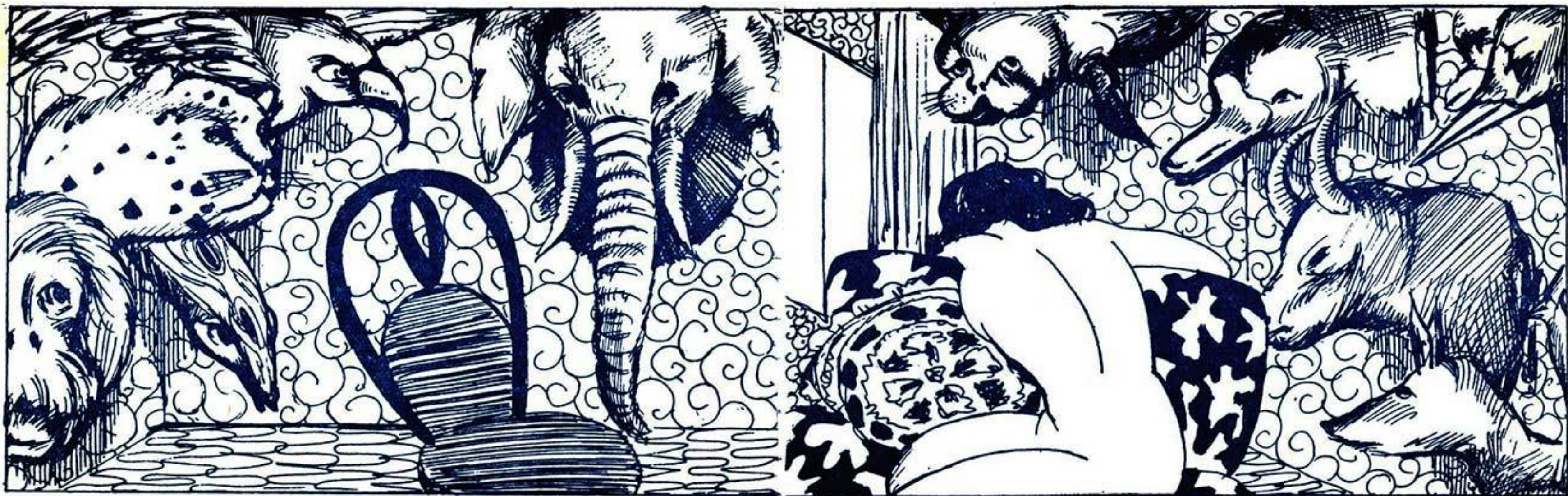
口絵 新着フット紹介(一)……………北原純子・画
「いであゆ」より……………北原純子・画
拘束服とマスク、欧米式新スタイル……………(雲井久子)
或るポーズ……………(雲井久子)
現代マゾヒズム芸術時評……………滝見子・画
滝見子素描集……………滝見子・画
文学に現れた責めの描写……………松原三千代
私のふんどし(二)……………松原三千代
異性より同性に興味……………畑村一提供
コルセット・マンボ……………林一彦
スカートの魅力……………東田一郎
牢獄の花嫁……………鳴山能平
黄色オラミ誕生……………真木不二夫
和装女の縛り責め展覧会……………岸本青柳
美女決闘場面のアイデア……………小西鉄二
腋毛礼賛……………南秀夫
女武者自刃……………沼山正三
ある夢想家の手帖から……………沼山正三

醜惡への幻想……………淡美一郎
玉稿落穂集……………編中友三
魂を病む人……………北原純子
私の告白二題……………青葉真三
家畜人ヤプー……………沼田正一
女性化願望と女性ホルモン……………古井成太郎
糸姫の体験……………高橋よしえ
最近の映画から……………白石栄一
美とワイセツの限界……………柳沢吉保
緊縛映画速報……………千葉栄一
防具使用による窒息死……………近藤正男
マゾ・クラブの結成を望む……………山田一
バスガールに硫酸……………東田一郎
告白「責めとエッチの自画像」……………越野忠正
現代マゾヒズム芸術時評……………原忠正

昭和三十一年 〇一月号 (復刊第十一号)

定価二百円 (〒8円)

口絵 新着フット紹介(アメリカ)……………(2)
花嫁受難二題……………北原純子・画
「ボウニ」分岐点の一場面……………北原純子・画
鳴門の妖鬼(水戸黄門漫遊記第十話)……………須川令子嬢
ADESUGATA……………北原純子・画
お灸せめ……………北原純子・画
欧米式新スタイル(5)……………北原純子・画
文学に現れた責めの描写……………藤見郁
花と潮風……………阿川純子
フエチに關する切抜きから……………阿川純子
黄色オラミ誕生(第二部)……………木真不二夫
大奥裸女決闘……………京洛生
電氣責に關するノート……………甲斐仁三
ある夢想家の手帖から……………沼田正一
女性切腹例抄記(上)……………田谷敬三
ある女給の体験……………日下絹子
麻酔切腹……………青葉真三
遊女八重路の責め……………本門由郎
女性角度的に……………長門雅秀
特異な角度から(折檻と拷問)……………藤山秀緒
続々・乗馬ズボンの女腹切……………藤山秀緒



奇譚クラブ 復刊第十七号 目次

美への冒瀆

加賀利江子嬢艶姿集

花魁『美吉野』の折檻

映画写真『夕立勘五郎』

映画題名、女優名当懸賞

洋画スチール二題

『聖衣』『岩窟の野獣』

四馬孝・画

加賀利江子

滝れい子・画

楓月太郎提供

楓月太郎提供

旅廻り劇団の賣場面から……………星 光一……………18

陰花植物……………島 直樹……………23

時……………麻生 保……………25

私の告白 恋する夫人への手紙……………麻生 和夫……………26

ある女給の体験……………日下 絹子……………34

高井好晴氏のアイデアに答えて……………南川 和子……………40

一輝亭雑記……………内田 武男……………42

青い浣腸器……………久利須照雄……………47

魔女裁判に関するノート……………甲斐仁参……………49

おんな白虎隊……………青山 芳樹……………56

未来幻想 家畜人ヤプー……………沼 正三……………62

マゾ小説……………沼 正三……………62

切支丹迫害物語……………沼 正三……………62

マリァ観音……………本田 由郎……………72

切腹随想……………本田 由郎……………72

「乗馬ズボン」への憧れ……………藤山 秀緒……………77

残酷な女性……………森本愛造訳……………81

創作L・T商会……………佐川 増夫……………83

「腰巻のアンケート」……………牧 高志……………90

大衆雑誌の挿絵から……………丘 一明提供……………94

私の本箱から……………星 光一……………96

灰色のノート……………矢崎 龍一……………104

おむつカヴァーと私……………原 由貴子……………110

諺のもつイメージ……………吉野 祐……………112

小屋に二人の惨死体……………高崎 勉……………115

ある夢想家の手帖から……………沼 正三……………118

『和装教室』……………白金 紅次……………120

花魁「美吉野」の折檻……………本田 由郎……………128

緊縛映画速報欄……………千葉 栄市……………131

「アイデア」ファンタジア……………田 華雄……………132

告白虹のかけ橋……………皆川のぶ子……………136

アブ・モード・オール・スクラップ……………矢桐 重八……………140

続・潰滅の前夜……………土路 草一……………148

婦女子襲撃事件の頻発……………岸本 青柳……………164

読者通信……………岸本 青柳……………168

〔奇譚クラブ最近号主要目次〕

女性の素足礼讃……………高原正夫
家畜人ヤブー(第二回)……………沼本正三
舞踊女師匠の責めの実験……………岸本青柳
最近の「縛り映画」から……………嵯峨美也子
少年期(母と子の手紙)(2)……………山口幸一郎
戦地での同性愛……………東野めづみ
サジスチンの半生記……………鷹野めづみ
「魔海の業火」……………弓鬼一郎
児童雑誌にみた惨虐性……………東野めづみ
玉稿落穂集……………編集一部
ヴェールを脱いだ肢体美……………畑集一部
「ムチ打ち」と「緊縛」……………間島真一
緊縛映画と雑誌の挿絵……………千葉栄一
〇二月号(復刊第十二号)……………
【定価二百円】(〒8円)

口絵……………
新着フォト紹介(アメリカ)……………(3)
洋面スチール名画集(四場面)……………
北原純子「捕われの令嬢」……………
先でのお仕置「猿轡を噛まれた女優」……………
たち・欧米式新スタイル(6)……………
我が異常性の記……………南秀夫
オート・スタイルの女腹切……………藤山律夫
お隣の研究……………須藤三夫
ある夢家の手帖から……………沼本正三
姫君に手を出す……………本由郎
花と潮風(二)……………北原純子
マゾヒズム見たたり聞いたり……………春木俊野
サジスチンの半生記(三)……………鷹野めづみ
秀緒の告白……………藤山正三
家畜人ヤブー(第三回)……………沼本正三
サディズムの芽……………岸本青柳
女教員の責め折檻……………本由郎
異人屋敷の裸女……………白田金田
お妾アバウト……………白田金田
現代マゾヒズム芸術時評……………辻村忠隆
話の肩籠……………辻村忠隆
フエチに関する切抜から(2)……………阿川新子
白衣の傍観者……………菅野ふみ
「スロース・クラブ会則」……………並木新一

私の「縛り美五原則」に就て……………佐渡
流暢とおむつ(二)……………月岡映子
秋のふんどし……………松原三千代
〇三月号(復刊第十三号)……………
【定価二百円】(〒8円)

口絵……………
新着フォト紹介(アメリカ)……………
スクリーンで縛られた女優たち……………
晦冥の悲歌……………四馬孝・面
習作……………栗原伸・面
浴槽の新妻……………栗原伸・面
森の小径で……………萩千恵子嬢
大映映画「魔の花嫁衣裳」より……………
我が異常性の記……………南秀夫
花と潮風……………北原純子
髪と絵……………荒尾謙介
マゾヒズム見たたり聞いたり……………春木俊野
正月映画を中心の縛られ映画……………嵯峨美也子
あふり責め奇聞……………本由郎
フエチに関する切抜から……………阿川新子
ある夢家の手帖から……………沼本正三
悪魔の勝利を夢みる男……………佐々木トム
或る女装マニヤの記……………森本信一
流暢レポート……………島直樹
特異な角度から……………九雅直樹
私のふんどし……………松原三千代
燃ゆる男……………藤山正三
或るアブ・マニアの告白……………東本秀郎
女同志の吊り責め……………岸本青柳
刺青の朝……………鳴山千春
禪美悲願……………加藤千春
ある女給の体験(2)……………日下子
サジスチンの半生記(4)……………鷹野めづみ
「流暢」に関する告白……………島直樹
虐待された女中……………佐原弘
少女の切腹……………中康弘
電気責に關するノート(続)……………甲斐仁通
邦画もシネスコの縛り映画へ……………嵯峨美也子
続・潰滅の前夜……………土路草一
スクリーンで縛られた女優たち……………千葉栄一

〇四月号(復刊第十四号)……………
【定価二百円】(〒8円)

口絵……………
女体運動機能測定器……………四馬孝・面
縛られた女優たち……………榎月太郎
緊縛映画名場面集(一)……………榎月太郎
スクリーンで縛られた女優たち……………榎月太郎
縛られ拷問を受けるジナ・ロドリジ……………
我が異常性の記……………南秀夫
種とブリーフ(二)……………池田ふみ子
マゾヒズム見たたり聞いたり……………春木俊野
探險服姿の女腹切……………藤山正三
スロース・E・T・C……………並原新吉
女優を縛る監督達……………甲斐仁通
木馬責に關するノート……………沼本正三
現代マゾヒズム芸術時評……………
女装愛好者の手帖から……………沼本正三
ある夢家の手帖から……………沼本正三
緊縛の輕演劇……………本由郎
インナーベルト責め……………武田源四郎
統一・切腹曼陀羅図……………法谷源四郎
統一・潰滅の前夜……………榎月太郎
縛り責めを好む男と女……………土路草一
大衆文学の責の描写資料……………岸本青柳
〇六月号(復刊第十五号)……………
【定価二百円】(〒8円)

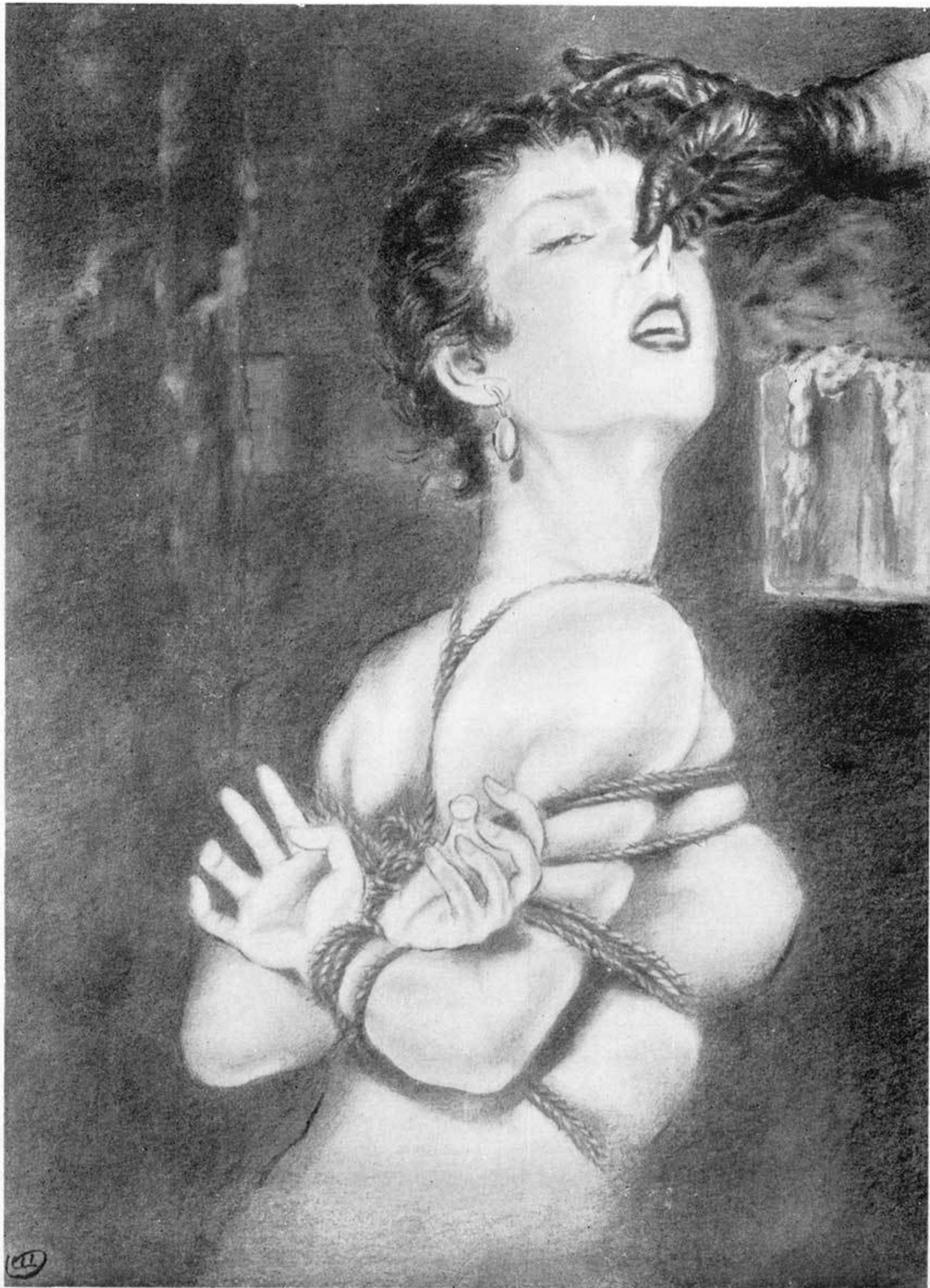
口絵……………
緊縛映画雑感……………榎月太郎
マゾヒズム見たたり聞いたり……………春木俊野
擦り責に關するノート……………甲斐仁通
ある夢家の手帖から……………沼本正三
切腹随想……………須藤三夫
ふんどし幻想……………松原三千代
責絵師の話……………本由郎
加藤送別会……………青葉一夫
流暢器具考……………本由郎
統一・潰滅の前夜……………土路草一
女サジストの記……………鷹野めづみ
「和装教室」……………白田金田
玉稿落穂集……………編集一部
〇七月号(復刊第十六号)……………
【定価二百円】(〒8円)

口絵……………
地下の拷問室……………四馬孝・面
縛られた女優たち……………榎月太郎
花坂道子嬢艶姿集……………北原純子・面
石抱き算盤責め……………榎月太郎・面
緊縛映画名場面集……………榎月太郎・面
「愛は惜しみなく」……………藤山正三
私の本箱から……………星地光一
幻想の娘……………星地光一
重屏禁……………星地光一
ある女性から編集長への手紙……………泉かよ子
水責に關するノート……………月岡映子
マゾヒズム見たたり聞いたり……………甲斐仁通
統一・切腹曼陀羅図……………法谷源四郎
南支那の鬼……………本由郎
現代マゾヒズム芸術時評……………伊藤忠正
女血たるま……………池田ふみ子
禪とブリーフ……………内田武男
一輝亭雜記……………山田津子
黒いペチコート……………山田津子
那津子の流暢日記……………山田津子
仏・津子の流暢日記……………山田津子
緊縛映画速報欄……………飯田靖子
防衛服と私……………飯田靖子

美への冒瀆

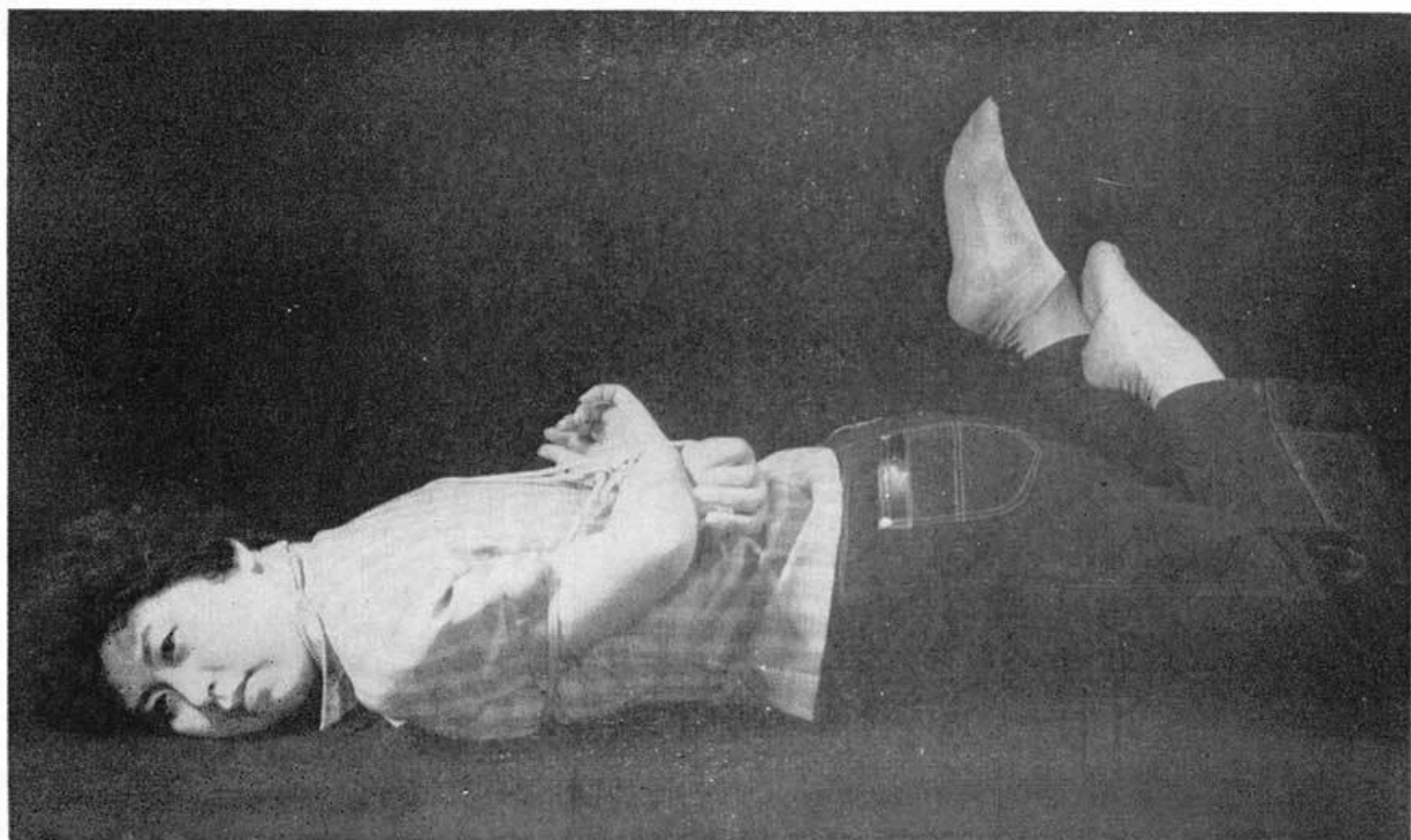
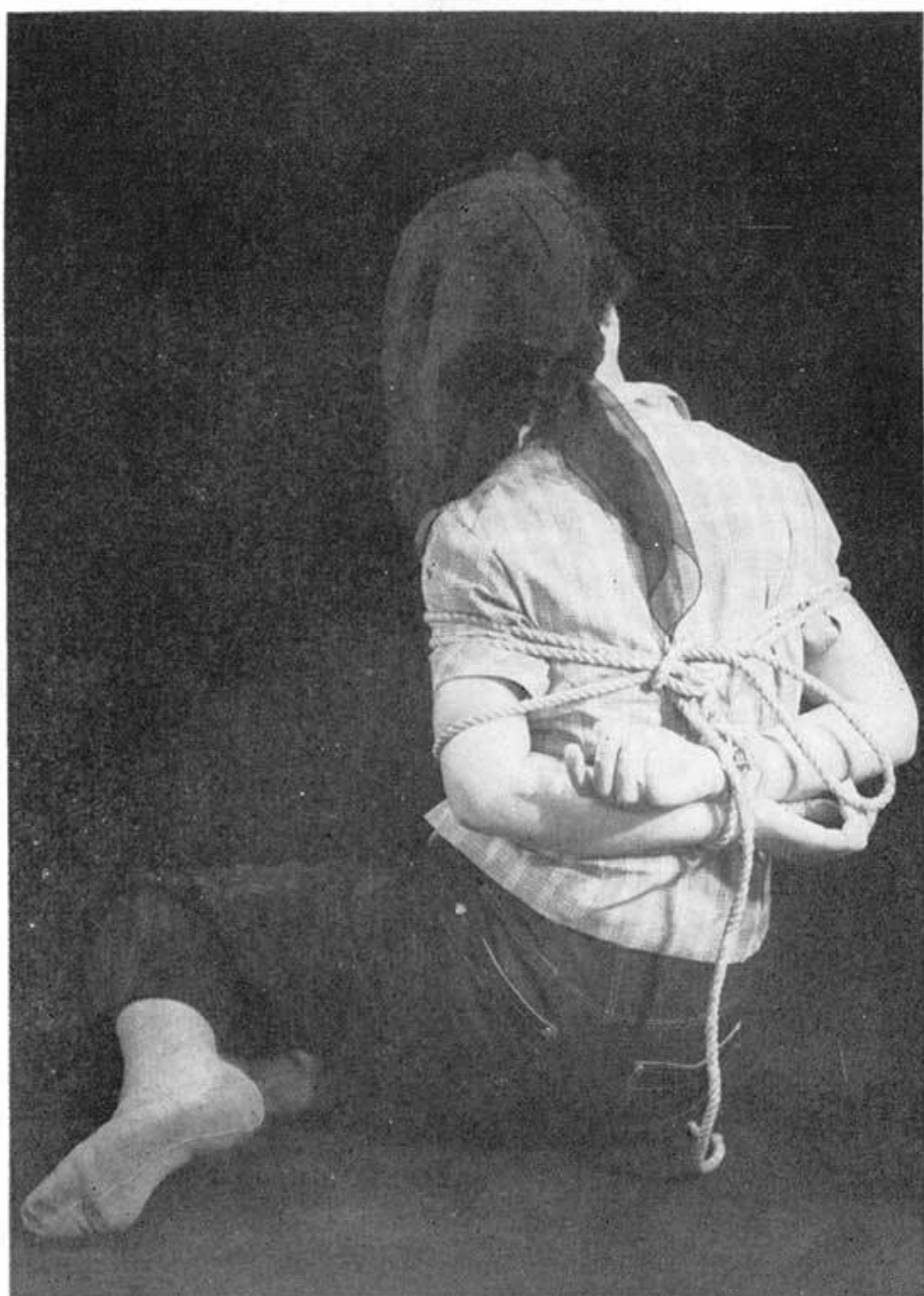
四馬孝・画

美貌の中心である鼻に対しての虐待は美への冒瀆でなくてなんだろうか。



加賀利江子嬢艶姿集

(モデル 加賀利江子)



花魁『美吉野』の折檻



「花柳小菊」は恋しい勘五郎の許へ晴れて嫁入りの当日かねて横恋慕する「石黒達也」にかどわかされ荒寺の本堂に監禁される。



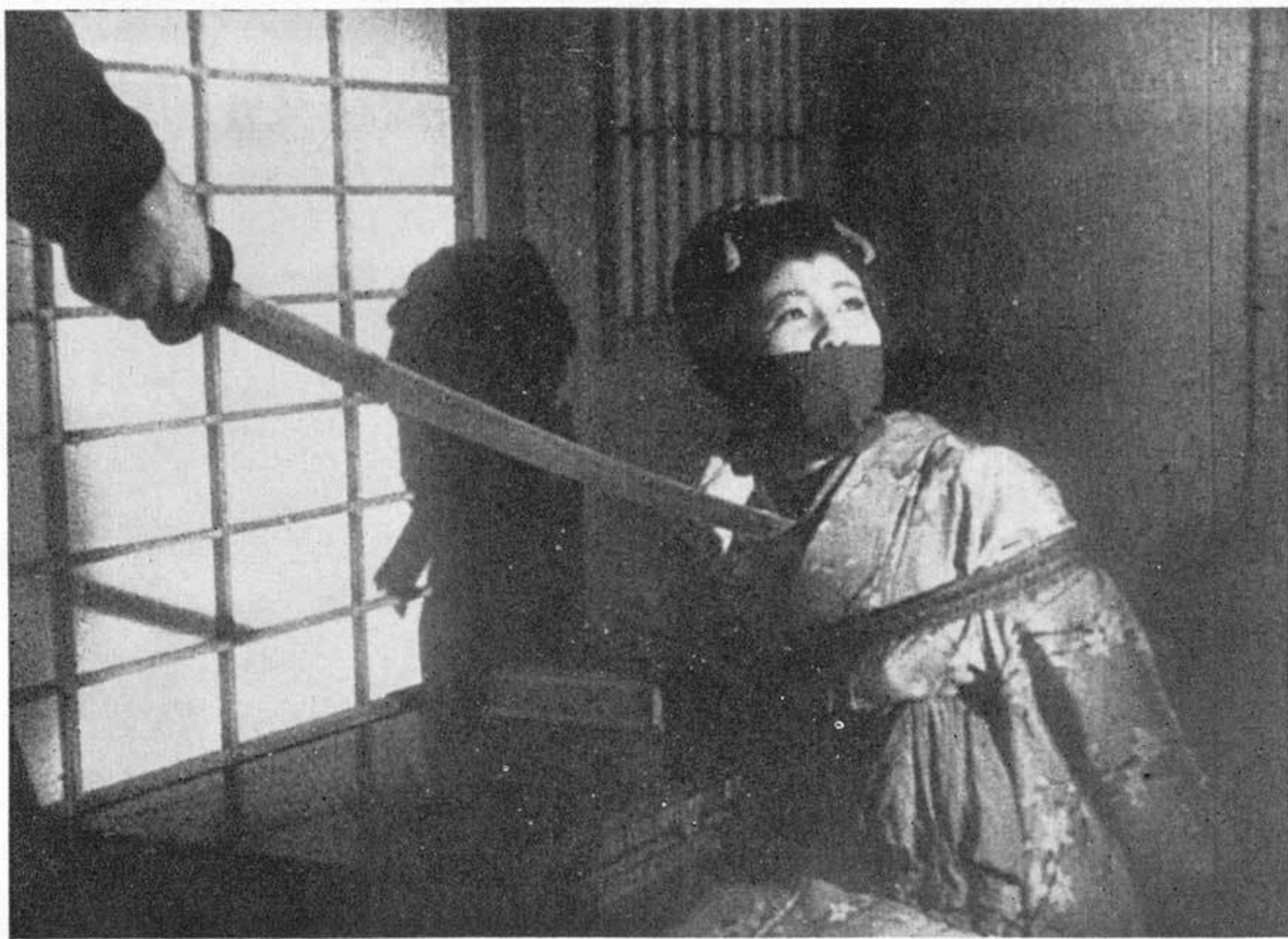
宝塚映画『夕立勘五郎』

花柳小菊

<楓月太郎・提供>



〔規定〕ハガキにて題名と女優名をお知らせ下さい。正解者の方には全部、キヤビネ版の本写真四枚を贈呈します。締切は7月15日。



(1) 題名 () 女優名 ()



(2) 題名 () 女優名 ()



(3) 題名 () 女優名 ()



(4) 題名 () 女優名 ()



米 20THフオックス映画「聖 木」より
有名なキリストの処刑シーン。中央はヴィクター・マチュア



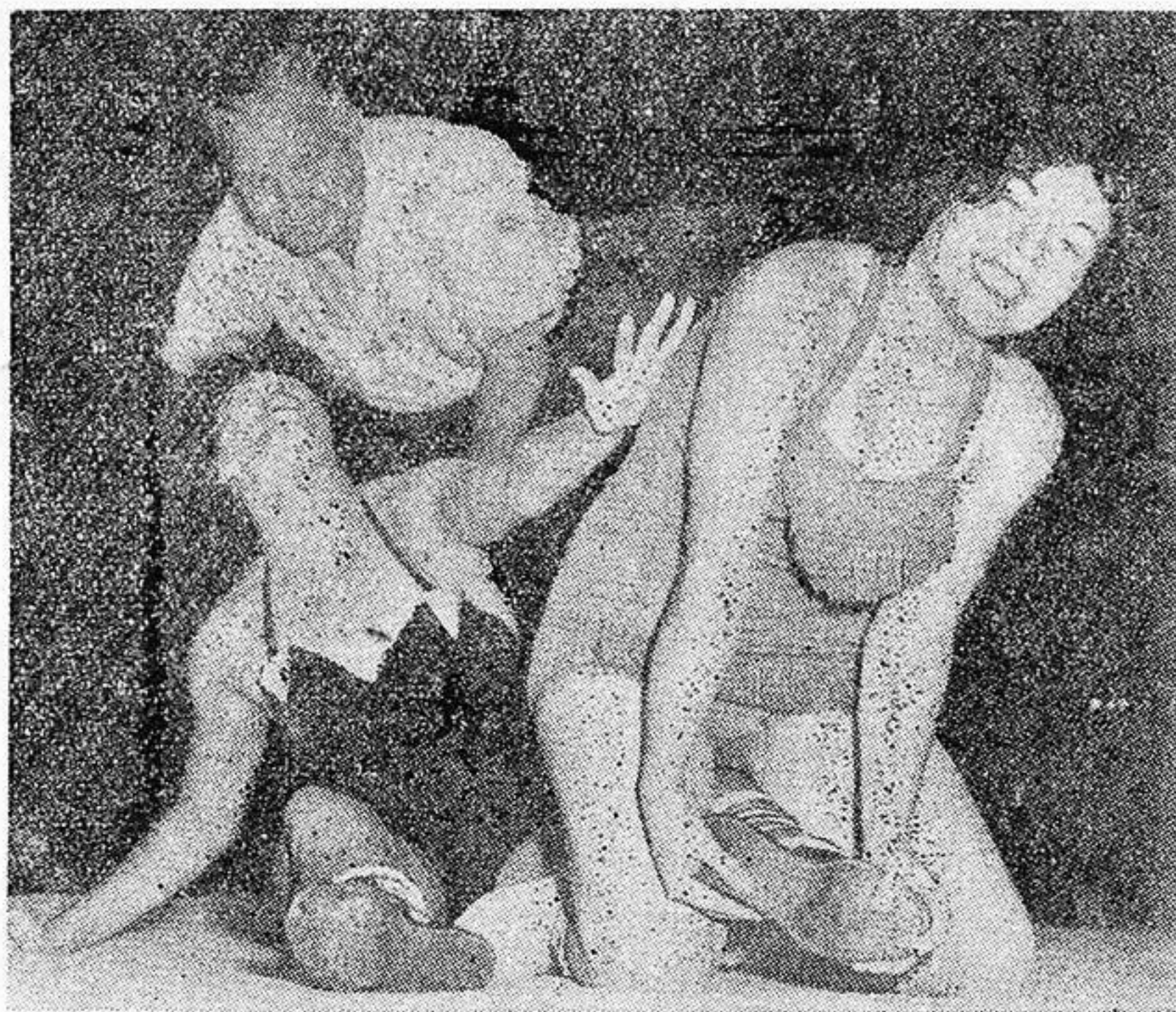
英映画 「岩 窟 の 野 獣」 より
後手縛りに猿ぐつわを噛まされ馬車で誘拐されるシーン。

新しい文献研究誌

奇譚クラブ

1957年 8月号

(第十一卷 第七号 通刊第九十七号)



girl wrestlers vol. 1 No. 1ヨリ

旅廻り劇団の責め場面から

星 光 一

東京から約十里、封切されてから五六ヶ月経ってのフィルムを上映する映画館が、一つだけの、この街へは芝居などは年に二回位しか廻って来ない。それも、青果市場か広い寺の庭を借りて、むしろ囲いの粗末な即席劇場で、普通五日間興業をやると、次の町へ廻って行く。この街は、いつも芝居は人氣が悪く

五日以上の興業は、成り立たないらしい。客足が少いから昼間は専ら宣伝に専念して、開演は七時頃になる。こういう地方に来る劇団は、素人に毛の生えた様な連中が多いが、演ずることは相当露骨な事をやる。責めの場面で、本当に頭から水を浴せたり、縛りにも、東京辺りでは見られない文字通り掛け引きなしの緊縛がよく見受けられる。

今年も、彼岸を目当に廻って来た、橋劇団というのが演じた「仇討二筋道」の中で二幕、力が入った責め場が見られた。

その日は、早めに行つて見たが、むしろ囲いの小屋の前に張った大きなポスターに二人

の縛られた女が、描いてあった。

双方とも真紅の腰巻一枚で、露わな、真白い肌に赤黒い縄が食い込んでいた。

一人は、半ば後向きになって後手に手首だけ縛り、その縄でぐっと吊り上げられて爪立っていた。頭をうんと前に曲げてあるので縛られた手首が肩の上まで上っていて、その脇腹から腰の方へ鞭の痕が一本走っている。ぐっと横に張った肘から二の腕にかけての線と、白い肌に赤い腰巻の調和が実に色っぽかった。もう一人の方は立膝を、やや左に崩して座った女が正面を向いて柱に後手に縛られた姿で、やはり腰巻一枚身に着けたきりだが片方の膝を崩している。片足が太腿の辺まで現われている。胸の縄は乳の下を二巻きして柱に止めてあった。

入つて見ると、中は来るのが早かったせいか半分位の入りだったが、それでも始まる頃は八分程客がつまった。

ストーリーは、極くありふれたお家騒動の

話で、定石通り始めの中は悪人達の勢力が強く、忠臣側の苦心が続く。

お家の横領を謀る悪人達の厳しい見張りの目を潜って、江戸の奥方の処から国元へ密使に発った腰元のお仲は、度々の危機を逃れて夜暗に乗じて国元へ入る事が出来たが、遂に悪家老の手の者に捕われて家老の屋敷へ連れ込まれる。

二人の侍に左右から腕を掴まれ、引ずられる様にして、お仲が庭先へ入つて来た。

「捕えて参りました」

二人は其処へ、お仲を突放した。よろめいて裾を乱し膝をついたが急いで立上ると乱れを直し、家老の方を睨みつけた。

「座れ」

一旦、手を放した二人がお仲の両腕を鷲掴みにして肩を押した。

「な、何をなさる」

身をもがいたが、男二人の力には及ばず、押さえ付けられてしまった。

「お仲、大分急ぎらしい処を邪魔して済まんな、夜道をかけて、これから何処へ参る」
掴まれた二の腕の痛さに思わず眉を寄せたが答えない。

「大分の察しは、ついているが、お前の口から教えて貰えぬか、それに使いの口上もな」
女の口は固くつむったまま少しも動かない。腕を押さえていた若侍が、

「なんとか申せ、強情な奴だ」

掴んだ腕を逆にとり、じりじりっと、ねじ上げて行く。

「うッ、つッ」

思わず歯を噛んで額に冷たい汗が浮いてくる。今にも肩の辺で「ぐきん」と音を立てそう、しかし女の口は固く結ばれている。

「なる程」

家老は感心した様にうなづくと、

「これは少し骨が折れそうだ」

身をかめると縁の下から弓の折れを取出して、ぽんと投げて顎をしやくった。

押さえていた片腕を放し、それを拾った侍

は「びゆう」と素振りをつつしてから、力任せの一撃を腰の辺りへ打ち下ろした。

「ああっ」

苦痛に顔をゆがめて反返った。弓は続けざまに肩から腰に重い響きを立てる。

「うッ、うッ」

両腕が放されたが立上る力もない。血の気の引いた蒼白な額に油汗をにじませ、両手を突いて体をささえているが、その手が震え両肩が大きく波打って荒い呼吸をしている。

「この位の処で、どうだな」

弓の先で背中を突いた。

「何も知らない、何も云うものか」

あえぎながら、云い終らぬ中に再び弓が鳴って、

「うッ」

前のめりに突伏したが、そろそろと起き直る。

「待て」

手を挙げて制した家老は、お仲の顔を窺うように覗き、

「何か書類を身に付けているかも知れん、脱がせて見ろ」

身体の痛みを為、起上るのも苦しげにやつと座り直したお仲が、此の言葉を聞くと弾かれた様に腰を浮かせたが、男達の手の方が早く、両手を押さえ帯に手がかかる。

「あッ、何を、あッ」

悲鳴を挙げ、まだこの様な力が残っていたかと思われる程に身をもがいたが、男二人の力にあつては難なく次々に剥がれてゆく。真白な肩が現れ、更に胸が、荒々しく息づく乳房が現れる。

「ああっ、何をなさる、お許し、あッ」

流石に、先程の態度と変り、哀願の声になる。しかし男達はかまわず最後の肌褌袴を奪い取ると垣根にかかっていた縄を取り、後手に高々とねじ上げて胸から二巻して縛り上げた。縄の食い込んでいる胸と二の腕がくびれて痛々しい。上下に廻された縄の為か非常に乳房が大きく見えお屋敷勤めの肌は蒼白く汗に光っている。

それ迄、縁先に立って見ていた家老が庭下駄を履いて下りて来た。若侍が髪を撫んで仰向かせる。

「良い身体をしているのう。江戸の屋敷で裾を引いて歩いて居る時より、裸で縛られ、泣声を挙げている方が余程美しいぞ」

ゆっくり白い身体を見下していたが、弓を拾うと、その先で乳房の上を「ぐいッ」と突いた。

「ああっ」

目を閉じて喰い込む縄の痛みを耐えているお仲は「びくッ」と身を震わせる。次に右の乳房

「うッ」

縛られた縄の間から、ぷくんと飛び出た柔かそうな乳房を右、左と絶え間なく弓の先が襲って来る。ますます呼吸が荒くなり、水を浴びた様に汗が流れる。手を休めて顔を覗くと涙の痕が痕をつけている。



「しぶとい奴、必ず云わせずには置かぬに、早く申してしまわんと益々痛くなるぞ。云ってしまえば直ぐにでも解き放してやるが、どうだな」

「知りません、何も、何も云えませんが」

「何っ、これ位では、未だこたえぬと云うのか。見事最後迄云わずに通す気か」

今度は転して置いて、弓の雨を降らせる。

打ち下される鞭の唸り、肉を打つ鈍い響、喰いしばった唇からもれる呻き声が入り乱れ、ただ一枚腰を覆った布をも乱して転げ廻っていたが、遂にうつ伏せになったまま打たれる度に背をまるめ、又、反らしているだけになり、それも呻き声が低くなると共に動きもなくなり背中にも廻されている手も固く握っていたのが力なく開くと気を失ってしまった。

「氣絶したらしい、今夜はこれ位にして着物の方を調べて見よう、明日は何としても白状させねばならん、水でもかけて気がついたら例の処へ入れて置け」

云い捨てると、散らばっているお仲の着物や帯を抱えて奥へ去っていった。

お仲は、昨夜の通り半裸体の上に厳しく縄をかけられたまま、蔵の中の柱に一尺程の余りを残してつながら、縦横に弓の痕が走っている背を見せて倒れていた。

窓から陽の光が差込んでいる処を見ると一晩ここに縛られたまま寝てしまったのだろう、暫らくすると低く呻いて身動きした。はっと気がついて起き上ろうとしたが、縛られた手、痛む身体の為になかなか起き直れない。

「あっ、痛っ、つつ」

のろのろと虫の様に首を挙げ、やっと膝をついた、そのままの姿勢で少しの間じっとしている。

「痛いっ、うっ、苦しい」

長い時間かかって、自分の体をつないだ柱によりかかる事が出来た。

一息ついて、あたりを見廻していたが、窓を見ると目が光った。

「縄が、この縄が解ければ、あそこから」腕に一寸力を入れて見たが、二の腕を噛

M.K

む縄の痛さに思わず

「うっ、うっ」

と、息を止めた。しかし、今のうち何とかしなければならぬ。早く縄を、この縄から抜けないと誰か来たらお終いだ。

身体中の痛みを堪えて身をもがいた。

「うっ、うっ、痛いっ」

だが、少しもゆるんだ様子はない。

「うーっ、ちいっ」

と、歯を噛んで、一しきり身をくねらせていたが、遂に、あきらめたか柱によりかかったまま静かになった。

「奥方様」

閉じた目から涙がこぼれ落ちる。

蔵の戸が重い音を立てて開き、昨夜の二人を従えて家老が入って来た。お仲は脅えた眼で見上げたが又力なくうなだれてしまった。

「ふふ、縄が喰い込んで痛むらしいな、大分息も弾んで苦しそうだ。お仲、一晩ゆっくり考えたであらう。返事はどうだ？」

「……」

「まだ黙って通す気か？」

「……」

「今日は聞き出さぬ内は、途中で止める様な事はしないぞっ」

語気が次第に強くなって来たが、お仲は依然として顔を挙げず、答えようとはしない。だが段々と身体が固くなって来る。

「矢張り駄目か、では仕方がない」

後の二人に目で合図をすると、窓際に寄り箱に腰を下した。

二人の侍は柱の縄を解くと、

「立て」

ぐいっと上に引く、よろよろと二足三足よろめいたが、やっと立上る。

すると、同じ柱に胸の高さで一尺程、縄を

遊ばせて縛りつけた。

一人が奥から鞭を持って来ると、びゅうびゅうと風を切つて威嚇する様に鳴らしていたが、腿の辺りへ「びしっ」と噛みつかせる。

「ううっ」

びくんと片足が上る。その足が下りないうちに、前にも増した唸りを立てて鞭が襲う。

「うわっ」

身体が前に崩れ、ゆるんでいた柱上の縄がぐんと張る。

「びしっ」「びしっ」と交互に、生きものの様に確実に腿へ喰い込んで来る鞭に喰い切られ、脛を伝ってくるぶしへ血が一筋垂れて来る、顔が引吊つて唇の端がびくびくと震え、もう打たれても足は挙がらない。

「びゅう」「びしっ」と鞭が鳴る。

「ひーっ」

背をのび上る様にして足を突張る。揃った両腿へ「びしっ」くるっと巻附いてはねかえる。膝がぐんと折れて、柱の縄が千切れそ

うに張り、胸の縄が肉に噛みつく。

「びしっ」「びしっ」鈍く重く一しきり鳴り響くと、お仲の頭がぐらっとゆれて、首の骨が折れたのかと思うほど前へ垂れ、だらりと縄にぶら下ってしまった。

一人が水を持ってくると、その水で顔をぬらしては髪の毛を握んで柱に打ちつける。

やっと気がついたらしく、細目を開くと、

家老の方を見た。

「さすが大役を任された女だけに大したものじゃ。だがお仲、人間の身体には限りがあるぞ、今の内に云ってしまえ、散々苦しんでからではつまらないか」

「……」

「返事はなしか、では、もう尋ねまい、お前の方から云いたくなる迄待ってよう」

もう一人の侍も立ってくると、昨夜からの緊縛を解いた。したしたと其処へ崩れ、手について支えようとしたが、長い間縛られていた腕は、しびれ切つて、いうことをきかない。そのまま前のめりに倒れてしまった。

蔵の中央に、人間がらくに入れそうな大きな箱が持込まれる。それを伏せるとその上にささらの様に砕いた青竹を十本許り並べて敷いたが、お仲のぐったりと投げ出した手首を前で重ねて縛り、両足首も堅く縛ると二人で

運んで来てその上に、うつ伏せに寝かせた。

お仲は、もう何をされても抵抗らしい動きは見せなかったが、竹のささらが腹を刺したか「あっ」と、小さく叫んで腹を浮した。すると、重みのかかった胸の肉に鋭い痛みが加わる。

「お仲、大分手を焼かせたが、お前が、これでも云わずに通せたら、拙者もあきらめてお前を放してやることにしよう」

嘲けるように自信ありげに云う。

「お前が布団の代りに敷いている青竹を一本づつ引抜いて全部抜いたら許してやる」

聞いたお仲は「あっ」と驚いて、身体を転がして逃れようとしたが、側に立っていた侍が飛びかかり、身体中の重みで、のしかかるようにして押さえつけた。

「許してっ、お許し下さい」

「申すかつ、云うか？」

「許して下さい、お許し下さい」

「云えば許してやる。これっ、云えば許してやるぞ」

「殺して下さい。一思いに」

「黙れっ、云うのか、云わぬのか」

もう、お仲の耳には家老の言葉が入らないのか夢中で「殺せ、殺せ」を繰返している。

「やれっ」

面倒くさくなった家老の声が、いらだった様に叫ぶ。

真中辺の一本を掴んだ侍は

「それっ、一本」

声と共に、ぎゅうっと引き抜く。

「うわあーっ」

背中へ、のしかかっている侍を、ふり飛ばしように、はね上って、獣のような唸り声を上げる。

「二本」

喉の破れるばかりの絶叫がこだまして尾を引くと、一つに括られた足が「ぐーん」と突張り宙を蹴る。箱の横面を鮮かな色を光らせ血が糸を引いて流れ落ちる。

「責布団の具合はどうだ。寝心地が良いだろう」

侍が、三本目に手をかけ、嘲笑いながら云ったが、だらんとした首は動かなかった。

「ううっ、ううっ、ううっ」

呻き声だけが重苦しく聞えて来る。肩と背中肉が「ビクビクっ」「ビクビクっ」と震えている。

「三本」

「ぎやあーっ」

息が絶えた様にぐんなりと長くのびていた身体が弾き返り、首が背に付く程そり返る。

「許してっ、助けて、助けて下さいっ」

「唯助ける訳にはゆかんが、云う気になったか？」

「は、はい、云います、云います」

激しく喘ぎながらもつれる舌で云いかけた言葉がふと止った。

「先ず、お前の行先は？」

「……………」

「もう二三本抜くか、まだ沢山残っている」「云いますっ、何でも云います。御許し下」「がくっ」と悶絶してしまった。

遂に白状して、家老の手で戮り殺しにされてしまう。この劇は五日間の連続物で、毎日二幕づつ十幕になっている。責め場は三幕目の家老の庭先、四幕目の同じく蔵の中の二幕になっていて責めの前後に多少の芝居が入るがほとんど二幕、責めの場面になっていた。

お仲の役を演った女優は、お仲の殺された後、他の役でまた出たが、責められる時の演技に比べて大分落ちていた。きつとこの女優は縛られ役が専門であろう。マゾヒストかも知れない。他の俳優達も、今までこの街に来た劇団としては熱演の方であった。

ただ惜しい事には照明、背景ともに悪く、これをどこかちゃんとした設備のある劇場で見られたらと残念に思っている。

五日間の興業を終って、この劇団は群馬県の方へ行くと云う事を聞いた。

(おわり)



シークレット・ショッピング

薬局の店内に飾られてある宣伝用の大きな「イチヂク浣腸」を目にすると、きまって私の視線は、その巨大な浣腸器にすいつけられ妖しく心が震えるのであるが、一体、他の人達はどうな気持でそれを眺めるのであろうか。

街を歩きながら、薬局の前を通るたびに、私はそんなことを考え、浣腸器の模型なんて、素晴らしい宣伝のアイデアではないか等と、独り、感心してみたりするのである。

知らない町を歩っている、薬局にイチヂク浣腸の模型が置いてあるのを見ると、私は旧知の友達というより、恋人にでも出遇った様な親しみと歎びを感じるのである。

角皓子さんが旧号に(三十一年一月号)『イチヂク浣腸を作っている会社で働いている人達はどんな気持なのだろうか』とか、羽村京

陰 花 植 物

——或る浣腸マニヤの告白——

島 直 樹

予さんも旧号に『あんな大きな浣腸器で浣腸されたら』等ということを書かれていたが、全く同感で、イチヂク浣腸の模型の傍に、若い女の店員が何気なく立っているのを見たりすると、その組み合わせに、何んとも云えない面白味と甘さを感じ、模型のイチヂク浣腸ばかりでなく、陳列ケースの中に、ガラス製浣腸器が並べてあったりすると、その楽しみは倍加し、私には、どんな素早い一瞥にでも、浣腸器の置かれた陳列ケースを見出すことが出来るのである。

薬局があると、通りすがりに、店の中を覗かないではいられないというのは、私にとって、無意識的な習慣なのである。

いつ頃、誰が考案したのか知らないが、イチヂク浣腸は云うに云われぬ不思議な魅力を持っている。

私が秘密な性癖を持っているせいか、最初のうちには浣腸器を買うのに変に恥かしく、始めてイチヂク浣腸を買った時など手がふるえていたのを覚えている。なるべく小さな店でしかも、年老いた店番の居る店を選び、客の居ない時を見計って、小さな声で、イチヂク浣腸下さいと、それこそ勇気を出して云ったのであるが、顔の赭くなるのが自分で判る程で、大人用ですか、子供用ですかと、ブッキラボウに訊ねる主人の声も上の空、とにかく包まれたイチヂク浣腸を手にして店を出ると道行く人が皆、私を注視しているような錯覚におち入り、逃げるようにしてその場を離れたこともあったのであるが、現在では浣腸器を買うことにすら、秘密めいた楽しみを感じ、店員が若い女性であれば、更にその楽しみは大きいのである。

最近改装されたばかりの、その街の薬局に

は、店内前列の陳列ケースの下段に注射器や浣腸器が並べてあって、その前を通る時などひそかに浣腸器のケースを数え、それが減っていたりすると、どんな人が買っていたのだらうかと、それからそれへ想像をたくましくするのが、日課の一部にさえなっているのであり、ゴム製のエネマシリンジにひそかな挨拶をおくるのである。

或る日の夕方、その店でガラス製浣腸器を買っていると、小学校二年生位の可愛い女の子が出て来て、ピストンの具合や嘴管の破損を調べている女主人の手先をみつめながら、「誰か病気のね」と独言をつぶやき、私の顔を見たのである。女主人は、そうねと云いながら器用な手つきで包装紙に包んで呉れたが、病気の時にでも浣腸されたことがあるのだなと、その時、私は思った。

それから数日後、夕方、その店の前を通ると、セーラー服を着た高校二年生位の、髪を肩まで伸ばした可憐な女の子が独り店番していたので、どんな反応を示すか興味に馳られた。私は、或る種の期待をもって、「浣腸器下さい」といとも自然に云ったのである。瞬間、一寸頬赫らめたように感じたのは私の気のせいであろうか。

二重まぶたの澄んだ眸をしている少女は、棚の上をちらっと見て、イチヂク浣腸と印刷されたボール箱から、イチヂク浣腸を取り出

し、これでしょうかと訊ねるその顔をじっと見ながら、いいえ、ガラス製のをと云うと、恥かしそうな微笑を浮かべながら、陳列ケースから三十〇の浣腸器を出すのを更に意地悪くもう一度二十〇のを下さいと私は云った。客に馴れないのであろう少女は再び顔赫らめ二十〇の浣腸器を手にとると素早く包装紙に包もうとするので、「こわれていないでしやうね、よく調べて下さい」というと、耳の付根まで赫く染めながら、包みかけた浣腸器を出し、おずおずとした手つきで浣腸器を調べている細っそりした指先を見ながら私は心の中で『美少女と浣腸器』これは絵になるぞと思ったのである。

店を出てからも私は、美少女に浣腸器をいじらせたことが無性に楽しく、下宿に戻るや少女の恥し気な顔を脳裏に思い浮かべながらその少女の手に触れた浣腸器で心ゆくまで浣腸のエクスタシーを味ったのである。

こうした、ひそかな楽しみが度び重なるにつれて、私はもっと大胆になり、店員の一举一動作から僅かな顔の変化まで観察しつつ、勿論自分の顔を赫らめることなく堂々と浣腸器を求められるようになったのである。

以前のように、客の居ない店を選んだりする必要もなく、むしろ客の沢山いる薬局で浣腸器を買うことにスリルめいた楽しみを味うようにさえなった私は、その日も例の如く街

を散歩していると、四、五人の事務員風の女性達があれこれ話しながら化粧品を選んで大きな薬局が目にとまり、更に白衣を着た店員三人ともが若く美しかったので、私の足は自然に店内へ吸いこまれていった。先客の女性達は店の主人公と思しき女から化粧品の使い方を説明されていたが、浣腸器下さいと云った私の声に皆ふり向いたので、流石の私も、若い女性の眸の集中攻撃に出遇うと、胸がどきりとして柄にもなく顔を赫らめたのであるが、その時、私は確かに誰かが「アラ」と云ったのを耳にしたのであり、服装からその先客達が近くの銀行の事務員であることが判かると、これは面白いぞと思った。

私の応待に出た店員は、イチヂク浣腸でよろしいのでしょうかと、愛嬌のある笑顔で訊くから、陳列ケースを指さし、エネマシリンジをと今度は低い声で云った。

赤い色をしたゴムの浣腸器が店の照明にテカテカ光り、尖端の黒い嘴管が妙にはっきり映ったのを美しいなと感じながら、ゴムは硬化していないでしやうね、使用法はと、少し大きな声で訊くと店員は、マニキュアのされたキヤシヤな手でゴム球を握り、嘴管部でない方の端を指さし、「こちらを浣腸薬の中に入れこういう風に掌で握り、離すと液が吸いこまれますから、何度もくりかえせばいいのです」と、そこは商売柄、顔色一つ変えるで

時 報

麻 生 保

なくソプラノの透る声で使用法を説明してくれたのである。その時、反対側で化粧品を買っていた女性の一人が、じっとこちらを見ているのが私の前に掛けてある鏡に写り私は内心、やはり浣腸器には女性も興味があるのだなど、その女性の心理が判るような気がし、不意に後をふり向くとハッとして視線をそら

せた女性の耳のつけ根がみるみる赫くなっていくのを、私は何んとも云えぬ満足感と愛しむような気持ちで、エネマシリンジを渡されるのも気づかない位、みつめていたのである。銀座のMデパートの薬品部で浣腸器を求めた時などまわりに客が多いのと店員が余りにも美しいので、こちらの方が恥しくなったが

週間読売、五月五日号「当世カメラマン氣質」の中で、一寸読み捨てならぬ事が書いてあった。

『(前略) 渋谷高弘氏というカメラマンが居る。(中略) 今年の正月、彼は恐しく風変りな娘を発見した。東京都内某高校二年というから十七歳だが、やる事なす事、五歳位まさせている。美人だが、従来の日本的な美しさとは違う。乗馬、スキー、スケート等のスポーツからマージャン、玉突きまでやる。そうかと思えばスペイン語をペラペラしゃべり、自分でデザインしたドレスをさっさと縫い上げる。気が向くとふらりと銀座へ出て遅くまで遊んでいる。彼はこの瑠美子という娘にすっかり魅せられた。』

そして口説く事にした。彼のアイデアである「私の十七歳—マイ・セブンティーン」だ。瑠美子さんの両親は、彼の熱心な頼みについて承諾した。以来、野に山に酒場に学校に、彼女を写す事三千枚、この六月末に一人の娘の生活を追った組写真の個展が銀座で開かれるそうである。(後略)』
どうです。この展覧会は見逃す事は出来ませんね。恐らく男なんか何とも思わない様なこの素晴らしきお嬢さんの美しき姿が、沢山拝見出来る事を期待する次第です。特に颯爽たる乗馬姿は、なるべく多くして頂きたいものです。鞭を鳴し乍ら馳けている処などは如何でしょう。さあ、渋谷カメラマン、しっかりお願いします。

それはそれで又別なスリル？があり、とにかく、浣腸器の買物は楽しく、十五、六位の女の子が店に居る薬局があると、私は必ず寄って浣腸器を求めるのであるが、アラツと云ったきり赤くなつて店の奥に引き込んでしまふ子もあれば、大きな声で「お母さん、浣腸器だって、お客さんよ」と平気な顔している子もあつたりして面白いものである。

ある薬局では、やはり若い女の子が居て、浣腸器を出してくれた時、店の奥から声がして、注射器と間違えないでねと云うのに、箱のを開いていて、若い女性の口から浣腸という言葉を聞いただけでも胸ふるえる位楽しくあとでその声を反芻しながら浣腸するのはなかなかいいものである。

こうして買い求めた浣腸器が二十本近くもたまると、余程可憐な少女が店番でもしている薬局でない限り買うのを控えるのだが。

読者は私のこうした性癖をどう思うであろうか。浣腸器ばかりでなく私は、少女や若い女の子の居る薬局があると、男の私にとって不必要な月経帯まで買うのであり、浣腸器と月経帯をガールフレンドの処へ無名で送り、相手が小包を開いた時の驚きと羞恥を想像したりして私だけの秘密な欲びに耽けるのである。

△私の告白▽

戀する夫人への手紙

麻 生 和 夫

先生——奥様と申し上げても宣敷いのでございますが町の人々が呼ばれている通り私も先生とお呼び致します。——御良家のお生れと女性として諸事に御精通になった御教養と、それに加えて美しさを備えられた先生に対する私の思慕がとう／＼押えきれぬものとなつて、この手紙を認めたのでございます。私も若し女性に生をうけていたとしたら先生の御傍で花嫁修業の万事を御教え頂き、習い事ばかりでなく、典型的な良妻賢母型の先生の御人格に接して修養を積んでいましたものを——。

この一文が万一、先生のお目に止る様な光栄がございました場合私も先生のお名前も偽名ではございまして、御賢明なる先生は私というのが何者であるか、又御自分のことにお氣付きになり大きい驚きを感じられることとでございましょう。勿論途中までお読みになったとしても、私に対するお憤りと、けがらわしさの為お破り捨てになることとでございましょうけれども……。

私がいかに先生をお慕い申し上げているかを唯単に普通の男として美しい異性への憧れ恋心でございましたならば、たとえ恩師の奥

様たる先生に対する道ならぬ恋でございまして、又年令が私より七年も年長の最早、女性としての、盛りを過ぎられた御方でございまして、古今東西に多くの類例のある所謂、常識で割切れない処の思案の他と申される至極ありふれた氣持でございまして、先生も何とあの男が自分に——。と一笑に附され、或は、はかない片想いに思いつめている私の心情を浅間しくも、あわれと思召すかも分らないのでございます。

処が、お読み続けになられた時、私という表面は済ました白ぼくれた善良そうな顔、——いゝえ生活や行動までも、——した男がどの様にしつこく先生をお慕いし、そのつきつめた恋の本性は、どういう欲望を秘めているかが明らかになってゆくにつれて先生のお顔は青ざめお身体はワナ／＼とお震えになり、私という男を憎み恐れて、勿論御輕蔑になり、その日からは私と出会われても御顔には不快の色をたゝえ、いつもの優しい片えくぼもはつきりした御温顔の微笑は永遠に消え去ることとでございましょう。しかし、私はこの心の中にうずたかく積って来た限りない恋の執念をあます処なく打明

けねばならないのでございます。どうか、お許し下さい。この悪魔につかれた様な恐ろしい告白を。

先生の御主人には私は学校時代に他の誰よりも可愛がって頂き、進学から卒業後の就職に至るまで（戦争のために折角の御計いも無駄になってしまいました）一方ならぬお世話になった私は、お若い頃の先生をよく存じ上げております。その頃の先生は実にお美しく上品で、この田舎町には勿体ない程のお方でございました。併し、私は当時まだ青雲の志を抱いていたせいもございまいし、又年端もゆかぬせいもございましたが、私の宿命的な欲望はあの頃の先生の一般的な美しさは別として現在の先生の御容姿の方により多く慕わしさを抱くのでございます。失礼な云い方をすれば、グイ／＼とひきつけられる魅力を感じるのでございます。昔は何一つ氣にとがめることなくぐった先生のお邸の門を今は度々訪れることすら何かこう後めいたやましさを感ずるのでございます。あの頃、将来を宿望された身が不幸にも幾多のつまづきを見せて落ちぶれたとはいえ、私も唯今では一家をもつ平凡ながら外見は健全な一社会人でございます。何の氣おくれを持つこともいりませうためらいもなくごくありふれた動作で先生の御邸を伺うことの出来る筈の私が半面には先生にお目にかゝりたくてウツ／＼しながら半面自身の心の影におびえる身となったことは実に意外なことであり、また私としても理性と良心が多少たりとも残っている故でございまいしう。恋心を抱きながら、自分とそして周囲の環境の中心にとじこもって悶々の日をいたずらに恋しい人の面影のみを求めている私の真実の心は先生が凡そ御想像になられる表面美しく飾られた悲しい恋の物語の中の主人公の様な生易しいものではございません。その様なものならば私はもっと卒直に先生に対して尊敬し慕情を、恋の昇華を婉曲に語り満たすことも出来たかも知らないのでございます。精神的な恋は勿論、如何に濃厚な肉体的交渉でも一般的常識の域を超え

ないのであれば――。

先ず、私は学生時代から女嫌いで通っておりまして。結婚も止むを得ずした形でございました。浮名も聞えず固い男、これが私の世間から見られる形でございます。その私が生れて初めて熱烈な恋心を先生に抱いたということ、しかも現在の先生に。お分りでございまいしうか、勿論、私より他にも過去数年以上も前の先生ならば私と同じ氣持を抱いた男性もあつたこととでございまいしう。とに角こゝう申しては失礼でございますが、先生ももう三十も半ばを過ぎられた御年令、まして近年めっきりとお肥りになられたお身体（勿論昔から御豊満なお身体でございましたが）では如何にお美しく御上品なお姿とは申しても男性をひきつける魅力は半減したというのが世間の一般論でございます。処が私はそうになった先生のお姿、それに加えて恵まれた御生活と高い御教養と磨かれた知性が加わって今や最高頂の美しいお姿が私の渴仰してやまない女性のタイプになられたということとでございます。要するに私には中年の爛熟した肉体中に女性特有のおしとやかさを失われない方の御容姿に此の上なき美を見出すのでございます。この頃の新聞に『中年の婦人は肥っている方が美しい』とありましたが何という嬉しい言葉でございまいしうか。

思う人の姿を一目でもみたい。その人の声をききたい。その人のふれたものを手に入れたたいという欲望は恋するものの常道でございます。私もこの例にもれないことは当然でございますが、私のこの狂わしい道ならぬ恋に悶え、尚且つ正規な法則を超えた邪しまな欲望はまるで飢えた犬が露地を覗う様な卑屈な氣持を胸に時々あらぬ行動を、しかも世間体を気にしながら起させると共に私の魂を奪つて身体のみを彷徨させるのでございます。

廻り道を承知の上で、必ず先生のお邸の前を至極何げない風をしつて通ることも、もしや先生が縁側かお庭で寛ろいでおられる姿を見

た時は夕方から夜にかけてならば二、三度も往復することもございました。他人の用事を引受けてでも先生のお邸へ伺うことも、木曜日の夕方、私の勤める事務所で人氣がなくなっても尚一人残って事務所の前の広場を先生のお姿が通られるのを気をつけて監視していることも（先生は私の勤めているY部落の婦人の方々にお花をお教えになる為毎木曜日正午過ぎに私の事務所の前を通られ夕方お帰りになられることでございます）待ち切れなくなって先に帰る時も後をふり返り／＼ブラ／＼と歩むことも、又遠く前方に先生のお姿。

他の人と違ってこれは恋するものの敏感さでございますか。又先生はでっぷりとお肥りになっておられるからでもございしますが、——が見えた時の心のときめきと足を早めることも——先生がお邸の傍の畑でお野菜や花壇のお手入れをなさっている時、私は何でもない話題でも持出して話を進めて先生のお手を休めてみたり、以上のいろ／＼なことはすべて私が先生に接したいばかりに故意に苦勞をしていることでございますが、先生にはすべて偶然と受取られているに違いございません。決してお怪しみになつてはおられないでございましょうが、若し私のこの手記を読み私の本心を知られた場合は、如何でございましょう。

道で私と行き会って別れた先生が若し後をお振り返りになつたらきっと私が立止って先生の後姿に異様な執着をもって食い入る様なひとみを送っている視線にかちりと合われることとございましょう。私はいつも先生がよく着こなされた和服姿のお見事さに見とれるというよりも、更にそれ以上の淫らな想像を現実の先生の和服の下に隠された肉体に及ぼし特に豊かな肉づきを示されている先生の腰のあたりの動きをしげ／＼と見送っているのでございます。前方からでも先生に気付かれぬ程度の微妙さで、しかも紳士？としてあるまじき無遠慮さを秘めて先生のふつくらとしたお顔や盛土った胸の隆起、それにきっちりとおしめになった帯の真下の部分、肥られて

いる御婦人へのみ見られる張りきつたふくらみを実にすばやく盗み見るのでございます。いやらしい男とお思いでございましょう。併し私の本当の告白はまだ／＼これからなのでございます。

勢にまかせて告白いたしますが、私は先生の一条もまとわざるお裸の姿を見たことがございます。勿論一寸の時間であり、後姿でございしますから御安心なされて宣敷いのでございますが、こう申すと先生はお顔を染められてお驚きのことでございましょう。乙女の時代と違い三十代の御婦人ともなれば、そうそうお恥しがられることもないでございましょうが、他の方と違ってたゞずまいも正しく、裾の乱れ少しの着崩れも気になされる先生のこととでございますから恐らく御家内の皆様はとも角、他人に裸体をお見せしたことは皆無でございましょう。むし暑い夏の日にもきちんと身づくろいをなされておられる程の先生でございますもの、そしてその高雅なお心が私にとって益々貴重な条件でございますから、あえて先生を高く評価致したいのでございますが——。

それは四年前の夏の夕刻、夕顔の白くお庭に浮んでいる風鈴も涼しげな頃でございました。私は一寸した用件でお邸へ伺い正しく玄関から声をかけたのでございますが、広いお邸は高いラジオの音楽のみが聞えて裏の方でお祖母様がお庭の草花にでも水をおやりになつておられたのでございましょう。誰もお見えにならない気配に私は妙に白々しくてじっと立っていることが出来ず、何思わず二、三步奥へ入り丁度右側にございます物置の方の入口に歩み寄り——全く弁解済みておりますが、その時ばかりは全然何の野心もなかったことは確でございまして、かえってその様な時の方がこうした貴重な経験に出くわすものでございましょうか——私が通路の左の鼠入らずのわきへ、そっと寄った瞬間でございました。向う側の突当りに、かすかに灯がもれて、そこが先生の宅の御湯殿でございしますがザツと水を切る音が聞えて、その灯のもれていた扉がすっと開かれ

るのと同時に電灯の光が暗い室内に斜めに走って大きく広がり白い湯気がもや／＼と立ちこめて、開かれた扉の中に丁度お湯からお上りになった肥った豊満な御婦人の全裸の肉体を私は認めたのでございます。斜め向うを向かれた先生の糸まとわぬ裸体、私はかたずをのんで目を大きく見はり、まばたきする間も惜しく棒立ちになっておりました。よくもまあその様な場所に立って呆然としている私



く、一度拝見した先生の裸体にあらぬ妄想の輪を十重二十重に巻きつけるのでございます。

耐えきれない様な未練を残しながらも私は先生がお湯殿をお出でになられるまでには当然その場を立去っていなければなりません。本当に憚り寸時の間でございました。現実を描いた極楽の夢物語でも語る様な気持で私は今も尚その夜の光景を思い浮べて甘美な陶醉

を先生の御家内の皆様に見られなかったことでございます。お湯殿の先生はよもやこのうす暗い木蔭で、美しい裸像に見とれている、ふらちな男があることを知る由もなく、ゆっくりと向うむきのまゝお身体をお拭いになっておられるのでございます。上体をかがまれたり、片足をおあげになったりするときのその見事な肉づきの躍動、先生はあまりの熱気に何も思わず涼を入れたのでございましょう。白い湯気が温く上気した美しい輝きとみずみずしい潤いをもったお肌からも立ちこめて、その豊満な肥え太られたお身体の特に肉づき良く大きな山と盛上った丸味をおびたおしりから太い丸い実にきめのこまかそうな太ももの白さが、あます処なく私の目にまばゆく映って、はつきりと臉にやきついたのでございます。何という見事なお身体、何度思い出して見ても私を混乱させ、理性も道徳もふみにじって私の欲望は狂わし

にひたるのでございます。私の生涯の中でも実に数える程の少い貴重な寸時でございました。先生は全然お気づきにならないでございましょう。その時も湯上りの恐らく先生としてはしどけない肌着姿を私に見せることを厭うて裏づたいにお邸へお入りになりお身づくろいをチャンとされて私の前へ例の温い笑顔でお出ましになりましたから。実の処その時、私は先程の先生の麗わしいお身体をぬすみ見た寸時の夢からさめた如くホッとため息をついたのでございます。

その後の私は先生と道で会いお邸で御円満なお顔を拝見する度にあの夜の先生のお身体が私の眼前にさら／＼と輝いて妖しい錯綜を描き、身も心もかきむじって踊り狂いたい程の惑乱にかられ、私の悪魔の如き想像をいよ／＼煽りつづけるばかりでございします。それからというものは私は先生のお邸へ訪れる時はつとめて夕方を選び露地に面して拝見出来るお湯殿の窓にほんのりと灯のうつつておりますときには大きな胸の鼓動のときめきを感じてその下を通るのでございます。窓は高く夏の夜、あけ放されてありまして、とても中を覗う術はありません、いたずらに私はいつも御入浴をされているのが先生であるかの様な、そしてあの豊満な美しいお身体を湯にひたられているお姿を思い、感きわまる様に立ちすくむのでございます。今一度、あのお肌を拝見したい。肥ったお身体をかくすものがない姿を見せて頂きたい。私はわくわくと大きな期待をもって朝すますべき用件も夕方にのぼし、お湯殿に灯のうつる時を選んで、再びあの僥倖を願いつゝ玄関へ訪れるのでございますが、何とも物事はそう簡単に甘い夢を再現してくれるものではございません。その後は一度だけお座敷の奥の方にうす桃色のおゆもじ一枚で豊かな乳房をわずかにのどかせてお湯上りのほてったお身体をおさましになつておられるのか、そういうお姿をチラと拝見したのみでございします。そのやるせなさ、私は夢に一度、先生がお衣をぬぎすてられて

お湯殿へお入りになる白い肥満したお身体を見て、思わずお恥しいことでございますが……をおぼえたこともございます。私はもう一刻を先生に対する思慕でのみ過すこともございます。和服の胸元のおわずかなお身体の一部の柔らかな厚さにさえ私はあられもない想像をする程、病こうもうに入ると申しますか、若しや先生が一言私に気を許されて誘惑の言葉をかけられたと致しますならば今の私でも家も妻も財産も何もかも犠牲として先生にお近づきしたことでございましょう。

一度恋した人は忘れられないとは若い頃の精神的恋愛の感傷でございします。二十の恋は心であり四十の恋は肉であると申された詩人がございしますが、私にあてはまることは三十になって恋した先生のお姿、まして一度拝見した恋しい先生のお身体が忘れられないという事でございします。心だけの恋ならば或はもう青春を過ぎつゝある私もその様に女々しくあきらめ切れなしいとは申せ、どうにもならぬこの片恋の苦しみから逃れるすべもあるでございします。中年の恋は肉体なしでは考えられ得ないのでございます。私もその例外でなく、そして私特有の欲望と理想のお姿であられる先生のお身体があまりにも私の本能をゆすぶりつづける処へ、一度たりといえども私の目にやきついたという事は、もうどうにもならぬ憧れを先生と私の空想的関係の幻想を描く処へ、追いやつてゆくのでございます。私の本当の心、先生の御肥満のお身体に憧れる本性。到底常識では容れられない非道な欲望の対象としての先生が恐しくも又妖艶な幻想を私に呼び起すのでございます。

先生は、よもや奇譚クラブという雑誌を御存知ありますまい。もしや知っておられると致しましたならば、私の喜びは無上に燃え上り又勇気も奮い起せることでございますが、先生は如何思召すか？表紙は非常にユニークなもので、完全に奇クがこの種雑誌の持つ何

かこう誇大的なひがんだ暗さを排除した明るさを保っていることをズバリと表現していると私は思っているのですが、何気なく口絵をもらいになった時「まあけがらわしい」と投げ出されることとでございましょう。

私がこの本を弁護するのは我田引水と見られることとでございすが、出来得る限り公平に申し上げますならば勿論正常な方々、先生もそのお一人でございしますが——には見るに耐えぬどぎつい雑誌と見なされることもやむをえません。併しこの世に生をうけている人々の人生は通り一ぺんの理屈で割切れるものではございしません。数多くの悩めるもの、複雑なコンプレックスをもって悲しんでいる救われ難い人々が存在するのを否定することは出来得ません。ましてや人間の本能たるセックスの問題にしても、なまじ非道德という烙印をおすことによって悲惨な宿命に呻吟する不幸な陰影が一見ノーマルに見えている人々にすらひそんでいることは見逃すことの出来ない事実でございします。先生、先生は果して性の問題に何一つ御不満をお持ちではないといい切れるでございしょうか、先生のお肌が年令に似ぬ美しさを保つていられることは、衆知の事実でございします、その理由の一つにお子さまをおうみになつたことがないという事実がございします。世間一般の取沙汰が単なるうわさでございします、それに越したことはございせんが、とかく口喧ましい世間の噂は先生と御主人の間の性の問題にまで言及することがございします。私は又先生に関することは異常な熱心さをもって聞いておりますので、私の想像の限界でおしはかったことのみでございしょうが、先生が性的御不満をお持ちになり、たぐいなき美しい肉体をそのまましぼませてゆくのかと思うと——。

話は横道へそれましたが、奇クは決して他の同類誌（私は同類と見たくないのですが）に見られる様に、一時的な興味を煽り、どぎつい宣伝文句で以って読者をつり内容は分りきったバクロ

ものの表面を撫でた様なナンセンスな文ばかりを羅列したものとは全然趣きを異にして、終始一貫した異常さの中にも何か明るい真面目な充実したものが感じられる雑誌でございします。私が中年の肥満した御婦人を欲望の対象とする中にでも、矢張り理想のタイプとして高度の品位を求める様に、この他誌と違った独特の品位を持つ奇クを愛し、私のこの異常なる本能の唯一つの慰めとしてずっと愛読し、二三拙文を発表したのでございしますが、この本をよまれば私の持つて生れた欲望の異常さが判明することとでございしょう。この本の中にはあらゆるアブノーマルな記録が渦を巻いております。それもつくり出されたものでなく、真実のものでございします。女性が縛られたり、鞭うたれたり、逞ましい男が女の奴隷となったり、男色家の手記や人間が家畜の姿となり、一つの物体として取り扱われるような恐ろしい文章がのっているでございします。くどくは申し上げませんが私が先生を恋慕うあまり、喜びの極致に於て見出す最愛の女性の姿が、この雑誌の絵に文にのっている哀れなる女性の姿に置きかえられた時でございします。お分りでしょうか、私が先生の美しいお身体を、どの様にしたいと思ひ、日夜あらぬ空想を縦横無尽に駆使しているかということ——。

先生、この窮屈な観念で、がんじがらめに束縛されている現世に於いても、唯一つ空想は無限でございします。空想は誰にも弾劾され詰責されることもない筈でございします。

前にも申しました通り先生はY部落へお花の先生として毎木曜日出かけられますが、私は出来得る限り先生と連れて帰ることを毎週の楽しみとしておるのでございします。今日は木曜日という日になると、午後は私は仕事さえお留守になり勝ちで思ひ余る人と共に歩くだけのことが、この様に嬉しいものであるかと我ながら不思議となる位でございします。その帰り途、人家がとだえて淋しい川べりの通称暗やみ藪という藪の中を通る時、私は肥った先生の横側をゆっ

たりとお歩きになる歩調に合わせて歩き、ぴったりと着こなされた和服姿の先生の姿をチラ／＼と横目で覗いながら、いつも次の様なよからぬ光景を想定しているのをごさいます。突然、私が先生の後から先生の柔い胸元を羽が締めにして力まかせに深い藪の奥へと拉してゆく、勿論先生の必死の抵抗が考えられますが、その抵抗すら私には楽しいものの一つでございます。何を企らむか、一体どうしようというのか、それは申す迄もないこととございます。日頃思ひこがれた先生への恋を暴力によってなし遂げようというのをごさいます。先生の抵抗を束縛するための細引きは用意しておりますがいつもと違っていい程和服をお召しになる先生の帯締めや下紐など材料は先生自身がおつけになっておられることとございます。先生は「真夏の日でもこうして和服をきっちり着ればかえって涼しいものよ」と仰せになったこととございます。その様な御人格の先生が裾が乱れ、柔いお身体をひし／＼と縛られるということは、どんなに悲しいこととございましょう。豊満なお身体があらわにされる瞬間は、どの様にみじめなお気持ちでございますでしょうか。私が先生の最後の肌着に手をかける瞬間は、私の呼吸も先生の息づかいもせわしく川の流れも竹やぶを渡る風もすべてが止まった様に鳴りをひそめることとございましょう。私に対する憎しみと憤りが先生の肥ったお身体を逆流してかけめぐり、恐怖と悲しみのため先生が氣も遠くなられる時、逆に私は喜びに恍惚となって同じように失神してしまふこととございましょう。

先生、若し、こうした恐しいことが現実に行われたとしたら先生は果してどういう御処置をとられることとございましょうか。私はいつもそのことを興味深く考えております。勿論、私を見る先生のお顔からは以前の微笑は永遠に消え去り、残るのは憎しみと怒りとのみでございましょうが、御自身の天性の本能たるこの性の問題とふみにじられた知性と心理の関係を、どういう観念で考えられるで

ございましょうか、私のこの夢想の手記は、そういう先生の御思慮に委細構わず無遠慮に先生の肉体を犯し、先生のお心までも冒瀆することをお許し下さいませ。

先生が私のあくなき恋心に負けて消極的に私の不倫の恋をお認めになったとしても、私はこれ程思いつづけた先生を唯単に年少なる若者と中年婦人の危険な関係のみで終らせることはございませぬ。先生と不倫の恋に陥った第一段階の喜びが更に私をして次の第二段階の欲望に発展することとございましょう。全く理想の女性としての先生に対して、私は普通概念的な欲望のみで満足は致しません。先生の持たれるあらゆる部分、先生のすべてが、私の自由に扱える愛玩用の生ける動物的存在であって尚私の求める知性を失わぬ私の所有物とならなければ私の夢はとどまることがないでございます。先生の氣高い珠の肌につける私のサジストたる加虐の血がそのとき快哉を叫ぶのでございます。

サジストたる私は、その方法をあえて単一の方法を固執することとはあり得ません。具体的にいえば私は先生のお身体にありとあらゆる方法による責め、凌辱、苦痛を加えたいのでございます。対象が先生の豊満なお身体ならば、あえてその手段を選ばないで徹底的に色々な方法をためてみたいという念願でございます。出来得るならば先生のお身体各部各細胞を一つ一つ違った手段で弄んでみたいのでございます。奇クに現われた数々の恐しい受難の図を先生の豊満なお身体を使って演出してみたいのでございます。何という恐しい想像でございましょうか。先生、如何思召してございますか私によって自由自在に責め苦しめられる我が身を御想像下さいませ。

私は今ここで先生に対する、その色々な方法や光景を羅列することを抜きに致します。いくら並べたてても際は限はございませぬ。そこで私は私の理想の一駒たる一つの光景を捉えてそれを絵として

先生に進呈し説明を加えることに致します。別紙の通り拙い筆で描きあげましたけれども到底素人の私には先生の美しさは万分の一も表現することは出来ません。ましてや先生の気高い内心の知性、悶えるお苦しみのお心の悩ましさは、全然あらわすことが出来ないことは残念でございます。唯私の欲望と感じのみを拝察して頂ければもうそれで満足でございます。私としては精一杯書いた積りでございます。このゴタ／＼したアクセサリーも私好みの数限りない欲望を表わしたものでございます。この肥満した全裸の姿を浅間しくも

縛られて多勢の男女の前にさらされている中年の御婦人は、たとえ似ていなくても私の為にこの様な恰好にされました先生のお姿でございます。先生のお身体は私の拝見しました限りに於ては、もっともっと御立派なものでございましたが、お許し下さいませ。

(つづく)

△註▽筆者の描かれた絵、数葉同封されてありましたが、掲載出来ない性質のものでありましたので、御諒解下さい。

四馬孝傑作集『美しき女体家畜飼育室』

△―潰滅の前夜―▽より

(大判判画紙)

焼付八枚一組 八百円(送共)

(一) 奇妙な磔

Y国人の地下室に捕われた美貌の日本娘に対する苛酷な調教、胴に絡んだ冷たい鎖、足首にはまった鉄のベルト、そして口には革製の鉗口具が、しっかりとかまされている。黒い手袋をはめたY国人の触手は次、第に日本娘の顔に迫ってくる。

(二) 排泄の強要

鼻をつままれて仕方なく開いた口の中へ情容赦なく注ぎ込まれる大量の食塩水。今は観念の眼を閉じて、その食塩水を受入れているが、やがて起ってくるであろう生理的現象を想像してY国人は、にやりとほく

そ笑むのであった。

(三) 煙草責め

完全な後手しぼり、真紅の猿ぐつわは厳しく右の鼻には一本の火のついた紙巻煙草が差し込まれている。左の鼻孔からは煙が渦を巻いて吐き出された。苦悶にもだえる美貌の日本娘、Y国人は更にもう一本の煙草をとり出して火をつけようとするのであった。

(四) 現代の火責め

膨隆した豊かな両尻の丘に艾のけむりを挙げる全裸の日本娘、あゝ、なんとという美貌に対する凌辱であろうか。一見肌に粟を生ずる凄絶な飽なき責地獄。

(五) ミンミン責め

「そうら、鳴き声が悪けりや、声の出が

よくなるようにしてやるぜ、それで足りなきや、まだまだ手があるんだ。これはほんの序の口だよ。……」

(六) 空気ゼメ

なんとという惨忍な責めでしよう。身動き出来ない彼女は猿ぐつわの苦しさも縄目の痛さも忘れて、鼻孔を僅かでも開けようと切なく喘ぐ。

(七) 食事ゼメ

「フムム、さあ、腹がへったろう、食事の時間だぜ、特別料理だ。ゆっくり食べさせてやるからナ……」白い顔がぐっと仰向かされて、男の手から……

(八) みじめな白豚

「さあ後でゆっくり鳴声をきくからね、その美しい顔をよく見ておきな。ふん、いくら綺麗だからって、あんまりなめた真似をしやがって、ざまア、見ろ。……」

ある女給の体験 (5)

日くさ下か絹きぬ子こ

外ではお祭りのハヤシが流れていました。

彼は椅子に深く腰を下したまま、私を後向きに立たせ両手首のいましめを一旦解いてから背中に高く縛り直しました。

「この生意気な尻め、この尻め！」

強く或は弱く、気まぐれな彼の乗馬鞭の一打ちごとに悲鳴を挙げながら、ゆっくり時間をかけた二十の鞭をお尻に受けました。

こんな悪魔のような責めを受けながら、みじめな屈辱を耐えしのんだ私自身も、かなり変った女だったかもしれません。

私がお祭りの夜、簾椅子に上げられた時から私と光夫さんの仲は、また急に昔にかえってしまい、私は彼から二三日連絡がないと急にたよりなくこの世に一人ぼっちにされた様な淋しさに襲われるのでした。彼は私が鞭で

ぶたれるのを拒みますので、打つことはしなくなりましたが、その代り私のお尻は度々晒しものになりました。

こんな日々を送っていると時々女の落ち行く底知れない深淵をのぞいた様な気がして罪悪感におびえる事がありました。朝のぞいた鏡の中につかれの出た自分の顔を発見してゾツとし、もう今日限り彼のところへ行くまいと決心しながら、時がたつとまた責められた折のお尻の皮膚のくすぐつたい感覚が忘れられず、また出かけてしまうのです。

そんな時、私に思いがけなく縁談が持上がありました。先方はいとこである叔父の長女が勤めているデパートの課長さんで、叔父の家と同じ町内にある旧家でした。私は全然先方

を存じませんでした。母の告別式の時、参列して私を知り叔父を通じて話があったのです。あの告別式の間は、少し小さかった借りものの喪服を着てずっと泣き通しだった私がそんな人に見られていたかと思うと顔の赤らむ思いでした。相手は四十二才で前年奥さんと死別され、八つの男の子が一人あって、私を後妻に望まれたのです。叔父夫婦は私が女給をしていることをかねぐ一族の恥の様に思っていた位ですから、またとない良縁だと私にすすめました。

同じ町内の方のお世話でお見合いの運びになった時、でっぷり肥って脂ぎった中年男を想像していた私は少し神経質に見えるやせぎみのスマートな相手にドギマギしてしまいました。私はお茶を捧げ持ちながら、ふとお店に

来るお客のKさんの話を思い出しました。Kさんはこれまでに十回近いお見合いの経験者ですが彼はお見合いの場で相手の女がお茶を運んでくる時ブルブル手を震わせているのを見るのが大好きでお蔭で見合いは止められなと云っては私達を笑わせていたのです。その時私も緊張で和服の膝が少しふるえているのがわかりました。

最初はそんなに気の進まなかった私も見合の後、先方から返事の来るまでは何も手につかない程落着きませんでした。が婚約が整った時はやはりうれしさを一杯でした。これが私の様な世界に生きる女が人並みに結婚出来る最後のチャンスのような気がします。でもお料理や裁縫など何一つ習う間もなく二十五にもなっていた私は、それからの一カ月、一通り憶えるのに涙ぐましい努力をしました。先方にはまだ元気なお母さんや女中さんもいるとお話で少しは安心しましたが、これで一家の主婦になれるかしらとこれまでの不勉強をすっかり後悔してしまいました。こうして私は光夫さんとの関係や私の性癖の事など胸に秘めて嫁いで行きました。

やっと二人きりになった時、夫は何事も子供のために忍んでほしいと私に頼みました。実母を失った子供に対する父親の深い愛情を感じられ私もこっくりうなづいていました。

新婚旅行に連れて行ってもらえなかったのは別に不満ありませんでしたが、それからの務めは私の想像していた以上にきびしいものでした。夫と子供を会社と学校へ送り出してから少しウスノロの女中と二人で広い家の掃除をします。長い廊下の雑布がけだけでも私には辛いものでしたが、またこの家は、引揚げ以来困窮のうちに過して来た私さえ、びっくりするほどしまり屋の家風でした。財産税ですっかりなくなりいまでは僅かの家作と今住んでいる住居しか残っていませんが先代が爪に火をともし様にして財をなし、一生を節約で送った姑は私のどんな無駄も見逃しませんでした。朝は塩で口をゆすぎ、教えられるお菜の味付けは驚く程水っぽいものでした。でも親孝行で母の云うことは一切さからわれない夫に気に入られる為には、まず姑に仕えねばなりません。その夫も私には毎日その日の入用だけ五百円とか七百元しか渡して呉れないのです。それでも家計簿をつけて月末にまた報告しますと何を買ったとかが無駄が多いとか叱られます。時々足りない分は自分のお金を出して繕っておかねばなりませんので少しばかり持ってきたお金もまたたく間に無くなりました。でも長い間の浪費癖と未経験の私には、この方がかえって気楽だと思いい直して、早く新生活に慣れる様努力しました。小学二年の子供は私をママと呼んではく

れましたが、夜は姑に抱かれて寝る程のひよわいおばあちゃん子で、とても私になつて呉れそうにありません。

朝の掃除をすませると義母と向い合つて着物の仕立かえを習います。夫の和服を出して来てほくのです。が経験の無い私はどうしていいのかさっぱりわかりません。「娘に女の務めを何んにも教えていないなんてどんな親なんだろうね」とか「女給をしていると違つたものだね」と云われる程辛いことはありませんでした。すこし坐っているともう足がしびれて来て、もじもじしてきますと義母は意地悪く私へ隣の部屋へこてを取りにやらせます。立上ろうとしてどすんと倒れると義母は待ってましたとばかり物指でヘラ台をはげしくたたき「何です、お行儀の悪い」と叱りつけます。這う様にしてやっと帰って来ると急に悲しくなってしまうました。

夫が帰ると義母はきよう一日の私の落度を大げさに報告しますので私は毎夜、夫に叱られねばなりません。今までは派手な生活をして来たところが家庭にはいったら、そんな事では駄目だ、おかあさんによく仕込んでもらえ」といいます。私はただ一人の頼りである夫に叱られるのが一番辛く、夫の機嫌を直す為、義母の前に両手をついて、あらためてその日の不都合を詫びねばなりません。でも夫に二人だけになると「母もきつ

い人だからお前も辛いだろうけれど辛抱して呉れ」とやさしくいたわられると彼の胸に顔を埋めて泣き出してしまふのでした。

そのうちだん／＼私は夫に対する愛情が芽ばえて来ました。夫も彼なりに私を愛してくれます。夫の楽しみは晩酌で、毎夜彼の盃を横目にうかがいながら御飯をたべる時は充ち足りた幸福感がありました。私が手をしなわせてお酌するので「やっぱ慣れた手つきだな」と云われ、ヒヤツとして彼の顔色を見ましたが決して皮肉で云っている顔付ではありませんでした。「女給って、どんなことをするんだい」と聞かれ「御存じのくせに」といいますと「いや僕はああいう所へはあまり出入りしないたちでね」と笑います。ほんとに夫はその点、謹厳らしく思われました。「のってごらん」と云われて夫の薄い膝に私の大きなお尻をのせてだかれますと「重い重い」といいながら、なか／＼離してくれないのです。

そのうち私は妊娠したことを知りました。東京に嫁いだ妹は、私からの手紙の返事に、「お姉さんは相変らず要領が悪いのね、結婚してすぐ妊娠しちゃ遊ぶときがないじゃないのうちの秘訣を教えましようか」と云って来ました。はね廻っている妹が目に見える様です。だん／＼お腹がせり出して来ると私は義母の

すすめで冷えない様にフランネルを強く巻きました。そして通じを整えるため毎朝水をのみ、余り好かないお漬物を沢山食べる様に云われました。このあたりは郊外と云っても田舎同様でお産は実家へ帰ってする風習がありそして赤ちやんの身の廻り一切や近所へくばるお祝いのお餅まで実家で支度するのです。でも実家のない私は入院させてほしいと思いましたが、もち論そんなぜい沢は許されそうもありません。でも義母はずっと以前から私のお産の用意をすっかりすませ、三四週間前から私が時々痛みを訴えますと、もうお産婆さんの手配まですませて呉れました。

いよ／＼産気づいて継続した陣痛が起って来ますと義母は早速敷布の上にゴム布を置きその上に白い産蒲団を敷いて私を寝かせ、廊下にはもう四つの金だらいと大小の便器まで用意されています。義母は慣れた手つきで甲斐々々しく働き、心細い思いだった私には日頃のおそろしさなど忘れてしまうほどのたのもしさでした。産婆さんが来られて一旦苦しみが去るとすぐ腰湯をつかい浣腸を受けました。身支度をすませ再び横になって消毒液を浸した冷たいガーゼでよく拭いてもらいます。

私はこれまで診察を受けて来た先生から、無理にきばらなくても、生理的に自然の力が加わって来るから自然に任せて置きなさいと

云われて安心していたのですが、産婆さんは私の両手に竹筒を握らせ歯の間に布をかませかけ声をして私をりきませました。堪えがたい疼痛と同時にいきみが起って分娩出来た事を知りました。赤ん坊は男でした。あと産もすんで私はボロぎれで禪の様におしめをされるのを感じながら眠りに落ちました。

目が覚めるともうお乳が少し張って来ましたが新乳は毒だからと義母は私の乳房をもんで捨てさせた後、やっと赤ん坊を抱かせてくれました。なか／＼啜えられない乳くびをふくませると母となった喜びがどっと押寄せて来ます。あんなにけなしていた妹からは「お姉さん、お目出とう」という便りと立派な産着を送ってくれました。

一週間は絶対動いてはいけないと云われ、床の上に起き上ることも許されません。毎日産婆さんから浣腸をうけ、さし込みで取ってもらっては後を充分に拭き取られ消毒を済ませて襦を締めました。義母は私のボロ布の取り替えや赤ん坊に授乳させるための世話などで夜も満足に寝ない程です。

やっと起上ってもよいと云われ、赤ちやんのおしめと私のおしめを共に自分で取替えることが出来る様になったので、私は嫌だったボロ布を捨てて脱指綿を当てた新しいT字帯を作ってしまったところ、また通じが悪くなり、義母に下剤をのみたいと申します

と産褥中の下剤はお腹が痛むといつて義母の手で浣腸を受けることになりその時新しいT字帯を発見されてしまいました。浣腸中のこととて逃げることも出来ず「こんな勝手なまねをして……」と横臥していた私のむき出しのお尻ははげしくつねられ、ぶたれました。

赤ん坊が生れてから、生活に大きな張り喜びを持った私は、たとえ悲しい事があってもじつと坊やの顔を見ると不思議に和わらいで来ます。でも私はこの機会に親子水入らずの生活が送れたらどんなに幸福なことだろうと考えて、つい夫に義母を残して別居したいと洩しました。その時、夫は「そんな事云つても無理だなア」と困った風でしたが二三日して義母に呼ばれ「わたしを養老院へでも入れる気かえ」と云われてはじめて義母の耳にはいった事を知りました。私はもうその時はそんな虫の良い考えを起したことを悔いていましたので心から詫言しましたが、目をつり上げた姑には私の弁解など聞き入れてもらえず「おお、おそろしい嫁だよ」と耳をふさぎたくなる様な言葉でののしられそれを契機に私に対する義母の不信は一層はげしくなつたのです。私の毎朝の挨拶にも、もう返事さえ頂けず姑の宣伝で町内に私の悪名は知れ渡りました。

夫がロータリーの大会に出席のため一週間

ばかり留守になつた時、私はもう夫のいない婚家にいたたまれず義母が隣りに出掛けした隙に書置をのこし坊やを抱いて家を出ました。ただ一つ下げたスーツケースには坊やのおむつとガラ／＼を入れるのがやっとでした。

叔父の家に行きますと一家はまさか私が家出して来たとは知らず、皆で坊やをあやして呉れますので、つい云いそびれてしまいました。幾日経つても私が帰りそうになく、ふさぎ込んでいますので叔母はきつと不審に思つたのでしよう、問いつめられて、とうとう白状しますとあきれ果てた叔母はすぐ婚家へ詫びに出向きましたが、その頃はもう婚家では親族会議が開かれて私の離縁が決まり、叔父のうちへ使いが出ようとした所でした。もともと夫が私を望んだとき、親戚の殆んどが、「女給では」と反対だったのですから私の離縁は満場一致だったのでしよう。

人の好い叔父を除いて古風な叔母は世間体とわずかな生活費の為、私を邪魔者扱いにし、いとこ達も以前の様な親しさを見せにくれません。私は一時の興奮がさめると行きどころのない悲しさから自分の軽はずみな行動を後悔していました。ロータリーから帰った夫が訪ねて来たとき、どんなことでも辛抱しますからと夫にすがって、もう一度婚家に帰れる様哀願しましたが、私に対する義母の怒りは少しも和わらない様なのです。夫は度

々坊やの顔を見に来ましたが叔父一家は彼に對して大層愛想がよく、二人だけにして気を効かせるのです。夫はそのうち義母も折れるだろうからと私と坊やを市内に間借りさせました。勤めの帰りに立寄れるので便利だったからです。

近況をこまごま書いた妹宛の私の便りに對して妹の主人から「情におぼれては姉上も坊やも不幸になるから家庭裁判所へ相談する様に」と書いて来ました。裁判所と云つて訪ねて行ったら普通の裁判所とは全然方角違ひだったので一日無駄足をふんだ後、平凡なサラリーマンの様なその判事さんに事情を話しました。別の日に呼び出しを受けて行つて見ると夫も来ていて結局離婚が成立し、私はいくらかの慰謝料を受け坊やは夫が育てる事になりました。

坊やは離したくなかつたのですが私に生活能力がなく、また忝くにしても坊やを抱えては二人共倒れになると云われて私も泣く／＼判事さんの言葉に従いました。坊やを夫が引取りに来る前夜は、もう呑みあきてすぐ乳くびを離すのを何度もふくませながら一晩中泣き明かしました。やつと齒がはえかけて、日増しに成長する坊やとも、これが見おさめになるかも知れないと思うと何も知らずに寝入っている愛児の顔が涙でかすんでしまうのでした。

私は慰謝料のうちからこれまでの食費分を叔母に支払うと、もう一度坊きに出ようと決心しお上りさんの様な顔をして駅前安宿にとまり、毎日勤め口をさがしました。そのうちにもお乳が張ると坊やの顔が思い出されて気が狂いそうになります。とうとう彼のデパートに電話をかけ一目だけ坊やに会わせてほしいと頼みますと今度の月曜日に旅館で会わせてやると云って呉れました。

一週間ぶりに元気な坊やの顔を見るとわけもなく涙が出て来ます。膝にだき上げると、モミヂの様なかわいい手がお乳を求めて来ます。乳くびを吸わせながら、いつまでもこのままおられたらと一時の幸福感にじっと坊やを抱きしめました。夫に求められて「もうわたし達は夫婦じゃないんですもの」といいながら坊やに会わせてもらった代償を感じて拒むことが出来ません。自分の弱い意志をはがゆく思いながら、せめて後めたい感じを薄めるため夫に始めて後手に縛ってもらいました。後手のまま坊やの傍にすり寄り、おとなしくしているかわいい額にかぶさってそっと口づけした後、夫に抱き寄せられると何だか私が坊やのため人身供養になった様な気がして来るのでした。

再び坊きに出ることは、この世界の内実を知り尽している私だけに始めて飛び込んだ時

以上に辛く悲しい思いがしました。固定給のある二、三のお店を思い浮べながら比較的評判のよいサロンAを訪れました。若い支配人に「経験は？」と聞かれ「始めてです」とう

そをつきますと「うちは経験者しか採らないんでね」といわれ、しまったと思いました。もう後の祭りでした。次の店では聞かれるままに以前かおりさんのいたお店の名を云いま



すと、どうして止めたか尋ねますので結婚から離婚まで答えねばなりません。根掘り葉掘り結婚生活から離婚の理由まで訊かれ無遠慮な質問の果に私がいまは一人のお客もないと知ると、あとで採否を通知しますと云ったまま梨のつぶてでした。固定給のあるお店は殆んど定員がふさがっており、チップ制のところでもお客をもっていないと歓迎されないのです。わずか二年足らずの間にこの世界でも競争のはげしくなっていることを知りました。

丁度その時開店したばかりの「幌馬車」が女給を募集していました。押しかけた大勢の希望者の中から十数名のうちに私も採用されたのです。アパートの権利金を支払うと慰謝料も殆んどなくなりました。私は新しい気持ちで勤めました。仿っているうちは何もかも忘れていきます。将来の計画を立てるにもお金がなければとまずコツコツ貯金をする事にしました。

十月になって間もなく坊やのはじめての誕生日が来ました。せめてその日だけ坊やに会いたく、迷惑になるかも知れないと思いが、退勤時を図ってデパートの職員出入口の前をウロ／＼して待っていました。近くの喫茶店にはいつて夫は私の頼みを聞くと「そんなに度々会わせると云ったって困るよ、やっとう家政婦になつた処だし、人工栄養もどうや

ら軌道に乗ったんだから、今お前に出られて乳をやったり抱かれたりしたらぶちこわしじやないか」といいます。それでも夫の視線がじろ／＼私の胸のふくらみにそそがれているのを感じ「私はどんなことされても構いませんから一目会わせて頂だけ」と頼みますと私のあまり必死の顔付きに夫は可愛そうだと思つたか、それとも薄気味悪くなったのか、「坊やに触りさえしなければ会つてもよい」と云ってくれました。

当日、私は貯金を全部、下して坊やのベビー服を買い旅館で夫の退勤を待っていました。彼は「坊やに口づけしたり抱っこしてはいけないよ、この間の様に縛って置くから服をおぬぎ」と云うので、そんなにしなくても思いながら彼の氣の変わるのを恐れてスーツの上下をぬぎますとスリッパまで取られました。細ひもで高手小手にいましめられた私は室の真中に坐ってまっていますと隣りの襖があいて三十余りやせ型のちよつと垢ぬけした見知らぬ女の人が坊やを抱いてはいって来ました。その人が家政婦なのでしょう。私の前に坊やを下すと室の隅に下って、この奇妙な母子の対面を見下していました。下された坊やはウンとそっくり返ると向うへ這って行こうとしますので「坊や／＼」と呼びますとやっとな私の膝にはい寄って来ました。抱っこする自由のきかない自分の後手がうらめしく、坊

やが私のブラジャーをひきむしってお乳を露見してくれたらと儚ない願いをかけながら、私のガーターをいじくっている手首に輪のはいった可愛い手を見下しているうち、坊やはもう母を忘れてしまったのかまた向うへ這い出します。後から縄尻を引かれるのも構わず「坊や／＼」と体を乗り出し泣き声で呼びましたが、もう家政婦に抱き上げられ立去ってしまった。今までの張りつめた氣持が一度にゆらぐと、近寄って来る夫の言葉も遠い世界の様にぼんやり聞いていました。

今度のお店は立地条件が悪いせいか開店の華々しさに較べると日が経つにつれて客が落ち出し、私達の収入にも影響して、自然私の貯蓄計画は狂いがちでした。その時、お店で東京の新橋に開店する同じ幌馬車に行く希望者を募りました。月給制で宿舎も出来たこのことで私は関西にいる限り坊やの幻に悩まされ通しなので東京へ行けばあきらめがつくかも知れないと思い、東京行に加えてもらいました。夫宛にもう坊やともあなたとも会わない積りですと便りしますと思いがけなく彼から返事が来て坊やとも最後になろうから、もう一度会わせてやろうと云って来ました。来る十日は田舎のお祭りで義母がそちらへ出かけるから家へ来いとこの事でした。しかもその日は私が東京へ出発する予定の前日なのです。

坊やの世話をよく頼んでおこうとその日、家政婦さんには茶羽織を、女中には化粧品のセットを買い、彼の帰りを見はからって訪ねますと女二人は、待ちかねた様に私を居間へ通しました「ここで脱いで頂戴」と云われ何のことだろうと合点がつかねていますと、「脱いでいただく約束でしょう？ 旦那様の御命令ですよ」といいます。ああ、また縛られるのかと思うと嫌悪と羞恥でフツと溜息が出て来ます。スリッパまではぐられて、ウスノロの癖に力のある女中にきつく縄をかけられました。「それでは行きましょう、離れですよ」と家政婦の声に女中は縄尻を鞭代りに私の薄いナイロンパンティのお尻をぶって追いついてますので驚いて「何をするのよ」と睨みつけますと家政婦は「ホッホホ、ねえや、そんなにしなくてもいいのよ」と女中をたしなめました、あまりのくやしさに私はお尻で女中をぐいぐい壁ぎわまで押し付けました。家政婦は女中から縄尻を取ると「さあ大人しくして歩くのよ」と私を先頭に立てて奥へ進みました。

先ほどもがいた時からパンティの布がお尻の割目にはさまって気持ちが悪いのを我慢していると、「奥さま、ちよっとしたお芝居ですわね」という女中の声に私は「なアー」と振りかえってハツとしました。私は今まで、この女中から奥様と呼ばれていましたので今

高井好晴氏のアイデアに答えて

—雄鶏の脳味噌—

南 川 和 子

読者提供のアイデア（六月号）高井氏の「罪と罰」「SM運動会の巻」は、面白く拝見いたしました。その中で「鶏小屋」と「電熱器」が出てまいりましたので、少し陰惨になりますが、私の体験いたしました中国に於ける身の毛もよだつような「不老長寿薬」の製造方法に就いて、過程を御紹介いたします。

私が北京におりました頃、中国の金持連中は、残虐と申しますが、非常にサディスティックな方法で、鶏の脳味噌から「不老長寿」の高貴薬を製造いたしておりました。

長生きをしたいと云う欲望は、人間永遠の希望で御座います、中国では古来、この方面の研究は盛んであったように、文書で拝見いたしております。

例えば、「秦の始皇帝」は、妙令の美しい処女を一昼夜、清冽な井戸水に沈め、水を含んで白臘と化した美肌を甌上に、すく

い上げ、自ら刃物を握って、その、ふくやかな胸、腰の辺り、さては女の生命とたのむ臓器を抉り取っては、食したと伝えられております。

つまり、娘盛りの十七歳から二十歳ぐらいまでの妙令の女の、あの水々しくも艶やかな肉体の総べての部分には、これから開かれようとする溢れるばかりの強烈なホルモン薬が充実している。と云った根も葉もない、殆んど信じられないような大陸的な古学者の、着想に基いた、哀れな支那上代の女性被虐の歴史であります、こう云った女性軽視と申しますか、女体を物品扱いした中国人の思想は現代にも及んでいるものがあります、中国では、凡ゆる階層の女性が、こうした特権者の横暴な犠牲に供されていたので御座いました。

高井氏の③見出し、舞踊——に於ける遊戯的なシーンも、中国では残虐なサディスティックな私刑にもなりかねないので御座

も自分が呼ばれたと思って反射的に振かえつてしまったのですが、女中が呼んだのは家政婦の方でした。パツの悪さと恥かしさで耳まで赤くなりながら「ホッホッホ、まだ奥様気取りなのね」とさも憎らしそうにあざける家政婦に追い立てられて離れ座敷に行きますと坊やが夫に抱かれて待っているのを見て家政婦を引きずる様にしてにじり寄りしました。

近づけた私の顔に小さな手がいたづらします。まだ赤ん坊だから大きくなった時、こんな哀れな母の姿は憶えていないだろうと思いつながら、とても「坊や、ママよ」とは名乗れませんでした。口に突っ込まれた小さい指を軽く啜えようと坊やの生温かい息づかいが聞こえる様です。私は駄目とは思いつながら「ねえ抱かせていただけませんか？」と身をねじって哀願してみましたが、夫がちらっと後にいる家政婦にうかがう様な素振りをするのを見て彼とこの女とが家政婦と雇主以上の関係にある事を知りました。その女は「もういいじやないの、もういいでしょう？」と後からはげしく縄尻を引いて私を立たせようとします。「坊や、さようなら」と心を残しながら背中を小突かれて廊下に出ますと、家政婦は「最後は色仕掛けなんだから油断も隙も出来やしない」と私のお尻の下をつねり上げました。私は坊やとのお別れに母の泣き声を聞かせたくない歯をくいしばってお尻の痛みをこらえていました。

(未完)

います。

私が、これから申し上げますのは、相手が雄鶏だからよいので御座いまして、人間でしたら、女性を食することまでやりかねない中国人のことですから、あるいは終戦時の中国に於て、哀れな捕われの日本婦人や中国人女性達が犠牲に供されていないと誰が断言出来ましょう。現に、私がおりまして、昭和十七年頃。日本軍閥の花々しき時代には於いてさえ、数多くの日本婦人とか幼児たちが誘拐されたり虐殺されて行方不明になっていたの御座いましたから。

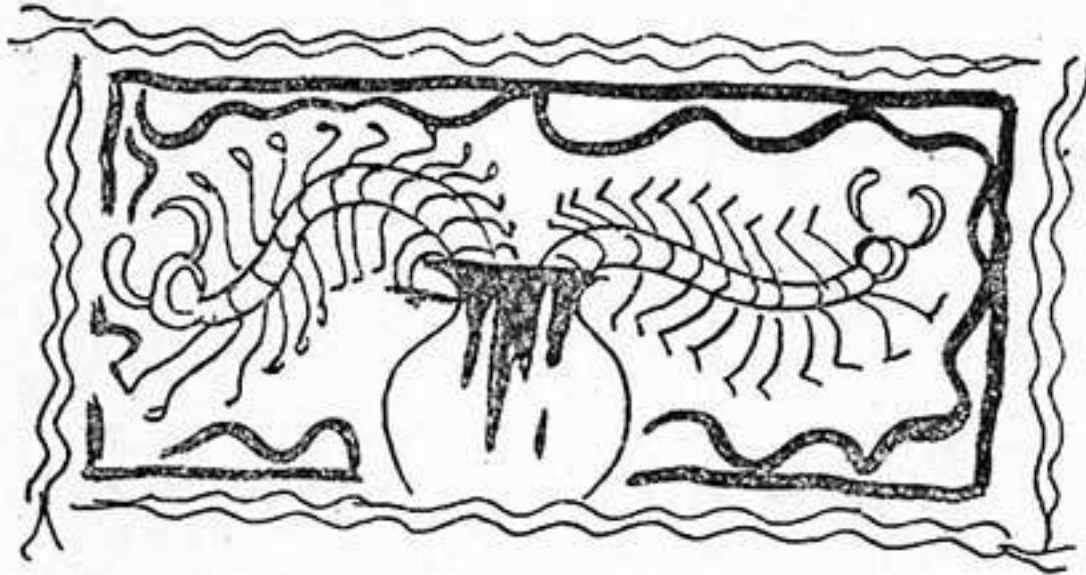
さて、本題に戻りましょう。高貴藥製造には一般に雄鶏を用いていたことは前にも申しのべましたが、特に生殖力旺盛な雄鶏ほど珍重され、用意の支柱に縛りつけられます。これに先だち、無理矢理、押えつけられた雄鶏は料理人の刃物で、頭蓋骨の頂上を、丸く剃毛し、坊主頭にされます。すむと雄鶏の肢裏の下には部厚い鉄板が敷かれます。これで万端準備は整ったわけなのですが、すぐに鉄板の下側から電熱器ならぬ油火で、なるべく悠っくり鉄板が焼かれています。熱さに耐えかねた雄鶏は機械的に足踏みを始めます。それから次第に速度を増し、もう夢中になって熱くなった鉄板から一寸でも一刻でも肢裏を離そうと焦

ります。やがて、失神せんばかりの激しい速度で足踏みしておりました雄鶏は、疲れ果て、ぐったりとなり、動かなくなった両肢の裏を焼け爛れるにまかせて鉄板が音を上げて焦がし始めます。すると料理人は用意の刃物で雄鶏の頭蓋骨をパツクリとあけます。待ちかねていた招待客やその家の家族達は交互に、小さな匙をとって雄鶏の頭内へさしこんでは一匙一匙、いとも町重に脳味噌をすくい取っては、呑むので御座います。すっかり空になった頃、雄鶏は料理人に払い下げられ、やがて食卓を飾る美食と変わるので御座いますが、奇抜と云えば奇抜、凄惨と云えば、あまりに凄惨な殺害の方法ではないでしょうか。中国人に云わせれば、爪先から羽の先まで存在する雄鶏のすべての精氣と申しますが生命力が、焼け爛れるような熱さに耐え切れず、上昇して頭上に集り、脳髓に集中するので、匙で一匙ずつ、すくい飲むことによつて長寿力を増すことが出来ると申すので御座います。

如何で御座いましょうか。若しも雄鶏の犠牲者が、妙令の美女であり、処女であつたとしたら、私は、むしろ、遅ましい雄鶏のような男性でありたいと願うので御座いますが。想い出したまゝに御参考に供したいと存じます。

(おわり)

一 禪 亭 雜 記



内 田 武 男

終戦時の混乱がまだ治っていない頃、私は「風太郎」という奇妙な名で呼ばれて、一禪亭に於て異常な生活を体験した。私はこの自分の体験した生活をお知らせしたく、再びここに拙い筆を続けることにした。

四、食 事

食事は二回である。掃除後と遊戯終了後摂らされる。食物は充分に摂る事が出来た。それは脂肪と蛋白とを豊富に含んだ完全栄養混合食で、筋肉の発達を助長するようにグリコーゲンが多分に含まれていた。また体を柔軟にするために醋酸液をコップに一日一杯ずつ飲まなければならない。食事には特別食があり、それはヘコの希望によって調理されるようになっていた。特別食を支給されるのは、よい客がついた者とか、客へのサービスがよかった者に限られている。また、減食があり、これは規則を犯したり怠けた者に懲罰として課せられた。いわゆる物理的刺戟による肉体的苦痛を与える事は、古参ヘコにとっては快感に変容する可能性があり、たいした効果をあげないからである。減食は、労働が激しいだけに大きな脅威となっていた。同性愛は二日、自

慰は一日、サボは同じく一日、失敗は一食分の減食となっている。

五、入 浴——座敷に出場する準備

入浴はヘコの衛生のためというよりも、彼等の商品としての価値を高めるために毎日欠かさず座敷に出される前に行われる。入浴といっても湯につかるだけでなく、体を磨きあげるのである。これは二人一組になって、相手の体を卵白や化粧液を充分に使ってつや出しする。皮膚が生鮮さを保つように特に配慮される。仕上げはオリーブ油によって行われる。オリーブ油は特に禪の摩擦を緩和するために、多量に塗りこめられる。また肩甲部や胸の隆起、臀部には光沢を發し、人目をひくようにオイルを惜しげなく使用する。また腋毛は残し、頭髮及び、その他のすべての毛は剃り落さなければならない。(頭髮を剃るのは逃亡をある程度防ぐためである)これも毎日欠かさず行われるのである。しかしこれも古参ヘコでは化粧液に特殊な脱毛剤が配合されているので、その必要は次第になくなる。但し頭部と腋下とには、化粧液の使用は厳禁されて居り、別の化粧液が使用されるのである。入浴が終ると、点呼の場合と同様に厳密な検査が親方によって行われる。脱衣場の中央に「足台」が据えられ、その前に親方が腰掛ける。それと真向いに鏡が見えるよ

うに配置されるのである。呼ばれた者は待機している風呂場から上り、床板を勢よく踏んで足台に直立する。検査は耳の穴から爪の先まで厳密に行われる。またいろいろなポーズを親方の命令でとられ、肉体の発達の程度均齊、柔軟性等が調べられる。これがすむと帳場から廻ってきたメモによって、六尺禪、サポーター、キヤルマタ、その他客の注文にある下衣が与えられ、座敷に出られるように準備する。しかし客の申合せにより大遊戯場で「競馬」や「風船打ち」等のマス・ゲームが行われる場合は全裸で行かなければならない。

準備の出来た者は真鍮製の首輪を世話頭によつてはめられる。この首輪にはヘコのネームが刻まれており、このネームはローマ字で入っていた。弥太吉が「YATAKICHI」と入っている新しい首輪をはめられている時、彼の虚脱した乳くさい顔に一筋の涙がきらめいていたのを印象深く憶えている。首輪には鍵穴がついていて、鍵は鎖によつて握り手とつながり、客がこれをチケットと交換に帳場から貰う。客は鍵を首輪の鍵穴にかける事によつてヘコを受取ったしるしになるのである。首輪をつけられたヘコは一列になって格子戸を前に呼び出しを待つ、座敷の世話役は一人ずつ「杏平!」「風太郎!」「弥太吉!」と呼び出し、格子戸の外に連れ出すと後手錠を

はめ、ヘコの尻を棍棒で追い立て乍ら座敷に連れ去ってしまう。ヘコは毎晩どんな客に遊ばれるか不安と興味をまじえた感情で胸をしめつけられ乍らじっと立っていないければならない。

六、肉づけ室

この室に入れられるのは小部屋での遊戯時間、入亭直後の者か小部屋の客がつかなくなったヘコに限られる。ヘコを無駄に遊ばせておくと体がなまになってしまふからである。(ヘコが健康な感覚をとり戻すことを極度に恐れており、そのためには時間の余裕を与えない)肉づけ室では体をこしらえるために、かなり激しい筋肉運動が課せられる。空中廻転、懸垂、足の廻転運動、腰を振る運動、重量挙、倒立等々。たとえば一例をあげてみよう。足の廻転運動は二つの鉄棒を両側に握つて腰を浮かすと自転車をこぐように足を廻転させるのである。一回三分から十分で入亭日数によつて時間を次第に延長するようにになっている。また、天井から吊つてある革手錠に両腕をしめつけ、一方の把手を引くと滑車が廻つて体が引きあげられる。この姿勢で尻を丸めるように足を廻転させるのである。またこれは廻転運動ではないが、腰の筋肉が発達してくると、同じ姿勢で腕を伸ばしたまま足を「ハ」の字形にあげて天井につけなければならぬ。この運動は「おしめ」といわれる

つまり吊された恰好で、おしめをかけられる姿勢をとるのである。

「風太郎! ケツをあげんか、おしめが、かからんぞ」

辰さんの怒声に、私が必死になって尻をあげ、足が天井にとどきそうになると彼は意地悪く把手をゆるめる。吊革が下つて体が落ちるので足と天井の距離は再び離れ、従つて尻を更にあげなければならぬ。ざっとこのような方法ですべての運動が指導される。

すべてのヘコは入亭すると誰でも座敷に出されるまで、短くて二日から六日は肉づけ室で過さなければならぬ。この間にすべての基本運動が一応出来るようになるのである。空中廻転、倒立などは一日で完全に習得させられる。弥太吉は入亭したばかりで私と一緒にになったが「腰を振る運動」をさせられていた。つまり万歳の姿勢で「氣をつけ」の足型を崩さずに両足を「へ」の字に曲げ、腰を前後に振るのである。弥太吉の体が崩れそうになるとタバコの火を彼の尻につける。オイルのくすぶる臭いがプンと私の鼻を打った。「こんなことにへこたれて、一人前のヘコになれるか」と云うのが、新入のヘコの訓練に辰さんが口ぐせのように発するきまり文句であった。

ヘコが二人以上肉づけ室に入る場合は集団的に体をきたえる方法として、いわゆるレス

リングが行われた。レスリングと云つてもヘコはサポーターもパンツも着けない、一糸纏わぬ素っ裸で取り組むのである。何故かと云うと運動が激しいので、禪でも着けようものなら股ずれがすぐ出来てしまうからである。従つて肉づけ室では禪をつける事は許されない。私と弥太吉もこの日、古代ギリシヤのレスラーのように熱戦を展開した、と云うより熱戦にならざるを得なかった。つまり辰さんの看視がきびしく、少しでも力を抜く事は出来なかつたからである。弥太吉の純真な手は私の身体を攻撃する事を極度にはばかつていたが、辰さんにたしなめられると彼は猪のように立向つて来た。彼の柔軟な体が私にぶつかつてきて、私に瞬間はのぼのとしたものを感じさせたが、陶醉する余裕などは全くなかつた。

七、遊戯終了——就寝

遊戯が終るとヘコは首輪から鍵がはずされ客から世話役に渡される。世話役はヘコの体に異状があるかどうかを厳密に検査し、異状が無ければ客は一禪亭を無事退出する事が出来るが、もし異状があればその程度によって補償金を帳場に支払わなければならない。検査を通過したヘコはヘコ場に送り込まれ、用便、食事の後、就寝を許される。就寝になると六尺禪と水法被をはずし、一枚の三角禪に取り換えて点呼を待つのである。点呼には検

身はつきものであるが、夜間の点呼は簡単に禪を親方に見せるだけで済むのである。この時エネルギーの消耗の著しい者はホルモン注射を尻に打たれる。親方の「よし！」という合図で禪を手早く着け、毛布の上に正坐すると「お休みなさいませ」と額をすりつける。この挨拶は必ず一齊にしなければならぬ。合い方が悪いと何回でも繰り返えしを命じられる。ヘコは毛布をかけて体を水平にし、両手を頭上で組み合せて寝なければならぬ。手を毛布に入れる事も、体を一方に曲げる事も規則違反として罰せられる。この就寝法も新入りのヘコには非常にきゆうくつであるが習慣になると苦痛にはならなくなる。それでも辰さんの動静をうかがい、違反をする者もある。その場合、新入りの若いヘコが選ばれる。しかし午後の検査で若いヘコの体臭からそれもちどころに暴露されるが相手を明す者は殆どいない。従つて懲罰を一身に受けるのである。何故かと云うと、相手を明かすとヘコの掟として爪はじきされるからである。最後にヘコが使用する三角禪について簡単に触れておこう。この禪は一枚の前袋と、それにつながるゴム製の後禪と腰紐から出来ている。前袋は Saport する部分だけにゴムがついていて、ぴったりはまるようになっていて。前袋はそれぞれのヘコの体の部分に合わせて作られていて、洗濯でとりまぎれぬよう

に隅にネームが入っている。後禪は巾の狭い総ゴム製で尻の溝に喰い入るようになっており、この禪を着けることによって下腹部の動揺を安定させるのである。効果から云えば六尺禪が最もよいのであるが、前に説明した点検に不便なので、親方がこのような特殊な禪を考案したのである。

次に遊戯場の説明に入ることしよう。

遊戯場には大部屋と小部屋があることは前に説明した。大部屋では主としてマス・ゲームが行われ、小部屋では手に入れた一人なり二人のヘコを一人の客が存分にもてあそぶのである。客に買いとられたヘコは客の命令に絶対に服従しなければならない。客はまた、ヘコの肉体を傷つけさせなければ思い通りにもてあそんでよい事になっている。世話役が客を紹介するとヘコは、

「風太郎でございます、よろしく願ひします」と頭を下げるのである。客は首輪に鍵をかけると、客の立場から、ヘコの体を点検する。「競馬」というマス・ゲームがある場合は、この点検は非常にうるさい。要するに馬になる人間の活力が勝敗のかなめになるからである。客は「追い込み棒」を帳場から貰うとヘコの尻を叩きながら遊戯場に追い込むのである。大部屋では追い込まれたヘコは、それぞれのヘコの体に合せた調具の置いてあるボックスに案内し、その場所で鎖につながれ

たまま客の指示を待たなければならない。

大部屋でよく行われるマス・ゲームは「風船打ち」と「競馬」である。この二例について紹介しよう。

「風船打ち」は、まず、それぞれのヘコの両股の間に色とりどりの風船が吊下げられる。これは一尺程度の長さの紐の先端に風船をとりにつけ、一方の端で腰から太股へかけて括るのである。鎖から解かれたヘコは遊戯場の中央に集合し、赤禪一本になった世話頭から風船をつけて貰う。客は鉄砲と紙製の玉を受けると、ヘコをとり巻いて遊戯が始まるのを、今や遅しと待ちかまえる。この間に客の手に④とか⑤とか符牒のついた旗が配られる。

客は同一符牒の旗を十数本もらうと、それぞれ腰バンドの矢立にほうり込むのである。準備が出来ると、世話頭は「用意」と叫び、太鼓を三つ鳴らす。鳴り終りを合図に客は遠巻きになったヘコの風船を割るために中央に殺到する。ヘコは風船を割られないように全力を挙げて逃げ廻らなければならない。室はかなり広いので二十人前後のヘコと、これと同数の客が行動するには十分である。伴奏はすべて和楽器で行われ、ヘコの士気を鼓舞する。おまけに世話頭の革鞭が絶えずヘコの動静を監視するのである。ヘコは風船を割られるまでは、逃げ廻っていないなければならない。早く風船を割られたヘコは世話頭のメモにつ

けられ、懲罰の対象になるのである。風船を割られるとヘコは停止し、股を大きくひろげ前かがみになると、両手を後に廻し、尻たぶをこじあけて、禪に旗を挿入してもらう。ヘコは旗を尻になびかせた姿勢で世話頭に向い「雪太郎、旗をつけられました」と、報告する。一番初めに風船を割られたヘコはぶら下った紐の一端をとられ、引きずり廻されたあげく、「一日分の減食」と云い渡されるのが常である。与えられた数の玉を打ち終るとゲームは終了し、採点する。採点は室の一侧の壁に向って、後向きに並んでいるヘコの尻にたてられた旗によって、客の得点をきめるのである。また、このゲームは源平に分れて行われたり、数組のグループに分れて行われる。いずれも賭を伴うのが普通である。つまり風船を割られたヘコの数によって勝率を計算、賭をするのである。

「競馬」は、いうまでもなく、ヘコを馬に仕立てて競走するのである。ヘコにはクツワが噛ませられ、はずれぬようにバンドでしっかりとめられる。クツワには手綱がとりつけられる。トロが運ばれると、ヘコはスタートに四人一組で車軸を両手でしっかり握り、四つん這いになって整列する。客はヘコを出来るだけ早く走らせることが必要なので、鞭でヘコの臀部を打つのである。また、客は行動しやすいようにキヤルマタ、又はブリーフ一枚

になる。彼等の好みで禪を着けたり、シャツ一枚で乗る者もある。(しかし男女同席する場合はヘコ以外、客同志が裸になることは禁止される)

「用意」という世話頭の号令で、ヘコは下腹部に力を入れ、両膝を伸ばして前方を注目する。よくきたえられたヘコは、尻の筋肉は盛り上り紅潮する。太鼓の合図で鞭をピシヤッとあてられたヘコたちは後足で床を勢いよく蹴り、走り出すのである。鞭は間断なく尻にあてられる。ヘコのクツワから吐き出す息づかいが室に充滿し、経験の浅い若いヘコの叫喚がよんだ空気をゆるがすのである。これを客の言葉で「鳴かせる」という。つまり若いヘコを鳴かせることに客は興味を持つらしい。弥太吉はしなやかな体を、年配の男の客の尻の下に据えられ、その重圧に押しひしがれながらトロを押していた。室を二回転もすると彼の腰はくだけてきた。客は足で胴を蹴り、尻に鞭の雨を降らした。彼は病人のように唸っていたが、それが次第にわめき声に変わり、ゆがんだ顔は汗と涙でおおわれていた。彼の長く尾をひく様なカン高い声が口から洩れると、客の顔は残忍にゆがんだ。

「小僧！ 尻をあげんか！」と怒鳴ると、弥太吉の脇腹を踵で力まかせに蹴った。そのシヨックで弥太吉ははねるように走った。ようやく三回転し、ゴールにとび込むと床にへば

りつくように倒れていた。どのヘコも全身から湯気をたちのぼらせ、胸と腹を交互にふくらませながら荒い息を吐いていた。所要時間と順位が世話頭によって発表され、決勝に残る馬がきまると、ヘコたちは世話役に手綱をとられて、一束になりシャワー室に連れてゆかれる。決勝に残る馬——ヘコはカンフル注射を打たれる。古参のヘコは皮膚が鞭をあてられても固くなっている、毛細管が膨脹する程度も少く、回復も早い、若いヘコ——

——特にはじめて競馬に引き出された者は、尻は「みみず腫れ」になり、はげしい痛みで直立することなど到底できない。シャワー室では這ったまま水をかけられ、世話役に洗ってもらうのである。競馬はヘコにとってはいわば洗礼であり、一禪亭に入ったヘコがこの洗礼を受けることによって一人前になったしるしになるのである。したがって新入りは他のゲームには出されても、競馬だけは「肉づけ室」で十分腕、足、腰の筋肉がある程度発達

ちようどあの時、K子さんと並んで立ったU停留所の前に、小さい葉屋さんがありました。私とK子さんは、シヨウウインドウを見るときもなく一緒に眺めていましたが、私はハッとして目をそむけ、盗み見る様にK子さんの顔を見たのです。K子さんのほの白く美し

しなれば出さない事になっている。この判定は親方が行うのである。決勝で優勝したヘコは客に手綱をとられて全員注視の中を一巡する。客たちはこのヘコの肩や胸や下半身の筋肉をつかんだり、叩いたりしながら品定めをし、価格の改訂が行われる。へつまりよいヘコほど値が高いが、しかし入亭直後の「初見世」（はじめて客の前に立たされる）になったヘコは、どのヘコよりも高価につけられるのである。なぜかという、純真で羞恥心に富んでいるヘコをもてあそぶことは、彼等のサディズムを一層刺戟することになり、それだけ希望者が多いからである。決勝に残ったヘコは世話頭から賞讃され、特別食が支給される。

マス・ゲームには「レスリング」「角力」「カムサツカ体操」等が客の趣向をとり入れて行われる。例えば「角力」では早くとりくんだ相手の禪をはずした者が勝利するといった具合である。

頬がパツと赤みがさして彼女も亦シヨウウインドウから目をそらす所でした。何故でしょう。そこには三種類の浣腸器が——赤いゴム製のエネマシリンジと三〇CCの青いガラスの浣腸器、スポイト式浣腸器の三種類が——並べてあり、その上にポスターには次の

小部屋では主として「縛り」とか「責め」がヘコに加えられるが、其の他の詳細はプレイベートな事柄なので他人の預り知らないところである。小部屋には番号とその下に収容されたヘコの名札が吊りさげられる。鎖につながれたヘコは客に引き立てられて小部屋に入るのである。ドアには鍵がかけられる。

ヘコが小部屋に収容されてしまうと一禪亭には物音一つしない夜がはじめて訪れる。廊下はひっそりと更け渡り、親方、世話頭、世話役、帳場の仕事師たちは、ようやく自分をとりのどしたように仮睡の床にもぐりこむのである。ヘコは「エビ責め」や両手両足を八の字にひろげて一晩中ハンモックに吊られている責苦をまったく知らぬげになまあくびを一つすると眠りに落ちてしまう。騒々しいヘコ場の行事が数時間の後にはちやんと待っているからである。

(終)

様に書いてあったのです。「お子様や御嬢様奥様方の便秘は浣腸で……健康と美容の為に……」と。

私には青い硝子の浣腸器の曲線を書いて延びた嘴管が、グリセリンに塗れて光って居るように思えました。そして、それを手にした医

者の手が恥しがって逃れ様とする私の腰の辺に迫っても来る様な錯覚に襲れて胸が高鳴るのを憶えました。しかし、その時にK子さんの顔にも浮かんだ同じシヨックの色が私には二重の喜びを呼び起した事は事実なのです。電車が来ました。逃げる様にK子さんは電車に走り寄り、私は続いて電車のステップに上るとK子さんのクリクリとうごめくお尻を目の前にしてジッとして居らない様な気持になりました。

その頃、私はK子さんと同じアパートに隣り合った部屋で住み、同じ商社に通って居たのです。その日も一緒に帰りましたが、シヨウウインドウの事はお互いに何も云いませんでした。しかし、その夜、私はK子さんの事を考えないで居られなかった事を告白しなければなりません。夜具の中で何時かK子さんの肉づきのよい白い肌、そして、ふっくらとボリュームのあるお臀の事を、そしてK子さんが病気になる、隣りの部屋でお医者から無理



青い浣腸器

久利須照雄

矢理に浣腸をされる光景を想像して妖しく胸がふるえるのでした。

私は押入れの中から硝子製の五十CCのグリセリン浣腸器を取出して頬ずりをしました。通常の二十CCのものにくらべて遙かに大きいこの浣腸器を、新宿のあるデパートの薬品部のケースの中に見出して、何日も何日も横眼でのぞきながら、その前を素通りしたのでした。そのずっしりと手ごたえのあるであろう触感、嘴管は私の希望する程は大きくないのですが、それでも先にゆく程太くなって、通常のものより遅いその尖端、とうとう決心してそれを買った時の恥しさを今も忘れる事は出来ません。それを渡してくれた男店員

の口に心もちか笑いがあつた様に思い私の全身は汗で濡れました。

私はコップに枕元のお湯を注ぎ、浣腸器に吸上げると鏡台の前に置きました。五〇CCの水を含んで青く濡れた浣腸器は鏡の中に妖しい光を放って静かに写っております。なんという澄んだ美しい色でしょう。何時か鏡の中の私はK子さんであり、鏡に映る私の右手は医者の手である事を私に錯覚させてくれるのです。私の言葉はK子さんの言葉になり、私は今や浣腸され様として恥しさに拒否し続けるK子さんになりましたのです。

鏡の中の光景が、どんなものであったか、私は俳優でもあり演出者でもあり、又見物人でもあったのです。私はそれを眺めようと狂気の様になりました。医者の手には、五〇CCのガラス製浣腸器が握られています。それを眺めたK子さんの、

「嫌です、嫌よ、浣腸はいや、恥しいの、きまり悪くてとても、先生、嫌、あゝ、とてもとても嫌、やめて」

と叫びますが、医者の手の中の悪魔の槍の様な浣腸器の嘴管はグリセリンの液に輝いてその尖端から滴々と薬液を洩しながら淫蕩な光を放っています。私は医者であり、又、反面、その光景の盗視者です。そして、それと同時に又私は浣腸を自らの肉体に感ずる事も

出来るのです。あゝ、なんという私の奇想天外で奇抜なアイデアでしょうか。一人三役。そうです。私は一人で三人分の愉悅を味わうことが出来るのです。なんと素晴らしいことではありませんか。

コン／＼とした眠りが来て、朝、私は夢の様な昨夜の思い出を抱いて何にも知らないK子さんと一緒に勤めに出たのです。

私はKさんを浣腸するか、K子さんに浣腸されるか、又はK子さんが他の人から浣腸される所を見てみたい。そんな欲望に毎日々々悩まされたのです。会社のTがK子さんの後ろを通りぬけながらお尻を掴って行ったのをチラリと目撃した私は、事務をとりながら、そのまゝK子さんの肉付きゆたかなお尻を想像しないではいられませんでした。

そんな私に、とう／＼絶好の機会が訪れたのです。K子さんが病気になったのです。昨夜の事でした。夕方から腹痛で休んで居たK子さんが八時頃になって急にひどく痛むらしいのです。と云っても何も大した事とは思わなかったのですが、毛布一枚に包まれたK子さんの体がベッドの上でよじれるように苦しむ度に、私には何時もの欲望が打勝ち難いものになりました。「いゝのよ、いゝのよ」と云うK子さんを説き伏せて近くのお医者Yを呼びに行ったのです。私にはYが来て、K子さんを診察するのだろうと考えただけでも興

味が湧いてきました。その上若しか！若しかしたら浣腸！あゝ私は気が遠くなる様な思いで医者Yの所に走りました。若しかばかりではありません。私はもっと作爲的でした。Yに私は云ったのです。

「どうか先生、すぐ来て下さい。今少し落着いたのですがさっきはとても苦しがつて（誇張です）又、夜苦しみ出すと困ります。盲腸、いえ盲腸ではないと思います。痛い所が右側ではないのです。とても便秘症の人で、随分お通じがないらしいのです。自分で下剤など飲んだらしいのですけど、え、浣腸ですって嫌ですわ、恥しいわ、でも浣腸してあげて下されば、きっとよくなるんでしょうね、先生どうかとにかく来て下さいね、浣腸して下さい、どんな用意したらよいのでしょうか、帰って準備して置きます」

私は胸をおどらせ、足がふるえました。K子さんは、もう大して痛まない様でしたが、私が「Y先生はすぐ来るわ」と云った時には安心した様な顔をしたのです。

私は意地悪い楽しさにわく／＼しながらK子さんの枕もとに坐って申しました。

「あのね、先生はね、『お通じがないのだから、とにかく行って浣腸して様子をみましょう。お湯を沸かして用意しておいて下さい』と云ってたわ」と云って、K子さんの顔を見ました。期待に燃えて、あゝ、K子さんの顔

はみるみる紅に染まって泣き出しそうなガマンの出来ない様な嬌しい表情になり私をみつめ、それから目をそらして「まあ」と云った後、急に「嫌だわ、そんな事、嫌よ、ねえ嫌よ」と半ば身を起しました。

「だって、Y先生がそう云うんだもの、看護婦さんに『浣腸器を出して用意して下さい。』『私も参りますわ』って看護婦が云ったら『いやいゝよ僕一人で』ですって。Yさん自分でK子さんを浣腸する積りよ」そう云って私は立上り、ガスに火をつけると、もうドアがノックされたのです。私はK子さんの顔を眺めて秘かな楽しみを楽しみました。

這入って来たのは中年の謹厳な顔をしたY先生です。私は部屋の傍で、K子さんが恥しがり「いや、いや」と云う声が次第に小さくなり、やがて横むきに寝かされ丸まって顔を毛布に埋めて了ったのを、例の想像力を働かせて意地悪い眼つきで眺めていました。私の飽くなき空想力はK子さんの上に縦横無尽にかけめぐるのでした。私はグリセリン浣腸液の進む音を聞いたように思いました。

私は自分の部屋に帰りドアに鍵をかけると待ち切れず鏡の前に座りました。愛用の五〇CCの浣腸器を取り出し、グリセリン溶液を筒一杯にまで満しました。

（終）

魔女裁判に関するノート

甲 斐 仁 参

映画「ノートルダム・ド・パリ」には、魔

法とか魔女について如何に馬鹿げた事を当時の人々が信じ、又僧侶兼検事等と云う人間が勝手な裁判を行って魔女を作り出したかが描き出されて居るが、事実ヨーロッパではルネッサンスを頂点として十八世紀まで数百万の女性が魔女として焚殺されて居る。その歴史的な解釈はさて置いても、この事実は私にとって非常に興味がある。日本に於ても島原始め各地で切支丹に対する迫害は行われたが、いずれも転宗を誓えば許されて居る。しかし魔女裁判に於ては一度その嫌疑がかけられたが最後、自分が魔女である事を認めれば勿論、認めなくても種々の方法で魔女と云う事を証明？ されて焚殺されて居る。又拷問によって女の口から聴き出した事は悪魔との情交そ

の他についての珍無類な事ばかりであった。

熱狂、男ひでり、天啓宗教にはつきものの必然性等々種々の解釈はあろう。「魔女狂の歴史はいつでも、人間の総ての歴史の中で、一番恐ろしい章の一つである」と歴史家は云うが私にとっては「最も魅惑的な章の一つである」と云う事になる。

今回のノートは、一人の魔女糾問官の手記の形ではあるが、年代や二、三の人命を除いては全部私の空想の産物である事を御断りして置く。尚歴史的な事実や背景その他は手近には、安田徳太郎訳、フックス著「風俗の歴史」第三卷、病める官能に相当綿密に述べられて居る。

私の長年の夢は実現されようとして居る。

ローマ法王直属の異端糾問官として、いよいよヨーロッパの片隅ではあるが、美人の産地として名高いキルティヌ侯の所領におもむく事に決定したのだ。神学者であり最近「フオルミカリノ」を発表したヨハンネス・ニードルのもとで魔女の訊問や発見の規則について親しく教を受け、彼の方法は熟知して居るが私自身、もっと効果的な拷問や、発見法を考案し、又実地に行う機会がおよずれた事は非常に喜ばしい。ヨハン・ヴァイマーと云う医者は魔女は精神病患者であり、糾問官がでっち上げたものと云い出しては居るが、私にとっては大きなお世話と云う処で、病人であるうがなかろうが、一人でも多くの魔女を発見し、火刑に処す事が私の任務であり、又私自身の秘かな喜びでもある。十人の部下と医者

で針師の男一名と画家を連れて行く事にした。

既に私の赴任を知っているのか、侯の所領に入ると女達は、さも恐ろしいものでも見るように私の馬車を見送って居る。しかし噂に違わず仲々の美人揃いである。明日からは意のままにあの女達の涙や、汗や、体液を拷問台の上で絞る事が出来る。

キルティヌ侯を始めとし、教会の神父も、裁判官も、その他の大勢も、皆老ぼれか、腰抜けである。一四八七年、ローマ法王インノケンティウス八世の教書「いちばん望むものについて」が出されてから数十年経った今日まで一人の魔女も発見出来なかった弱みもあるが、少しオドオドし過ぎるようだ。勿論私にとっては好都合であるが……。それにしても審問室と拷問具の貧弱さには驚いた。又牢獄の狭さはどうしようもない。城の一翼を提供して貰う事にしたら私の研究室の隣に審問室を二つ作り在来の審問室も牢にするとしても、とても足りまい。何か別の方法を構じなければならぬ。又他領への逃亡を防ぐ為に国境警備を厳重にするよう進言したが、もし一人でも逃亡させた事が判明した際は「魔女に魅せられたもの」として即刻火刑にするよう重ねて布告させる事にする。

所が今日聞き込みに行かせた部下の一人が

女占術師が居る事を知らせて来た。明日はこれを逮捕する事にしよう。

占術師の女はアルヘンティヌと云う名で二十八才、毛髪は褐色、灰色の目ですんなりと背の高い皮膚の白い相当の美人である。目がきついのが難と云えば云えるが、先ず私の好みの女である。女は靈感によって占いをすると云いながら、その靈感は悪魔の力である事を認めないので拷問に掛ける事にした。第一の審問室には昨日命じて徹夜で作らせた拷問椅子が置いてあった。それを見てもう女はガタガタ慄え出した。それに腰掛けさせ、椅子の背にベルトでくびれた胴を留め、両手を肘掛けに載せさせて固定しただけで大きな目に涙を光らせた。私は愛用のペンチを取り上げた。これは先の締める部分に厚い革を巻いたもので相当強く挟んでも皮膚が傷つかぬよう工夫されている。先ず女の左手首を握った。しっかり指を折って握りしめて居るので指を開くように命じたが聴かない。それでペンの柄を掌の間にに入れてこじ開けると、手の掌が脂汗でじっとりとしめて居た。小指の爪の上を挟み静かに締めて見た。女は大げさな悲鳴を上げて泣き出した。次々と五本の指を締めた後で魔力によって占う事を認めるかと聴くと女は認めた。どうして魔法の力を身につけたかと聴いても答えない。今度は針

師に命じて針を爪の間に刺し込ませた。女は身をよじり、自由になる足をすり合わせヒイヒイ泣き声を上げたがどうしても白状しない。しかし魔力で占う事を認めた以上魔女である事は明白になったので、今度は出入の女の名前を言わせる事にした。部下にそれを書き取るように命じ、居間に戻って、大工、鍛冶屋その他の職人に、私の考案、設計した奴隷の拷問用の台や椅子、道具を説明し、大至急作る事を命じ、又十日のうちに町はずれのフォントロの岡に火刑場を作る事を命じた。これは長さ六十メートル、幅十メートル高さ三メートルに土を盛り上げ、長さ二メートルの太い鉄棒を十メートル間隔に五本立てるものである。

審問室に戻ると百人程の名前を書取った。後は良く思い出せないと云うので、もう一責する事にした。先刻責めた左手は針を刺し込んだ爪の下に赤い糸程の筋が見えて居た。右手首を掴んで指を開くように命じると今度は恐る／＼手を開いた。指がひくひくと怯えて居る。先ず人差し指を挟んだ。痛い痛い泣き叫ぶので少し弛めて、憶い出したかと訊ねると一人の名前を口走ったが、それは前に一度云って居る。

「それはもう云っている。他にどんな女が来た?……」

と云いながら又じりじりと手に力を入れ

た。

「あつ、い、痛い。もう、もう他には憶い出せない、アッ、アッ……」

女は残りの指を引つらせて、肩をよじる。この様子では本当にもう憶い出せないのかも知れないので、指をはなしてやった。女は肩を慄かせて泣きじやくって居る。兎に角、この女は魔女のうちでも頭目株の一人に違いないので、一応悪魔の跡を調べ、参考のため、一つは私の楽しみみの為に画に残す事にした。画家と針師を残し、部下の者は今女の口から書き取った名前にもとづき年齢別に整理し住所等調べるように命じて部屋から引取らせた。

私がまだ泣いて居る女の身体からベルトをはずすと、女は自由になった両手で顔を覆った。

「これからお前の身体に残された悪魔の跡を調べる。着物を脱げ。」

私の声に女はハッと顔を上げたが、ヒイとかすれたような声を上げて背中を円くした。

「云う事を聞かぬとひどいぞ」

と怒鳴ると女はしぶしぶ立ち上り、私達に背を向けてモゾモゾと着物を脱ぎ始めた。

「何をして居る、全部取るのだ。」

女はペティコートをおろして俯向いて自分の肩を抱いた。少し瘠せて居る脇に肋骨が二三本浮いて見えた。私の設計した検査台がま

だ出来上らないのでX字形の木架に掛けて調べる事にした。羞しがっておろおろする女を針師と二人で壁際に連れて行き手足を開けて鉄の環で留めると、女は眉根をひそめ、目をきつく閉じて頬を染めた。針師が大きな虫めがねを持ち出し肩から二の腕を仔細に調べて居る。

「ここに一つ御座居ますな。」

針師のつつく右肩にうつすら赤い唇の跡があった。続いて小さくふくらんで息づいて居る乳房の上に、脇腹に、腰に、太腿に同じような跡が発見された。

「毛をすり落さないといけません。」

針師は私に云うので画家に尋ねると今日一日待って呉れと答えたので、明日それを実施する事にし今度は背面を調べた。背中の一つ腰や尻にも幾つもの悪魔の爪の跡があった。

私は画家に、X字架につけた女の前面と背面を描くように云って牢獄の改造を見に行つた。

魔女の牢獄はAとBの二種に分ける事にした。Aは従来通り鉄格子の入った部屋で寝台を置き飲水の桶も、便器も入れてある。しかしBは今までの審問室を改造したもので、天井から何本も鎖を吊し、それに手足を嵌める環を付け、床には何個も枷と環を取付けてある。つまりこれらの鎖や枷が適当に四肢を嵌めて放置して置くもので、睡眠を制限し、勿

論自由に水も吞ませぬし、排泄もそのままさせるのだ。又この部屋の隅には小さな檻を何個も作り積んである。不自由な恰好のままこの檻に入れて置くのだ。しかしとても百人以上の女を一度に收容するわけには行かない。だから魔女と自白するか証拠が見つければ一応家にもどし、家人に監視させ、必要に応じて再度取調べようと思う。勿論、その間は両隣まで責任を負わせ、自殺、逃亡させたものは極刑に処す事にすれば良い。一方年齢の多い者や醜いものはさっさと焚殺して仕舞った方が良いと思う。

日も暮れて来た様子なので、審問室に戻ると丁度画家も大体仕事が終わって居た。牢へ入れようかとも思ったが考え直し、今夜一晚、私の寝室に連れて行く事にした。手足を留めてあった金具をはずすと跡が残って少し血が滲んで居た。後手にして手錠を掛け、そのまま薄暗い廊下に連れ出した。女はもうあきらめたのか私に腕を掴まれたままおとなしく従った。

その夜、寝台の上で私に責められながら語った彼女の話は非常に面白いものであった。女は父親の顔を知らず、母親に十才まで育てられたが盗癖のため追い出されジプシーの仲間に入らり、そこで占術と魔法を習得したと云うのだった。此の土地に五年程前から住み付き、占いをする一方「魔女の膏薬」を売っ

たらしい。その膏藥を寝る前に身体に塗り込むと、魔法の力で箒の柄に跨って夜空を飛び魔の山の饗宴（サバット）に参加出来、そこで思うままに悪魔と情交出来ると云うので、勿論これらの事は既に「魔女の槌」の中にも書かれて居るし「フオルミカリノ」にも取り上げられて居るが、サバットの様子が相当に異っている。単なる饗宴や情交ではなく、ありとあらゆる淫らな遊びをすると云って居た。

暁近く、私が少しまどろんだ隙に女は舌を噛んで自殺を計った。幸い手当が早かったため大した事はなかったが、少々驚いた。今までも例があるので、今後は必ず嚙ませる事にする。

◇

早朝、A、B、Cの三種の嵌口具の製作を命じた。Aは口に入る部分が鉄の棒になって居り、その上に革を巻いたものであるが、Bは鉄の玉が口中に這入るようになって居り、Cは玉の上に棘を植えたもので、必要によってはその上に革の袋をかぶせ傷付かぬようにも出来るものである。その他二枚の鉄板を捻子で加減して口中で開かせる仕掛の開口器等も製作させる事にした。

今日はアルヘンティーマに自供させた名簿により取り敢えず二十八才の女ばかり十人程逮捕して取調べる事にした。手錠のまま並べ

て見たが一寸いける女は一人しか居ない。ソフィと云う名の金髪、蒼目の中肉、中背の女だ。おまえ達は占術師のアルヘンティーマから魔法の膏藥を買ったろうと訊いたが、皆知らないと云い張るので、アルヘンティーマを引き出した。嚙を噛まされ、顎に血とよだれを流し後手錠の女を見て十人は顔色を変えた。余程苛酷な拷問を加えたとも思ったのであろう。アルヘンティーマは自殺を計った罰として抜歯させる事になって居るので、昨日の椅子に据えてその事を伝えると、ヒイーと喉から笛のような音を立てて目を大きく見開いた。針師はニヤリと笑うと椅子の後ろに廻り、濡れた顎を持って仰向けさせると大きなペンチで前歯を挟んだ。針師の手に力が入ると、女が恐ろしい悲鳴を上げて脚をはね上げるのと同時だった。見て居る女達もハッハッと息を荒くして居たが、その恐ろしい声を聞くと、両手で顔を覆って後ろを向いて仕舞った。

「見ろ！」

私は怒鳴って部下に顎をしやくった。部下は大きな鞭で発止と床を打った。女達は自分が打たれたかのように飛び上った。私は立ち上って、アルヘンティーマのそばに行つて見た。既に氣を失つて居り、閉じた目から涙を流しながら、それでも齒を引抜かれる度に呻き声を上げ、齒の抜けた穴から血を噴き出さ

せて居た。

「手早くやって血を止める。」

私はそう云いながら嚙のベルトを脱し、ハソカチを引き裂いて口に押し込んだ。私は女達の方へ向き直った。恐怖に引きつった顔が並んで居た。

「お前達、魔女の膏藥を使った事を認めるかどうかだ。」

私は順々に一人ずつ顔を睨みつけた。ソフィは、顔を蒼白にし、白い唇をワナワナさせて居たが急にバタリと床に倒れた。他の女は口々に、知りません、知りませんと金切声を立てて首を振った。倒れた女はすぐ目を見開き驚いたように目をキョロキョロさせて、よろよろと立ち上った。

そのうちに針師はアルヘンティーマの抜歯が終った事を告げたので、消毒、止血をよくして休ませるよう小声で命じたので、部下達は、失神してダラリと手足をたらし女を椅子からはずして隣りの審問室に抱きかかえて行った。

部下に命じ一人のふとった女の両手を挙げさせ、天井から下った鎖につなぎ、襟に手を掛けて衣裳を引き裂き背中を露出させた。びくびくと白い皮膚の下で肉が動いた。

「膏藥を使ったか。」

私はもう一度尋ねた。

「知りません。」



女が答えるのと同時に部下が鞭を背に振りおろした。残りの女も同時に悲鳴を上げる。

「アーツ、つ、使いました。」
打たれた女は大きな尻を振って叫んだ。

「アルヘンティーンヌから貰ったのか？」
「そ、そうです。一度、一度だけ売って貰いました。」

「どうした。」

「つ、使いません、捨て、捨てて仕舞ました。」
続けて三つ鞭が背中中で鳴った。女は鎖を鳴らせて、泣き声を上げた。

「あつ、あつ許して、云います、云います、
本当は、本当は使いました……。」

夜寝る前に、膏藥をすり込み、箆の柄を股に挟んで、ベッドに横になると間もなく、夢でも見るように夜空を馳けて、サバットの仲間に加わり、男の形をした悪魔達と楽しく一夜を明かした事を、女は答えた。その魔の宴席に居た女のうち、知っているものの名前を云わせるのには、尚五六回の鞭打が必要だったが、アルヘンティーンヌから訊き出した名簿に、八人の新しい名前を加える事が出来た。いくら鞭打っても新しい名前が出て来なくなつたので、ソフィを除く他の女を次々と同様にして責めたが、それによって合計三十人の新しい名前が判明した。所が二人はどうしても使わないと云い張った。自白した七人の女は一応帰宅を許した。火刑になる事が決定したのも知らずに、女達は裂けた背中を気にしながらも喜んで帰って行った。白らを切る二人の女には丁度出来上って届けられたBの轡を噛ませ、Bの牢獄に、両手を吊って置く事にした。

ソフィは自分で直接責めて見る事にした。
手錠をはずして、先刻、アルヘンティーンヌが抜歯された椅子に腰かけさせただけで、彼女

はもう膏藥を使用しサバットに行った事を白状して仕舞った。仕方がないので、サバットで見た女の名前を次ぎ次ぎに言わせた。五人程の名前を挙げると後は出て来ない。

「もっと知って居る筈だ、云え。」

私は椅子に彼女の両手と胴をベルトで留め衣服の前を肌けさせた。白い皮膚が鳥肌立ちふつくらとした乳房の上でかなり大きな乳首が色づいて居た。太腿をしっかり合わせた彼女はサッと顔を紅潮させる。私は手にした驚ペンの羽根で円い肩先を撫で廻わした。

「アウッ、フウッ、本当に、本当にもう知らないんです、アッ、アッ……。」

乳首は軽く一撫でしただけで、固くツンと上を向き、腹を撫でると可愛い臍がキュッと中へ引っ込む。太腿からふくらはぎ、更に足首を掴んで足の裏を撫でると、指がさもたまらないと云う風にヒクヒクとちぢみ上がる。私は身体が熱くなり、ペンを持つ手が汗ばんで来た。泣き声とも、笑い声ともつかぬ奇妙な悲鳴を上げながら身を揉む彼女の全身も薄紅色に染まり、汗を浮べた。しばらく羽根の下で身体を慄かせて居たが、そのうち息をぜいぜいと切らせ出したので、手を休めた。

「どうだ、思い出したか。」

「ハアッ、ハアッも、もう居りません。本当にもう憶い出せん……。」

目尻から涙が光って頬を伝う。

「そうか、もっとよく考えて見る。」

私はAの嵌口具を嵌めて、ベルトをはずしてやった。彼女は慌てて床に華のように拡がったペティコートを拾った。Aの牢に入れてよく監視するよう命じ、居間に戻ると職人達が待ちくびれて居た。伸し責の設備を取り付けると云うので、早速第一の審問室に装備させた。

午後フロントルロの岡に行つて見た。盛んに土を運んで居る。それを見物している馬鹿も居た。一人の部下がアルヘンテイーヌが意識を回復し、血もとまったし割合に元気だと云つて来たので、なるべく滋養のある流動食を与えて、小さな檻に入れて置くように指示した。

夕刻Aの牢獄に行つて見た。ソフィは寝台の上で睡むっていた。Bの室に入るともう異様な臭気が鼻を打った。二人の女は両手を吊られたまま、まだくねくねと身をよじつて汗の粒を噴き出し、涙と半分開いた口から流れ出した唾液で喉から胸まで濡らしていた。

アルヘンテイーヌは膝を折り、犬のような恰好で、小さな檻に詰められていた。私はその前にしやがみ込んで顔を覗いた。

「馬鹿な事をした罰だ、これから取調べに協力するか。」

私が聴くと、女は

「あい、いたひまふ、くるひいんれす。らひ

て、らひて……。」

何を云っているのかよく解らないが出して呉れと云っているらしい。私は部下に命じて檻から引き出させ、身体を洗って私の研究室に連れて来るように命じた。

私は女の体液の反応その他で、魔女を判別する方法を研究中であり、一通りの道具は揃えて来たが、特別の検査台を注文して作らせ先程運び込んだので、即刻使用して見る気になったのである。これはX字架を寝かせたもので、更に頭部から、腰までを支えるように中心にも木が添えて在り、傾斜とか、高低を自由に加減出来るようにされている。私がそれを動かしながら調子を見ているうちに、部下がアルヘンテイーヌを引張つて来た。早速この台に載せ、手足と胴をベルトできっちり留め、更に頭もベルトを巻いて固定した。針師は皮を引っぱりながら丹念に毛をすり落している。女は黙ってぼろぼろと涙をこぼし続けていた。検査の結果更に二箇所「悪魔の跡」が発見された。針師は今度は全身に針を刺して、痛感覚の無い所を見付け度いと云うが、私はどのようなして悪魔の跡が残されたか、その時の模様をもう少し調べ度いので針師にはBの牢に吊つてある女を自由に調べよう云った。彼は喜んで出て行ったが、間もなく審問室から、彼の怒声や、女の悲鳴や激しい鞭の音が聞こえ出した。私は一人で

ひっそりと女の身体を眺め廻わしていた。女は時々薄目を開けて私の方を盗み見ては慌てて目を閉じる。暫くしてから女は頭の方を上げて、台の傾斜を強くした。丁度大の字なりに台に寄りかかったような恰好である。開かれた足の間に椅子を運んで私は腰を掛けた。腰の上に残された小さな赤い痣をつつきながら訊ねた。

「これは、何をした跡だ？」

女は齒の無い悲しさで、唾液をこぼしながら、本当は町の若者と遊んだ時の跡だと云い出した。サバットでは跡が残る事は無いと云うのだ。私は本当はそれが事実であり、サバット等と云うのは女の見る夢だろうとは思っていたが、それでは魔女の証拠が一つ無くなって仕舞うので認めるわけには行かなかった。早速若者を参考人として呼び出す事にした。夜ではあったが部下にその男を連れて来るように命じ、その間隣の審問室へ針師の検査を見物に行った。

二人の女は両手を鎖で吊され、肩や腰に針を何本も刺し込まれて悶えていた。

「こいつらは鞭打教徒ですよ、だからいくら鞭で引っぱたいても効き目がないんです。」

なる程、彼の指さす女の腰や尻には、今日記された他にも無数の鞭痕がついていた。

「何か他の適当な責道具を使わなければ駄目ですね、伸しても良いですか。」

彼は今日取り付けられた器具を指さした。「明日裁判官を立合わせて、使ってみよう。それより針の結果はどうだ。」

「痛みやがるんですよ。寝かせて、もう少し、苦しめてからでないと効果が無いようです。」

針師はそう云いながらも、太目の針を女の太腿に刺し込んだ。女が針鼠のようになってキイキイ泣くのを見ても、大して面白くも無いので、アルヘンティヌの所へ帰って見た。昨夜のように羽帯で擦り責めにしてやろうと剃り取られた腋の下へ羽の先を持ってゆくと女は身をよじらせて、全身が汗ばんで来る。そのとき、廊下に乱れた足音が聞えたので、若者が到着したのを知った。部下に付き添われて部屋に入って来た男は、顔を蒼白にしておどおどしている。

「この女の名前を知っているか」

恥しいのか固く目をつむった女の顔を指して私は訊ねた。

「ア、アルヘンティヌ」

「この痣は、お前が付けたのか。」

私は例の跡をつついた。

「と、とんでもない。私、私はこの女に一度だって、触った事ありませんよ。」

女は必死の面差しで若者を見上げ、何か言葉にならぬ叫び声を上げた。

「間違いないな。この女とは関係無いな。」

「は、はい、何も関係ありません。」

「良ろしい帰れ。」

部下と共に男が去ると、アルヘンティヌはオイオイと声を上げて泣き出した。

「又、嘘をついたな。」

そう云いながら、昨夜、何度も何度も彼女を気が遠くなるまで、責め抜いた秘蔵の道具を取り上げて、椅下にかけた。すぐ泣き声は呻き声に変わり、ハッハッと熱い息を吐きながら、女は悩ましい体臭を部屋中に漂わせ出した。

(未完)

絵画 写真 のアイデア募集

本誌の口絵(写真を含めて)並に代理部の分譲写真、或は「画帖」「写真帖」などのアイデアを広く皆さまから募集いたします。内容はどんなものでも結構です。採用の分には、原画、若くは引伸写真、画帖、アルバムを贈呈の外、優秀なるプランは本誌に掲載の上、編集用のフォトを贈呈いたします。出来るだけ詳細なる説明及び出来れば略画の添布をお願いします。(困難なときは略画はなくとも差支えありません。)(編集部)

女切腹悲話

おんな白虎隊

青山芳樹

福島県の東山温泉は、会津若松の近郊にある清流に面して山ふところの懐かしい温泉場だ。戦後いく年かたって、ここに新しく生れた一つの名物がある。それは有名な明治維新の飯盛山の悲劇に因んで、芸者衆が凛々しい美少年の扮装で舞う「白虎隊」の踊りである。美女数名がキリリと男装して腕もあらわに剣をふるう姿には不思議な倒錯的な魅力があつて、忽ち東山温泉の人気をさらった。

今、その旅館の小さな一部屋で静かに私の相手をしているのはその芸者の一人、名を聞くと小奴と云った。年は丁度という所か、名前の通り小柄だがキリッとした硬肥りの、胸はむしろ豊かに厚い好ましい女であつた。

さき程の宴席で朋輩と一しよに舞った白虎隊の踊りの、この妓の意気が際立って鮮やかだった所から、白い稽古着姿の扮装のまゝこの部屋に引っぱり込んで幾度となく演技を繰返えさせて写真など撮った。殊にこの女が最後の件りで稽古着の前襟を押開き、肌に巻き締めた真白なさらしの上から、大刀逆手に一文字に切腹をする所は、ほかの女たちに見られない何か異常な気魄が漲っていて、酒席の余興というにはふさわしくないようなりアルな迫力が胸を打って来た。

「何かあるな」と私は思った。

外は深い雪だったが、部屋の中はガス・ストーブが赤々と点いていて春のように暖い。小奴は酌を一つすると、自分も鮮やかに一

杯乾して、

「少し寒いワ」

と、稽古着一枚のままの両肩を抱きすくめるようにした。ピッタリと肌に喰い入った刺子の短かい半袖をこぼれる二の腕がむっちり和白い。艶であつた。

「旦那、切腹がお好きネ」

と突然云った。

「お腹を切るとき、どんな気持がする？」

それには答えず、「フフ」と笑って何が考えている様子である。眼がキラキラ光って、さっきからの激動に気が立っているのか、頬に生き生きとした昂奮が流れている。

「旦那に見ていただきたいものがあるの」

小奴はスッと立ち上ると部屋の隅に行つて向うむきに手早く稽古着を脱ぎ捨て、胸まで巻きつけた白木綿のさらしをクルクルと解きはじめた。上半身裸体になると、ためらう風もなく双肌脱ぎの袴一つのまま私の前に来てピタリと坐った。盛り上った胸乳が心なしに大きく息づいている。左手を左の下腹に当ててまっすぐに私の顔をながめて、

「これを見て頂戴」

私はハッとした。左手を離れた小奴の下腹に傷あとがある。キメのこまかい滑らかな素肌の、白絹のような胸につづく肉づき豊かにふくらと肥えた白い腹に、深く凹んだ臍とならんで鮮やかに見えるその傷あとは、明ら

かに刀でグッと突き立てたものだ。

「切腹したんだネ」

私の声は妙に上ずってカスれた。

小奴はだまってるなと指さきで傷を揉んだ。束ねた黒髪にキリリと白鉢巻をしたまま、袴一つで双肌脱いで坐った姿には、妙な潔よい露出感があった。

「聞いて下さる？ 切腹しなきゃならなかったわけを……」

「聞こう。聞こうじゃないか」

私は冷えた盃を乾した。

やはり今日のような雪の深い日であった。

三年前の話である。

その夜の宴会は何か政党関係の多人数で、新聞記者も大ぜい来るといので旅館は昼ごろから準備にこった返していた。

小奴はあてがわれた小部屋で、呼びものの

「白虎隊踊り」の仕度をはじめた。

湯殿から出て来て、隣りの鏡台にスッと坐ったのは姐芸者の千代香である。女ざかりの肌のかおりが火照るように立ち上って、小奴はふと嫉妬めいたものを感じた。千代香は何故か黙って鏡の中の自分の顔をじっと見つめている。

小奴は化粧をつづけながら、

「姐さん、自分にホレたの？ フフ」

千代香は何か考えごとをしていたらしくフ

ラリと小奴の方を向いて気もないように

「ううん、何でもない」

「何よ、マジメくさって、少し変だわ」

千代香はそれには答えず、薄く笑ってクリムムの瓶を取り上げた。

それから千代香の化粧ぶりがどうもおかしかった。念入りに顔をつくって襟おしろいまではいいとして、双肌を脱いだ胸から腹、下腹の方までキレイに薄化粧をする。

「姐さん、何をしているのよ」

訝しがって尋ねる小奴にも頬に一寸微笑を浮べるだけでハキとした返事は与えず、何か考えながら腹部に白粉を施し、立ち上ると浴衣を脱ぎ捨てて全裸のまま切り立てのさらしをしごいて男のように褌をしめはじめた。

大柄な女体が、立ったままキリキリと白木綿を腰に巻きつけている姿が妙になまめかしい。白虎隊の踊りは袴を着けるから湯文字は使えないがパンツを穿いて、切腹の型のとき前を開くからさらしを乳房から腹にかけて幅広くかたく巻くのだが、千代香は褌だけで下腹を浅くまき、すぐいつものように短かい半袖の白の稽古着を着込み、滝縞の袴をつけようとしている。小奴はたまにかねて声をかけた。

「姐さん、まだ早いんじゃない？ それにお腹はそのまま？ どうしたのよ、一体？」

「ウン、今夜はストリップやるの」

「ストリップ？ 冗談じゃないわ」

小奴はとうとう立ち上って来た。

「何だか変よ、姐さん。」

その間にも千代香は袴を穿いてしまい、紐をグッと押し下げて白布の上締めを堅く結んだ。隣の部屋に入って踊りに使う大刀を提げて来ると座蒲団の上にピタリと坐った。

「小奴ちゃん」

何かただならぬ千代香の面ざしである。小奴は気押されたように呆氣にとられて畳の上に膝をついてしまった。

「……」

「小奴ちゃん。一寸聞いて頂戴。」

千代香の眼が厳しく見据えている。小奴は何が何だかわからぬままに仕方なくうなずく外はなかった。

「小奴ちゃん、アタシの姉さんがどんな死に方をしたか、聞いたことがあるわネ。」

「エエよくは知らないケド、誰かさんに捨てられて、子供も亡くなって、たしか猪苗代の湖に飛び込みなされたって、可哀そうな方だったそうネ。」

「そう。あたしがまだ十四の時だった。相手の男を恨んで恨んで恨み死にに死んだのよ。――その男が、石井ッて奴が、今夜の宴会に来る。」

「エッ。」

千代香の手が静かに側に置いた刀を取り上

げていた。スーッと鞘を払うとぐつと刀身をみつめた。小奴は水を浴びたように総毛立った。刀はいつも使うジュラルミンの玩具ではない。本物の日本刀だった。一点の曇りもない氷のような刃先を目の前に見て、小奴はガタガタふるえ出した。千代香はあくまで静かである。

「ネ、ネ、姐さん、こ、ころすつもり？」

自分で自分の言葉におびえていた。

「姐さん、てば。」

千代香は刀を鞘に戻して、遠い所に眼をやった。

「―殺すつもりだった。はじめは、いつかはこの刀でと、これを用意したの、姉さんの仇だものネ。でも、昨日になって今夜、石井がここに來ることが分ったとき、私は別のことを考えたの。殺す機会はある。でも唯殺してしまえば新聞に一寸のるだけよ。人殺しなんて当節いくらだってあるものネ。それに人を殺せば自分も死ななきゃならないでしょう。同じ死ぬなら。―だから私は考えたの。どうせ今夜はあいつ、取巻きの新聞記者と一しよに正面にフンゾリ返ってるでしょうよ。一ぱしのボスだものネ。その皆の見ている前で―あたしはネ。」

一いきにここまでしゃべって来て千代香はふと息を呑んだ。

「あたしは白虎隊を舞いながら、この刀で立

派に腹を切って死ぬつもり―。」

「まア。」

「腹を十文字に切って、ハラワタを出して、姉さんの恨みをこめて、あいつに投げつけてやる。大騒ぎになるワ。新聞記者も多勢いるし、芸者の腹切り、それも華々しい切腹だから明日の新聞はみんな書くワ。石井にとって政治的な命取りになる。一思いに殺すよりあとあとまでうわさに残って、どんなに痛快だか知れやしない。これが本当の復讐よ。小奴ちゃん。その代り私も今夜のうちに死にます。黙って見送って頂戴。」

「姐さん……。」

小奴は身も世もなく千代香のむっちりした膝に泣き崩れた。お侠できこえた千代香がこうキッパリ言い切った以上、その堅い決意は止めて止まる様子もない。それに千代香姉さんなら女ながらもキツと立派に切腹をやりおさせる。―アア姐さんがお腹を切って死ぬなんて……。

「誰にも知らずまいと思ったけれど―小奴ちゃんにだけは隠せなかった。―一人の姉の恨みを晴らすために、淋しく死んでゆく私の最期を、小奴ちゃんにだけは見届けてもらいたかった。」

千代香の眼にはじめて涙が浮んだ。小奴はふとゆうべの千代香のことを思い浮べた。

千代香はなぜか昨夜は小奴にもお座敷をこと

わらせて床急ぎをし、二人きりの一夜を過している。牝豹のように狂気じみた動作だった―小奴は思い当った。その時はもう千代香は死の決意をしていたのだ。燃える女体がこの世に残す最後の烙印であったのか。そう云えば千代香は、今朝からご飯を食べようとしな。腹を切った時、中から汚ないものが出ないようにとの心使いなのだ。小奴の眼に又新しい涙が浮んだ。

「姐さん。どうしても死ぬの？」

千代香は一つふかくうなずいて、

「私の決心をにぶらせないで……。今夜はあんなに歌の方をたのむわネ。あんたの歌を聞きながら、私は、落着いて切腹をするわ。」

もうどうしようもなかった。小奴は唯もうワクワクしながら出の仕度を急いだ。何故とも知れぬ、排泄感のような戦慄が身内を駆けめぐる。思い立って千代香のしたようにさうして禪をしめ、余った布で腹を巻いた。下腹が締って心地がよかった。昔のサムライも切腹の時には血止めのさらしを腹に巻いたという。

千代香はその間に隣りの部屋で床に入り、稽古着姿のまま蒲団の中で最後の眠りをとっていた。安らかな寝息に覚悟のほどがうかがわれて小奴は又泣いた。

出の時刻が迫ると千代香は静かに起きて鏡台に坐った。死の仕度はもう出来ている。口

紅をさして、黒髪をとくとサツと後ろへ流し白鉢巻をキリリとしめた。女ながらもほれぼれするような凄艶な姿である。

二人で水盃をとり交した。

「姐さん、あんまり痛くないように切つてネ。見てられないから。」

「心得た。十分に切つて、ウンと血を出して気絶させてあげる。」

千代香はそんな冗談さえ云う。深い雪で寒気が厳しい。二人とも、稽古着一枚の素肌は桜色だ、まるで全身を縛られてでもいるように痛く、それがかえって快い。

「さア。」

千代香は、凜然と日本刀を提げて起ち上った。小奴もつづいて廊下に出た。いよいよ死の檜舞台、切腹の場所に行くのだ。暗い縁側を、二人は黙々と唇をかみしめて歩んだ。

二人が定めの座敷に入ると、宴会は既にたけなわであった。百人からの客である。ドツと拍手が湧いた。「いよう、日本一」と掛け声がかかる。口笛を吹くものもあった。千代香の美貌が昼のような電灯の下に一きわ冴え渡った。

一しよに踊る五人の芸者たちも、もう稽古着姿のまま酌をしまわっていた。大広間の屏風の前に六人が正坐し、小奴は一ばん端に立って一礼した。千代香は声援を送る馴染客



にまんべんなく愛嬌をふりまきながら、キツと正面を見つめた。そこには床の間を背に石井がごう然と坐っている。これからどんな騒ぎが起るか、神ならぬ身の知るよしもなかるう。

千代香は小奴の方にソツと眼を向けた。微笑をふくんだ満足そうな眼差であった。「たのむワネ」とその眼は云っていた。小奴は思わず涙がつき上げて来て顔を伏せた。「いぎッ。」

六人の気合が揃った。小奴は夢中で歌い出した。会津婦士道の最期を謳う、新作『おんな白虎隊』の歌である。(註Ⅱキング・レコード版)

一、くちびるかんで 眉あげて

花の乙女も 白だすき

孤城を守り 剣を執る

会津の天地 日は昏し

差す手、引く手―満場は水を打ったように静まりかえった。

二、風なまぐさき 城下口

そよぐ秋草 何むせぶ

倒れし姉を 肩に負い

なおつき進む 敵の中

歌が最後に近づくにつれ、小奴の声調は心なしか愁いをふくんでいよいよ冴え切った。六人の美女が舞う稽古着姿も凛々しい会津娘子軍の面影は、人々の心にあやしいときめきを与えた。

三、血を吐く思い 落城の

つきぬ恨みを 誰か知る―

二人の女性は、サッと刺し違えの姿勢をとり、三人は思い思いに胡坐して稽古着の襟をかき開き、真っ白なさらしを巻いた腹を十分

に出して刃を逆手に向け、切腹の構えになった。満場に押し殺したようなどよめきが起こった。女たちが切腹するところを目の前に見るサデイスティックな昂奮だった。

〽散り行く花の 娘子軍―

「エーイツ」六人の声が人々の胸を打ち、五人の女が悲壮な面持ちで刃を突き立てたとき中央に両足を踏み開いて立ち腹の型をとっていた千代香の左下腹から、迸るように鮮血が溢れ出し、白い手甲をつたって縞をなして袴を朱に染めた。滴る血汐は畳に叩きつけたように散った。「ウッ」と低い呻き声が聞えた。千代香はいつの間にか手拭を巻いた大刀を逆手に深く腹を刺していたのである。豊かに丸く盛り上った双の乳房、白い腹―人々ははじめて彼女が素肌を露わしていることに気付いたのだ。

〽会津の山河 雲悲し

小奴はどっと涙をたぎらせながら、必死の声をふり絞って最後の一節を歌い切った。

次の瞬間、「ワーッ」という叫び声が上がって場内は総立ちになった。

千代香が刀を腹に突き立てたまま、齒を喰いしばってよろよろと床の間の方に進んで来

た。

人々は悲鳴をあげて逃げまどった。

千代香は石井の前に来て立ち止まった。

「石井さん、姉さんの恨み……」

右の掌を返して刃を上から押えた。うでに力がこもって、立ったままキリキリと右の方へ深く腹を割いた。続いて鳩尾から丹田まで縦に十文字に切り下げた。

石井は真蒼になって、ぶるぶるふるえている。千代香がああ娘の妹とはじめて気がついたようだった。

千代香はよろめいて傍の柱に背をもたせかけ、そのまま血刀を口にくわえると、右手で腹の中から盛り上った臓腑をつかみ出し、血みどろの塊を、石井めがけてサッと投げつけた。はらわたは無念にも石井には当らず、うしろの壁にパシヤッとぶつかり、ズーウと血の帯を引きながら畳の上にずり落ちた。

石井がガクガク足も宙に人々の背に負われて逃げ出すのを、千代香は血走った眼でジッと睨みつけていた。

流石は新聞記者の集りである。千代香が一文字に立ち腹を切った時から、十数発のフラッシュが室内に閃いていた。写真班のカメラのドライな眼が、余す所なくこの売れっ子芸者の腹切るさまをフィルムに収めていたのである。

千代香もそれが最期だった。石井を追って

女体切腹構成案図譜

中康弘通氏案、北原純子女史画

キヤビネ版印画紙密着焼付

八枚一組千円（送共）

甲 時代物

(一) 女武者の最期

戦陣の間、戦敗れた乙女が落城の炎を眺めながら鎧通しで腹一文字に……

(二) 腰元の自害

白装束の腰元、九寸五分にて……

(三) 遊女の自決

妖艶なる遊女、懐剣の切先を臍下にたたかき突き立て、真一文字に……

(四) 武家の娘

武家の姉妹、一人は臍下を深く切り

溢れ出た腸を左手にて握み、一人は……

乙、現代物

(一) 女剣戟の腹切

男装小姓風の女優、上半身肌ぬぎとなり、立ったまゝ大刀を下腹に……

(二) 女剣士の切腹

刺子の稽古着姿の女性、道場の板の間にて短刀を下腹に突き立て……

(三) オフィス・ガール

アパートの一室、パンティを膝頭まで下げた乙女、短刀にて左下腹から……

(四) 農家の娘

十七八の可憐な娘、モンペの紐を解き、鎌の柄を右手に今まさに……

いた眼が急に光を失って来ると、彼女の体は崩れるように畳の上に坐った。口にくわえていた刀を取って切腹をのど笛に当てると、人々が止める間もなくズブリと止めを刺した。刀は白いうなじへ突抜けグーッと貫かれた。「ウーム」

と一声、長く悲痛に呻いて、そのまま千代香は、古えのサムライのように静かに前に突伏し、初一念通り、女ながらも雄々しく見事な切腹を遂げたのである。「つきぬ恨みを誰か知る——」あの「おんな白虎隊」の歌のことばをそのままの最期であった。

あたりは一面の血の海となり、千代香の膝

の下からは新しい血の河が流れた。

「姐さん！」

茫然と姐芸者の、あまりにも壮烈な死にぎまを眺めていた小奴が、真ッ先に走り寄って死体の上に泣き伏した。稽古着姿のほかの五人の女たちも、ドッと駆けつけてすがりついた。さながらに飯盛山の白虎隊の最期の場面を偲ばせる悲壮な光景であった。フラッシュが又閃いた。

稽古着の肌を入れて語り終った小奴の眼には、ウッスラと涙が浮んでいた。私はあまりにも凄まじい女のハラキリ話に息も詰る思い

がした。

「あたし、みんなが騒いでいる間に、ソッとそこを抜け出したの。誰もいない小部屋に入って襖をしめて、感激の静まらないうちにと、思っこの姿のまま闇の中で床の間に腰かけてすぐお腹を切ったのヨ。勿論姐さんのあとを追うつもりだったわ。でもダメね。だってまだ十七だったでしょう。ここに小刀を突き立ててイタイッと思ったら、そのまま気が遠くなってしまうたの。すぐ見つかって病院につれてかれて……」

「それで——その石井とかはどうなった？」
「お金の力ってコワイわね。新聞にはとうとう出なかったわ。尤も石井はまもなくほかの悪事がバレて警察につかまったけど。これがその時の写真の一つよ。拝むようにして一枚記者さんにもらって置いたの。」

凄壮な千代香の立ち腹の写真だった。
「芸者ってつくづくいやネ。お金の力にしばられる辛さはほかの人になんか分らない。」
小奴の年のわりにませた言葉も、女体のあわれさ、マゾヒスティックな深刻なひびきをもっている。私は思わず小奴を稽古着の上から抱きしめた。右手をいそがしく襟の間から差し込んで、柔らかな腹の肌の、いたましい切腹の傷あとにグッと爪を立てていた。小奴が、鳩のようにのどを鳴らした。

(終)

未来幻想
マゾ小説

家畜人ヤプー

(第八回)

沼

正

三

第十四章迄の梗概

二千年後の宇宙帝国イースは白人の樂園、黒人は奴隷化され、その下にヤプーなる黄色の家畜人があつて生きた道具として使用されている。彼等は日本人の後裔だ。

イース貴婦人ポーリーン・ジャンセンは航時円盤艇で遊歩中遭難し、現代世界で瀬部麟一郎と婚約者クララとに救われる。麟一郎が人犬に咬まれたのを癒しに、二人は二千年後の世界のジャンセン家地球別荘にやってくる。クララはポーリーンの智慧で記憶喪失中のイース女を装いポーリーンの妹ドリスや兄セシルは信じるが、セシルの義弟ウィリアム丈は恋人の直観で正体を見抜く。クララも彼を憎からず思つて、イースへ帰化する決心を固める。

一方ヤプーとして扱われた麟一郎は、皮膚窯で処置されて、永久に着物の着れぬ肉体にされ、ポンプ虫を吞まされる。大暴れの後ポーリーンに取り抑えられた彼は、手錠足錠でクララの私室に引き連れられて来た。

麟一郎を連れて奥の部屋へ入ったクララを隣室で待っていたウィリアムは、やがて催眠薬により眠り込んだ。ポーリーンは奥の二人も昏睡してるのを発見した。

第十五章 二つの手術

一 昏睡波動

宇宙船模型が宝船だろうということはポーリーンには一目見て見当がついていた。ジャンセン一族は骨董趣味がないから、この部屋に元からあったわけではない、矮人決斗の折ウィリアムが賭けた船の置物というのがこれであろう。さて宝船なら、中に矮人がいる筈、彼等が、この部屋で起つた怪事件の一部始終を知っているのではないか。

敏腕な検事長としての捜査の感だった。ポーリーンは躊躇なく上蓋を外した。案の定七矮人、とりどりの畸形の中で、船長格の弁財天女を摘み出すと、そつと掌上に載せ、

「さ、お話し、お前の見たこと、聞いたことを、一切」

弁財天女は人間(白人)の肌に紛うばかりの白い肌をしたうら若い美人だ。手に持った宝槍(昔は多聞天の持物だったもの)を横に

おくと、跪いて最敬礼し、淑かに立ち上って、話し始めた。低い
が、鈴を振る様な美声である。
『わたくしは司令室に立って覗き窓から部屋の様子を見ておりました。女神がヤプーをつれて入っておいでになりました。すぐ手錠を外しておやりになりますので、わたくしはてっきり女神がこのヤプー



ーを舌人形^{リンガ}としてお慰みになるのだろうと存じて、交悦楽演奏^{インタコース・ミュージック}
の用意を致させました。……
——ビル、貴方の心配も（とポーリーンは独り思った。）一応尤も
だったわけね。
『ところが、女神は簞笥から服をお出しになるとヤプーにお渡しに
なりました。わたくしに分ら
ぬ言葉で命令なさりつつ……
……。彼はそれを引摺むや、何
か叫んで横に放り出しまし
た。何のことが分りませんで
した。

——妾には分る。クララは
奴^{あれ}に服を着せようとしたのだ
わ。だが奴^{あれ}は、自分が服の着
られない身体になっているこ
とを知ってたのだ。

『驚きましたことに、ヤプー
は女神と並んでソファに腰掛
けました。話が続きましま
が、船内スピーカーで聴きま
しても、わたくしには全然理
解できませんでした。唯女神
がむしろゆっくりと頼むよう
な口調でお話しになるのに対
して、ヤプーの方が強い怒っ

た声で喋っていました。彼は度々隣室への扉を指さしました。……

——ビル、貴方が奴のことを嫉んでいた様に、奴の方でも貴方のことを嫉んでいたらしいよ。お笑い草ね。……クララが頼んだって、こののは、一体何かしら？頼むなんて。（ポーリーンにはクララが麟一郎を原球面に一人帰らせようとしていたことなど想像も及ばなかったのだ。）『急にヤプーは跳び上って尻を撫り、もう腰を下そうとはしませんでした。……』

——皮膚反応痛だわ。ビルはヤプーが寝台の中に居ないかなんて心配してたけど、寝台どころか、強化皮膚にはソファさえ許されてないってことを忘れていたのね。

『今度はヤプーが哀願し始めました。彼は女神の掛けてらっしやるソファの前に跪いて頭を下げました。女神は断っておられました。』

——クララはヤプーに、お前を何々にするつもりだ、と宣告したに違いない。奴はその運命を恐れて、決心を変えて呉れと頼んだのだらう。（これは無理もない推測だったが、実は、麟一郎は、自分と一緒に原球面に帰って欲しいと懇願して、クララに断られたのであった。）

『ヤプーがヤプーらしい姿勢を取ったことに満足と安心を覚えまして、わたくしは一寸目を放しました。突然、今迄珍紛漢紛でした言葉の中に、家畜語が混って、スピーカーから流れ出て来ました。……』

「何といったの？」ポーリーンは思わず口に出して問うた。

『はい。「心中タ、クララ、俺モ死ヌカラ」そう聞えて来ました。』

それで吃驚して覗きますと、ヤプーは自由になった両手で女神の咽喉元を締めつけ、女神は苦しうに身悶えしておられます。ヤプーの恐ろしい形相と今の言葉、無理心中なことは疑いようがありません。

ん。それで、非常措置として、催眠楽を平生より倍も強く演奏させ、更に五倍に増幅して放送しました。……

「この宝船は自動演奏具兼用なのね？」

『はい。多聞天が小伶人血統でございますので……』

——そうだったのか。それが珍しい品という訳だったんだわ。やっと昏睡現象の謎が解けた。就寝時に催眠楽を奏する自動演奏具。その催眠楽は、耳で聴いては予守歌に過ぎないが、副次的に人間の鼓膜に乘らぬ高周波の昏睡波動を伴う。常は徐々に人を眠に導く文だが、それが十倍に強化されて、麻醉短銃で射つたのと同じ効果を示したのだ。この雌矮人の機転のお蔭でクララは危いところでヤプーの暴力から救われた訳だ。

「よくやった、ごほうび」

弁財天女と、彼女の昔の持物だった弦楽器を抱いている多聞天と二人に一口宛、唾を吐き与え、感激に頬を紅潮させて恩賜の聖唾を啜り始めた小動物を横目に見ながら、ポーリーンは腕送話器に命令した。

「アレマン医師を大至急この部屋に寄越しておくれ。極秘で、簡単な手術道具持って……」

寝台のクララは身動一つせぬ。昏睡波動の襲う前に気絶していたのかも知れない。

二 特別檻

麟一郎は黒奴の肩の上で正気附いた。首を絞められて失神したクララと違って、昏睡が浅かったのだ。

——クララを殺してしまったのに、俺はまだ生きている。……

悔恨が胸を噛む。自殺の機会を狙おうと決心した。

黒奴は一階裏庭に面して突き出して建てられている^{ロー・ヤプー・フォールド}畜舎迄降りて来た。丁度この時、セシルが居合せた。彼は晚餐前の一刻を生ヤプーの調教に費したが、ここで今し方、例のヤプーが先刻地階で大暴れしたという噂を聞いたところだった。

そこへやって来たのが、正に噂のヤプーではないか。見れば手錠足錠。……「御用中」(これは欠礼の際の挨拶である。)

と通り過ぎようとする従者A3号を

「待て、どこへゆく」

と止めた。黒奴はヤプーを肩から下し立たせて、

「このヤプーを予備檻へ入れますので……」

「予備檻? そうじやあるまい、^{スペシャル・ペン}特別檻

(Special pen) だろう。決ってるじや

ないか。馬鹿」

白人からそう詰めつけられると、自分が聞き違えていたに違いない、という気になり、

「は、特別檻で」



麟一郎は、声の調子と着物の裾模様から、この白人こそ船中で自分に好意を示して呉れた人だと確認すると、

「あなた、先程はどうも」

そう呼び掛け、あれ以後の黒人の非行を訴えた。

ヤプーは人間に話し掛けてはならないが、未訓練の土着ヤプーはその禁令が分っていないから、例外である。だからセシルは話し掛けられたことには平気であったが、「先程はどうも」という挨拶には驚いた。そして、更に喋らせて、このヤプーが「自分が服の着られない身体になったのは黒奴が彼の命令を濫用して悪戯したためである」と信じ切っているのを知ると、この逞ましい生ヤプーの知能の低さを憐みながらも、笑い出さずに居られなかった。その笑顔をまた、麟一郎は彼への好意のしるしと思ってしまうたのだから始末が悪い。

並んで、ある扉の前まで来ると、

「この中へ入って待つが良い、悪い様にはしないから……A3号、錠を外してやれ」

これで益々セシルを親切な人と信じ込んだ麟一郎は、彼の言葉を寸毫も疑わず、扉を開けて中へ入って行った。

先刻檻（じん）という言葉が話されていたが、ここには鉄格子もない。明るく照明された殺風景な八畳敷位の一室。造作（ぞうさく）といつては中央に奇妙な腰掛（？）がある丈だ。四脚に支えられた座部が中程で深く凹んだ上左右に傾斜し、いわば極端な鞍形（くらがた）になっているので、普通に腰を下すわけにゆかない、跨るしかない。背中の倚懸（よりかけ）もない。奇妙な形だが、四脚から見て腰掛以外の用途に用いられるものとも思えない。他には何もない真白な床と壁に、脚の黒色と背面の黄色がよく映えている。

何気なく近寄って跨って休もうとしたが、ふっと先程ソファにうつかり腰を下してひどい目に合ったことを思い出し、布地が張られていないかどうか、手で触ってみた。

——生きている！

そういう直感があった。手には例の肉質金属の弾力に富んだ肌触りしか感じない。しかしその全体から「生物」の印象を受けるのである。生体家具というのではなく、人間とかヤプーとか云った高等生命体とは全然別種の、いわばなまこやひとでを眺めて感じる時のに近い様な「生命」の認識だった——いや、この時にはまだ認識というより予感だったが……

不気味さに麟一郎は思わず後退りしようとした、その瞬間、鞍形胴体の下腹部、丁度鑢（あぶみ）の垂れ下る両側の部位から、サツと二本の触手が跳び出して来て、彼の両脚を捉えようとした。柔道で鍛えた彼の運動神経が一瞬早く一間も飛び退らせなかったら、彼は簡単にかまっていたに違いない。

と、この生きた鞍は、ノシノシと今迄唯の棒と見えていた四本の脚を動かして、触手を振りつつ、隅に立っている麟一郎の方に寄って来るのだ。彼が素早く他の隅に廻り込むと、どうして知覚するか、確実に彼の位置を知って又方向を変えて寄って来る。ゆっくりだが、歩みは確かだ。

三 人工動物「去勢鞍」 カスト・サドル

特別檻の中で麟一郎を追い廻している怪物は、去勢鞍（カスト・サドル）と呼ばれる人工合成による生物の一種なのである。

蛋白質の合成に始まる生命体の人造はイースにおいても長い歴史を閲しているが、生物進化の跡を辿り尽すには研究室内の二千年の時間は余りに短く、今迄精々腔腸動物程度のものが合成されたに過ぎない。

然し、天然に存在する生物と同じものを作ろうとあせらず、人工で別種の生命体を作り出そうとする試みは予想外の成功を示した。

原形質細胞の代りに肉質金属粒子、血液として特殊な化学溶液、神経作用は電磁気……これを統合する脳髓として倭人により有魂化した小型人工頭脳——こうして出来上った作品は、動物体のもつあらゆる特徴を示し、ただ生殖による再生産の能力を缺く丈だった。そしてあらかじめ一連の作業を本能化しておく、それを忠実に正確に遂行した。本能動物の例に洩れず、予定された枠以外での適応行動という知性能力を示し得ないが、本能的行動としては随分複雑高次の段階に達し、略昆虫類と同程度に及んだ。これが人工動物である。

そこで、色々な作業が、こうした有魂機械より更に一歩進んだ人工動物に委ねられることになったわけである。去勢鞍カスト・サドルというのもその一つで、生ヤプーの去勢手術をすることを本能にしている人工動物である。

その真黄色の背部表面は、相手の肌色が黄色である場合に丈、反応を起すための識別器官である。白人や黒人には、これは単に鞍形の腰掛に過ぎない。然し肌の黄色い奴が掛けると、この鞍は恐るべき去勢台として作用する。そして、近くに黄肌の奴がいてしかも鞍に乗らぬとそれを捉えに行く。行動範囲は特別檻と呼ばれる白色平面で囲まれた空間に限られるが、蜘蛛が自分の巣におけると同じく、この檻の内部にある限り、甚だ有能で、どんな敏捷なヤプーも結局は彼の餌食にならざるを得ないのだ。

ところで、セシルが麟一郎をこの檻に入れたのはどういう訳だったのか？

一体、生ヤプーは必ずしも去勢されなければならぬものではないのである。殊に以前は、去勢してしまつては雄心が減じて鞭打を忍耐し易くなるので、調教する上での楽しみがなくなるという理由と去勢してしまうと後で仔種こねを取りたい時困るという理由とから、生ヤプーは去勢しないのが普通だった。ところが、栄養液への男性ホルモン添加により去勢ヤプーも女性化する心配がなくなったこと、剔出卵丸を精虫金庫に預けて、いつでも仔種が引き出せるようになったことなどから、この反対理由がなくなった上、一方には上流人士の珍棒愛好、殊に自己珍棒訓練セルフ・テインボウ・ディシプリン（後節参照）の流行があり、この頃では生ヤプーの約半数が去勢される。（残半数は肉便器、肉反吐盆その他口と胃で奉仕する道具にされる予定の生ヤプーで、これは少くとも筒が必要だ。第七章二参照）。

だから、ヤプーの大暴れの噂だけ聞いて、その後の出来事を知らなかったセシルが、客室から手錠足錠で送られて来たこのヤプーを特別檻行きと思い込んだのも無理はないので、「ヤプーの処分は持主の意志に従う」という原則から、一応クララの覚醒まで予備檻に入れておこうとしたポーリーンの意図は、セシルには通じなかったのだ。

そして、ドリスやウィリアムがそれぞれクララに贈物をした時以来（第十章二）「自分も何か」と考えていたセシルは、このヤプーを去勢し、珍棒を作ることになれば、自分が立派な握柄をプレゼントしてやれる、と突嗟に思いついたので——一つはそんなこともあって、Spare pen を Special pen と誤解したのだ——すっかり乗気になって、特別檻に直接このヤプーを送り込むことまで執行したわけだったのである。

檻の中では、麟一郎が額から油汗を垂らし、襲いかかって来る怪物から辛うじて身をおかわすのに精一杯である。もう時間の問題だろう。

四 五趾足整形

クララの寝台の脇では医師カルロス・アレマンが一寸した外科手術をしていた。

彼は、年の頃三十五位、南欧系で、黒い髪、灰白色の肌、背はあまり高くない、性格をそのまゝ情熱的な眼は黒い瞳だった。然し、争えぬもので、表情にどこか卑しげな所があり、平民であると分る。御用医師団の一人として若夫人に随行してやって来た練達の外科医だ。

彼の眼の下には、象牙を刻んだ様な美しい足と、それに貝殻を嵌め込んだとも譬えたい趾の爪とがあった。……唯それが五つある！

——不思議だ。こんな可愛い足の持主にこんな畸形が出るなんて……。

メスで小趾を削りながら、彼は心に呟いた。染色体医学の発達が肉身形質の畸形因子を絶滅した、と彼は学んだのだ。学者の常識としては、隔世遺伝としてでも五趾足のイース人が存在する筈がないのだ。しかも眼前のこの患者は明らかに小趾を持っている。



——一体何者だろう。きっと美人に違いないが……。

まさか、検事長のジャンセン若夫人が、前史時代人を連れて帰るなどという重大犯罪を犯したとは知る由もないアレマンは「畸形を恥じて家出した友達だから、極秘に手術して欲しい」というポーリ

ンの説明を鵜呑みにして、クララをイース貴族と信じていたから、不思議で仕様がなかった。

彼は横に立っている外科道具を満載した移動架（※）に向い皮膚（※）をを出すように命じた。患者は顔を手巾で覆ったまま眠り続けていた。先刻来た時もそうだったし、手術前に超笑気ガスで麻酔し直した時も、ポーリーンが自分でガスを吸入させ、彼には患者の顔を見ることを許さなかったのだ。今も、後方で彼女が、監視する様に彼の作業振りを見守っているのを、彼は全身で感じていた。

（※）移動架（Walking holder）というのは、上半身に金属

性の棒や釣手や函を取り付けて、色々な小道用を装着収納しているヤプーで、生体利用家具（生体家具とは異り循環装置が附いていない。）の一つである。所要の物を取り出して主人に手渡すこともできるから、非常に便利なものだ。ポーリーンの夫ロバートが野外写生の時連れてゆく画布ヤプーや絵具皿ヤプーもその一種で、総称して運搬畜といわれる。

皮膚鏝を使うと、手術の痕跡も分らぬ。クララの足は生れながらの四趾足としか見えぬほどに整形された。

「終わりました」

鏝を移動架の手に渡しながら、アレマンはポーリーンに報告し、改めて、自分の手術した美少女の足先に見入った。

——何という変わった美しさだろう。この足先の筋肉には、今迄自分の知っていたどんな貴婦人にも見られなかった異様な野性が秘められている、この天下一品の足の持主は一体……「秘密厳守は云うまでもないけど、カルロス」ポーリーンの声は厳しかった。「お前

さん自身も無用な好奇心は捨てるんだよ」

「はい、畏りました。若奥様」

彼はきっぱりと返事した。この怪しの美女の秘密を知り、その足に恋したばかりに、後に当の彼女自身の手で自分の人間性が褫奪される破目になるうとは、夢にも知る由なく……

五 如意鞭「珍棒」

クララ自身も知らぬ中に、足趾の整形手術が始まった頃、階下生畜舎の特別檻では、とうとう麟一郎が去勢鞍（カスト・サドル）に把えられた。

散々逃げ廻った末、麟一郎は「これでは結局疲れて負ける。いっそ逆手に出て、怪物の脚を取って倒してしまおう、失敗して殺されたって、どうせ自殺する気の俺には同じだ」と猫を食む窮鼠の様に、廻り込んで後方から跳びかかって行ったのだったが、やはりそれが運の尽きだった。触手が片脚に巻きついたと思うと、その先端がパツと環状に膨脹し、足首を通すと忽ち締る。金属ゴム製孔鉤（ホール・ボタンの）の仕掛（第八章三）を知らぬ彼には全くわけが分らぬ中に、触手はグーッと縮まり、片足を取られて彼は引き倒された。直ちにもう一方の足首にも輪が掛って締った。この触手は、上半身は早く問題にせず、両足首丈を狙う、鎧触手（スチール・フック・タングルズ）という名を持つ奴である。

怪物が四脚を縮めて鞍部が低くなった上方に麟一郎は両脚を開いて立ち跨った——跨がせられた。自由な上半身をどう動かしても、両腕で触手を叩いても、全く無益で、触手は把捉した彼の両足を思い通りの位置に持ってゆき、彼是否応なしにその姿勢を取らされてしまったのだ。

いきなり、鞍が下から跳びついて来た——と思った時には、もう

鞍に乗り跨がらされていた。両足首が鎧触手で下方に引かれているために内腿でびたりと鞍を挟み着ける丈でなく、常の乗馬鞍——麟一郎自身も、半日前には、これに跨ってタウヌス山に登って来たのだが——よりも、座の前後の曲線のそりが急なので、前は臍下二寸位からは腰椎下部までを結ぶ部分が鞍に前後から挟まれて密着しているのである。

しかも奇妙なことに、前陰部には何の圧迫もない——その筈だ、見れば座の前部中央線上、丁度前陰部の当る部位にばかりと適当な大きさの穴があいて、袋も筒もそこに収まっているのだ。中に何か液体が入っているらしく、彼は筒が濡れ漬っているのを感じた。

この怪物の正体を知らぬ麟一郎は無理矢理妙な姿勢を取らされた丈で、予期していた様な死の苦痛が襲わないのに、一寸拍子抜けの気がしたが、それは時間にすればほんの僅かなものだった。間もなくその穴の細い縁が締め始めた。袋も筒も、附根から切断される、それも一耗締め、一種締る毎に段々切られてゆくのだ。勿論麻酔はない。麟一郎は吼え猛って、両手で髪をかきむしり、胸を叩いて苦痛と格闘した。……又もや大拷問だ。

去勢鞍の行う作業はどんなものかを説明しよう。鞍に乗せたヤブーの前陰部の筒を調べて、もし長さが足りなければ、造肉刺戟剤に漬して充分な長さにする。その上で袋と筒を根元から切断する。皮膚鑊でプレスし、表面を毛一筋小穴一つない滑らかさに仕上げしなう。(尿道は塞がることになるが、既にポンプ虫が体内にいればその体液分泌の効果で水分が直腸部に滲出して来る様に組織が変つて来るから、その方の心配はいらないのだ。)

切除した袋の中の玉は、一つは精虫金庫に畜籍登録番号を付けて

半永久的に保存され、他の一つは、料理材料等に消費される。

さて、筒であるが、何故にわざわざ一定の長さにまでしたりするかというと、これから鞭を作る為なのである。切断の時、急に切り落さず、段々に切り離して行くと、その苦悶によって、苦痛素ドロゲン(第七章一)が身体中に廻り、筒の海綿体の組織が変化し易くなり、直ちに増長液に入れて処理すると鞭海綿体^{ウイング・スポンジ・ボディ}といつて、伸縮率が三倍の極めて能率の高いものになる。同時に筒自体も外皮を伸延する処置をしておく。これを生体接着糊で、一定量の人工血液を含む握柄に接続する。そうすると、柄の握り方次第で、平生ポケットの中では一尺足らずの革腰带状の皺だらけの柔軟な物体に過ぎないものが、瞬時にしてピンと細く伸びて強く撓う三尺の竹策^{じち}状の物体に化するのである。同じく Penis-Whip^{ティンボウ}でも、スジャンボク(第七章一参考)などより遙かに精巧なもので、伸縮自在な点から如意鞭とも云われるが、普通には珍棒^{ティンボウ}(limbow)と呼ばれる。珍棒が生ヤブー訓練の鞭として、どれほどの性能を持つかは、後章で明らかになる。人工動物「去勢鞍」は、単に袋や筒の切断丈でなく、鞍の内部で、玉や筒をこのように処理することも、その本能の一部にしているのである。精虫金庫に送る玉を外で受け取ったり、鞭の握柄を渡してやったりする人は別にいなければならぬが、残りの玉を料理したり、柄を取り付けて珍棒を仕上げたりすることなどはこの生きた鞍がするのだ。

苦悶の一刻が終つて、鞍上から解放された麟一郎は、凸起物はおろか毛一筋ない前陰部を撫でつつ、屈辱感に堪えられなかった。

——俺は、とうとう去勢されてしまった。

六 家畜語学習と生本能注射

再びクラクラの寢室を覗いて見れば――

彼女の枕許では一台の言語学習機が早口に喋り続けていた。

「……………」

次は褒貶詞です。ヨシ、ダメ、モチヨットの三語を知れば充分でしょう。続いて命令詞。これは色々ありますが、先ず九方向詞から憶えて下さい。マエエ、アトエ、ミギ、ヒダリ、ウエエ、シタエ、ソトエ、ナカエ、マワツテ、良いですね。今度は禁止詞、これは、イケナイ、コラ、……………」

ポーリーンの命令で、先刻A3号がそつと置いて行った家畜語音盤である。眠っているクララの心の中で唯ここだけが目覚めている下意識、その言語中枢に対して、白人向きの文法で分析解説された

七月号の批評と感想

竹 村 茂 一

七月号拝見、先月号も仲々充実した内容で嬉しく思いましたが、一コマを見るようだ、と言う通り今月号は更に一段と進捗したよう全く楽しい。それにも増して、花坂道子嬢の美しい姿態美には文句で結構でした。目次カットも清新で意欲的。口絵では四馬氏の「涙のダイヤモンド」が例月通りのリ迄のモデル嬢にないノーブルなアルなタッチで好ましい作品、縛

家畜語が、最も能率的に教え込まれて行った。明日の朝、クララは鱗一郎と話すのに独乙語を使う必要はもうないだろう。

特別檻の中では、鱗一郎が舌を嚙んで自殺を企った。去勢されて生きる屈辱に耐えかねたのか、クララを失って、生きる希望を喪失したのか……………」

次第に遠くなってゆく意識の隅で、彼は扉が開いて何人かの人が入って来たこと、自分が抱き上げられたことを感じた。

「やれやれ。危うく死なれるところだ。二度とこんなことのない様に、生本能原液（これはネアンデルタール人から採集した精気エキスである。）を一本注射してやろう……………」

セシルの声らしい……………」と思ひながら、彼は意識を失った。

クララ・フォン・コトヴィッツと瀬部鱗一郎とにとっての、イース世界の第一夜はこうして更けて行った。

原女史の絵は、嗜虐的なマニア向の構図、但し新しい狙いはない。内 藤一氏のマツトに生きる夢、本誌の構図、但し新しい狙いはない。内 容もよいが筆力も相当なものだ。楓氏提供の緊縛映画名場面集は文字通りの名場面、しかし、縛られる女優の表情は余りよくない。愛 プ、矢桐氏の引用は全く巧みだ。は惜しみなく、の配列の妙、蓋し 連載を希望する。久しぶりの翻訳 黒いペチ・コート、本月の範囲で 本月の庄巻といってよい。 是て、本文の方では、L・T商 は十分わかりかねるが、鴉嘔氏の 会の空想が面白く、防毒面と私は 今後の活躍を期待する。 読んでいて汗が出てきそう。甲斐 とにかく本号は読みごたえもあり 氏の水責に関するノートは、従来 愉快に拝見したことを感謝する のノートと同じく出色のもの、近

切支丹迫害物語

マ
リ
ア
觀
音

本 田 由 郎

(一)

天草四郎時貞を総大将に森宗意軒を軍師として、徳川幕府の悪虐に抗して立ち上った切支丹一撥も城方の武将、山田右茂作の返り忠で寛永十五年二月二十七日を最後に、春の日の中に崩れ去った。

この乱の原因は、切支丹を邪宗として圧迫した徳川幕府の政策に源があった。役人達は切支丹信者とみれば、老若男女の別なく捕えて拷問をして責め苛んだ。拷問により切支丹の信仰を捨て転宗した者は、転び切支丹といって、信者仲間より笑ひ者にされ蔑まれた。しかし奉行所は全力をあげて切支丹狩りに狂奔した。中でも信者仲間の最も恐れているのは、蛇平と呼ばれる目明しであった。

「とつとつ、歩かねえか」

蛇平が今日も、信者の若い美しい娘のお雪

を、高手小手に縛り上げて奉行所へ引立てゝ行く。この門内に消えたからには、転び切支丹にならぬ以上その命の助かる道はなく、それ以外の者は吟味中に責め殺されるか、火刑などの極刑で殺されてしまう。奉行所の門内こそ、この世の地獄だ。お雪が奉行所に引き立てられる姿を見て、村人達は囁きあった。

「おう皆の衆、お雪坊の引立てられて行くとこを見たかや」

「おう見たぞ、憐れにの」

「でもものう、奉行所では、一体どんな痛い目に会うのかのう」

「なんでも裸でよう、ぶつたぐるそうじやねえか。転ばねえので、ひどい責め折檻をするんだとよ」

「俺の聞いた話だと、口の中の白い歯を一本一本引っこ抜いたり、手足の爪を一つ一つ剥がしたり、焼けて熱くなった鉄板の上を素足

で歩かせたり、裸にして転がしたりして、死ぬまで責めぬかれるそうじや」

「痛ましい事だのう。全くむごい役人共だ」

「これ、この土地で迂濶な事を言いなさんなよ。今お雪を引立てゝ行った蛇平にでも聞かれてみなさい、忽ち手が後に廻るだ」

「おう、桑原く」

(二)

お雪は奉行所に引き立てられると、身に纏った着物を剥がされ湯文字一枚にされて、水牢の前に引かれていった。その水牢は、地面に二間四方の広さに掘った井戸だった。

「お雪、この中を見る。強情女が沢山いるから」

と蛇平は、お雪の白い肌に目を走らせた。

お雪が中をのぞくと水牢の中には、老婆をはじめ十二、三才の少女まで十人近く女たちが身につけた物は腰の物一枚という憐な恰好で仄暗い中にあらわな曲線を露出していた。

「どうだお雪、水牢の中に入られない内に転宗こんそうしまえ。そうすれば直ぐ家に帰らしてもいいと、お上ではいいなさるんだ」

「……」

「そうかい。返事のないのは転ばない証拠だな。まあ、ゆっくり水牢の中で考えるがいいさ。だがな、水牢の中はちよつとばかり冷たいぜ、お前の肌を心ゆくまで責めて呉れるだ

ろう。じゃあ大人しく水に浸っていなよ」

蛇平はこういつて出ていった。お雪は無情な下人達の手で、豊かな女体をくねらせながら下されていった。水牢の水は蛇平の言う通り冷くて肌が切れる様だ。他の女達は数日前から水牢に入れられているため、顔は青ざめて死人の様であった。美しい筈の彼女達の肌はぶく／＼とふくれ上り、その肌を指先で突いたなら水が吹き出すかと思われた。お雪も数日後には、あの様な水死人の肌になるのか、白く美しい肌が自慢で親がその名もお雪と名づけてくれたのに。いくら泣き悲しんでも、奉行所の内は警戒が厳重で、どんな手段でも助け出す事は出来ない。水牢の中で自分の体を責めに任すより仕方がないのか。多くの女達は一言も言葉を発しなかった。既に声を出す気力さえなかったのか？

(三)

数日後、お雪は水牢から引上げられた。しかしお雪の肌は多くの女達と異って、数日間水の中に浸っていても清らかな美しい肌のままだった。いや前にも増して美しくなっていたかも知れない。蛇平は残忍な瞳でお雪をみつめながら

「お雪、面白い見世物が見物できるぞ。木戸銭はいらねえよ」

蛇平の声に、そこを見ると、世にも恐しい

光景が展開されていた。腰の物まで剥ぎとられた女に拷問が加えられていた。一人の女は地面の杭に大の字に縛られ、口には漏斗を差込んで水を流し込まれた。見る／＼内に腹はふくれ上り、水が入らなくなると、下人が二人で女の足を取り逆に吊し上げて水を吐き出させ、又、仰向けにして水を飲ませた。再び腹がふくれ上ると、今度は女の腹部に二人が乗り足踏して水を吐かせた。女は水だけではなく血まで吐き出した。これで拷問が終ったのではなく、次に砂を食べさせた。

「お雪、今の有様を見たかい。転ばぬ信者は皆あの様になるんだぜ」

お雪は余りの惨たらしさに思わず目をつぶった。もう一人の女は、後手に縛られた腕と背中の中に六尺棒を差込まれ、ぐっと上に持ち上げられていた。苦痛のため顔はゆがみ、全身から玉の様な汗を出していた。六尺棒がギリ／＼とねじ廻されると、体を海老の様に反りかえって喘いでいる。唇は真青に変色して長い髪が地面にたれてゆれている。

「ゼズスキーリスト」

女は微かな声で云った。

「うぬ畜生、生意気な、転べ／＼」

下人は女の髪の毛を掌に巻いて血のにじみ出る程強く引っぱった。

「お雪、お前も転ばなければあの様な拷問に会って、責殺されてしまうのだぞ。拷問中に

死ななくても落ちつく先は、三尺の柱の上で槍のさびになるか、火で生きながらあぶり殺されるのさ。疵だらけになってから半死半生で転ぶより、どうせ転ぶなら今の内転んだ方が身の為だぞ。お前の事は御奉行様から、この蛇平にまかされたのだ。俺だって鬼でも蛇でもないぞ」

蛇平のこの言葉にもお雪は、一言も返事をしなかった。業を煮やした蛇平は「おいお雪、この俺が下手に出りやいい氣に成りやがって、転ばなければ転ばなくてもいい。体を痛めつけてでも転してみせるぜ。俺の拷問は他の目明しより滅法強いが承知だろうな。痛い苦しいとはほづら書いたって間に会わねえぞ。思い切り責めてやるからこっちへこい」

(四)

お雪は引きずられる様にして引立てられていった。お雪は引き立てられていった所は、奉行所の拷問倉だった。常の時なら正式に拷問が行われるわけだから、それには次の様な立会人等、立会いの上で行われる習わしだった。第一吟味方(掛川町方与力、今の主任)その次には書物役(町方吟味方下役同心)次は御徒目付、御小人目附(御目付方)次は鍵役次は打役(牢屋同心)次は牢医者、次は牢屋下男、次は下人等で、ざっと以上の様な立会

人が立会う訳である。これが当時の常時の拷問の仕方であった。しかし、お雪の場合はこれと異り切支丹信者でもあり（切支丹信者の場合は特に強く責められた）蛇平に取調べを一任された以上、目明しの思いのままにどの責めでも自由に加えることが出来たのだ。こ

の場合、目明しに任すという事は、目明しの私刑にも等しかった。目明しとその手先だけで、何んの立会人も無く十二分に責めることが出来た。目明し達には都合がいいかも知れないが、責められる方では、たまったものではない。まして、お雪のような弱い女性の



身では、堪え難いことだろう。拷問中に命を落すことがあっても目明し達は何んの咎めもないのだから、心置きなく責めることが出来る仕組になっているのだ。

「さあ、どの道具で責めてやろうか」

倉の中には色々の責道具が、所狭ましと置いてあり、幾人かの血を吸ったそれらの道具は、今日も又、お雪の新鮮な血を求めている。天井には大きな滑車があり太い綱が通され、その綱の先端は吊し責められた男女の血で薄黒く変色さえしていた。壁にかけられた大小様々の鞭も全部血でよごれて、如何に多くの人々が責められたかを物語っている。そのうちの一つは、まだ乾き切らない新しい血がベツトリとついていた。

「さあ、拷問杖でその柔肌をぶちのめしてやるか。白い肌が破れ赤い血が吹き出すぞ。それとも滑車で吊し責めと行くか、括られた手首が千切れる程痛むぞ」

蛇平は残忍性をむき出して、子供が捕えた蛙をもて遊ぶ様に、お雪をどの様な方法で苦しませ様かと考えた。

「そうだ、お雪、馬乗りは好きかい。ここに手頃な馬があるぜ。あの木馬の上で血まみれになるまで楽しむかい。しかし町住いのお前には乗馬は無理な相談かな。じゃソロバン責めといくかい。これで責めればどんな蓮葉女でも静かに行儀よくなるんだぜ。お雪、町育

ちのお前に行儀見習いをさせてやるよ」

蛇平は下人達に三角柱の並んだソロバンを運ばしてきた。

「おい、もう一度お雪の縄目を嚴重に縛り直せ」

下人達は縄を締め乍ら、猥らな手附でお雪の肌をなぞ廻した。

「用意が出来たら台の上に載せてやりな」

「へえ、でも親分、この女の湯文字はどうしましょう」

「湯文字がどうした」

「その、なんで、湯文字も一思いにしつpegしたほうが、わしらの方も責め甲斐があると
いうもんで」

と、下人達は云いながら「エへへ」と笑った。

「いいだろう、はがしてしまいな」

お雪は身に纏った最後の物まではがされてしまったら、生れながらの赤裸だ。

「親分さん、お情けです。どうかこの一枚だけは」

お雪は縄目の不自由な身で、蛇平ににじり寄って必死に頼んだ。

「いいからお雪の湯文字をはいでしまいな」

「へえー、この女、なにしがやるんだ」

と、下人の一人は力一杯縄尻を引っぱった。お雪はどつと見事に後に倒れた。そして忽ち下人達の手で湯文字をはがされてしまった。

お雪は今ではもう観念の臍をきめ、蛇平達の責めを待つのみとなった。しかしその表情の中には、切支丹を信じ死んでも転宗しないと堅い決意が見えた。

「台の上に乗せろ」

蛇平の命令で、お雪の体は下人達にかかえられて台の上に載せられた。その姿は神に捧げる生にえにも似ていた。台の上に坐らせられたお雪は柱に後手を縛られ、あばれない様にと首と膝も嚴重に縛られた。

「それ、膝の上に石を載せろ」

お雪の膝の上には十二貫もある伊豆石が載せられた。

「ううつ、ううつ」

「どうだお雪、転ぶか。転べば直ぐ膝の上の石を除けてやるぜ」

「……」

「そうか、二枚目を乗せて欲しいんだナ」

又、一枚の伊豆石が膝の上に乗せられて、前の石と加えて二十四貫の重さが加わった。それもソロバン台の上であるので、その苦しみはどの様であったであろう。

「どうだお雪、転ぶぬか」

お雪は苦しかったが、死んでも転宗しないと覚悟して呻くだけで返事をしなかった。

「強情な女だ。もう一枚載せろ」

下人の手で三枚目の石が、故意か、それとも偶然にか膝の上に落された。

「ううー、ううつ」

とお雪は悲痛な叫びを上げてもだえたが、首の縄が締るばかりで、どうにもならない。「えーい、まだ転ぶぬか。今一枚の石を載せてみる」

情知らずの蛇平は、実にお雪の膝の上に四枚の石を載せた。これでもお雪は転ぶとは言わなかった。

「ええい、めんどろだ。こうしてやるんだ」

四枚の石の上に蛇平自身が乗った。

「お雪、どうだ気分は。お前達、お雪の膝の上の石をゆり動かしてやれ」

「へえー、子守唄でも歌い乍らゆすりましようか」

下人達は面白がつて石をゆり動かした。可弱い乙女がこの様な無惨な責めに堪えられるものではない。とうとうお雪は失神してしま

った。
「俺の子守唄が氣にいったらしく、ねんねしてしまっただぜ」

この責めは、お雪の失神で中止された。蛇平は下人達にお雪の膝の上から石を除かせ、台の上から下さした。お雪の両膝は無惨にも皮は破られ、肉はザクロの様に口を開け、真赤な血が吹き出していた。

「牢の中で少し休ましてやれ」

お雪の裸身は下人達の手で牢屋の中に運ばれていった。

「おい女、着物だ」

中に囚衣が投げ込まれたが、お雪は冷たい土の上に伸びたまま着る事も出来ない。下人達はお雪の姿に猥らな眼を走らせている。見兼ねた同じ牢屋の女囚が、お雪に着物をかけて、下人の眼からさえぎってやった。女囚達は、お雪の傷を見て拷問の恐しさに震え上った。

(六)

翌朝、蛇平は早くから再び責めるつもりか牢の前に立った。外から暫く中の様子を見ていた蛇平は、お雪が歩行を奪われているのを知ってそのまま引き返した。蛇平が立去ったのを知るとお雪はほっとしたが、それも束の間で、やがて蛇平は下人達にモッコを持たして再びやって来た。そしてそれに乗せられて昨日の拷問倉に運ばれた。

「お雪、昨日の拷問で、歩けなくなった様だな。歩けなくなっちや不便だろう。今日は馬乗りを教えてやるぜ。昨日の穴埋めにな」

木馬がお雪の前に運ばれた。

「初めから生きている本当の馬じゃ無理だろうから木の馬で練習させてやるぜ。早く乗んな。ちえ、一人で乗ることも出来ないのか、おう、誰か手伝ってやりな」

下人達にかえられて木馬の上に跨がされた。木馬の背がソロバン台の様に三角に切り

立っていた。

「お雪、練習を始めるぜ。それ木馬を動かせどうどう」

お雪の乗った木馬を前後左右にゆり動かした。お雪は身をよじらして逃がれ様とあえいだ。

「お雪、馬の上でそんなにあばれたんじや早く上達しないぜ。木馬だからいいようなものだが、本当の馬ならとつくに振り落されているぜ。さあ、お雪の身体を落ちない様に縛りつけてやりな」

お雪は雁字がらめに木馬に縛りつけられて身動きも出来なくなった。

「さあ、木馬を動かせ」

下人達は再び木馬をゆり動かし始めた。お雪の身に伝わる苦しさは、前にも増して鋭かった。

「おい、見ろ。お雪の着物の下で何か動いているぜ、調べてみる」

お雪は木馬に跨ったまま無惨にも着物を脱がされてしまった。

「動いていた物がわかったぜ。お雪、お前の尻だ。拷問中にそんな物を動かされちや眼の毒だ。動かない様にさして貰うぜ」

今度は鉄で作られた分銅が足に吊された。

そして完全に身体が木馬の背についてしまった。蛇平は切支丹信者を転宗さすことより、若い女を責めさいなむことを喜こんでいると

しか思えなかった。

「うーうん」

再びお雪は失神した。

しかし、いくら責められてもお雪は転宗するとは云わなかった。切支丹を信ずる強い心が芽ばえていたから。

(七)

いよいよお雪は、二日間晒された後、処刑される事となった。町の中央の辻に柱が立てられ、荒縄で十文字に縛られた。物見高い見物の人は黒山の様に集った。そしてお互に話し合う声がお雪の耳にも入った。これまで加えられた種々の拷問より、この様に大勢の前に晒されることが一層つらく切なかった。

二日間晒されて火あぶりの極刑で処刑される当日、海岸の砂浜の処刑柱の下に薪木が山とつまれ油がそそがれた。お雪の処刑の見物人の中には大勢の切支丹信者がまじっていたが、彼等はお雪の霊が天主に救われる事を心から祈っていた。この様に切支丹信者の処刑が日夜くりかえし行われ、或る日は一回に数十人の男女が処刑された。切支丹信者の前には死が手まねきし、きびしい拷問と極刑が待っていた。

或る男は大きな石を背負わされたまま、二時間も逆さに吊られた。両眼は飛び出し全身が腫れ上った。或る者は手足の指を束にして

拇指から漸次他の指へと順々に切られた。殆どの者は真赤に焼いた十字型の烙印を額に押された。シリシリと黄色の煙を挙げて皮肉が焼ける恐ろしい拷問であった。信仰を棄てないことをはっきり告白した者は猿ぐつわがはめられた。女は丸裸にして晒したり、背中に熱湯を注いだりした。惨殺された死体は、首と胴体をバラバラに寸断されて、別々に放棄されて、その残骸は山となった。焚殺、磔、熱湯責、晒、食餌責、烙印、斬首、氷責、硫

黄責、鋸引き、等、ありとあらゆる拷問、処刑の方法が用いられた。

(八)

寛永十四年、ついに天草の乱が起った。怒りが爆発して切支丹一門が蜂起したのだ。天草四郎が総大将となり、本拠を肥前島原に置き数十万の大軍と戦ったが、寛永十五年二月二十七日、味方の武將の裏切りで敗れて、一年近くの戦は終った。

天草の乱後、切支丹信者が国内より姿を消しただろうか。否、表面は姿を消したかに見えたが、地下組織の中で活動を続けられて行き、聖母マリアを観音像に形通り、マリア観音と名付けて信仰は続けられた。切支丹信者の胸の中に点った神のともし火は、幕府の権力を持ってしても消す事は出来なかった。今日でも、この地方の名家、旧家の中には、マリア観音が家宝としてあがめられているという。

(終)

奇譚クラゲ旧号の在庫案内

☆復刊号の分

復刊第1号	(30年10月号)	二百円 (送16)
復刊第2号	(30年11月号)	〆売切
復刊第3号	(31年4月号)	二百円 (送8)
復刊第4号	(31年5月号)	二百円 (送8)
復刊第5号	(31年6月号)	二百円 (送8)
復刊第6号	(31年7月号)	二百円 (送8)
復刊第7号	(31年8月号)	二百円 (送8)
復刊第8号	(31年9月号)	二百円 (送8)
復刊第9号	(31年10月号)	二百円 (送8)
復刊第10号	(31年12月号)	二百円 (送8)
復刊第11号	(32年1月号)	二百円 (送8)
復刊第12号	(32年2月号)	二百円 (送8)

復刊第13号	(32年3月号)	二百円 (送8)
復刊第14号	(32年4月号)	二百円 (送8)
復刊第15号	(32年6月号)	二百円 (送8)
復刊第16号	(32年7月号)	二百円 (送8)

【代理部だより】

○本誌の復刊号は上記の通り在庫しており、ますから御入用の方は、お申込下さるようお願いいたします。三冊以上まとめて御注文の節は送料は当方にて負担いたします。

○休刊前の本誌の旧号は殆ど売切れておりますが、只今、昭和30年2月特大号から同年5月特大号まで、若干在庫しておりますから、お申込下さい。各冊一部百四十円 (送料十六円) です。右以外は全部売切です。すから悪しからず御辛抱願います。

○アルバム、第一集、第二集共品切です。
○三条春彦画、「時代物責絵巻」未製本の分が若干残っておりますので、御希望の方はお申込下さい。八枚一組一揃百五十八円 (送共) です。

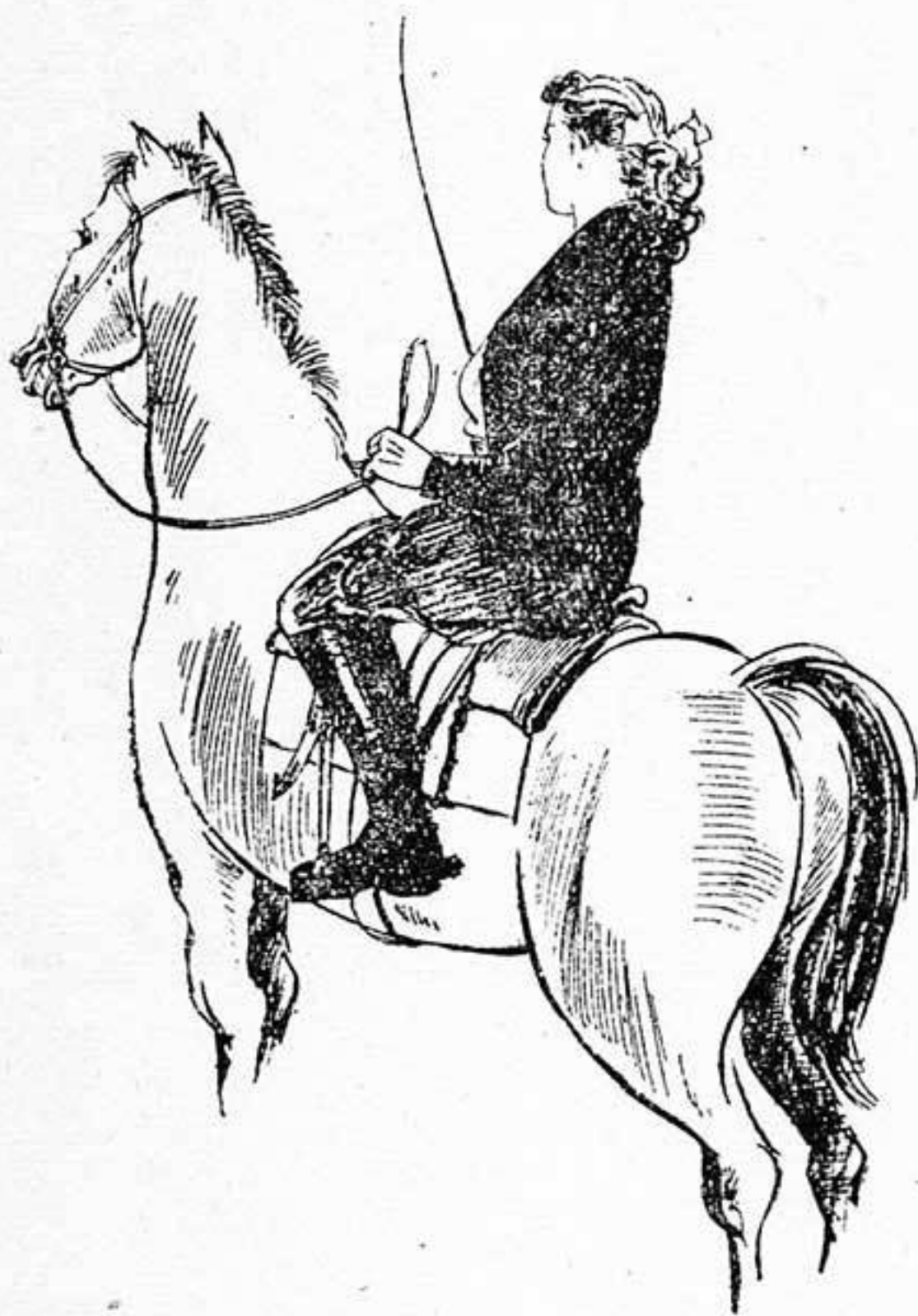
○代理部分譲品総目録の残部がなくなりまして、この機会に以前の分は打ち切りといたします。但し特に御希望の方に限り当分の間、焼増はいたします。

○新しい目録は都合により延期となりましたので、お申込下さいました方は暫くお待ち下さい。出来上り次第お送りすることにご致します。時期は只今のところ未定です。それまでは本誌に発表の目録により御注文願います。

切 腹 随 想

『乗馬ズボン』への憧れ

藤 山 秀 緒



いま私は、旅先の旅館の一室でこれを書いて居ります。「藤山秀緒」と云えば、もう皆様は、この一室で、私がどんな姿をして、どんなことを書こうとしているのか、きつとおわかりになりますわね。そうです。私はいま馬装しています。黒革の乗馬靴、カーキ色の乗馬ズボン、真紅のスポーツシャツ、そして七分丈のダブルコート。そしてこの乗馬靴は屋内だけしか穿かないプレイだけのもの、ズボンも私の汗がにじんで、ごわごわとした異臭を放つお恥かしい品です。でも私は、この乗馬ズボン姿からのがれることがどうしても

出来ないのです。私の異常なまでの乗馬服への執着——そして、その乗馬ズボン姿の女性が、刀を我と我が腹に突立てて、抉り、のたうち、そして泳え／＼た呻きをのこして俯伏せに倒れて行く。筆をすすめる私の手はふるえ、ズボンは脂汗にぬらぬらときしむ。——

私は三十年の四月から、皆様の前に現れた「男」です。皆様は私を男と認めていらっしゃいましたね。寄稿家の近藤一様や東一郎様など、私の作品の批評を下さる先生方も「藤山氏」とおっしゃって下さいました。私は「藤山氏」と云っていただくたびに、本当に男になったような気がして、とても嬉しいのです。そして、私は、皆様を欺いた喜びに雀躍すると共に、この秘密を、そっと打開けて、再び皆様のお声をおききしたかったので、つづけて「秀緒の告白」を書いてお送りしたのでした。そうした夢のような月日が、先号の「続飛行服姿の女腹切」までに、十篇の作品を私に書かせてしまいました。私は奇クの原稿を書くときは、必ず馬装か、飛行服姿に身を固め、男装して机にむかいました。そして、いまこの十篇の拙い作品をかえりみ、私の異常性格への反省と、女腹切への強い愛着をテーマにして、不幸な一人の女の悶える姿を皆様の前に投げかけてみたいと思います。

私の十篇の作品の中で、朱に染まって死ん

で行った女性はこの通りです。

「飛行服姿の女腹切」(三十年四月号)

飛行将校の妻——飛行服姿、司令

部地下室にて、正十文字腹。

「乗馬ズボンの女腹切」(三十年十月号)

叛乱軍将校の妻——夫の軍服、自宅にて、正十文字腹。

「稽古着姿の女腹切」(三十年十一月号)

女剣士姉妹——稽古着、袴姿、道場にて、一文字腹、介錯。

「続乗馬ズボンの女腹切」(三十一年十月号)

従軍看護婦美也子、妙子——二人とも将校軍服、敵中にて正十文字腹、扶腸、抽出、差違いて死に切れず、火あぶり。

「女武者自刃」

真田幸村娘雪路——鎧姿、乱軍の中に馬上一文字腹、更に右脇より鳩尾へ切り上げ落馬、乳下一抉。

木村重成妹志津——鎧姿、敵陣庭

前にて、横二筋、縦一筋割腹、扶腸、抽出、乳下一抉、苦悶の姿にて名乗り。

「続々乗馬ズボンの女腹切」(三十二年一月号)

歌手美智——乗馬服姿、林の中に馬をすて、正十文字腹、扶腸抽出、乳下一抉。

親友千代子——乗馬服姿、美智に

殉じ、一文字腹、扶腸、抽出、

乳下一抉。

「オートスタイルの女腹切」(二月号)

女ドライバー美枝——乗馬ズボン

ワイシャツ姿、ライバルのサーカス団へ乗込み、正十文字腹、扶腸、更に短刀で腸をかき切り敵方へ投げつけ、俯伏苦悶。

同花子——乗馬ズボン、乗馬服姿、自分のサーカス団にて、未明逆十文字腹、腹部大動脈切断。

「秀緒の告白」(二月号)

藤山秀緒——乗馬服姿、正十文字腹、扶腸、抽出、切断、乳下一抉。

「燃ゆる男装」(三月号)

香川妙子——主計将校軍服、自宅にて、妹の介錯により磔。

香川奈緒子——軍服、姉の刑よ執行後、正十文字腹、喉部一抉。

「探検服姿の女腹切」(四月号)

中山寿美子——探検服、乗馬ズボン姿、中央アジア探検旅行中、一行の身替りとして一文字腹、扶腸、抽出、乳下一抉。

「続飛行服姿の女腹切」(六月号)

葉山露子——従軍看護婦、飛行服

姿、敵地にて正十文字腹、喉部一抉。

こうして私は、私の幻を次々と誌上に発表して自ら慰めてまいりました。皆様は、きっと、藤山秀緒の女腹切といえは乗馬ズボン姿を思いうかべていらっしやることでしょう。ある方は、また乗馬ズボンか、とマユをひそめられるでしょうし、あるかたは、その男装のあざとさにうんざりなさっていらっしやることでしょう。私も、それがわからないではありません。なればこそ、女武者を登場させたい歴史小説で目先をかえたりもしてみたいのですが、私の、乗馬ズボンへの烈しいフェティシズムは、いまでは、片時も私の生活から切りはなすことができなくなってしまいました。私は、雨でも降って、レインコートが着られる時は、下に乗馬ズボンに長靴をはいて出かけます。そうでないときも、殆どスラックスだけしか穿かなくなりました。私の、この世にも悩ましい乗馬ズボンマニアぶりは、私以外の誰方にも理解できそうもありません。

そして乗馬ズボンに附随する乗馬用長靴もかせない伴侶であり、更にもう一つ、レインコートへの愛着もたちがたいのです。私の女腹切シリーズには、そういうわけでレインコートが、時折登場して参ります。そして、「秀緒の告白」でも申上げたように、

飛行服姿が私のフエティシズムにとどめをさしているのです。大きくて、重くて、とても旅先まで携行することができない飛行服には大きい故に、重い故に、また断ちがたい魅力があります。

これらの衣服を使って、私の女腹切は、はじめて私の理想を満足させてくれるのです。

「読者通信」の中で、東一郎様は、「女腹切の描写が少しくわしすぎる」とおっしゃいました。お恥しいことですが、私の感情のたかぶりは、抑えても抑えても、あのように、これでもか、これでもかと突込んで行ってしまうのです。法谷四郎様は、「凄惨な陶醉美は毎号の白眉」とおほめ下さいました。嬉しうございました。近藤一様も、いつもおほめ下さいます。一度その姿をフィルムに収めよとおっしゃいました。でも、こんなに恥しいことを毎号のせた女が、どうしてそんなカメラの前に立てましょう。これだけはおゆるし下さいませ。（そして、私と文通したいと御希望のお方もあるとか。私はいま、東京を離れてくらす時の方が多く、お返事も一々は書けません。御意見は奇ク誌上にお寄せいただければ幸でございます）

読者通信は、かかさず読ませていただいておりますので、批評をお書き下さると、とても参考になります。私の女腹切の特色は前にも申し上げましたように、私の異常なまでの乗

馬ズボンへの愛着と、もう一つは、切腹描写の詳細なことでございます。

ところで、のたうち、呻き、喘ぎそして死にいたる凄惨な自決の模様を、あれほどまでつきつめて描いて居る私の女腹切シリーズを不愉快に思っている方も多いことと思いますので、私の「女腹切観」とでもいうようなことを一寸のべさせていただきます。

女が腹を切る——これはよくよくのことです。よくよく申訳ない場合とか、他人のために犠牲になろうとするつきつめた場合でもなければ、こういう自決の方法は、女として採る筈がないのです。

前者の場合は、切腹という、最も苦痛の多い自殺方法によって、自分の良心の苦しみからのがれたいのでありましょうし、後者の場合は、自分の潔さを誇示しつつ死にたい気持ちからでありましょう。

前者の理由で死んで行く女の、腹の切り方は、刃を肉体に加えたと同時に、心の苦しみが肉体の苦しみへと移るのです。ですから、私の切腹描写の中で、最初に左脇へ突立てたときにあげる呻き

「ううっ……」

という表現の中に一番重大な意味を持たせて居るのです。そして、引廻しつつ次第に興奮して行く女の姿が、刻々の呻きによって描

かれて行くわけです。鳩尾から下腹へ切り下げながら、

「ウーッ！」

と呻くときは、良心の呵責から解放された喜びも束の間、はげしい肉体の苦痛に、泳えくた泉をほとばしらせる悲劇の女が、苦悶の絶頂をのぼりつめた凄惨な姿が描かれています。

更に女腹切の真価は、十文字腹のような深傷によってさえも死ぬことができず、新しい致命傷を求めて最後の力をふりしぼり、乳の下を抉るあたりにあるのではないでしようか。

彼女を苦しめているものは、もはや良心の苛責ではなくて、切りさいなまれた臓腑の苦悩です。二様の苦しみが、交互に与えられる——しかも宿命を負った彼女の意志は固い。

——健気な彼女の姿を想うとき、私の胸はときめくのです。もっと苦しませたい。私の心の中でサディズムが頭をもたげます。私は馬装の全身を硬く引きしめながら、彼女の幻を追って行きます。私の分身でもある彼女の幻は、私の思うままに、苦しみ、悶え、そしてのたうち廻るのです。私が興果てて乗馬ズボンを揉み合わせつつ俯伏せに倒れる頃、幻の女も「立派に」最期をとげて、大和撫子の自刃は、ものの見事に達成されるのです。

こういうわけで、私の切腹描写は、傷の深

さとか、血汐の量に重点があるのではなくて引廻して行く女の苦悶の表情に目標があるのです。どうぞ、お読みになる時には、そんなおつもりで、呻きの一語々々から、女の気持ちをおくみ取り下さるようお願い致します。

夜もふけました。最後に挿絵のことにふれてみましょう。私が、いまでも、飽かず眺め入るのは、「乗馬ズボンの女腹切」に掲載していただいた絵です。

「続乗馬ズボンの女腹切」は、切腹あり拷問あり、火焙りありで、私としては力作でありましたのに、絵を入れていただけなかったのが残念でしたが、あとは、必ず一枚か二枚づつ入っていますので、毎号の到着がたのしみです。ただ、乗馬ズボン、乗馬靴、あるいは飛行服などについての細かいところが実物と違うのはやむを得ないことでしょう。

すけれど。旅先の宿で、たどたととりとめのないことを書いてしまいました。おゆるし下さいませ。いずれ想をあらたにして、再び切腹を描きたいと思っています。いままでの作品がズボンや飛行服ばかりで、気になっていましたので、思いつくまま、おわびのために筆をとりました。皆様の御活躍をおいのり致します。

「残虐な女性」

ヨハンネス・ビルリッゲル博士著

森 本 愛 造 訳 註

第六章 女性の幻想性加虐慾望

◇本項継続に際しての中序

筆者は昭和二十七年末より本誌に興味を惹き、二十八年に墮独の性風俗文献二・三をあけて、この訳出を申入れたのであるが編集長箕田京二氏はこのビルリッゲル博士の著作を推して二十九年度、卅年度と足かけ三ヶ年に

渉って訳註を続けて来たわけであるが、部分的に甚だ複雑、難解なる本書を一般に紹介するに当って、同氏の好意的な取扱いは、訳者をして、当初「マゾヒズムのメッカ」と大言壮語せしめ、屢々本邦及現代社会に於ける引例を註として挿入して実に莫大なる文献となりつつあった。然るに、当局の弾圧は、遂に漸く興味本位より脱して、研究誌としての容

姿を具えつつあった本誌を中断せしめ、これに引続いて商業上の多くの支障によって、休刊久しきにわたったため、折角続いてきた本項も中断の止むなきに至った。併し訳出はすでに完成しており、唯、浄書、註解を附するのみの段階に至っているもので、訳者の個人的都合は後廻しとして、とにかくにもこの訳出を完成せしめる事が肝要と思うので、ここに改めて本項を第六章より始めることにする。復刊其の他の煩雑な状況の下にあったので、第五章中半以降は続項の区切りに対することとし、第六章よりは従来の形式を廃し、人、地名の原語は一切の原註と共に各章の最後に付することとする。唯、訳者の必要と思われる現在刊行中の参考書目等を簡略に付するに留める心算である。又従来大量に紹介してきた挿絵及珍奇画の複写は、特殊の有志が

多数あるなれば格別であるが、原則として状態の好転するまでこれを割愛する。(訳者)

第六章 本 文

多くのサディスティン達が残虐行為を眺めることに大きな満足を得るといふ事は周知の事実である。彼女等が、他人の残虐行為を眺めるにとどまるために、彼女達は同情深いと考えられる事が多い。その結果、実際には、心底に淫虐の慾望が活動しているにも拘らず人々は彼女達が提案する刑罰に対する意見を只々正義を愛し、邪悪を排するが故であると確信するのである。人々、特に淫虐愛好を極めて稀なものと解する人々によって、その様な皮相な判断が、如何に数多くなされているかは次に挙げる引例によって明かであろう。

スペインのセヴィリアで闘牛を見たゾフィ・デエネルは次の様に記している。

「故国に在る時には、私は闘牛の様な非道な見世物を見るなどという事は道徳に反する事だし、決してそんな場所には行っていない心算でした。併し今、スペインにやってきました、最大の権威のある闘牛場を見る機会に直面し、側の人達から、この見世物を見ないではスペインやスペイン人を理解する事は出来ないなどと云われてみると、私達はその言葉に従わない訳にはゆきませんでした。そうして、今、その見世物を見て

しまった現在、私は決して後悔はしていません。

ピカドオル(槍闘片師——前座に出場して騎馬で牛に対する闘牛師)が、尖った槍を牛の横腹に突き刺すと、牛はこの最初の苦痛に忿怒して角を振り立てて人馬に向ってゆきます。多くの場合、この牛の猛進の為に、馬は脇腹を抉られ、ピカドオルは落馬するのです。待ち構えていた人達が走り寄ってピカドオルを救い出します。馬が悶え乍ら息が絶えてしまうと、その死体は場外に運び去られ、血の滲んだ大地には新しい砂が撒かれます。若し、馬が死に切れない時には、屢々馬は脇腹から内臓を露呈して引きずり乍ら、再び牛に向って進まねばなりません。私はそんな時に慄え乍ら眼を閉じました。二、三頭の馬が殺されると闘牛は次の段階に入ります。闘牛師(この場合は徒歩の闘牛師であつてトレアドールと呼ぶ。所謂花形闘牛師はすべてこの種類に属する。例えば「カルメン」のエスカミリオがこのトレアドールである。)が巧みな方法で牛の首や背中に六本から八本の飾り付き鉗を突き刺すと、牛は首を振って鉗を落そうとするのでした。

こうして四頭の牛が殺されるのを見てから私達は闘牛場に別れを告げたのでした。

こうした記録が、残虐な行為に慣れていない婦人の正直に述べられた感情を示している。類推するならば、(——訳者——反感を持って対した第一回の時の愉悦から推して)第二回目以後、この婦人がどの様な快感を闘牛から得たかを私達は想像する事が出来る。

私達は多くの欧州女性と殆んど全部のスペイン人の女性が闘牛を烈しく熱愛して、その場内で発揮される徹底的な動物サディズムの発露に酔い痴れるかを、一般的な常識として知っている。(——訳者註——これらの事は「アレナの勇者」||「灼熱の勇者」というアメリカ映画にも詳しい描写があるので参照されたい。)

ヴィレイも亦その著作で、「スペインの女性性は男性よりも一層血なまぐさい闘牛を情熱的に愛している」として前述の所説を裏書きしている。従つて私は注意すべき一例を想起される事を望みつつ、闘牛に関する詳述を割愛しようと思う。注意すべき一例とはフランスの或る王妃が、彼女の生地スペインの闘牛と闘鶏とをパリに移殖しようとした努力を指す。

女性達は又、人間と動物との戦いに対してだけでなく、動物同志の戦いにも興味を持っている。ハイソリッヒ・サンドルスはこの点について、次の様に述べている。

(以下次号)

△ 創 作 ▽

L

・

T

商 会

佐 川 増 夫

奴隸商売風景

「この前お買上げ願った品は、その後如何で御座居ますか？」

「悪くないね、ま、大いに気に入って可愛がつてやってるよ、ハハハハ」

「それはし宜う御座居ました。私共と致しましては、自信をもっておすすめした品で御座居ますから、御満足頂ければ私共の方でも嬉しいようなわけで御座居まして、はあ。ま、あれはあれと致しまして、今日もきつとお気に召して頂ける品が用意して御座居ます。一号のウインドーを御覧下さいますよう。」

田口は恰幅の良い、五十前後の一見して重役、社長風の人物を案内して、例のお姫様のシヨールウインドーを開けて中に入った。私は

田口につかず離れず、少々間の抜けた恰好で突つ立っていた。

陳列場にはいつの間にか四、五人のお客が熱心にシヨールウインドーを覗き込んで若い社員の説明を聞いたりしているが、矢張り肝腎の所は田口支配人直々の御出馬でないと中々話がまとまらないらしい。

「如何です、素晴らしい品で御座居ましょう。」
「ふうむ。十九才、十三貫と、えーと、この前は確か二十だったね」

「はあ、さようで御座居ます。」

「一寸似ているじゃないか、妹分て所だね。」
「ええ、そんな所です。まだ一寸肉付きが足りない所が欠点といえは欠点ですが、そこら辺は御仕込み次第で、どうにでもなるというものです。ハ、ハ、ハ。」

「八五万か、高くはないね」

「はあ、八五万っていうのは大勉強なんですよ、以前でしたら百五十万でもどうかって所なんです、近頃やと商売も軌道に乗って参りましたので、こうお安く願えるようになってたような訳で御座居ます。ま、それにしても八五万はお買徳だと思えますが。」

「お姫様姿が仲々よく似合うじゃないか。どうだね、君、衣裳ごともらおうじゃないか。衣裳は幾らで譲るかね」

「さようで御座居ますねえ、外ならぬ植田さまのことで御座居ますから、そう、頭のものから全部含めまして十五万で宣しう御座居ます。」

「十五万か、じゃ、しめて丁度百万だな、よからう。小切手は会計の方に廻しとくから、

今晚の中に届けてもらおう。」

「は、かしこまりました。すぐお届け致します。三木さんと山下さん、一寸、すぐこれを包装して運送部に廻すように。着物もたたんで一緒に持って行けるようにしてね。いいかい上物だから、壊さないよう充填物をたっぷり使って丁寧に梱包するよう云ってくれ、たのむよ」

田口が女店員に云い付けている間に、重役さん、他のショーウィンドは覗きもせずに、さっさと陳列場から外へ出て行った。

向うのショーウィンドの前で、さきほどから夫婦者らしい中年の外人がしきりと相談をしている。どうやら奥さんと旦那さんの意見が合わないらしい。田口は二人の間に入ると案外流暢な英語で話しかけた。西洋人は買物がうるさいと聞いていたが、実際彼等の品定めは恐ろしく念入りで、髪の毛、耳朶、鼻から歯並び、肌触り、バスト、ウエスト、等々ためしすかしつ、念入りに調べている。旦那の方は少々太ったふっくり型を、奥さんはスマートなすんなり型を候補に上げて互いに譲ろうとしない。中に入った田口も少々もて余し気味だったが、どうにか話がついたらしい。サンキューペリマッチをくり返している。

見るからに有閑マダム然とした毛皮のオーバーを着込んだ四十前後の小肥りの女が、こ

れも毛皮のオーバーを着て、目の下まで掩うような大きなマスクをかけた若い娘をかかえるようにして入って来た。

「これは、これは、ようこそいらっしやいました。今日はペットをお連れですか」
「ええ、この頃はいつもミミを連れて歩くことにしてるの。」

マダムはいたずら子のようにニヤリと笑うと、ミミと呼ぶペットのオーバーを一寸めくって見せた。驚いたことにオーバーの下はストッキングだけのオールヌード、後手はもとより、太腿から膝頭まで、細紐で丹念にきつちりと縛られている。

「おやおや、これはどうも、しかし、なんですよ、街の中で風にも吹かれてオーバーがめくれたりしたら、一寸事です。ま、奥様のことで御座居ますから、へまはおやりにならないでしようが。」

「大丈夫ですよ。銀ブラだの映画だの音楽会だの、もう始終連れて行っているんですものほら、このマスクの下にはこうやってちゃんと猿轡までしてあるし、そう／＼この間ね、うっかり喫茶店に入っちゃってね、ミミの猿轡一寸外せないもんだから、すっかり弱っちゃった事があるわ」

「それでどうなさいました？」

「仕方がないから私がミミの分も飲んじゃって、あわてて飛び出しちゃったの、ふふふ」

「それはどうも、しかし笑話のうちはよいですが、もっと工合の悪い事にならないよう御願ひしますよ」

「そう心配しなくても大丈夫よ、ええと、今日はね、ミミに少し着物を買って上げようと思つて来たの、それに新型の木馬が出来たそうだから、よかったらそれも貰おうかと思つて来たの」

「はあ、さようで、では向うのお部屋に御座居ますから、どうぞ、ごゆっくりと。」

特売品のウィンドーの前では、さっきからサラリーマン風の若い男が、あれかこれかと品定めの中である。田口が如才なく相手になつて居る。

「そうですね、特売品とは申ししましても、別に特売用に仕入れた品では御座居ませんから十分吟味した品ばかりで、実際、お買徳品だと存じますが。これなんか如何ですか」
一人の品物の髪の毛をつかんで頭を上げさせる。

「三十二才、一寸年はとっていますけれど、よく慣れていますから、お若い方にはかえって適当ではないかと思ひますが。」

サラリーマン氏は足首についている値札をちらっと見て

「八万か、五万にしてくれたら買つてもいいけどな」

「五万ですって、それは御無理ですよ。私共の方では決して掛値なぞしておりません。八万というのはギリギリに勉強したお値段です。て、本当は二十万は頂く品なんです。一寸身体が弱いんで、こんなお値段で特売しているわけですから。」

「身体が弱いんだって、それじゃしょうがないな、病氣したって一寸医者と呼ぶのは工合悪いし。」

「いや、その点は御心配なく、ほら、この人が、当商会専属の医師ですから、その点のアフターサービスは責任はお持ち致します。」
 といいながら私を指さした。私はあわてて会釈した。

「まあ、六ヶ月以内の自然故障は無料修理ということにはなっておりますが、そちら様の手落による故障でも、出来るだけのことばさせて頂きます。」

「ふうん、八万ね、それじゃ月賦にして呉れないかな」

「月賦ですか、弱りましたねえ、今まで月賦を扱ったことはないんですが」

「月賦だって、もうすぐボーナスが入るからそれまでいいんだよ」

「仕方がありませんなあ、よろしく御座居ます。その代り、よその方には内緒に願いますよ。そうでないと、月賦が流行ってしまつて困りますからね」

「すぐ持つて行くから荷作りしてくれよ」

「明日になれば車でお届けしますが」

「いや、自分で持つて行きたいんだ。」

「じゃあ、すぐにお包みしますから一寸お待ちになって下さい、山下君、そうだな、一通り縄をかけて、通い袋にでも入れてね、口にリボンでも結んで持ち易いようにしてあげて、ええと、それからお渡しする時、上下をようく教えてあげて、頭が下になったりしないようにね。」

田口の売り付け方は実に巧妙で、この人にはこれと見立てると、まず間違いなくそれを買わせてしまう手腕を持っていた。私はただ感嘆して眺めているばかりだった。

おや／＼向うでは恐らく今春高校を出たかどうか位のポニーテイルのお嬢さんが、父親らしいロマンズグレーに、おねだりをしていく。早速田口支配人が近よって行く。

「どうもこの子はフランス物がいいって盛んにねだつて居るんだが、十七、八でおとなしいのは居ないかね」

「さようで御座居ますね、おとなしいのと申しますと、ええと、そう、こちら十八才ですが、あちら物にしては小柄で至って大人なしのようですが、お嬢様、如何ですか」

「そうねえ、一寸猿轡外してもいいかしら、私少しお話しして見たいの」

「ええ、けっこうですとも、どうぞ」

ポニーテイル嬢は、白い指先で器用に品物の猿轡を外すと、あらかじめ、頭の中で考えて置いたらしいフランス語で何にやら話しかけた。生憎と私はフレンチは出来ないの、何んと云ったの解らなかつたが、品物の方には、どうやら通じたらしい。しばらくだまつて居たが、ポツリポツリと返答をした。ポニー嬢が又話しかけると、今度はペラペラと勢よく喋りだした。今度はポニー嬢一寸聞き取れないらしい。それでも何度も訊き正して、凡そは解つたのか、品物をそつと抱きかかえて、フランス映画風に一寸気取つてキスをした。

「これ氣に入つたわ、お父様これ買って。」

「ふふふ、そうかい、君、これは幾らだね」

「ええ百四十万で御座居ます。」

「ふうん、安くないね、由紀や、もっと安いので我慢しないかい」

「嫌よ、お父さま、断然これ氣に入っちゃたんですもの、ねえ、たった百四十万じゃないの、フランス語の先生一人雇つたと思えば安いものよ、ねえ、買ってよう。」

「仕方ないなあ、じゃ君、これ貰おう」

「は、どうも有難う御座居ます」

「ついでにわしも一人買って行くかな、わたしは矢張り日本物が良いな」

「は、日本物はあちら側に御座居ます。」

親父さんの方は、なじみの芸者に似たので

も探しているのか、ゆっくりと見て廻っている。ポニー嬢は、自分のお玩具の包装する所を見たいと云って女店員と一緒に品物を連れて包装室に入って行った。

「そんなわけで、しばらく様子を見て、気に入ったら正式に結婚しても良いと思ってるんです。だから身体の方ばかりでなく或程度頭もよくって、教養もある人でないと一生の伴侶としては困りますから、そう云った点も含めて適当なのはいいですか」

「中々むずかしい御注文ですねえ、すると学歴は大学出ていないといけませんか」
「いやあ、別に大学出である必要はないんですが、ただ一応私のお話相手になる位のセンスがあつて、趣味の良い人なら学歴なんか問題じゃないわけですよ。」

「どうも、センスとか趣味とか云われましても、正直の所、そう云う方面については今まで余り重きを置いてなかったんで、どの品がどれ位の頭があるか、一寸解りかねるのですが、その方面のデータとしては学歴ぐらいしか解りませんので、松戸さん、一寸原簿を持って来て見て下さい」

さすがの田口もこういった注文は、始めてらしく頭をかいている。

「君、昔の吉原の花魁だつて芸事ばかりか学問や行儀作法まで、みっちり仕込んだつて云うじゃないか、君の所も少し、その点

も考えるべきじゃないかな」

「はあ、早速研究して見ます」

そこへ女店員が原簿を持って来た。

「ええと、今の所大学出が一人と在学中だったのが三人居りますが、さしあたり、その辺

の所からでも選んで頂くより仕方ないのです
が」

田口は原簿と首っ引きで、花嫁探しの青年
紳士とショーウィンドを巡り歩いている。

「将来結婚するつもりか、ふふん、一寸愉快



な考えじゃないか、俺もその内氣に入つたのを見付けて女房にするか。」

ふとそんな事を考えて見た。ヒヨイと後から突っかれて振り返ると秘書の中谷嬢だった。「なんだ、中谷さんか、どこへ行っていたんだい？」

「ふふ、一寸つまんない用事をしていたの。どう、我がL・T商会、仲々売れ行きがいいでしょう。」

「うん、田口のやつ、こんなに商売上手だとは思わなかったよ。一体一日いくら位売れるんだい。」

「そうね、五百万割る日は少ないわね、それに通信販売も入れれば、七、八百万位になるんじゃないかしら」

「凄いいもんだね、原価なんて只みたいなものだろう、税金はかからない——」

「そうでもないのよ。案外純益は少ないらしいわ、何にかと掛りが大変だしするから」

手持無沙汰で困っていた私は、良い話相手が出来たので色々と話しかけたが、彼女は内輪のことは余り話したがない風だった。

「隣りへ行って見ましようよ」

隣の部屋には、色々の拘束具、折檻用具、衣裳、書籍、それに片隅にはデスクを据えて相談室のようなものである。

と、見ると、さっきのマダムが裸にしたペットのミミに、種々な布地を巻きつけては、

盛んに囚衣をえらんでいる。もう大分長いことやっているものと見えて、台の上には布地が山のように積まれ、女店員は飽き／＼したような顔でお相手をつとめている。

「奥様、これがよくお似合ですわ、ね、ミミさん、これがいいでしょ」

中谷嬢が横から口をはさんだ、ミミは猿轡されているのでコックリをした。

「そう、それじゃこれにするわ、型はさっきので、寸法は少し小さい位にキツチリとね、紐も少し細目のをたっぷりつけてよく締るようにしてね」

店員がミミの身体に巻尺を当てて、寸法をとっている。ミミはくすぐったそうに身をくねらせてもらっている。

「新型の木馬っていうのはこれ？」

マダムが首と尾の間がいやに狭い木馬を指してきいた。

「ええ、さよう御座居ます。このまたがる部分はこのように簡単に取り外しが出来るようになって置りました、この三角型に尖った木のこれと、ガラスで出来たギザギザ付きのと、スプリングが入って痛くないこれと、三通りに使えるようになって居ります。それからこの尻尾は、こちらのハンドルを廻して頂きますと、このように後ろに倒れるようになって居りますので、ここに上半身を縛って置きますと、仰向けにすることが出来るわけで

御座居ます。四本の足には、それぞれバンドが付いていますから、うつ伏せでも、あお向けでも、簡単に固定出来ます。その外、足につける分銅も、軽いのから重いのもまで三通り附属致して居ります。」

「ふうむ、割とよく出来てるのね、一寸ミミを乗せて見ようかしら、いいでしょ」

「はい、どうぞ御自由にお試し下さい。」

マダムはミミの大腿を縛った縄を解き、跡のついた肌をいとおしそうになでてやった。「痛くないのはこれね、このネジで止めればいいんでしょう。さあ、ミミちゃん、この上に乗るのよ。」

と云いながら、ミミを抱きかかえて木馬にまたがらせた。ミミは恥しそうに顔をそむけたが、別に抵抗もせず、大人しく木馬にまたがった。スプリング入りの台がぎゅっと窪んで、ミミのお尻の間にかくれて見えなくなった。ミミは不安を大きな瞳に浮べ、不安定な身体をゆらゆらさせた。例の大きなマスクの猿轡の為に一層強調された瞳が、ふるいつきたいほど可愛らしい。

「ミミちゃん、痛くないわね、どう具合は。」マダムは返事の出来ないミミに何にかと話しかけながら、垂直に立っている木馬の尻尾にミミの上半身を念入りに縛りつけた。女店員やお客やらが五、六人、そばに立って見物しているのも全然目に入らないらしい。左

右に開いたミミの両足を無理に近付けて鎖のついた足枷でつなぎ、そこに一番軽い分銅を吊り下げた。

「このハンドルを廻すのね。」

マダムがハンドルを廻すのにつれて、ミミの上半身が仰向けに倒れてくる、しかし足には分銅が吊り下げられているので、下半身は垂直のままである。上を向いた乳房がブルンブルン緊張に震えている。

相談室では、遊戯室の設計について相談しているらしい。

「そうです。矢張り五坪は欲しい所ですね、五坪ありますと、一通りの道具は皆備えることは出来ますし、玩具も三人位までは十分入れておけますから」

「これが、五坪の標準設計図かね」

「はあ、さようです。ここに特殊ベッドを置きまして、こちら側に万能緊縛台、こちらには十字架、木馬を入れます。天井には八力所ほど滑車をつけまして、こちらから向うにはレールをつけて、吊ったまま移動出来るようになります。電気、ガス、水道とトイレ、バスまで整うようになって居ります。」

「うん、そうかね、矢張り五坪欲しいね。どうだろう、家に古い土蔵があるんだが、これを一つ改造して出来ないもんだらうか。これだったら十坪以上あるんだが。」

「土蔵ですか、土蔵でしたら好都合です。私

共の方で手を入れますと新築なさると殆んど変らない立派なものが出来ますが。一応現場を拝見してからでないか。」

「そりやそうだ。じゃ明日にでも早速見に来てくれよ。そしてなるべく早く設計と見積りを出してもらって、すぐに工事にかかってもらいたいんだ」

「は、かしこまりました。では明日の午前中にうかがわせますから」

この設計技師はまだ若いハンサム青年で、女店員が多いこの売場では一寸ばかり目立つた存在である。

「佐川君、一寸」

第二売場に通ずるドアを開けて田口が入ってきた。

壊れた玩具

「早速で済まないんだが、一寸往診に行ってもらえないかな、実は、さっき借してやった品物の一人がどうかしたらいいんだ。稲村屋のおかみから電話があつてね。頼むよ」

「あゝいいとも、愈々僕の商売ってわけだな」

私は気軽に引き受けて仕度を整えると、田口のナツシユに乗って稲村屋へ出掛けた。出迎えたお女将は粹づくりに化粧しているが、四十五、六になっているだろう、脂肪肥りした色白の愛相のよい女だった。故障した玩具である患者は、二階の片隅の四畳半に寝かさ

れていた。枕もとには店の女中と、お客の男達が三、四人心配そうに坐っている。患者はやや細面の整った顔立ちの女だが、顔は真青で、脉も殆んど触れない位に弱く、意識を失っている。聞いてみると、この玩具は、がんじがらめに縛られた上、蒲団むしにされた上から大勢乗っかって踏んづけられたそうである。しかし、この玩具は呼吸困難の為というよりは、むしろ神経性のショックを起したもののようだ。すぐ強心剤とアドレナリンを打った。更にブドウ糖を静注している内に、顔色が幾分赤みを帯びて、脉も触れるようになって来た。その中に、意識も取りもどしたかパッチリと目を開いたが、もうしばらく目をつぶっているように命じた。

「もう大丈夫でしょう。このまましばらくすれば、すっかりよくなります」

「はあ、そうですか、どうも有難う御座居ました。私は、死んじやうのじゃないかと思つて心配していたのですよ、どうも、これで助りました。」

お女将はしきりに頭をさげた。しかし、純粹に、この女の生命が助かった事を喜んだのか、或はL・T商会への弁償を逃れたので喜んでいいのか判ったものではない。女中やお客達も引き揚げて行つた。私は尚、念の為もうしばらくここにいて様子を見ることにした。女はふと眼を開き何にか云おうとしたが、

私はもうしばらく黙っているように云った。と、今まで静かだった中庭をへだてた向いの部屋が急に騒がしくなり、酔っぱらった男のだみ声、芸妓なのか、若い女のなにかのキイキイ声の間に苦しそうな、女のうめき声まで混ざって聞えて来る。

「おや／＼又始めた。もういい加減にすればいいのに、嫌な人達だこと。」

お女将が呟いた。どうやら、この女と一緒に借りられた他の二人の玩具を又しても慰みものになっているらしい。時々写真を撮るのかフラッシュのまぶしい光がこっちの部屋まできらめく。バタ／＼と乱れた足音をさせて、芸妓が二人、入って来た。

「先生、わざ／＼どうも御苦労様でした。あの、あちらの方がお礼に一杯差し上げたいから是非お呼びして来るようにって」

「折角ですが、僕は往診中なんで酒なんか頂くわけにはゆきませんよ」

「そんなお固いこと云わないで、ねえ一杯だけ。」

とか何んとか云われて、もともと嫌いな方ではないのでとうとうお女将に後を頼んで引っぱり出されてしまった。中庭をへだて、向いの部屋にはどういふお客か知らないが五、六人の中年の男が芸妓を上げて騒いでいた。

驚いたことに、部屋の中央には一人の若い女が、後手に縛られ、膝を折り曲げて仰向に

寝かされている。そして、その身体の上にじかに刺身やら塩焼やら、甘煮から香の物に至るまで、胸といわず腹といわず、大腿といわず一杯に乗せてある。つまり、彼女の身体がお膳であり皿であった。おまけに、へその窪みに醤油を満たし、箸でつまんだ刺身をそこに運んでいる。大分喰べ散らかしてあるのを一人の女が一寸並べ直し盛んにすすめるが、食欲は一向に出ない。

もう一人の玩具は腰巻一つにされて、今や二、三人がかりでえび責めにされつつある所である。

「そう、もう少し曲げてよお」

一人の女が前に廻り縄を持って、首と足を結びつけようとしている。背中に廻った男は両手と右ひざがしらまで使って前に押し曲げる、力を入れる度に、猿轡をされた玩具の口からうめき声もれる。別な男が、カメラをかまえて、この異様な光景をフィルムに納めようとしている。

男達はもうこの遊びに大分飽きたような顔付で、酔も十分に廻ったかトロンとした目をして、酔も十分にかえって元気づき、目を血走らせて、この遊戯に熱中している。普段は人一倍束縛の多い芸妓という稼業が、時たま、自分より弱い立場の女に立ち向った時に、急に衝動的に加虐的となったものか、それとも、女というものは、もともと

とこんな嗜虐的な性質を持っているものなのか。

私は二本の鉋子を立てつづけに空にすると患者が心配だからといって、もとの部屋にかえったが、見ていくるはずの女将の姿はなかった。そのかわり、女はかなり元氣をとりもどして居た。

「先生、向うはまだお開きにならないの」女が、案外はつきりとした声できいた。

「うん、でも、そろ／＼終るだろうよ」

女は一寸目を伏せた。長いまつ毛が印象的である。ふと目を開くと

「先生どこからいらしたの」と聞いた。

「どこからって？」どこからの意味が解らぬのでき返した。

「普通の街のお医者じゃないんでしよう」

「ああ、そのことか。僕は今日からL・T商會に雇われた医者なんだよ。」

「あら、そうなの、ふーん」

女はしばらくだまっていたが、急にボツンと云った。

「私、もと看護婦だったの」私はだまって女の顔を見詰めた。

「私、先生のお手伝いに使ってもらえないかしら」

思い切ったように女が云った。

お手伝いとなると、商品なる女が、商品を扱う側に立つということになるが、しかし、



『腰巻のアンケート』

一或の奇人夫婦を訪ねて一

まき
牧

たか
高

し
志

そんなことはどうでも良い。一人看護婦がいれば何にかと好都合だ。

「田口支配人に話しておくよ」

「お願い、きつとね」

「君、名前何んて云うの」

「藤代和代、でも、こゝでは、四ノ九八四七って云わないと判らないわ」

私は何んとなく秘書の中谷嬢を思い浮べていた。向いの部屋では一しきり又、騒ぎが大きくなった。いじめられている友を思っ

和代は悲しそうに目を伏せた。

この時、柱時計が十二時を打った。

(未完)

『いつ頃から、どんな動機で女装されたんですか?』

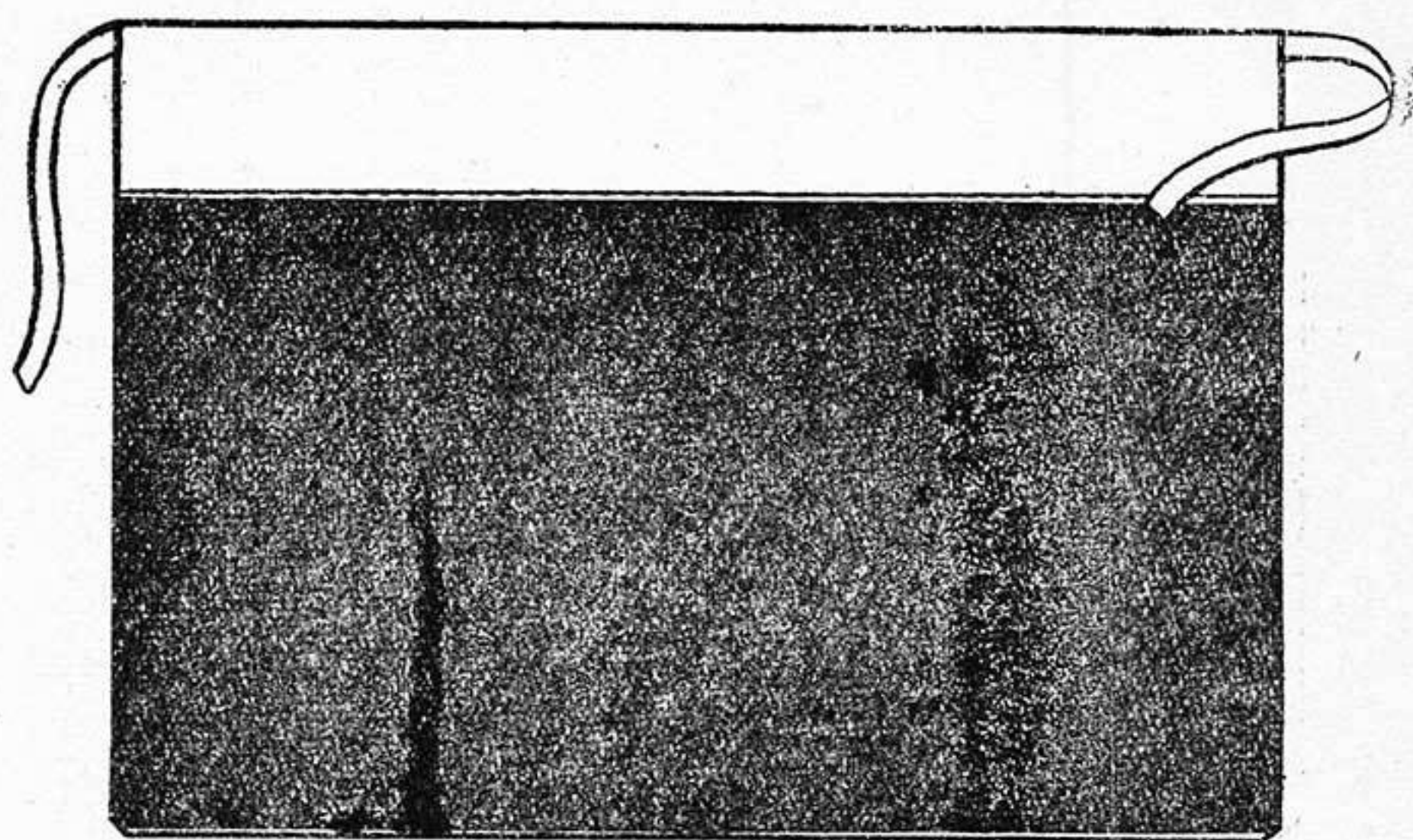
『いや別に、これと云って意味はないんだがね、ただ好きだからやったまでで、近所じゃ倒逆夫婦だと云ってるよ』

『二六中、四六中御二人が女装では家の中がまごついてお困りじゃないですか?』

『そうでもないよ、家内は洋装で専らズボンでやるから区別はつくしね、ただお互にくつろいだ時にきものの女が二人出来て愉快になるが』

『一つ今日は御主人のきもの——特に下に召しておられる物について一席お伺いしたいんですが最近上映された天然色の美女蝙蝠などという映画は御覧になりましたか?』

『先頃、家内と観たね、あれは君、大塚がなくて淋しいよ、折角色のついた映画だろう。うんときもののよさを出さなくっちゃ、夜の河だってまだ色気が足らんね、うん、違う、腰巻もあるが腰元連中のは長襦袢だよ、あれは本当の色じゃなかったね、カメラが悪いん



『その点伊太利の映画で蝶々夫人は朱が朱に出ていましたが、やっぱり日本の緋の色は緋に出ないとパツとしませんね、奥さんなんぞこうして女装の御主人を御覧になっていかが

だろう』

第Ⅳイ、関西式横巻きお腰

です？』

『ええ、もう、慣れてますの、好きなものは好きなようにさせてますからホホホ』

『やはり下着の方も特別誂らえにお作りになるんですか？ 万事男は丈布が大きいでしょうから』

『下着と申しまして肌着とお腰

だけです、折々は交換して着るんですけど、主人好みの物も縫

います、ただ下着以外となります

と一寸なかなか既製品では間に合

いませんで、きものから長襦袢だの帯類になりますとどうしても

主人の身体に合せませんと』

『すると、普断はそんな恰好で、たまには盛装でもなさるんですか？』

『一通りは揃えてはいますんですがお勤め(チンドン屋)の外にお

花見の仮装行列でも頼まれられない限り滅多に着ませんの、役者の出来

損ない見たいになっちゃいますか

ら』

『その下着なんです、お腰しなんか何かにつけてチラチラしますしね、そんな時のお気

持はいかがです？』

『自分で穿いてて近頃は何んともしないね、

僕は便利だから嵌めてるんであって一向平気

さ、平気で物干し竿に干すよ、この間も家内

のと四、五枚蹴ってたのでパン助宿と間違え

られちゃった、色？まあ、いつでも若いつも

りでいたいなら赤に限るね、ほう？やっぱり

世間にや結構女装愛好者がいるんだね、洋装

もいいが色気がなくなってるね、ただ此処んこ

ろがベチャンコだろう(と乳の処を指す)こ

れはブラジャー、いやキヤミソールか、これ

にゴムパットを入れてね、ごまかしだ』

『そうしますと御主人は御主人だけに色々

アクセサリーが要る訳ですね』

『まあ、要る方だろう、例えば冬に白足袋を

穿こうと思っても特別に探さんとなないからね

先だってもたまには俺のお酌もよからうてん

で新規に島田のかつらを買に行っただが

御注文でないと無いと云うしね、腰巻の間か

ら毛ずねが出れば毛抜きクリームも必要だし

ね』

『先ず一つ、参考までに今締めていらっしや

る腰巻の寸法をとらせて頂けませんか？』

『家内のをとり給え、あれも俺のを嵌めてる

んだから共通だよ』

『奥さん、御主人の御命令なんですから一つ

参考までに』

『まあ、ひどい方、一寸余計に一枚借りたんですのよ、寒いもんですから、じゃ、どうぞ

第2図を御覧願います

『家内と五、六寸違うからね、腰巻もそれだけ大きくなるだろう、パンティと云う奴だつて伸びないと家内のは僕には入らんしね、お腰しの紐だつて前結びが便利だから一寸長めにしてある』

『あの——つかぬことをお聴きしますがこの腰巻は何日位で替えられますか？』

『どうだ、お前の方が汚れるんじゃないかい？ 四、五日で洗つてゐるんだから』

『……』

『どうも飛んだお尋ねで失礼しました、只今拝見した寸法ですが、これで大体仮りに、普通の男の人が締めるとしても不都合な処はありませんか？』

『映画や芝居の場合だつて長襦袢まで曳いて歩くんだつたら腰巻は長い方がいいかも知れん、普段はこれで充分だよ、一事に腰巻と云うが昔は関東風と関西風とあったんだね、——第1図を参考迄に御覧下さい——だけど近頃は何んだ、皆んな関西風つて奴かね、大巾の布（裾布のこと）、こりやおおい、金紗縮緬が上等なのかい？ まあ近頃流行のレイヨン物でもいいさ、それに腰布（胴布とも云うそうだ）をつければ出来上るんだが、一度行燈風に作らせて窮屈な目に逢つたことがある、みやこ腰巻と同じさ、あれだけは止めた方がいい、それから街で売つとる耳付、白い腰布に三角

に足して出してある裾除は紐無しの挟む奴だが男は尻が細いから知らない間にズリ落ちてしまふ、まあ長目の紐を作つて前で結ぶのが一番安全だね、寒い時にや袷せにするんだね柄によつちや長襦袢を兼ねていいもんだが初めから二部式つて云う長襦袢は僕は天から嫌らいだから袷せの腰巻なら腰巻なりに柄を選ばなくつちや、そう、そう、あんた画がうまいね、その関東風なのが二部式長襦袢ともなるんだよ、へえ、今流行かねえ？

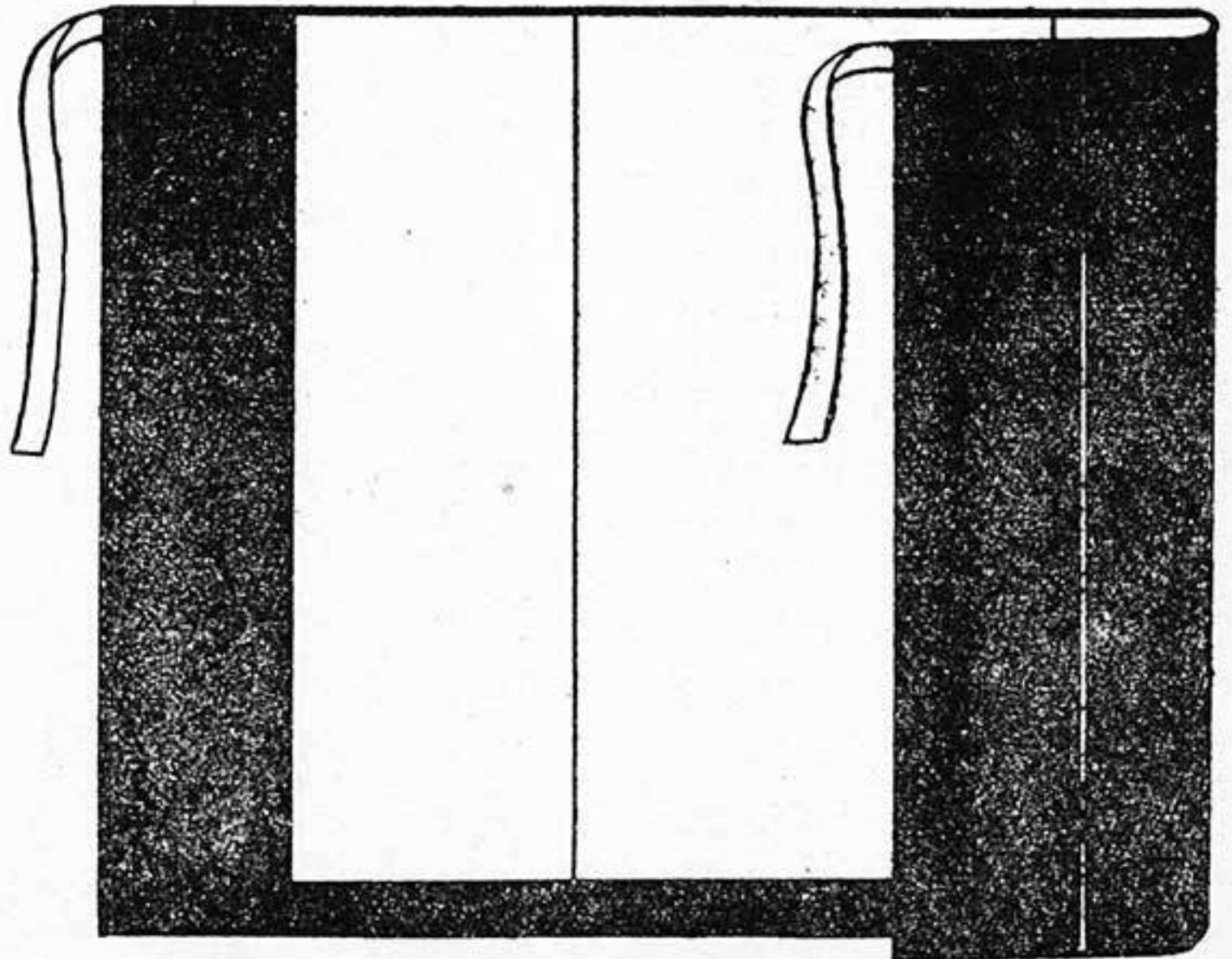
大方経済なんだろう』

『冬はまあいいとして夏場はいかがです？ 浴衣に下着一枚で過されるんですか？』

『大抵、その通りだね、その

方が却つて君、涼しいよ、仲間の女連中が暑い暑いって暑がるのはパッチなんか穿いてるからだよ、去年の夏は例の恰好で盆踊りで一っぱし踊つたらチンドン屋の親爺だあ——なんて拍手されてね、うん？ 木綿もいいが、ナイロンがあるだろう、一寸冷っこくていい気持だよ、勿論赤が色っぽくていいさ』

『最初のうちは、わたしの方が恥しいもんで



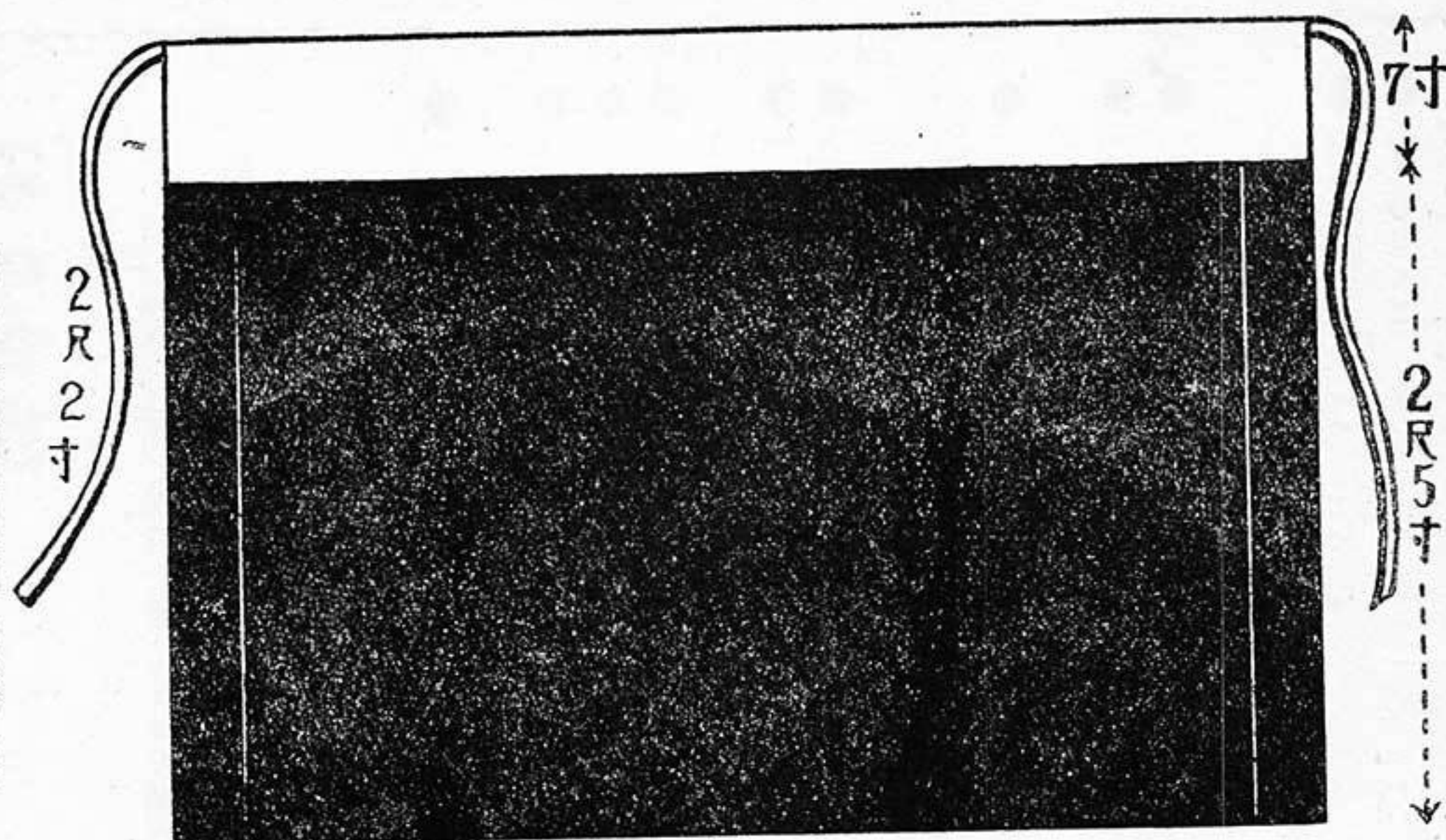
すから、そんな恰好で電車に乗ったりするのを止めたりしたんですの、すると天下公認の商売じゃねえかナンテ大威張で』

『色々と御夫婦の間で御苦労がありますね、処で先生、女の腰巻について何か面白い話でもありませんか？』

『要するに腰に巻く奴だからまあ半分は色気だろうねえ、ズロースだつて近頃は洗濯屋に

□、関東風のお腰

出すようだが、昔は芸者衆の連中大っぴらにクリーニング屋に出したと云うんじゃないか



第2回

←→
2.3寸

い、それ専門にやってた奴が仲間にいるし、吉原へ行つて二、三十枚貰つて来た奴もいた、小柄の男だ、何とか云つたなあ？揚げ屋の金さん？何んでも金の付く野郎だったが、先生の家がまた凝つてゐるんだ、六畳一間が全部湯文字だらけだからね、腰巻布団にくるまってる頃はよかっただろうが奴が死んだ時、女房さん困っちゃつてね、例の腰巻布団をひっくり返して線香を立てたのはいいがこっそり棺の中へ御愛用の物を入れててホッとしたと云つてた、今でも田舎の旅館に泊ると女中さんがクルリとお尻を向けてふくら脛に赤い蹴出しをからみつかせて見せる処があるね、ありや色気があるね、それからあれは何処へ頼まれて行つた時かなあ？ 不見転芸者が香水をまくっちゃう話は？ 本当に撒くかどうか知らんが何んと云うても奥ゆかしい話だナンて大笑いさ。まあ女がきものを着れば腰巻だね、吹かれ放しの長襦袢の間からズロースが見えちや艶消しだから』

『お話が伝統の腰巻にからみつくとなかなか話のタネも尽きませんがこころで一つ御商売の異色おひろめ屋になられた慣れそ

め、と云つた何か女装に関係深いお話を最後に伺えると』

『そりや、彼女から聴くんだね、押し掛け女房なんだから、いや、元は勤人さ、一寸眼を悪くして首、ぶらぶらしているうちに彼女の方が旅廻りの三味線曳きで小説じやないよ、本当の話だ、そのうち一緒に廻るようになってチンドン屋さ、女装したのもチンドン屋のせいだが初めは照れくさくってね、顔をかくして歩いたんだが慣れて了うと平気だね、』

『それで面白いお話があるんですよ、ホラ裏から抱きつかれた話？』

『あ、あの時は驚いたね、こっちは女だろう。いやさ女の恰好してるだろう、だもんだから道べたへつくまんじやつて女のように小便してたら、いきなり後から抱きついて倒すんだよ、夜だからいいようなものの、大方赤い腰巻でも見えたんだろう、本当の女なら倒し甲斐があるけどもさ、アハッハッハッ』

(この項終り)

× × ×

【雑誌通信】

大衆雑誌の挿絵から

△各誌六月号Vより

丘 一 明 提供

●「読切読物」新緑大增刊、剣豪読切集

画家は落ちるが縛り絵は四図もある。

●「好色新選組」土端一美画

●「美女肌吸血鬼」益田修三画

●「女色武芸帖」生野朗画

帆柱に後手。文中では全裸大の字だが。

●「やわ肌勤王芸者」奈良葉三画

●「探偵実話」女の犯罪特集

洋装前手縛りの挿絵が色刷頁にあり。山

田彬弘画

●「オール読切」山本秀夫画

口絵色刷磔

●「読切倶楽部」二六九頁

●「俠客五人男」三谷一馬画

主殺しの罪名で磔柱の上、火焙りとなる少女

●「面白倶楽部」一二八、一三八頁

●「屍蠟の市場」島田一男 堂昌一画

女が三人、背中合せにひとたばにグルグ

ルと荒縄で縛られていた。

●自由を奪われた女中（和服、後手）

●「小説の泉」

●「虚無僧伝奇」石原豪人画 三五六頁

うしろ手にくくられた女が五人必死に腕きながらも救いを求められないのは、いずれも、猿ぐつわをかまされているからだ。

（画はたゞ一人、それも猿ぐつわなし）

●「おさだ定九郎」岡崎武彦画 二五一頁

（女房を背負ったまま、立木にくくりつけられるという、変った構図）

●「読切特撰集」

●「八五郎の恋」鴨下晁湖画 三六四頁

後手、猿ぐつわ、

●「如夜又如菩薩」大久保敏雄、土端一美画
絵は大したことではないが、文章には切支丹を賞める数場面がある。その一部を掲げる。

——「しぶとい奴じや、まだ白状せぬな。ようし。女を剥げッ」

奉行の喚き声がまだ消えぬうちに、下役共が千代に襲いかかった。着物ははがれ、肌の物が奪われ、身もだえて抵抗する女体から緋縮緬の腰巻までも撈りとってしまった。剥がれた絨肌、野獣の様な男共の視線が、ねばっこくまつわりつく。——

白状せぬ千代の夫左門に向い拷問は尚も続く、——

「者共、女を吊れ」

とたんに、ヒーツと云うモニカ千代の悲鳴が、白洲一ぱいにひびきわたった。美貌が苦痛にゆがみ、真裸の女体が高手小手に縛られたまま天井へ吊り上げられてゆく。黒髪が乱れて雪の肌になつわりかかる。——

その上に、彼女は溝鼠の様な非人に翻られる。獄舎にも刑場にも、信者はさいなまれている。その刑場の場面。

——獄卒共はうら若い彼女達を裸にすると右手と右足、左手と左足を縄で連縛して、四ん這にして、それを鞭うって歩かした。

「読切小説集」

『夜の蜘蛛は殺せ』成瀬一富画 一八五頁

猿轡、後手、

『大衆小説』

『黄金曼陀羅』細木原青起画 三五一頁

ユーモア小説の挿絵で著名な筆者。奇妙な実感がある。

此の外に縛り絵こそないが、山田風太郎の『お江戸山脈』は、かたわ製造業ノが登場するグロテスク小説。

●『傑作倶楽部』

『緋鹿の子伝法』富賀正俊画 四一三頁

角田喜久雄の此の連載は今月、お絹、お源の二人が責められている。そのうちから

——男は大地に転っているお源の身体をまるで材木でも扱うように、ごろっとうつ伏せに引きこころがし、持っていた縄で、その両足首を固くしぼり上げ、更にその縄の先を、手首をしぼってある縄目の間へくぐらせて、ぐいっぐいっくと力まかせに引しぼった。

勢い、お源の身体は海老のようにそってきて、それでも無理に引きしぼる縄の力に耐えかねてか、その五体は波うつように苦悶の表情を示した。背中のところ、両手と両足首が一つになる迄遮二無二縄を引きしぼってから、がんじがらめにくくりあげ

てしまった。

丁度すぐ側に太い檜の巨木がある。男は縄のはしを取ってその太い枝の一つになげかけると、それまで遠まきにしていた三、四人の荒くれたちが寄って来て、手に手に縄のはしをつかんでたぐり始めた。

強情我慢に齒をくいしばってこらえていたお源が、

「あーっ！」と、魂消るような叫びをあげたのは身体がまさに大地をはなれようとする瞬間であった。

全身の重味が、手首足首の結び目へ、一度にどっとかかってくる。見る見る縄が肉にくい込み、どこかの骨がめりめりっと音たてて鳴ったような気持さえた。

情容赦もない。地上四五尺の宙に、お源のあさましい姿がぶらっととまった。

蒼白に変じた額からは油汗がしたたり落ち、襟元からすけて見えている胸乳の辺りが、今にも息絶えそうに荒々しく喘いでいる。

太い青竹をとった男が、その青竹の先をお源の脇の下へ通して、ぐいっごとじりあげた。ごじりあげながら、お源の身体をぐるりぐるり、廻転させる。十五六も廻しておいてから青竹をさっと抜きとると、檜の枝に張った縄のよじれが戻るにつれ、その

身体はまるで独楽のように逆廻転を始めた。

物凄く強情我慢な女だと見える。今にも悶絶しそうに喘ぎながら、くいしばった齒の中からわずかに、うっうっとうめき声をもらすだけであった。

ぎりり……ぎりり……

と、行きつ戻りつ幾度となく廻転しつづけていたお源は、そのうち

「うううッ……」と、一声長く息をひいてうめいたと思うと、それまでもがき、のけぞらせていた首を、がくっと前へ落して動かなくなってしまった。——

更に此の後、お源は囹として木の幹に縛りつけられる。

『初夏臨時増刊傑作倶楽部』

『暗躍は止める』下高原健二画

洋装で後手、手首足を縛られている。

『読切読物』六月特大号、

『地獄の死美人』久慈貫三郎画、

裸体の後手縛り 2枚、

『残侠浪人やくざ』小日向一夢画

(以上)



私の本箱から

—探偵小説の縛り場面—

星

光

一

今回は探偵小説の中に現れる縛りや、責めについて少し拾い出して見たいと思う。

探偵小説と云えば、江戸川乱歩先生を忘れる事は出来ない。昔、この人の子供向きの作品を読み、初めて探偵小説ファンになった人も決して少なくないと思う。現在でもラジオに映画に同氏の作品を盛んに演っている。探偵小説の中でも乱歩先生の作品は我々マニアにとっては、第一番に挙げなければならない。

それで、敬意を表して始めに、乱歩先生の作の中から二つばかり選んで見た。ただ、最近では、横溝正史先生の作品を主として読んでいる関係上、乱歩先生の物と云うと、どうしても古い作品からの紹介になってしまうのをお許し願いたい。

江戸川乱歩作「大暗室」雨読書院から発行されている。

彼女は闇の中で、ヌル／＼と纏ひつく蛇の胴中を手さぐりながら、思ひ切って短刀を突き立てた。

「ギヤッ」という悲鳴が空洞に飜して、すさまじく響き渡った。

「キ、貴様、俺を殺す気か。畜生、オイ、小人島。火だ、火だ、早く火をつけるんだ。」

真弓さんは短刀を落してしまったので、二の太刀を揮うことが出来なかった。あの一撃が精一杯であった。それが急所をはずれて、敵がまだ生きていることが分ると、彼女はグッタリとなって、再び立上る気力さへなかった。マッチがシュッと鳴って、蠟燭が点じられた。その赤い光の中に、大曾根は肩先からタラ／＼と血を流して、

物凄いい形相で立ちはだかつていた。

「エヘ、貴様は、それ程この俺が嫌いなんだな。よし、よし、それぢや俺の方にも考えがある。その強情が張り通せるものかどうか、一つ試して見るとしようぢやないか。オイ、小人島、縄だ。こいつを身動き出来ないように括り上げるんだ。そして例のところへ放り込むんだ。」

一寸法師が、どこからか長い縄を持出して来た。ニヤ／＼とあざ笑ふ不具者の顔が、真弓さんの真上に迫って……。

彼女はもう抵抗する力は残っていなかった。忽ちグル／＼捲きに縛り上げられ、芋虫のようにコロ／＼と転がされて、どこかへ運ばれて行った。ハツと思うと、身体の下の地面が消え失せていた。クラ／＼と眩暈がして、何か深い穴の中へ落込んで行くような感じがした。そして、彼女はまた意識を失ってしまった。それからどれ程の時間がたったのか、ひよっとすると、それは一昼夜も二昼夜もの長い時間であったかも知れないのだが、ふと正気に返って見ると、異様に固いものの上に、全く身動きも出来ないように縛りつけられていることが分った。彼女の身体の下にあるのは、何かしら木製の大きな枠のようなものであった。その枠の上に、彼女の手も足も胸も腹も、太い麻縄でグル／＼巻きに括りつけられているのだ。僅かに動くのは右手の肘から先ばかりであった。

「ア、あたしは死ぬのだ。かうして餓え死させる積りに違ひない。」彼女はもう諦めていた。餓え死にの苦しさは想像しても身震ひする程であったが、悪魔の花嫁になるくらいなら、まだしも餓え死を選んだ方がましだと、固く決心していた。

……中略……

オ、鼠の頭だ、一匹、二匹、三匹、四匹、数へ切れない程の鼠共が、ソツと穴の縁から頭を出して、こちらを窺っているのだ。

真弓は余りの無気味さに「シッ、シッ」

と云ひながら、僅かに動く右手を振った。すると、鼠共はサツと穴の中へ姿を隠すのだが、又暫くすると、ウジャ／＼と穴のまわりを蠢き始める。長い／＼間であった。機械のやうに動かししている右手が、もう無感覚になっていた。ふと気がつく、高い天井の闇の中に、チロ／＼と動いているものがあつた。最初は蝙蝠が飛んでいるのかと疑ったが、そうではなかった。何かえたいの知れない機械のやうなものである。それは大時計の振子によく似ていた。しかし、時計の振子などとは比べものにはならない大きさだ。暗いのでよくは分らぬけれど、その長さは一間以上、幅は二尺程で、振子の玉の先端に銀色の三日月型のものがついている。それが左右に大きく揺れる毎に、穴蔵の隅の隅の青い焰を反射して、キラリ、キラリと光るのである。

真弓はその奇妙な機械を非常に不気味に思ったけれども、まだ鼠の怖さを忘れる程ではなかった。又穴の方へ首をねち向けて、ともすれば這ひ上つて来る鼠を追うのに気を取られていた。だが暫らくして、再び天井に目をやった時、彼女はギョ／＼としないではいらなかった。あの大振子は、大きく左右に揺れながら、いつの間にか二尺程も彼女の方へ近づいていたではないか。振子はただ揺れるばかりでなく、徐々に地上に下つて来るのだ。

今では振子の玉の先端の、三日月型の銀色の部分が、ハッキリと見分けられる。それは謂はば巨大な鎌のやうなものであった。そして、その鎌の刃はまるで剃刀のやうに鋭いのだ。重い鉄製の振子は、空を切つて往復する度に、シュ／＼という鋭い不気味な音を立てた。真弓は徐々に徐々に下つて来る大振子と、その先端の巨大な剃刀の刃を見つめている内に、全身の産毛が悉く逆立ち、齒の根がガチ／＼と鳴り始めた。

今こそ分った。悪魔の恐ろしい企らみが分った。あいつは、この不思議な機械仕掛けによって彼女を殺さうとしているのだ。だが即

刃にではない。振子の先端が彼女の身体に触れるまで下って来るのには、恐らく数時間の余裕があるであらう。しかも、大きな木の枠に縛りつけられた被害者は、みすみす剃刀の刃に断ち斬られると分っているながら、その長い時間全く身動きをすることも出来ないで、じっと待っていなければならぬのだ。

やがて、振子の不気味な音の外に、匂ひが加はって来た。あの血の匂ひに似た鋼鉄の鋭い薫りが鼻孔にしみ込んで来た。

そして彼女は又、いつしか氣を失ってしまった。次に目醒めた時、そこは地獄でも極楽でもなくて、やっぱり以前の暗闇の穴蔵であった。血に飢えた殺人振子は、いつの間にかギョツとする間近さに迫っていた。巨大な剃刀の刃と彼女との間には、もう一尺程の隙間しかなかった。振子の揺れ方は丁度彼女の身体と直角をなして、数十分或いは十数分の後には、彼女のふくらとした胸の上を真一文字に斬り裂くやうな位置になっていた。

それは先づ彼女の服の上をスツと一摺り擦って、その布地をごく僅かばかりけぼだてるに過ぎないであらう。しかし、二度、三度、四度、振子の往復が度重なるにつれて、布地は刻々に烈しくけぼだって行くであらう。そして、服地が完全に断ち切れてしまうと、次には下着が、それから、ア、あのドキ／＼と光ったやつが、彼女の乳房の白い皮膚を、シューツとかすめて通るであらう。

そして、皮膚の表面が、細い／＼蜘蛛の糸のやうに、薄く赤ばむであらう。二摺三摺りの後、そこから絹糸のやうな血が流れるであらう。やがて、鋭い半月刀は皮を断ち切り、肉に喰い入り、長い長い時間の後、遂には骨に達するであらう。

真弓はキリ／＼と歯ぎしりを噛んで、目の前に迫る巨大な殺人機械を見つめていた。目をそらさうとしても、そらすことが出来なかった。何か強い／＼紐のやうなもので、眼球がその方へ、ドキドキ光る大剃刀の刃へ、ひきつけられていた。

下へ、下へ、大剃刀の刃は少しも狂ひのない正確さで、シリ、シリ、と下へさがって来る。下へ、下へ、それは人間業ではどうすることも出来ない、必然の運命のやうに、彼女の柔肌へと肉迫して来る。

振子の一往復毎に、彼女は火のやうな息を吐いて、喉をゼー／＼云はせながら喘いだ。

ア、振子の半月刀は、もう乳房の上三寸の近さに迫っていた。今三十往復、或いは二十往復の後、あの鋭い刃は、愈々彼女の服地を摺り始めるに違いない。

真弓の全身の神経は、電氣をかけられたやうに、無残に震盪した。又しても氣を失ひさうであった。だが、今度氣を失ったらおしまいだ。もう二度と目を醒ます折はないであらう。

さすがに乱歩先生の筆だけあって、大振子の剃刀の刃が、身動きも出来ず仰向けに縛りつけられた真弓の上に、刻々と迫ってくる緊迫した状景がよく描かれている。新青年だったかの雑誌で、この場面の挿画を見た記憶がある。猿ぐつわをされ仰向けに台の上に縛られた真弓のまわりには、十数足の不気味なネズミがかけ廻っていて、その上、一米ばかりのところを、大きなイカリのやうなものが、その先に鋭い刃をつけて左右に振っているという図であった。縛られた女の上に迫ってくる刃をつけた機械、そして配するにネズミ、全く心憎くばかりの条件設定である。その上、無駄のない文章が一層、この緊迫した雰囲気はいき／＼と描き出している。そういった点でも参考になるよい作品だ。

同じく、江戸川乱歩作「緑衣の鬼」より

これは、スピカ社の発行。

彼は矢庭にトランクに飛びついて行った。「誰です？ トランク

の中にいるのは誰です。お待ちなさい、今開けて上げますから」

彼は手早くトランクの帯革を解いた。だが鍵がない。どうしようかしらと、金具をガチガチやっていると、幸か不幸か、パチンと留金が開いた。蓋を開くのは恐ろしかった。大方は想像していても恐ろしかった。

だが、いつまでも躊躇していることは出来ない。彼は思ひ切って、ソツと蓋を持上げた。怖は怖は覗いて見ると、果して、何か変てこなものが、とぐろを巻いていた。

ふさ／＼とした髪の毛がある。白い顔がある。その顔が窮屈に折り曲げた足の、肉色のストッキングにくっついていて、手拭で猿轡がはめてある。荒い縞子縞の薄羅紗の洋服の上から、ふっくらした乳房が細引で縛られている。女だ、若い美しい女だ。

その残酷な様子を見ると、ボーイは何もかも忘れて、女をトランクの中から抱き上げてやった。そして、手早く縄を解き、猿轡をとってやった。

……中略……

白虹は眼鏡の向きを変へようとして、ふとその手を止めた。樹木の幹の間に、チラと動いたものがあるからである。

けものではない。立って歩いている、人間だ。緑色の洋服を着た人間だ。

だが、をかしいぞ、あいつが小脇に抱えている大きなものは、一体何だ。白いものが見える。オヤ、人の顔ぢやないか、乱れた黒髪。女だ、女だ、緑衣の人物は、一人の洋装の女を小脇に抱えている……。

白虹の片眼が、望遠鏡の金具にグイ／＼と喰ひ込んで行った。芳枝さんだ、ほのかに見える横顔の美しさは、もうあの人に極まっている。だが、芳枝さんはなぜもがかないのだらう。ただグツタリとなっている。ア、気を失っているのだ。気を失ったままどこも知れ

ず擢はれて行くのだ……。

曲者の行手は、案の定水族館であった。白い砂地を走って、水族館の建物の中へ姿を消したが、望遠鏡の方で先廻りをして例の番人部屋の窓のところへ焦点を合せていると、やがてその中へモヤ／＼と人の影が現はれた。

怪人物は失神した芳枝さんを床の上に横たへて、その前に立って眺めている様子であったが、暫らくすると、又ムク／＼と動き始めた。何をしているのか、彼の両手が芳枝さんの身体の上をあちこちと動くのが、おぼろに見えている。芳枝さんの上半身が真白に変色してしまった。ア、分った。あいつが上衣を脱がせたのだ、次には下半身が白くなった。

それから、今度はその白いものまでが剥ぎ取られて行く……。洋服を、下着を剥ぎ取られる毎に、芳枝さんの身体は、仰向きになり俯伏しになり、柔いおもちやのやうに、床の上を転がされた。やがて上半身が、奇怪な彫像のやうな曲線を見せて、露はになった。それから又下半身が、そして、おぼろげなレンズの視野に、ボッティエリのヴェーナスが、はれがましく横はったのであった。ふと、美女の裸像が妙な動き方をした。ア、芳枝さんは意識を取戻したのだ。叫んでいる。芳枝さんは叫んでいる。窓一杯に彼女の全身が立ち上がり、緑の手が背後から羽交締にしている。それを振りほどこうと、もがく腕、もがく脚、そして、白い顔は苦悶に引きゆがんで、精一杯に開いた口から、悲鳴がほとばしっている。

前文の方は、特にとり立てて云うべきところはない。只単に若い女がトランクの中で猿轡をされ、縛れているのをボーイが発見してその女を助け出すという場面である。後の文で面白いのは、望遠鏡で遠く離れた個所から捕われの女を眺めるといふところだ。探偵小説なんかには、よく使われる手法であるが、全裸に剥れてゆく女、

意識を回復して抵抗する女のさまがリアルに描かれている。映画でも、捕物や探偵物には、よく縛り場面が出てくるが、小説の中から、そういった場面ばかりを抜き出して、責めの効果の出ているものから、順に並べたら面白いだろうと思う。

昨年「潮書房」から『スピレーン選集』が発行された。映画「指紋なき男」の原作者と云うことで、小説の中にも素晴らしい処があるのではないかと、期待して早速買ってみたが、案外なのにながかりしてしまった。責め場らしきものが出ては来るが簡単に済ませてある。その中の一つ

「寂しい夜の出来事」

彼女は真っ裸だ。天井の梁から綱でぶら下げられており、綱は腕首に喰い込んで、白い体が、たった一つとまった電灯の光のうちにのたうっていた。ポークパイ帽の男は、彼女が自分のほうに向くまで待ち、それからありったけの力を出して綱を体にまきつけた。その綱が、心のいたむような音をたてて肉体に喰い込み、彼女は頭をもたげた。悪魔のようなこの綱にかかつては、苦痛もにぶってしまつたのであろう。

「何処にあるんだ。いわなきや殺されるぞ」

ポークパイ帽がいう。彼女は口を開けなかった。目を開けたけれど、口は開けなかった。

次に、平凡社から発行された『ルパン全集』から、第四巻「三十棺桶島」

彼女は夢中で男の腕に噛み付いた。ひるむ処をするりと抜けて素早く拳銃を取り出すと続け様に撃ち放した。二発の弾丸はヴォルスキーの耳を掠めて壁に射込まれた。

「此の尼奴」男は叫んだ。

「もう少しで殺られる処だった」

彼は再び猛獣のように躍りかかった。と思うより早く、彼女を抱き締めて、ポケットから取り出した綱で、がんぢ搦めに縛り付けた。彼はヴェロニックを縛したまま抱き起して自分の前に立たせ、顔を押し付ける様にして憎々しげに叫んだ。

……中略……

彼はヴェロニックを低い窓側に坐らせ、庭が一目で見渡せる様に顔をバルコンの横木に結びつけて、襟巻で猿轡をかました。

斯うして二三十分経った。

縄は引き千切る様に肉に喰い入り、額はバルコンの横木に傷つけられて血さへ滲み出した。二つに折られた膝は全身の重みを担って堪え難い位の痛みを感じた。

ヴェロニックの頭の中には苦悩の嵐が渦を巻いていた。

「あー、もう死ぬんだ」

と独語しながら、来世の幸福を夢みたりした。

……中略……

我が子の決闘を目の前に見る。それでも彼女にどうすることが出来るか、身には緊縛、口には猿轡、彼女は縛られながらも身ぶるいをした。ヴォルスキーは酒に酔って叫んでいるのだ。彼女は縛られた手を上げようともがきながら、猿轡の下からヴォルスキーに向かって叫んだ。

「助けて下さい、もう我慢が出来ません」

動悸が全身を振わす程激しく打出した。まるで息が止まり相に思われた。

「助けて、助けて」

ヴェロニックは、息づまるような思いで叫んだ。彼女はびったりと壁に身を寄せた。そして縛られた縄の苦しみをさえ忘れていた。

彼女の額からは血がにじみ出た。

……中略……

道が坂にかかったので、担架をかつぐのに骨が折れた。ヴォルスキーは二人の配下を助けながら辛つとの事で大樫の根本まで辿り着いた。彼等は、いけにえを載せた担架を肩からおろした。ヴォルスキーは身を屈めて、ヴェロニックの覆面を解いて覗き込んだ。眼と口は縛られた縄の為に呼吸づくのさえ苦し相に見えた。脈は弱く、殆ど聞えるか聞えぬ位だった。

間もなく用意が出来た。

ヴォルスキーは自分で梯子を架け、恐れ気もなく夫を上っていつてヴェロニックの頸を結んだ縄の一端を樫の樹から下に吊した。

「之で宜し。次は縄を引張る計りだ。一人は女を起させて、仆れなように支えているんだ。彼等は、いけにえを起して、木の幹に立てかけた。彼女の両の足首は前後に重ねて緊縛され、之れも縛られたままの両の手首はだらりと脇腰にぶら下っている。物凄姿だ。

やがて腰縄の端は樹の枝に架け渡されて、オットオとコンラッドが力を協せて引張り出した。彼女は一寸二寸と地上から離れた。

何の声も立てぬ処を見ると、全く意識を失っているのだろう。

ヴォルスキーは厳肅な面持で梯子を上って行った。彼は女の胸に手を当てて心臓の鼓動を聞こうとしたが、頭がだらりと左の胸に垂れ吊がっているので果たさなかった。不規則な弱々しい呼吸が、時々途絶えては無気味に耳に響いた。彼は物に追いかけられる様に大急ぎで梯子を下りて、ラム酒を一飲みで空にしてしまった。

樹の上からうーんと一声、唸り声が聞えた。女は苦悶して、時々蛇のように身をくねらせた。

探偵雑誌「宝石」から朝山靖一氏のものを一つ、別冊宝石二十号に載っていた「巫女」

それから私達は、二人だけで教へを説き、町から村へ、村から町へと布教の旅が始まりました。と同時に、私を愛玩の道具として徹底して遊ぶ彼一流の生活が始まったのです。彼は私を、人間として扱ひませんでした。そればかりでなく、子供が自分のオモチャを壊して面白がるやうに、私が苦しみ、身体を壊してしまふ事を楽しんでいたのでした。或時には私の身体を無視している、といふ事を私に分らせる為にだけで、私を苦しめていることさへありました。嬉しい事があるとなぐり、不愉快だと云っては突きとばし、腕をねぢ、頸を締めるといった具合でした。布教が思うやうに進まず、相手が彼の言葉に信服しない時など、そのじれったさは、必ず私のからだにぶつかって来るのでした。その暴れる音と、私の悲鳴で、泊っている宿屋中を騒がせる事も毎度でした。その時の私ですか？ 私は自分の気持を、口で応へる事をしないで、からだで受ける女でした。また、こんな事もありました。布教をして村から村へ巡りつづけるには、深い山を半日も越えてゆく事もあります。そんな時、彼は私を、後手にしぼり、その紐をくびに廻して、手が下れば頸が締まるやうにしたまま、尻や背中を牛か馬のやうに、棒切で小突き乍ら歩かせる事もありました。縛られたまま山道を登る私は、腕が抜け、るやうにしびれ、のどに紐が喰込み、息が止まるほど苦しく、その上歩き続ける疲労とで、気を失ふほどでしたが、執拗に小突かれ乍ら歩く私は、何もかも分らなくなり、その息苦しさで疲労だけが果しなく拡がり、宙に浮いているやうな幻覚に陥るのでした。

……中略……

「馬鹿な女達だなあ、口でばかり争ってないで、取組み合ひの喧嘩でもやったらどうだ。だが、そんな事ちや面白くないから、一つ俺がお前達に、どっちが辛抱強いのか、根競べをさせてやらう。先に音をあげた方が負けだ。負けたらおとなしく引下るんだ。お前達は、どうせ身体を張りたがってるんだからな、それがいいだらう」

時雄は押入から、絹のしごきを持出し、私の前に立ちました。
「着物を取れ」

夏とは云へ、甲州の夜は肌寒く、身体中が鳥肌になるのでした。私は、辺見と同列に扱はれる事に耐え難い屈辱を感じないではありませんが、彼の愛情が辺見に移っている今となつては躊躇してはいられませんでした。彼は私の足を曲げ、腕を折り、運送屋が荷物を仕上げるやうに、一縄ごとに力を入れて結んでゆきました。

次は、総てを観念し、眼を閉じている辺見の番です。丁度、江戸時代の拷問図にある海老責のやうに、忽ち彼は辺見を縛り上げてしまいました。一つの肉塊のやうに丸めあげられた辺見は、苦しうな呻き声を絶えずあげていました。それは人間の肉体の耐久力を試そうとすることでした。しかし何と馬鹿げた競技でせう。勝負は始めから決っているやうなものです。恐らく私の方が先に氣を失ふにちがいありません。時雄は勝たしたい方の縄目を加減したに相違ないので、私を見る彼の眼は皮肉そのものでした。私は、彼のわなに陥ちた事を、はつきり知りました。

口許に笑ひを浮べ乍ら、しばらく私達の苦しむさまを楽しんでいた時雄は、飽きたのかやがて布団をかぶって寝てしまひました。

それは苦しい時間でした。私は、荷物のやうに一つの塊になつたからだを動かして、時雄の枕許に近よって行きました。

「あなた、あなた」

睡さうな眼を薄く開けて、時雄は顔を向けました。

「少し変ですよ、見てごらんなさい」

布団を跳ねのけて、時雄は辺見の処へ行きました。急いで紐をほどき、その上に股がつて、力なく延びている両腕を、前後に動かし始めました。私は、自分の苦しみを忘れ、歓びの血潮が、からだ中に湧き上るのを感じました。拷問に等しい苦痛を受け乍ら、私は勝利感に酔っていたのです。

「私を愛玩の道具として徹底して遊ぶ」 彼は私を人間として扱ひませんでした。これらの語句からして、この男はサディストのようだし、あの方の「拷問に等しい苦痛を受けながら、私は勝利感に酔っていたのです」の文章は、明らかに、この女のマゾ性を物語っている。そして、自分の氣持を口で応える事をしないで、からだで受ける女を後手に縛り、尻や背を棒切で小突き乍ら、山道を歩いてゆく男。この二人の道行きを想像するとき、そこには激しいアブノーマルの火花が散るやうだ。然し、ここに紹介した文章の範圍では、我々に強く迫るものが稀薄なのは、筆者に、そういう體驗がないためかもしれない。

最後に横溝正史先生の作品で 講談社の発行による「幽霊男」より

カーテンをひき裂くやうに開いたが、はたしてそこに加納博士が、がんにがらめにしぼられたうえ、猿ぐつわまではめられて、丸太のやうにころがっている。

「おお、三ぶ」

抱きつこうとする絹子の髪を、うしろからつかんでひき倒すと、
「あま」

と、憎々しげに叫んだ菊池陽介は、まるで氣でも狂つたやうに、絹子の肌につけているものを、ズタズタにひきさき、ほとんど彼女を裸にすると、あらあらしく、壁にかかった馬鞭をとりあげた。

「やい、みる、爺い、おいぼれ、色男、この女はな、おれの嬢あだつたんだぜ。おれはこいつをさんざん可愛がつてやったもんだ。ところがこのあま、おれの可愛がりかたが氣にくわぬと、うちをとび出して、てめえとくつきあがつたんだ。あつはつは、おれの可愛がりかたか、おれの可愛がりかたというのはな、こんなふうにする

んだ」

ぴしりとはげしく馬鞭が鳴って、絹子の肌に、さっと痛々しいみみずばれが走る。髪を毛をひつつかまれた絹子は、逃げることもできないうで、ひいイと鋭い悲鳴をあげる。

「やい、あま、絹子、もっと泣け、もっと声をあげて苦しなれ。てめえが悲鳴をあげればあげるほど、俺の体はよろこびにふるえるんだ。快感にみうちが、うずくんだ」

それはもう人間の所業とは思えなかった。振りおろす馬鞭の下で、絹子の白い肉体が、苦痛にもだえ、のたうちまわれまわるほど、菊池陽介の歪んだ顔には、悪魔のよろこびがもえあがる。やつぎばやに降ってくる鞭の下に、絹子の桑肌はやぶれ、肉は裂け、むごたらしく血が走る。

絹子は呼吸もたえだえになりながら、しかし、苦痛をこらえて、ほとんど声を立てなかった。悲鳴をあげることによって、いっそう相手を兇暴にすることを恐れたのか、それともほかに理由があるのか。

ひとしきり兇暴な鞭をふるっていた陽介は、やがて全身に汗をかくと、がらりと鞭を投げ出して、ふかぶかとアーム・チェヤーに腰をおとした。それから、そばの卓上にある洋酒の瓶とグラスを取りあげると、強い酒を二、三杯、立てつづけに飲みほして……。

陽介はそこでよろよろと立ちあがると、グラスになみなみと酒をついで、絹子のそばへ近寄っていった。

「おい、絹子、これを飲めよ、気つけ薬だ」

絹子は床につぶして、苦しそうな呻き声をあげながら、弱々しく首を左右にふる。

「おい、飲めったら飲まないか、これからがいよいよ本式じゃないか。あの爺さんにさんざん見せつけてくやしがるんだ。おい、絹子、飲めたら飲め」

絹子を仰むけに押し倒すと、陽介はその上に馬乗りになり、鼻をつまんでその口に、強い酒をそそこんだ。絹子は強い酒にむせんで、呼吸もたえだえに咳きこんでいる。

陽介は血走った眼でにやにやそれを見ながら、絹子の肌から最後の一枚をはぎとろうとした。

以上、ここに挙げたものは、どれも取上げて目新しいものではないし、この程度のものであったら、他の探偵小説にもあるかもしれない。然し、自分の意図としては、縛っている、とか、責めているといった場面を挙げるだけでなく、或る程度、「責め」の雰囲気を出しているものを拾い出したつもりである。尚、文章は自分のノートでは、もっと長文の抜き書きをしてあったが、著作権の侵害を恐れて、大幅に削った。御熱心な方々は、原文によって、詳細を承知されたい。

今回は普通の雑誌から探し出して紹介することにしよう。

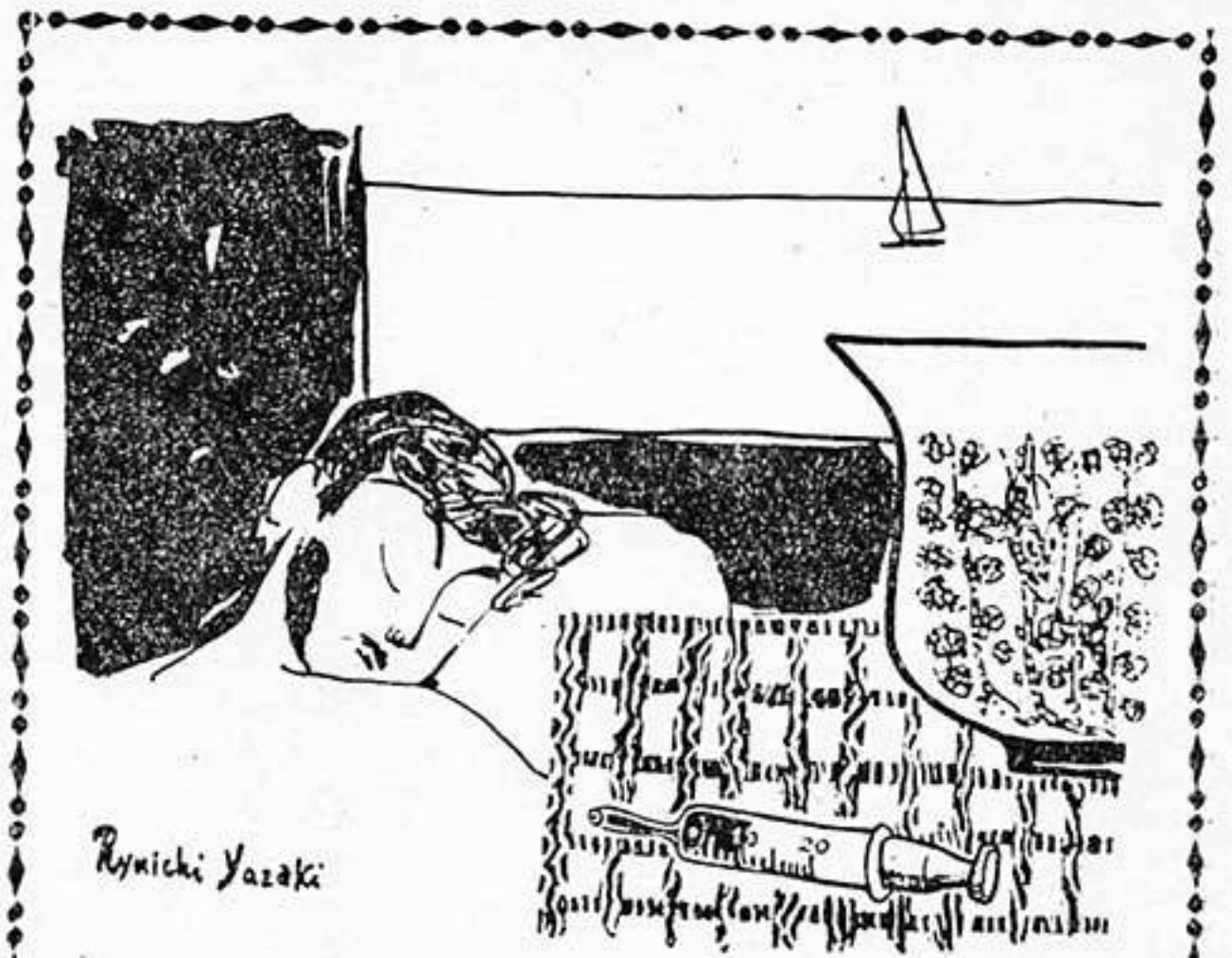
アイデア（緊縛写真）

△分譲写真として▽

分譲用の女体緊縛写真の服装について、小生の着想を提案いたします。従来は全裸の一条もまとわざるものが殆どで、中には腰巻、ズロース、パンティ、バタフライ等を着用したものも間々ありましたが、小生のここに提案しますのは、スポーツの

選手がパンツの下にはく禪式のサポーターをモデル嬢に穿かせては如何かということ。これは大部分ゴム帯で出来ていて緊縛感も十分出るものと思えます。このサポーターの上に縄目をかけるのも一法と考えます。ぴったりと身体の線のよく出るのが特徴です。

（鳥取莊吉）



灰色のノート

II

—ある浣腸マニアの日記—

矢崎 竜一

III

△脈々として此の秘密灌頂は人間の性的な慾望の存する限り相承されたと解釈されるのではあるまいか▽

(今 東光「稚児」)

七月二十二日

広々とした畑があらわれると、松林がそれ

に続く。また畑になる。薄墨色の日暮れの空にサーチライトのような平和塔の灯がまわっているなつかしいA島の姿が、松林の上に大きく見えてきた。T駅を過ぎる。電車は長い鉄橋の上から遠い海をちら／＼眺めさせていたが、再び畑と松林の雑風景な景色の中に入ってしまう。××に着く。

むうんとする汗臭い車中の人をかきわけて降りる。暗くなったホームの夜風が涼しかった。改札口にTが迎えに来ていた。

「すごく電車混んでやがったじゃあねえか、Cher ami。」

Tは俺のポストン・バッグを受け取ると、待たせておいたタクシーの中にほうり込む。「さあ行こう。俺ん家へ着いたらすぐ風呂に入れよ」

入浴後、Tの家の人たちとビールを飲みながら雑談にふける。明るいシヤンデリアの下で女性について語る朗らかなTに驚ろかされ

る。Tの肩にもたれながら、久しぶりに聞く潮騒の音に俺の心は浮き立っていた。

.....
もちろん或る倒錯者たちの生活は時に
変るように見えることがある、彼等の悪
癖（いわゆる）はもはや彼等の習慣には
あらわれなくなる、併し何ものもすつか
り失なわれることはない。隠された宝石
は再び出て来るものなのだ（ブルースト）

七月二十三日

頭上に輝く真夏の太陽。

広い海を沖へ／＼と、穏かな波のうねりに
乗って泳いでいると、あらゆるものから解放
されて行くような気分になる。

「俺たち、こうしてアメリカまで行ってみな
い？」

「ばか言え、鱈にくわれちまわあ」

Tは青い海の中で白い歯を見せて笑った。
夕暮れの浜から帰る。Tはすぐに浴室をの
ぞきに行く。

浴場の冷たいタイルの床に仰けになって俺
は手脚を伸ばしてみる。湯上りの熱い体がし
ずかに冷えてくるのが気持ちいい。

「おい、龍ちゃん、ここで流腸してやろう！
いいだろう？」

「うん」

Tは湯船から立ち上った。

Tにうながされて白いタイルの上で四つん
這いになる。

「トイレすんだらもう一風呂浴びて二階へこ
いよ。ウイスキーを用意しておくぜ」

潮騒の音が高く耳につく。

今まで俺の首すじを撫でていたTの指の動
きがぴたと止る。

「きみって、案外、素直なところがあるんだ
なあ……」

「なんで？」

Tは無言でにやっと笑う。Tの腕が俺の背
中に廻る。彼の厚い裸の胸の上に、俺の体は
ぐいと引き寄せられた。彼の目が急に大きく
雲りガラスのように拡がると、熱い息が俺の
顔を覆った。……Tの手が下に延びる、ごつ
／＼とした強靱な筋肉がからみつく。もがい
ている俺の両脚はじっとりと汗ばんできて、
いたずらに爪先で小波をかき立てるだけだっ
た。思わぬ熱いものの一戦にあって、俺の体

は浮かされると、もんどり打って海中に沈ん
で行った……。俺はTのヘア・ローションの
清々しい香の中にじっと顔をうづめたまま、
激しく息づいた。

七月二十四日

午後の海で泳ぐ。

まっ赤な西の空に、富士がくつきりと黒く
見える。金色に縁どられた鼠色の雲が静かに
流れていた。

アロハの袖に手をとおしながらTが言う。

「もう天門寺の和尚が帰ってるかもしれんか
ら、明日行ってみないか」

「なにしに？」

「いつか龍ちゃんの言ってた本が来てると思
うんだ。それを借りにさ」

七月二十五日

蟬時雨につつまれた松山の急な石段を登り
きった処で、天門寺の古びた山門のある広場
に出た。

「やれ／＼」

と、二人は陽焼けして真赤になった顔を見

合せた。汗を拭きながら暗い庫裏に入る。

目元にすすしい微笑を浮べた小柄な奥さんが、丁度よろしかったわ、きのう帰りはりましたの、とTに答えながら、われ／＼を書院に案内する。机に向って書きものをしていた赤ら顔の大きな僧が「やあ、おいで」と挨拶を返えた。

「お静、すまんが酒つけて呉れんかの」

と僧は奥さんに言う。

海風のよく通る書院の座敷から紺碧の海が望まれた。

「お前たち、この御本を讀んで、どないする積りや？」

僧はTと俺の盃に酒を注ぎながら尋ねる。

「お前たちが讀みおったら、つまらん事ばかりよう覚えて困るわな。はっはっは」

と体をゆすって笑っていたが、僧の目がきらりと光る。そして謹厳な顔附になると妙に底力のある声で静かに説教をはじめた。

「T、おまえは近頃けつたいな場所へよう出入りして、男の子泣かしよるそうじやないか？ いや、誤魔化しても駄目だ。わしの睨みに狂いはない！ 例えだ、いまお前がいくら否定してみおった処で、わしはおまえの目を一

見すれば、これはなん（男）色にふけつとる者の目やということが、ちゃんと分るのじや。君もそうだろう。お前らは全く困った奴らじやのう。

二人とももう大学なんぞ止してしまえ！ 頭丸めてもうて横川の谷にぶち込んで置いて四、五年みっちり修業させたるか。その間だけでも日本は救われるさかいにな。どうじやT、お前のお父っ様にくわしうお前の悪業をお話し申し上げて、叡山で修業してもらおうぞ」

「俺、そんなのいやだよ。和尚さん」

「駄目じや。おまえのような不良は、徹底的に人間改造の要がある」

「いやだっていったら俺いやだよ。和尚さんて全く人権蹂躪だ。俺の人格を認めようとしてないんだもの。ねえ、龍ちゃん、俺たちそんなに悪いことしてない積りだなあ」

「何をいうか、あはたれめが！ 今の若いもんはヤンキーかぶれして、やれ人権だ人格だと、やたら下らんことぬかしおる……。だがじやT、冗談はさておいてもな、狭い町やによつて怪しい噂はすぐ拡まるさかいに、品行をようせにやあかんぜ。何時までも男の子の尻ばかり追つとらんで、真面目に勉強せい。

ええか。今からけつたいな乱費ばかり続けておると、これから人生に花を咲かせようとする時分にはすっかり廃人になっちまうぞ。そちらの君もそうじや、はっはっは……。そう固くならんで、まあ飲め」

俺たちは僧の語る彼の学生時代の愉快な話と奥さんの手作りのさかなに、般若湯に強か酔った。暇をつげて寺を出た時は、全山寂として暗く、点々と石段を照らす街灯の光が目先にちらついて、くる／＼と廻って見えた。

Tとねる。

七月二十六日

目を覚めたときには、俺の傍にTは居なかった。

「十時だぜ、起きろよ」

濃緑色のサン・グラスをかけたTが襖から顔をのぞかせて言う。

「俺、これからちよつとママたちとおやじの処へ行つて来るから……」

「叡山御修業の一件でかい？」

「よせやい、馬鹿な。ママの買物のお供さ。

ついでに俺のお小遣のおねだりにね。晩にはスコッチを仕入れてくるから、うちの子と海へ行って遊んでくるなり昨日の本を読むなりしていて呉れ」それからねええ……と低い声で、龍ちゃんの浣腸をうちの子に云いつけといたからな。「では、行って参りまーす」

Tは階段をかけ降りていった。

間もなく車の排気音がきこえて、彼の母と妹を乗せて東京へ向うTの運転する車が、女中たちとボーイに見送られて本邸の門を出て行くのが見えた。

俺は窓を開け離すと、部屋の中に涼しい海風を入れて、また横になった。

「おにいさん、まだ寝てるの?」

心ちよい涼風に吹かれながら、俺は再び寝入ってしまったものらしい。

「おひる過ぎちやったよ」

揉上のあたりから頬にかけてほんのりと赤みをおびた、目の大きいT好みの美少年^{ボーイ}が俺を見おろしていた。目が会うと少年のあどけない口元が彼らしくほころんできた。

「僕ねえ、ジュニアからおにいさんに浣腸^{トイレ}して上げるようお願いつけられてるんです。おにいさん、すぐ浣腸してさっぱりしませんか?

それとも朝ごはんにする? 僕どっちでもいいけど……。おにいさんの好きなようにして」

そう言う彼の両手に、薄クリーム色のゴム手袋がはめられているのに俺は苦笑した。どっちだっていいよ。俺はTの少年を無性に愛撫したかった。俺はタックルするようにして彼の両足をつかまえた、不意を喰らった少年はよろけて、俺の脇腹の上にどさっと倒れた。

「にいさんの意地悪!」

おこつて真赤になつてゐるこの美少年を、俺はしっかり抱擁した。……ぐったりと、おとなしくなつた少年の閉じた瞼の下から口元に伝わつて流れた涙のあとが光っているのが俺にはなにか痛々しく感じられた。

女中の給仕で朝食兼中食のようなややこしい食事をすませると、俺は海に見える廊下に机を持ち出して、昨夜寺から借りて来た紫の袱紗包をあけた。僧が好意のつもりでか、あるいは質問を封じるためにか金地に蓮花と梵字を配した今東光の「稚児」が同包してあった。俺は「稚児」を手引きに「児灌頂私」を読みはじめる。

サレバ児^{ちこ}ノ此ノ相伝ハ天竺具山ニテハ金毘

羅神ヨリ尺迦如来ニ伝へ、唐土ニテハ天台大

師神僧胡僧ヨリ御相伝アリ、日本ニテハ伝教

大師山王ヨリ之ヲ伝へ給フ。三国ノ相承ノ様

此ノ如シ。是レ極ク大祕事也。是ハ慈恵大

師マデ口伝ナリ。恵心^{えしん}(^註恵心僧都源心。平安末期の天台派の僧)先徳

ノ末代ノ為ニ加様ニ注シ給フ也。祕ス可シ、

く。児モ僧モ是ヲ本ト為シテ振舞ウ可シ。

穴賢^{あなかしこ}、々々。千金莫伝可レ祕、々々。児ナリ

トイヘドモ是ヲ見スベカラズ。以テ只授ク可

シ。教ヘハ只相承一人有ル可シ。自門^(註天)

他門ニ可レ祕、々々。此ノ事肝心也。

一、尻ニ於テ多クノ異名在リトイヘド先ツ三

種ノ名有也。一ニ若氣、二ニ能^{ほつしやう}、三ニ法性ノ

花、此ノ三也。一ノ若氣トハ氣ノ若シトヨム

也。氣□□□(不明)男女和合ノ道ヲ氣ト名

ヅク、其ノ如キヨリ若氣ト云フ也。次ニ能

トハアタウルノ義也。仏ノ大慈大悲ヲ一切

衆生ニアタウル心也。サテ能ト名ヅクル也。

次ニ法性ノ花トハ、法性トハ本有具足ノ八葉

ノ蓮花也。此ノ蓮華ハ煩惱ノ炎ヲ消ス。故ニ

此ノ蓮花ハ開ク也。故ニ法性ノ花ト云フ也。

意得ベシ、々々。

一、僧ノ児ヲ用フベキ様ノ事

先ツ小童ヲ能クく教フ可シ。先ツ振舞ヲ

教ヘ、次ニ心遣ヒヲ教フ可シ。児ニ様有リ。

大取(武家)ノ児ト山寺ノ児ノカワリメ有リ。
大取ノ児ハミメ形ヲ以テ本ト為シ、山寺ノ児ハ心遣ヲ以テ本ト為シ、ミメ形ヲ次ニ為ス也。能ク〳〵教フ可キ也。小人ヲバ何ノ内ニテ能ク〳〵教フ可シ。人ノ有ル取ニテシカル事ハ見苦シキ事也。……(弘児聖教秘伝)

美しい現代語に翻案された花若丸と阿闍梨蓮秀との悲憐の「稚児」物語にあわせて、児灌頂から聖教の秘伝へと、女人禁制の中世天台の寺院の僧侶の間に秘められつつ密かに相承された稚児愛撫の不思議な方法に興味をひかれて頁を繰っていたが、充字や略字の多い、その上不可解な仏教の文句の続出に困惑させられた。俺はこの難解な漢文を読み続け、てゆくのがいやになって来た。Tの少年を呼んで浣腸をさせてから、彼と連れ立って海へ行く。

夜になって雨がはげしくなる。十一時を過ぎた頃Tから電話がくる。今、東京駅にいる。うん、こっちもすげえ雨だ。車が故障しちゃったんで俺、ママたちを送ってからおやじの処へ留ることにする。妹にジョニ・レイじやあねえ、ウオーカー持たせるから飲でくれ。じやあ明日まで。オサラバ、サラバ。

児灌頂ノノート

第一章 うそも方便・稚児は観音(の再来)であること

本座ヨリ阿闍梨下リ居リ高座ニ児ヲ置ク可シ。サテ阿闍梨中瓶ヲ加持シテ(印明ヲ)授ク可シ。印明ハ口伝。在別紙サテ授ケテ後ニ阿闍梨読ム可シ。誦ニ曰ク、口伝。

シ。其ノ後又教化為可シ。

三反誦ス可

汝今日自リ已後ハ本名の下ニ丸トイフ字ヲ加ヘテ某丸ト称ス可シ。此ノ灌頂ハ是レ観音ノ大慈大悲ノ汀(註灌頂ト同ジ)也。汝但慈悲在リテ一切衆生ヲ度セヨ。若シ慈悲心無クバ十方ノ三世諸仏、殊ニハ観音菩薩、別シテハ山王大師ノ御罰ヲ蒙ル可キ者也。汝ノ身ハ深位ノ薩埵、往古ノ如来也。故ニ此ノ界ニ来テ一切衆生ヲ度ス。汝ノ心月輪ノ中ニ本有具足ノ阿字有リ。今此ノ灌頂ヲ授ケタ時阿字出デテ当ニ汝ハ観世音菩薩ト成ル也。只観音ハ慈悲ヲ以テ観音ト為ス也。唯願ハクハ汝慈悲有リテ一切衆生ヲ教ヘヨ。(児灌頂)

漢ノ明帝ノ御時、芳祖仙人幼童ノ御時、是ノ御帝ノ御恩愛有也。彼ノ幼童朝恩ニホコリ

御帝ノ御枕ヲバ越シ、時ノ公卿、天上人之沙汰ニヨリ流罪ヲ被ル。時ニ帝王御悲ミアリテ此ノ普門品ノ相承ヲ授ケ給ヘリ。ソレヨリ天下ニ弘ル也。彼ノ帝王御恩愛シ男犯起ル也。彼ノ芳祖仙人モ本地観音也。是又慈悲ヲ以テ来リ給也。又此ノ灌頂ヲ相承シ給ヒシ慈覺大師モ救世観音ノ再来也。其ノ後天下ニ弘メ給ヒシ慈惠大師モ十一面観音ノ再来也。末代ノ児ニ成ル童男ハ皆観音ノ再来也。故ニ經文ニ云フ「十方諸国土無刹不現身」ト。此ノ文ノ意ハ一切衆生ヲ現シテ利益シ給フ故也。又云フ若シ衆生多ク淫欲有ラバ常ニ念ジ、恭シク観世音菩薩ヲ敬ヘバ、便ヲ得テ離欲スト。

(児灌頂)

灌頂ノ時ノ觀念観法ハ儀軌ニ有リトイヘドモ、児ト観音トハ全ク一昧ト観ル可シ。祕ス可シ、祕ス可シ。口伝之在リ。

(弘児聖教秘伝)

さて、「児灌頂私」は現在、叡山文庫(註一)に秘蔵される天海蔵書(註二)のなかで、最も特異な写本であろう。この半紙判(四六版)四八葉の一本には「先づ道場莊嚴ノ事」に始まる稚児灌頂儀軌の方法を詳述した一卷と弘児聖教秘伝私一卷とがおさめられている。

この写本は奥付によれば、足利時代に写されたもので、その原本（現存していない）は少くとも鎌倉初期に在ったものと推察される

（註三） 仏教における稚児崇拜の思想はキリスト教の聖母崇拜のそれに似ているとも云われるが、前者は後者程の普遍性を持つものではない。しかし、飛鳥、白鳳、天平を通じて表現された仏像の顔——俗人に最も喜ばれる東大寺の大仏にその典型を見るのだが——に、われ／＼は美少年の面影を認めざるを得まい。

灌頂はキリスト教におけるバプテスマではない。結縁^{けちえん}、伝法の莊重な儀式である。ただ児灌頂においては、僧児に灌頂して、児を崇うのである。弘児聖教秘伝にはこのような児灌頂儀軌の内容（精神的な）について語り、次いで稚児の教育（僧ノ児ヲ用フ可キ様ノ事）について触れ、次に児灌頂房中作法（陰取ノ作法）と契結の指取十指の儀が秘めやかに解かれるのである。そして最も興味をひくのが、同性「陰取（閨房）ノ作法」であることは言うまでもない。

（未完）

（註一） 叡山文庫は大正十年、伝教大師生誕一千百年を記念して、比叡山の各寺院の

御倉に伝存した典籍類の一切を納めるために山下阪本の里坊と叡山学園のほど近くに創設された図書館である。

（註二） 慈眼大師天海大僧正の收拾した書物。蔵書は日光輪王寺と叡山文庫とに納められているが、彼の收拾したおびただしい教典、古写本の類は価値高い貴重なもので、仏典研究家にはかけがえのない資料とされているという。天海は徳川家庫に信任の厚

フエチシズム詩集より

並原 新一

ふみつけたもの

雨の夜、くらがりで、私は ふみつけた何か白い やわらかな かたまり

誰がおとしていったのか その真新しいズロース

道のどろんこに いたいたしく汚れて

風呂帰りの娘？

ある主婦の買物かごから？

それとも ある少年のいたずらか？

かった天台の僧で、三代將軍家光の時代に上野に地を賜り、東照宮および寛永寺を興した。政治家として優れていたが他方学僧としても秀いでいた。

（註三） 御本云 宝徳二天庚午十月十五日於上野州新田庄世良田普門寺談所書写本 金資円盛 二十七才 縛日羅澄弁。大永四年甲申卯月下旬於奥州会津羽黒山 □□□……御本全書写□□円憲。

私は足先で 道の真中にきちんとひろげる
そして その上をわざと泥ぐつでふんできた。

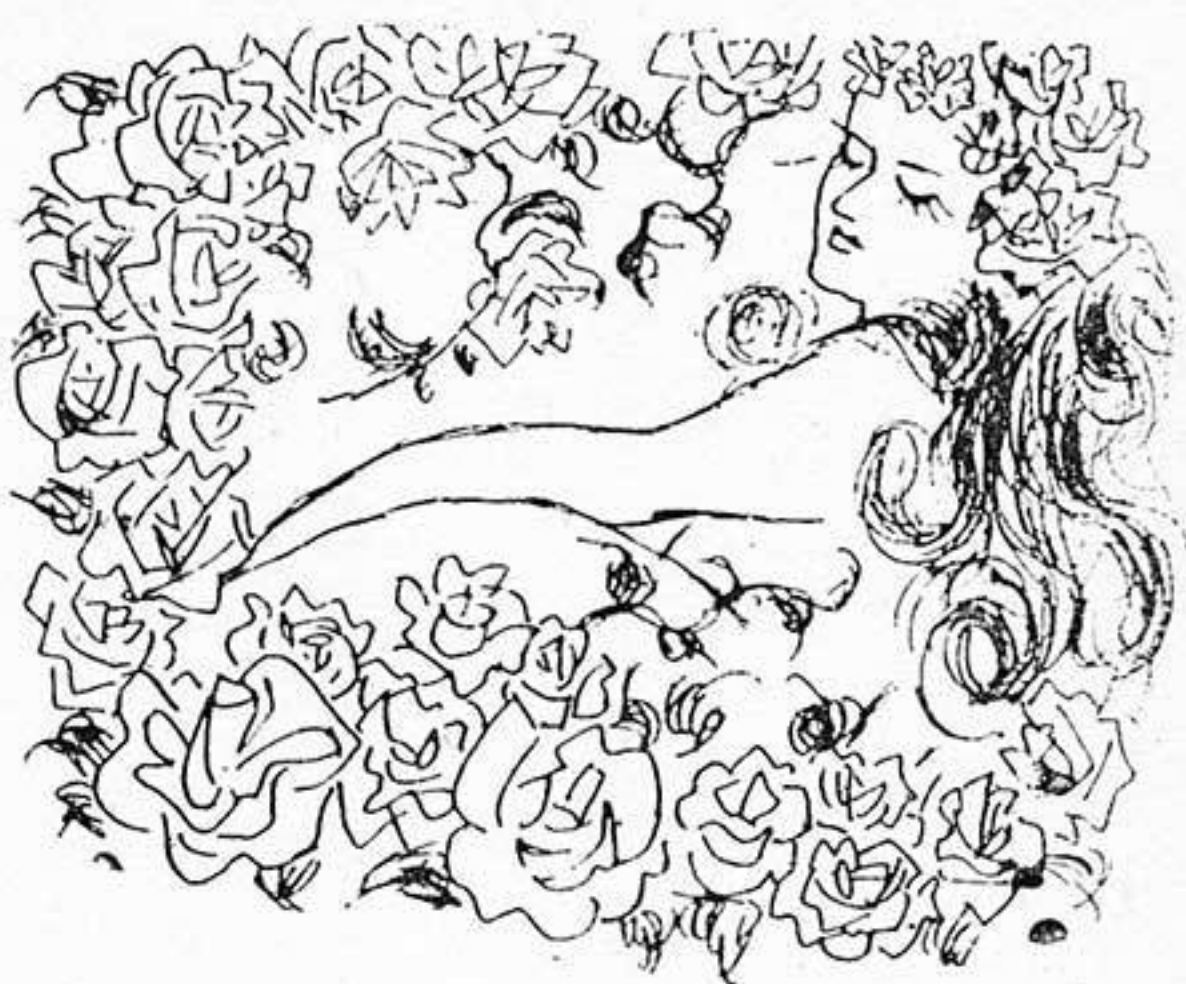
電車の窓から

毎朝 電車から みかける家
赤い屋根 広い芝生の文化住宅
若い女の姿がみえる

毎朝 電車から私はのぞきこむ
芝生の上の物干竿の赤白黄黒青
花が咲いたように ゆれているもの

毎朝 電車から 私はかぞえる
その女の下穿きの数を

（たしかに 十枚だ いや二十枚だ）
ある日 大きなおむつカバーがぬれていた



おむつカバー と私

原 由 貴 子

『お恥しい事です、一人娘が年頃になって
も夜尿症が治らず困っております。色々手をつくして治療して見ましたが、その当座はよくても少したつとまた失敗をいたします。高校三年になりますので、今春修学旅行に行く事になっているのですが、学校生活の最後の機会です、娘一人だけが病気で行けぬのも可哀そうなので何とか皆と一緒にいかしてやりたいと思います、夜寝る前におむつをあてさせ

ることにいたしました。

人一倍、羞しがりの年の頃の女学生です、で、そつとわからぬ様にと思いますが、赤チャン用のおむつカバーでは小さすぎて駄目です、生理バンドでも間に合いません、で、費用はいくらかかっててもよいから特別におむつカバーを作ってやりたいのですが、どこに注文したらよろしいでしょうか。
ズロースの下にあてさせるので、なるべく

薄い生地で内側にゴムを張って、生理バンドの様にピッタリしすぎず、あてたおむつがずれない程度で、裾に少し余裕のある位に、パンティー型とズロース型の中間位にして、お便所の中でそつと取り換えるのに便利な様、普通の赤チャン用おむつカバー式に前開きで作っていただきたいのですが。

悩める女学生の母

ある著名な婦人雑誌の「身の上相談」欄にこんな投書が載っていました。回答は、
「大変お困りの様で、同情いたします。お気の毒です、特に、おむつカバーの某メーカーに交渉してさし上げましたところ、幸い引受けてくれるとの事です、御紹介いたしますから、御住所と御名前を御連絡下さい」としてありました。

何気なく頁を繰っていた私の目に入ったこの文に恥しさを覚え、思わずあわてて眼をそらし、本を閉じてしまいました。

(でも、あたしには関係ないことだわ……)

私は会社重役の一人娘で、ある私立の女子高校に通っている十七才の女学生でした。パパは旅行が多く留守勝ちで、ママは本当のママでないの、私に対して意地悪でした。ママは病身だからといって、看護婦さんが一人ついていた。

或る日、私は学校から帰るとすぐママに呼

ばれ、寝室へ入りました。すると、ママの横に、何か手に持って看護婦さんが立っていました。

「由貴ちゃん。セーラー服のままでもいいから横におなりなさい」

ママがさり気なくいいしますので、何だかわからなかったけれども私はいわれた通りベッドの上に横たわりますと、看護婦さんは、「お母さまのおいっつけです。今日から貴女は、これをいつでもあてていなければなりませんよ」

と云って、持っているものを手でひろげて私に見せました。

一目それを見て、私は、はっと息がつまり差しさで真赧になりました。それは、華やかな模様の生地に黄色い上質の薄ゴムを張ったおむつかヴァーでした。

「自分では脱げない様に出来ていますから、私が毎日おむつを取り換えてあげましょう」

と看護婦さんが云うとママも、

「どう？奇麗で可愛らしくって、嬉しいですよ。勿論、赤チャン用のより大きいおむつかヴァーなのよ。丁度いいはずだわ。貴女の為に注文して特別に作ってもらったのだから」と云います。

（あら、嫌だわ……）私は胸が一杯で声も出ず、思わず身を浮かせると、ママは私を動けない様にベッドの上に押さえつけました。

「……なぜなの？……あたし、おしっこもらさないのに、どうしておむつかヴァーあてられるの？」

息をはずませ、やっとの思いでそう聞きますと、ママは意地悪い微笑を浮かべ、

「あなた、又、……でしょ。その罰よ、悪い子ね。変な悪い癖つくじやないの。こうすればもう自分で……から、したくても出来ないわ。おとなしくしてなきや駄目よ。さ、両足をひろげてお尻をあげて……」

と云ってふり返り、

「さ、早く」

と看護婦さんをうながしました。私が（あつ）と思うまもなくスカートの裾はさつとまくられ、穿いていたズロースは膝の下まで脱がされると、股間に折り重ねたガーゼがあてられ、ふくよかなお尻からそのおむつかヴァーで手早くお腹の下まですっかり包まれてしましました。そして、ぶるぶるふるえている私の太腿をゴムのひだがピッチリしめつけ、看護婦さんがホックをはめると私はもう無我夢中でした。私のあてられたおむつかヴァーは、ピソクの薄いナイロンが、丁度真白なシュミーズの真中に咲いた大きな美しい花卉の模様でした。

でも、私は羞しくてならず、涙をぼろぼろこぼしながらベッドの上で身をもたえる度に腰のあたりでゴムがキュッキュッと音を立て

ました。

私は、初めのうち羞しくて嫌でたまらなかったのが、日がたつにつれ、看護婦さんにおむつを取り換えてもらうのが楽しく待ち遠しくなり、その時、ホックをはずして前を開け、私のおむつかヴァーの中へ手を入れて、そつと、指で上手に……ますので、肌にやわらかくあたるゴムの感触が快くなって来ました。お風呂から出る時など、看護婦さんはおむつかヴァーをひろげむれない様に天花粉をかけて、あてる用意をちゃんとしておいてくれるのです。

スカートの下、私の穿いているズロースの内側には、人に云えない甘い羞しい秘密がかくれているのを誰にも気づかれずにすぎました。でも、近所の人は（赤チャンもいないのに、時々おむつかヴァーが干してある）と、変に思っていたかも知れません。これが私のおむつかヴァーが大好きになった動機です。もう、セーラー服とお別れしてしばらくですが、ママと看護婦さんにおむつかヴァーを無理矢理にあてられた初めての時の気持ちを今でも忘れられません。初めはただ羞しく悲しかったママの意地悪に、今は感謝しています。

もう許してくれましたし、ママのおむつかヴァーにもあいてしまいましたが、いつか、どこかの百貨店で「おむつかヴァー展覧会」

「あて方実演即売会」というのがあって、そこで「特製品もございます。モデルになって下さった女学生の方に、特製女学生用ブローズ型おむつカヴァーを差し上げます」としてあったら……そして私は、丁度修学旅行で来

ている大勢の女学生の目の前で、デパートの美しい女店員さんの手でスカートをまくられブローズを脱がされて、可愛らしいおむつカヴァーをあててもらおう事が出来たなら……などと夢んでいます。見ている中にも、きつと赧

い顔をする人がいるのではないでしようか。
(附記)
「身の上相談」はママが書いたのかどうかわかりませんし、うる覚えです。この通りではなかったかも知れません。

「諺のもつイメージ」

吉 野

裕

本誌愛読者にとって、空想の世界は、涯しなく、愉しいものだと思う。

そっと、臉をとじて、想像の世界に遊ぶ時、ふと、奇想天外な思いつきに出会うのは、誰方も、体験ずみのことと思う。

吾々が、日頃、何気なく使っている言葉の中に、奇クに相応しい空想が、浮びあがってくるものがあるのは、筆者ばかりではなからうと思うので、今日は、日常、遣い古されている。

「故事、諺、譬」などの中から、その言葉の

もつイメージを描いてみよう。

(博識な、諸兄姉に引用した言葉の、本来の意味を説くのは、愚の骨頂と存じ、早速、本題に入らせて頂く)

「習性となる」

閑居の深夜。毎夜のように戸外に洩れる、喜悅の悲鳴と鞭の響き。打つ者と、打たれる者の斗いは、日毎に、その激しさを加えてゆく。サジの夫、マゾの妻の悦樂の日々。――

「手も足も出ない」

誘拐されてから、責めの連続。
明日は、異国に売られてゆく身か。袋詰めになされ天井から吊るされた娘。かろうじて、首だけは、出ているが、頬に喰い込んだ猿轡が痛々しい。女体密輸の一齣。――

「弱い目に祟り目」

細く、か弱い手首は、荒縄で、キリ／＼と後手に縛られ、着物の前を、はだけられ、トキ色の腰の物が、ひろげられてゆく。
「いや、いや、後生ですから、それだけは、堪忍して……」

そう叫ぶ口を、ふさがないのは、娘の哀訴をゆっくり、楽しもうという魂胆なのだ。男の眼、言葉で、散々罵れた娘は、汚辱に打慄え、キュツと軀が引締まるのを感じた時。

――思わず、ハツとした。突然、生理的現象をきたしたのだ。よりによって、こんな窮地に、尿意を催すとは。アー／＼。苦しい。娘の肌は、怒りと恥かしさに紅潮していった。

“習い性となる”



“七転び八起き”

雪のように白い肌の女が、半裸にされて、海老責め縛りにされたまま、鞭を通れて、部屋中をドタリ／＼と転げ廻る。

布切れを口に押込まれ、猿轡を噛まされて、るので、声をたてることもならず、ピシリ、ピシリと打たれるたびに、逆とんぼに転が

る。転っては、又起る。

こつてりと、脂肪の乗った、年増女の、あられもない姿。――

“酒の爛は人肌”

往生柱に、全裸にむかれて、縛りつけられた腰元。好色な大名に、魅入られた悲しい運

命。羞恥責め、擦り責めを繰返しつつ、その柔肌で、温められた酒を、満足気に酌むのは、この世の極楽。二本目の銚子が用意され、ふたたび、それが……。さて、お爛のつくまで、もう一責めと、殿様の手には、牡丹刷毛が、つままれた。――

“一難去つて又一難”

川柳に、「猿轡、助けた男に口説かれる」というのがある。ほっとしたのも束の間。助けてくれた男も狼とは。数々弄ばれ、花の蕾を散らされる。

“隠すより現わる”

長襦袢一枚の後手、猿轡。露わにされた太股を隠そうと、跪けば跪くほど、胸がはだけ、裾が乱れて、肌がこぼれる。それが行燈の灯に映えて、一層男の好き心をそそる。

縛められた女の、空しいあがき。――

“牛の歩みの如し”

手枷、足枷、首にも枷。鞭の音に追われながら、処刑場へひかれてゆく、処女の群れ。感情教育の一場面か。

“毒食わば皿まで”

扱帯で、後手に縛りあげられ、柱につながれている娘。十八、九であろうか、髭のつま

った桃割れに、紅い鹿の子が可憐だ。白い胸に乳房が、フックラと盛り上って、汚れを知らぬ肌が、かすかに、戦っている姿は、絵草紙そのまま。――

姉娘を今、犯したばかりの、強盗は、この妹娘にも、脂ぎった、淫らな眼を光らせている。やがて、猿轡の下から絶望的な、呻き声が洩れはじめた。

恐るべき、地獄絵の展開。――

七重の膝を八重に折る

「妾は、何も存じません」

「どうか、お許し下さい、お願いです……」

嘆願、哀訴もきかばこそ、なおも膝に積まれる、無情の責め石。哀れ！ 島田の根もくずれ、悶え苦しむ白洲の女。

顔に紅葉を散らす

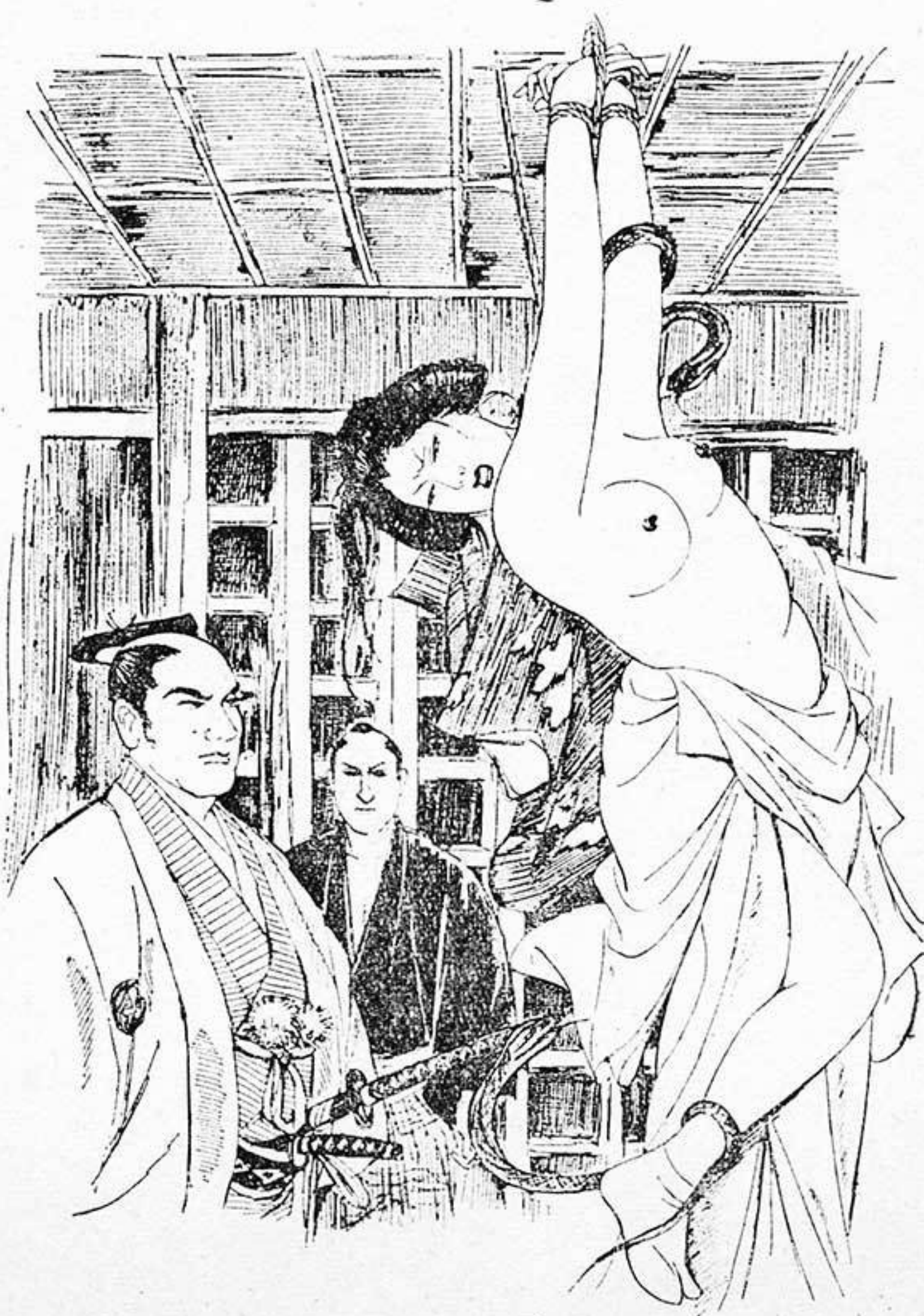
危機一発。危いところを、恋しい男に救われたが。――むき玉子のように、腰のものまで剥ぎとられた娘。

痺れるまでに肌に喰い込んだ荒縄のいましめに、女の生命を隠すことも叶わぬ、羞しい姿。羞恥のために、全身が火のように燃え、気も遠くなるばかり。早く縄を解いて下さい。

長いものには巻かれる

加賀騒動の「浅尾局の蛇責め」は余りにも

長いものには巻かれる



有名である。毒蛇は温き肌を求めて這い廻り、腕、首、股にと巻きついて離れない。責め苛なまれる姥桜の半裸の姿態は、想像するだに艶めかしい。

となる。温和な夫の何処に、こんな血が流れているのだろうか。夫のために、夜通し責め折檻され、初々しい、若妻も、日毎に痩せ細るばかり。――

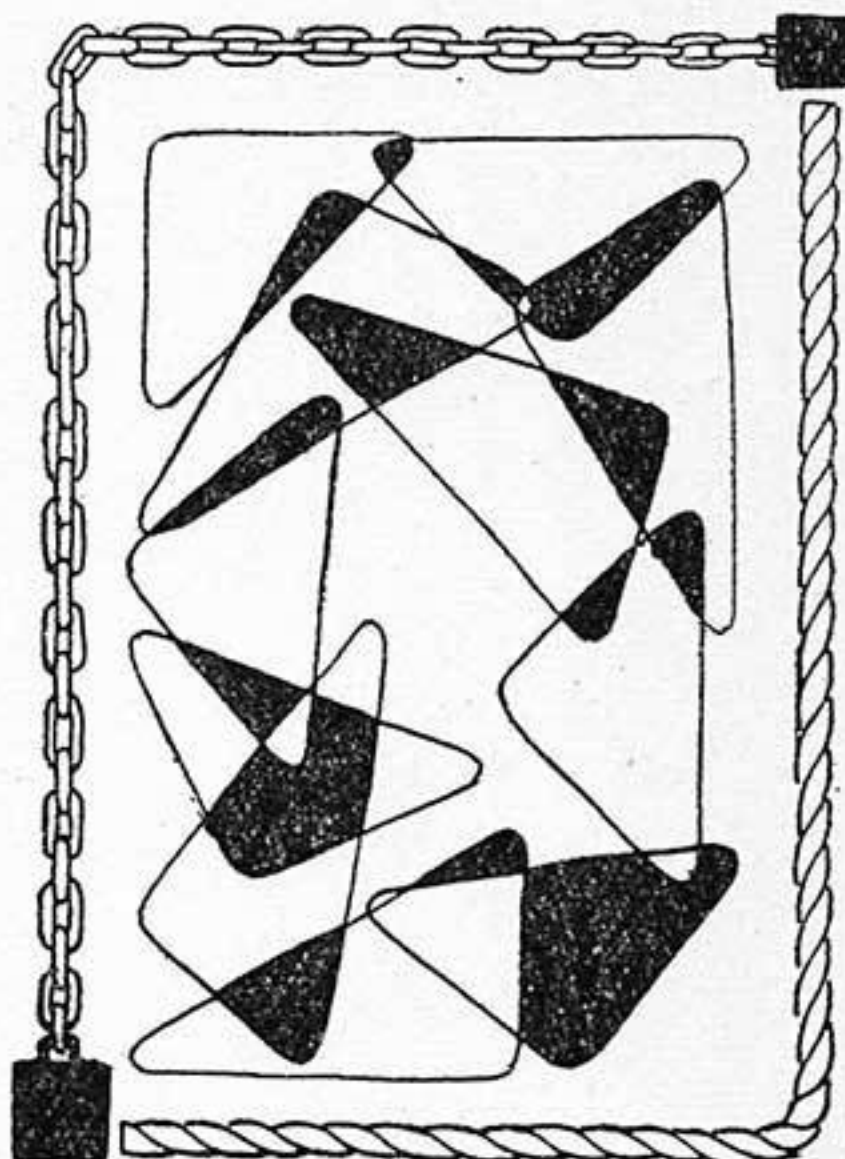
無くて七癖

昼の紳士も夜は豹変して、淫乱なサジスト

【事件の概要】

小雪の舞い狂う本年一月二十日、同僚の夫を薪割で撲殺し、自分もその場で首吊自殺を遂げたと見られる、不思議な事件が新潟県三条市に起った。

同日、午後六時三十分頃、同市西日向町、三条機械株式会社（社長、結城太一郎氏）へ日雇人夫として仕事に来て、朝から資材倉庫に附属している薪木小屋で薪割作業をやっていた、市内二ノ町堀川組（責任者、堀川政吉氏）の人夫、見附市新潟町、小林長次さん（五六）同三条市八幡小路、松本英次さん（二〇）の二人が、終業の五時を過ぎても姿を見せないで、同社倉庫係、戸山雄次さんが不審に思っ、薪木小屋（四坪半）に行つて見た



雪の夜の怪事件

小屋に二人の惨死体

三条でマキ割の人夫

高崎

勉

ところ、入口附近に頭を滅多打ちにされて、

俯向けに倒れている小林さんと、小屋の中央で荒縄で首吊り自殺を遂げている松本さんを発見し三条署に急報した。検視の結果、小林さんは後頭部に四ヶ所、骨膜に達する深い傷を負って居り、兇器は現場に血まみれになって落ちていた。玄能と薪割と判明、兇行時間は同日午後四時半頃と推定され、同署では

(一) 松本さんの前額部に傷があるが打撲傷でなく、首吊りが偽装死体とは思われない。

(二) 現場が荒されていない事。
(三) 四坪半の狭い場所に二人の油断を見すまして同時に殺害する事は不可能に近い。等から第三者による他殺の線は薄いと見て、松本さんが小林さんを惨殺した上、首吊り自

殺を遂げたものと見て捜査に乗り出した。

一方、他殺の線も捨て切れず、薪割からの指紋検出、目撃者、友交関係等を捜査、原因追究に当たっている。尚、死体は二十一日、三条病院で新潟医科大学、山内教授執刀の下に解剖された。

小林さんは見附市で農業を営み、妻ヨミさん、長男健一さん、他二人の子持で、土建業堀川組の責任者の堀川政治さんの義弟で、農閑期に頼まれて手伝いに来ていたもの。

又、松本さんは三十年十二月、一家を挙げて川崎市から三条市に転入、以来、堀川組の人夫を勤めていた青年で、家庭は父親鶴松さん（五二）継母トキさん（四六）他に幼い弟妹三人があり、一家の支柱となっている。

二人とも非常におとなしく親切者で、今年になってから三日間、二人一緒に三条機械に臨時人夫として働いていたが、とても仲がよく気が合い、相手に殺意を抱く原因等は全く発見されないと、関係者は口を揃えて話している。

堀川政吉さんの話

「私は妻と二人で靖国神社に参拝して、二十日に帰って来たばかりです。義弟の小林は大人しい好人物で、子供達にも慕われていました。松本君は、新制中学を中途で止める程、貧しい恵まれぬ家庭に育ち乍ら、大変、素直で人懐こく、人物も非常にしっかりしていましたので、将来を大いに期待していました。一体、何が原因なのか判りません。」

三条機械、高木庶務主任の話

「何時も五時になると事務所に顔を出してから帰る二人が姿を見せないの、どうしたのかと探して見ました所、あの惨事です。二人は時々コンビでやって来ますが、あれ程、気のよく合ったコンビは珍しいと感心していました位で、こんな事になってしまつて驚いている次第です。」

松本の父親の鶴松さんの話

「英次は酒も煙草もやりません。その他、遊び事は一切しない大人しい良い子でしたのにこんな大それた事を仕出かして申訳ありません。小林さんの御家族の方には、何んと云

って御詫びしてよいのか、只、申訳ない気持ちで一杯です。でも何故、あの大人しい英次が恐い事を仕出したのでしょうか。」

小林さんは背後から頭を薪割で一撃され、更に金槌で殴られ、頭蓋骨は無惨にも粉碎されている。松本は梁に荒縄をかけ首を吊つてぶら下っていた。発見者の戸山さんは、「余りの事に、思わず立ちすくんでしまつて声も出ませんでした。松本さんも小林さんもあんなに仲が良かっただけに不思議で、急に本当の事とは思われませんでした。」

と語っている。

又、松本の母親のトキさんは

「朝、出かける時、雪が降っていたので絆纏を着せてやりましたら、大層喜んで元気で出かけたのですが、どうしてあんな事をしたのか判りません。」

堀川政吉さんの妻、サミさんの話。

「小林は私の実弟です。工事責任者として三条機械に仕事に行っていたのですが、年が年だけに一切が慎重で、仕事は全部任せていました。松本は一年前から親子で私の所で働いていましたが、父親は昨年、年を取ったといつてやめました。英治は無口でおとなしく、いつも小林を慕っていました。十五日の新年宴会でも仲良くニコ／＼話し合っていましたのに、どうした事かまるで判りません。」

二人の家庭状況は、松本は家が貧しく不遇

で、新制中学を中途退して働きに出ていた、無口で小心な男だった。小林さんは、十六年間に日本通運、長岡支店に勤続し、数年前に退職、親類に当る堀川組の人夫頭を務めていた。戦時中、米国の捕虜に大変親切にしたといつて軍部にひどく睨まれたが、それにも拘らず小林さんはヒューマニズムの行いをしたので終戦後、米軍から感謝状を送られて、近所でも評判になった人である。家庭は妻ヨミさんを始め、坊き盛りの長男と次男、それに娘さんの五人家族で、男、三人が坊きに出て、妻のヨミさんと娘さんの二人で田畑五反を作っていた。生活は割合に豊かで恵まれた方であつた。

〔私の推理〕

以上が昭和三十二年一月二十二日の新潟県の新聞に出ていた記事であります。続いて翌二十三日には死体解剖の結果が報ぜられ、それによると第三者の存在は全く不可能で、松本が小林さんを惨殺し、自殺した事が判明したと掲載されていました。

しかし全く不思議なのは、二人の間に何等その様な惨劇の極手となるものが見当らぬ事です。容易に真相は判明しませんが、私の考えでは、或は次の様な原因ではないかと思ひます。この三条機械は私の勤務している工場の御得意様でもあるので、人事とは思えずこの事件を私自身の角度から探究しました。

松本は新聞の写真によると、美男子ではありませんが、どこことなく女性的な感じのする青年です。早くから生みの母親に別れて継母に育てられ、家は貧しくて非常に恵まれない生活ですが、性質は至っておとなしく誰にも可愛がられました。そして懐しの生母は、彼にとっては憧れの女性でした。その母の死後第二の母を迎えた父に対し、心ひそかに軽蔑

○春日ルミ嬢○

プロマイド（略号
るみ） 分譲

五枚一組 五百円（送共）

春日ルミ嬢フアンの強き要望に応えて、颯爽と鞭をふるうるルミ嬢の勇姿、未発表の近影を特に同好の方に限って焼増いたします。お申込下さい。

◎代理部たより◎

○代理部分譲品総目録は今回品切れとなりましたので、従前分譲中のものは一応打ち切りと致します。尚、新目録はまだ出来ていませんので、当分の間本誌の広告にてお申込下さるようお願いいたします。新目録の完成する日は、只今のところ未定です。

し内心不満を抱いていました。その彼の前に理想の父の様な小林さんが現われたのです。小林さんがどんなに人間として好い人であったかは、小林さんの経歴と実際に行った数々の美しい行為によって知られています。現実の父にあき足らぬものを感じていた松本は、一も二もなくこの小林さんに惚れ切ってしまうました。小林さんも、こんなに慕ってくる彼が憎いはずがありません。二人は年令を超越して、はたの目も羨やましい程の情愛に結ばれました。ところがこれだけですめば親密な友人関係で済んだのでしょうか、運命は思わぬいたずらをします。

それは正月の宴会の時でした。小林さんはふと松本に女性的なものを強く感じました。彼の妻は女乍らしっかり者で、男性的要素を十二分に持っている女丈夫肌です。この事が小林さんを同性愛に走らせなかったと誰がいえます。女性的な松本と、妻に一種の不満を持っていた小林氏との間に、越えてはならぬ禁断の線を酒の酔にまかせて越えなかったとは誰が断言出来るでしょう。こうして二人は遂に、道ならぬ倒錯的陶醉に酔い痴れることになったのでしよう。しかし、冷静になつて見ると、小林さんも後悔しました。そして薪小屋で一緒に仕事した時、間違った愛情を精算しようと言ったのでしよう。ところが松本は一向聞き入れないので、つい手荒くす

がりつく松本を突き放した時、前額部に疵を受けたのでしよう。そして倒れた時に手に触ったのが玄能です。絶望のために目のくらんだ松本は、前後の見境もなく半ば無意識にそれを振り廻したのです。それが戸口から逃げ様とした小林さんの後頭部に当たったのだと思います。

「ワアツ」

頭をかかえて倒れた小林さんは、

「畜生、人でなし。人殺し」

と頭から血を吹き出してのしりました。気の弱い松本も、物につかれた様に更に薪割り振り上げ、小林さんを滅多打ちにしました。

こうしてこの惨事をやった松本も、根が小心中者ですので、生きて居られる筈はありません。小林さんの後を追って首吊り自殺したのでしょうか。これがこの事件の真相ではないかと思ひます。松本が女遊びもしない今時珍しい位大人しい青年であった事、小林さんを大層慕っていた事、その松本があんな惨しい犯罪を行ったとすれば、原因はこれ以外考えられません。

私の憶測は以上の通りです。しかし、これは、あくまで私一人の推理であって、真相はもっと他の原因であったかもしれない。だが恐らく警察にも、これ以上のことはわからないでしよう。死人に口なしと言いますから。皆さま、如何お考えですか。

ある夢想家の手帖から

沼

正

三

第百十四 「美国横断鉄路」

アフリカの黒人のことを大分書いたが、この黒人に対して白人の懷く輕蔑嫌惡というものを私達自身も黒人に接触する際共感する。真黒な肌が汚ならしく、好きになれぬ、それは本能的なものだ。この場合私達は、いつの間にか自分を白人の側において黒人を見ているのである。

それはそれとして良い。しかし、それに泥み過ぎると「白人から見れば、私達の黄色の肌も、黒人の肌に近いのだ」という嚴肅な事実を忘れてしまう虞れがある。これ丈は心得て自戒せねばならない。私達には黒人と非黒人の二分類が通用するが、白人は白人か非白人か（或いは歐人か非歐人か）の區別しか知らないのだから。（手帖速報欄三三参照）

黒人が米國南部で奴隷だった頃の白人の黒奴觀というものを、奴隷が「黒かった」からで、「黄色かった」のなら、あんなではなかった。などという人もあるが、これは右にいう日本流の二分類の誤

りである。白人は黄色人だつて決して同類扱いはしないのだ。

白人による黄色人虐待という時、一つの作品を思い出す。久生十蘭の「^{アメリカ}美国横断鉄路」である。本項ではこれを紹介しよう。

中央太平洋鉄道のオークランド・オマハ間千二百軒の鉄道は千六百七十人の支那人勞働者の死屍の上に建設されたといわれる位の難工事、中でもホネー峠とカルソン峽の間ではひどかった。現場逃亡後捕まつて、額にC・P・R（会社名の頭文字^{イニシアル}）の烙印を捺された支那人勞働者が、後に桑港で沢山見られたというが、現場で見せしめ私刑は烙印どころではなかった。股の間に首を差し込まれ、縮ねた縄のようになった者、毎日腹に板を載せ五六人で踏まれてのし餅のように腹も胸も扁平になった者。頭蓋に一寸角の穴をあけられ、鉄線で脳髓をいじり廻される者、七十斤の岩を両手で支えさせられ、骸骨のようになりながら、毎日三十杖宛一年間鞭たれる者、これらは他人への逃亡教唆罪だ。放火して逃亡しようとした奴等は「細い麻苧で全身を隙なく巻き、藁荷^{わらひ}で包んだ上に藁をかけ、高い簀子の上に載せて、その上にとろ火の火桶を置き、時々藁に水

を打つ、こうして全身の脂膏を氣永に絞り取り、罪の重さを思い知らせる」という刑を受ける。

医者は支那人の嬰兒を両側から板で頭を締めつけて福祿寿の様な長頭児に育てたり、うるさく泣く子は、両唇を縫いつけた上を薬品で均して、鼻孔からなくては飲食できなくしたり、ちよこちよこする子は、木箱に押し込めて手足を萎びさせたり、捻じ曲げたりする。現場には「手足が蜘蛛のように長いのに、顔と胴体は鼠の子のように黒く乾からび、手足を使って草の中を這い廻っているのや、盆栽の松の木のようにうねうねと足の捻れたのや、どれといった満足な五体をそなえた」子供はいない。首丈出して生き埋めにされて殺される奴も沢山見掛けられる。

こういう所で、支那から狩り集められ、奴隷船の苦しみをなめて渡って来た支那人労働者が足首に鉄輪を嵌められながら軌条を運ぶ作業をしていると、桑港からの定時の貨物列車に客車がついて「裳裾を曳いた貴婦人や、立派な服を着た紳士が二十人許り」酒食を携えて下車する。これは、支那人への私刑を見世物にする「チャーミング・ショウ」が定期的に開かれるのを見物に来たのである。

白人の紳士淑女達が小屋のヴェランダの椅子にゆっくり掛けて、酒を飲んでいる前に、逃亡しようとして捕まった六人の支那人が引き出される。地べたに仰向けにされ、烙印が額に押しつけられる。そして、ヴェランダの方を向かされ、「笑え」と命じられ、笑うまで靴で蹴られる。

変った綱引が余興に供される。向い合った二人の男の鼻中隔に五厘がらみの細い針金を鼻綱のように通し、五尺ほどで結び合せ、二人の間の地面に縄を置いて境界を作る。鼻面で縄の内へ相手を引き込んだ方が勝という綱引である。二人は頭をうしろえ反らせて必死に争い出す。鼻中隔が破れ、血が鼻溝を伝って胸に滴る。……ヴェランダの見物は一齊に失笑する。今度は、弁髪を櫛の下

枝に結び付けてぶらりとぶらさげた上、小馬用の相中番の蹄鉄を両蹠に打ちつけ、馬の生皮を首丈残してすっぽり被せて麻糸で縫いつける。これは既に馬を盗み出した刑罰。

次に食料と鍋を盗んだ男は、大きなペンチで腿、股、脹ら脛、脇腹と、ところ嫌いなく肉を捻りとられた上、外科刀で額の真中あたりから、ぐるりと輪なりに切られ、頭の皮を引き剥がれた後へ、真赤に焼けた鍋を冠せられる。

次の男は……

もう止めよう。とにかく、こんな風な支那人への私刑で、白人男女の酒のさかなになつてるのである。内容から云えば、マゾヒストよりむしろサディスト向きであろう。ただ、それが、白人の有色人種に対するサディズムだという点で、たとえようもなく、私のマゾヒズムを刺戟するのだ。今でも見られる白人の黒人への私刑は、決して、黒人への暴行でなく、有色人種への暴行なのだ、ということ、彼等は、事情が許せば、黄色人種への私刑を酒興に供しうるので、ということ、これが私を喜ばせるのである。

この小説は先の題名では、二十七年九月の週刊朝日別冊に入っているが、日本青年が文中に登場する様、多少変えた形で、昭和十九年十一月号の文芸春秋誌上に「新残酷物語」として載っているのも同じ作品である。私は当時従軍中で、このことは戦後知ったのだが、戦争中に読めば「鬼畜米英」という気分を推進するのに役立ったに違いないと思われる。

本項の紹介はまことに簡略で、この短篇小説の名手の作の結構を到底尽し得ない。興味を起されたら、原作を是非読まれよ。「新残酷物語」の題名は君を欺かないであろう。

(未完)

『和 装 教 室』

紅 燈・お座敷着の巻

白 金 紅 次

瀧 れ い 子・画

『君はどう云うつもりでお座敷着出姿で、しかもさ、第一公式で威張って来たのかい?』
 『アラ、威張ってナンテいないわよ、お女将さんから頼まれたのよ、ひどく日本趣味の人だから気を付けなさいって』
 『君だって一本なり立ての、ほやはやだそうだから芸者の出の姿なんぞ満更でもないんだらう』

『でも、一寸気が引けるわねえ、だってまだ上手に袴が持てないんですもの』
 『最近、裾を曳いた姐さんナンテ薬にしたくも無いんだから精々僕にサービスして見せるんだね、僕も大いに君にサービス是れ勤めよう』

——トソノ方ハ私ガ御挨拶スルナリ、ダシヌ

ケニ云ツタケド、何ンダカ最初気味ガ悪カッタ。デモ、イツモノオ座敷ト違ッテ、「平」ダシ「きまり」カモ知レナイガ、モトモト「半用事」ト検番ニ断ッテ来タノダカラ、トテモ氣ハ楽、御連レガ無イノモノノ一ツ、招バレテ来テヨカッタトソノ時思ッタ。ヒヨットスルト、アタシノ方カラ「つけ玉」ニナルカモ知レナイ。

『嫌やよ、そんなにしげしげと御覧になっちゃ、着付はとて下手でしよ、まだ着慣れないんですもの』

『僕は一目見て女の素性がすぐ判るね、何んでも女は柔順にする事が大切だよ、損もないし、ね、君なんか、典型的なピュア・ジャパニーズ・ゲイシャガールだから』

『どうもお引立有難う存じます。幾久しく御ひいきの程をお願い申上げ……』
 『申し上げますの序でに今晚は、ゆっくり君のそのお召し物と身体付を拝見申上げ度いねえ』

『アラ、失礼ね、ウフフフ、』
 『行きつけの女将さん、何んと云ってた?』
 『何んてって? フフフ、そんな事、申上げられないわ』

『僕の悪口云ってたんじやないか? よくて考古学者位な処をさ、聴かなかったかい?』
 『学者じやないけど、四流処の呉服屋さんだって、だからお酌は加減しなければいけまさんって云ってたわ』

『流石は名女史だけある、君も早く出世し給

え、

『へ今晚あり——だけじやいつ迄経っても小便芸者だよ』

『じや、今晚はうんと出世しようかなあ、貴方の一番可愛い、理想の彼女になろうかしら』
——ト思ワズ、ソノ方^{カマ}ノ気合ニツイ釣り込マレテロガ滑ツチャツタケド、本^{カマ}当ハ内心トテモ怖ワカッタワ。何故ツテ、イツモハ飲メヤ唄エヤノ宴会ヅクメデシヨウ。ソレガ今晚ニ限ツテ妙ニシンミリシチャツタンデスモノ、加減シテオ酌シタ筈ノアタシノ方ガウント酔ッパライソウ——。

『僕はいつも思うんだけど、女の着物って奴さ、男の方が賞めなかつたら、着ている御本人は物足らないんじゃないのかい？ 女が女を賞めた処で至極儀礼的で面白くもかいくもないしさ』

『そうかしら？ だって花柳章太郎の女形姿を姐さん達とっても賞めてるわ、文句なしに奇麗だって……』

『男は水谷の八重ちゃんの方だね、君が章太郎だったら、僕はさっさと靴はいて帰るよ』

『御挨拶ね』

『第一、君の着てる、その黒地に牡丹雪を散らした、少し寒そうな南極向な柄だね、無理がこうじた借り着だろうけど、これにその白の塩瀬かい？ 黒と黄の大格子を染め出した、詳しく申せば粹な柳締めにした帯が解けてさ

仮りにだよ、仮りに男の野郎、ふんどしでも現われたら幻滅の悲哀だと思わないかい、それこそ』

『だから、最初から、パンティははいていませんの、ピュア・ジャパニーズ・ゲイシャガールなんですもの』

『その心掛けが堪らなく嬉しいね、たとえば、君のその下着——馬鹿に上^{おもて}の着物と似合わないうが薄紫地に業平菱の柄の重ね着が粋だとしても、さ、それからこぼれる物が野暮ったかったら万事艶消しとなる』

『こぼれるって？ この長襦袢のこと？』

『まあ、まあ、ちよい待ち……お酒を頂いてからゆるゆると参りましょうや』

——コンナオ話ハ私達ノ仇ク世界ガ世界ダケニ、今ノ若イ方^{カマ}ニハオ判ニクテ本^{カマ}当ニオ氣ノ毒ナンデスケド年輩ノ方ガ数段上手、イツモイキナリ握手シテ、ダンススル位ナライイガ、スグ接吻シテ変ナ処ニ手ヲ出スンデスモノ。女ノ着物カラツテ手ハアルノヨ、デモソノ方^{カマ}ハ着物トアタシノ身体ヲ拝見シタイト仰言ツタノハ一寸氣ニカカル、ケド安心シタ、何故ツテ——。

『君が仮りに僕の云い付けだからと云って無理に素裸になるのは丸切り感心しないね、およそ高島田のヌードって奴は野暮の野暮だから』

『じや精々帯を解いて長襦袢位な処でよろし

いんでしょ？』

『いや、モウちよいだけどさ、長襦袢でもいいさ、白衿の長襦袢を大きく衣紋をぬいて寝床のそばにキチンと座ってさ、旦那のお目覚めを静かに待っている姿なんてものは何んとも云えんとさる雑誌（婦人公論四月号妾の子参照）に書いてあったのを読んだけど、さ』

『じや、やって見ましょうか、うんと誠意を込めて』

『それよか先ず君のその赤い裾の中へ——裾を曳いたその裾の内に僕をかくまって貰いたいね』

『ア—ラ、この中へ？ こんな大きな坊やを』

『佐野次郎左衛門が八ッ橋を斬ったのは何もつれなからうぜオソリイじやなかったんだよ。彼女がアイと答えて紅絹のうちかけの中へ彼氏を入れてやりや、よかったのさ』

『では、御遠慮なく、どうぞ、お入り遊ばせ。』

あたしの方が立たなけや駄目でしょ？ 御覧になつちや嫌やよ、裾は八ッ橋が持っていないでしよ、お顔はアチラを向けていらしてね』

『もう少し、拡ろげ給え、それぽちちじやカソガールの仔がはみ出ちゃうよ、袴の様にフアーと拡ろげて、そう、案外芸者君の舞姿の裾は短いんだね、裾が重くてマントの様な、ビールの王様だって、こんな香水入りのマントは着せて貰えないから、な』

——ト大ゲサニ云エバ前代未聞ノ戯レ芸、小

サク云ツテ安芝居ノ一場面トデモ云ウノカシラ？ オ座敷へ来ル前ニオ風呂ニ浴^ユッテヨカッタ。スルト半腰ノママ、アタシノオ腹ノ下デクルリトオ顔ヲ廻ワシテマトモニアタシノ顔ヲ見上ゲ、両方ノ手デ長襦袢ノ上カラアタシノ両脚ヲシツカト抱イテ、こらッふらふらしちや駄目だよ、ト仰言ツタ時、クスグッタイヤラ涙ガ出ル位イジラシイヤラデ、アタシモ相当オ馬鹿サンネエ——。

『八ッ橋の何代目が、そうびくびく震えちやったら困るね。元氣を出し給え、生れ放しの仔馬だつて一と月も経てば、君もその馬の仲間の左り馬じやないか、動物園じやないがカシガールや馬がそう固くなつちやちやお客は来やせんよ、生きのいい動物に成り給え、帯を締めたやんわりした動物に』

『えゝ、なるわよ、生きのいい裾を曳いた色っぽいお猿さんになって見せましょうか？』

『さりとて顔の白いお猿は困るね、下手に転んじやったら、眼の毒だしね。まあお猿さんだったら精々引き廻わしの仔猿の方がいい、大きな女猿は馬にでも乗つけて芸当でもやらせるさ』

『馬に乗^りて引廻わされるナンて八百屋のお七見たい』

『だから八百屋のお七は、いつまでも人気者さ。焼かれても焼かれても灰の中から化けて出る、しかもこの灰はストロンチュムなんぞ』

と云う怖しい奴と違ってイロっぽいしね、人畜に無害の処が一番いいんだ』

『そうね、じやあたし、八百屋のお七になつて見ようかしら？ このまんまで』

——多分オ酒ノ勢^{セイ}ダツタデシヨウ。自分デモ妙ナ事ヲ云ツタモノダト後悔シタノデスケドアタシノ名が万菊、ソレヲ万^{マン}ズ聴ク、御用承リノイイ名ダトオダテ上ゲラレタコトガ、ソモソモの間違イダトスレバ、今晚ノ仕業^{シゴト}ハ私デナイコトハ判ルンデスケド——何ンダカ忍術力催眠術ニデモカカッタヨウデ、自分デモ段々訳ガ判ラナクナツテ来タワ。正直ニ云ウト地獄ノ方ヘ地獄ノ方ヘト誰カ曳ッパツテ行クヨウナ——ソレデイテアタシノ方モ好奇心ニツラレテソノ都度承知ノ上デ曳ッパラレヨウ曳ッパラレヨウトシテイタノカモ知レナイノヨツポドドウカシテタノネ——。

『お七は鈴ヶ森なんでしょう？ あなたの仰言つた無害の灰になつた処は。少し、あたし酔っぱらちやつた』

『おい、おい、お酒に酔っぱらちやつたお七って聴いた事ないぜ、特別化けて出た処が裾を曳く芸者のお七、万菊姐さんだったと云う処で手を打つか？ どちらも人畜に無害なんだから』

『いいわよ、お七姐さんでも八百万のお菊でも同んなじよ、女に变りはないんでしょ？ 引廻して頂戴！ さあ、早く引廻して頂戴よ』

『そう、せかれるとお献立が大変となるんだ。第一馬が、裸の馬が要るだろう。非人衆も呼んで来なけりやならんだろう。お役人も、江戸の町民諸君も皆んな必要なんだぜ』

『かまわないから皆んな、あなたがやればいいんでしょ？ 一人百役で賑やかじやないの。さあ！ やつて頂戴ッ』

『馬鹿にお急ぎの様子だね、引き廻せ、引き廻せて、ただ歩くんじやないよ。おひろめの御挨拶廻りじやないんだから』

『手をおくくりになるんでしょ。お七は昔から縛られていますもの。後ろ手に細引でくれば出来上るわよ、階下^{した}の女中さんから借りて来るわ』

『そんな物、借りなくってもいいよ。ちやんと有るんだから。まあ、そう、せかないで呉れよ。押し掛けお七姐さんに僕の方がたじたじのノイローゼになちまう』

——何時^{イツ}、何処デ用意シタンデシヨウ、ナドト改マル方ガオカシイノデ、サレルヨウニ身ヲ委スコトガ大切、コノ分ダトオ客ノ客筋ニヨツテハ三味線ト細引トソレニ……猿轡^{イナヅナ}用ノ手拭、ウフフフ、トンダ商売道具マデ持つテ歩カナケヤヘ今晚あり——ニナライノカシラ——。

『柔い身体付だね』と彼ノタクマシイ手先デアタシノ着物ニ包レタ両腕ハ後ニ廻ワサレタノ、オ酌スル右手首ニ細引ガカラミツクト、

続イテ左手首ヲ別ノ細引デククリ左右ノ手ガ合ワサルト一卷キ、二巻キ巻イテ締メツケラレタ。『一寸我慢するんだよ』ト手首ヲ縛ツタ細引ヲ帯ノ裏カラ前ノ方ニ廻シ両方ノ乳房ノ周リヲハサムヨウニ御丁寧ニ上ニ二巻キ、下ニ三巻キ締メ、アタシノ左肩ニ足ヲドツカトカケテギユウツト固ク締メツケラレタ時ハ骨ガ折レルカト思ウ位痛カツタワ。ソレバカリカ引廻シノ時ホドケテハ困ルカラト云ツテサツキ合セテククラレタバカリノ両手首ノ右左ノ小指同志ヲピアノ線見タイナモノデ肉ガ喰イチギレル位縛リ直オサレ、ソシテ最後ニ非人頭ニ持タセルシンドト云ウ腰縄ヲ赤いしごきノスグ下ニ二巻キ巻カレテ縄ヲ垂レル。『痛いわ、お乳が飛び出る位痛い、随分むごたらしいお七ね、可哀いそうだとは思わない？』こんなに縛られて。ねえ？ 息も出来ないわ』ト思ワズ口ニ出スト『お仕置前は辛抱したくっちゃや、これ位で泣いたら万ず聴かない妓になっちゃうぞ』ト彼氏ハヒドク、執拗ニアタシノ周リヲグルグル廻ッテ縦横十文字に縛ッタ細引ヤ肉ノ締マリ具合ヲ、ソレこそ真剣ナマナコデ見テイタワ。高島田ノたぼノ下から胸ノ縄ニ結ンダ首縄ガシカニ首ニ巻キツイテウツムイテモ顔ヲ左右ニ振ッテモ、トテモ痛カッタ。『さあ出来上ったよ。一寸お七君、来てごらん』

ドッゴイシヨノ彼ノ声ト一緒ニ背中ト腰ノ処ヲ持ツテスウツト身体ヲ宙ニ浮カス。脚ヲ合セテナカッタノデ裾が合ワズニ前ガハダケ紅縮緬ノ長襦袢カラ裾除ケノ処マデ捲クレテ白足袋コソ見エナイガトテモ恥シカッタ。随分乱暴ナオ役人サンダ事！『処で陽の暮れぬうちに引廻してお仕置を急がにやならん。サアサア皆の衆！ この娘っ子が天上天下御法度の火付け罪人だよ。退いたッ退いたッ、屋号は八百屋で名はお七、今日は特別身替り吉乃家の万菊姐さんだよ。近くは眼で見て、遠くは瓦版でよく御覧じろその——泣き面抱えて、たもとを噛んでる町の娘さんよ、あんたも火を付けりやこうなるんだよ。そのまた——横っちよの向う鉢巻のいなせな兄ちゃんよ。ふるいつきたい美しい女の子もこれこの通り、可哀いそうだと思うだろう。そうだろうなあ、役目柄拙者もどうにもならんのじゃ、そう押しちやいかん。コラコラこの女に触っちゃいかんツと云うのに静かに合掌してやって呉んな、何に？ 馬が無え？ 今裸馬を曳っぱって来るわッ』——縄尻ヲ取ラレ、オ座敷ノ中ヲグルグル引廻ワシタアタシノ身体ヲ中腰ニスルトオ尻ノ裾ノ方カラ頭ヲ突込ンデアタシノフクラ脛ヲ掴ムト、ポント背中ノ方ニ送ッテ彼氏ノ上ニ股ガサレル、裾前ハイイガ一番下ニ穿イタ赤イメリンスノオ腰巻ノ端ガ頭ノ天ッペンニマ

トツイテ本当ニオ氣ノ毒見タイ——『さあ、矢の字に、留公に、ずん公、しっかり女を囲んで歩くんだぞ。なあ兄貴、こんな美しいべべ着た女っ子をさ、何もむざむざ火の中にくべる事あ、あるめいになあ。神も仏も無いもんだ。殺す前に一つぺん抱いて寝て見たい？ 誰れたッ、俺見たいな様な事を云う奴は？ そうだ、そうだ、無理も無え、女ひでりの非人衆だもん、物は相談だが——ねえお七姐さん、ここらで廻れ右して俺等と夫婦になっちゃ貰えんだらうけえ？』『アイ、嬉しう御座んすが一刻も早ようお仕置が受けとう御座います。でないと……』『でない……』『でないと……』と仰言ると何か訳でも？ お有りなさると云うのですかい？』『ハイ、女の最期が、どんなに美しく、むごたらしいものであるか、この眼で見とう御座いますから、ウフフフ、存分虐めて頂き度いのよ、火で焼かれる前にお腰巻一枚にむかれて槍先で突いて貰いたいわ』『そう短兵急になっちゃ困るね、じわじわと鈴ヶ森の芝居が進んでる最中なんだから。処でお寒い海道筋だからオシッコはしなくてもいいのかい？ 特別に許すぞ、出る、そう素直に来なくっちゃいかん、この道筋の横に厠を設けてある、拙者お伴を致そう』『アラ、お役人さんいいんですのよ、おなどの厠りなど覗くものでは御座いません。嫌や

あね、本当に御不浄に連れて来ちやったりして、ハイ、させて頂きます。御親切に、恐れ入ります。帯にはさんで御座いますの、ウフ、恥かしい、随分ねえ』

『少々疲れたね、一人百役はセリフだけでも大変だ、ここらで中休み一杯行こうか』

『あら、お仕置前に御宴会なさるの？ こんなに縛られてはお相手出来ませんわよ、解い

て戴かなくっちゃ』

『そうは行かんよ、ねえ君、最期のサービスだ。オシッコで僕も男冥利に尽きたが恥かしい序でに君のその口でお酒が飲み度いね、斯うやるんだよ』

『だって、口紅がつくわよ、あたしの唾がお嫌やでなかったら、そう、強引ね、ウフフ、御免なさいおいしかった？ お燗の具合如何

が？ 少しウェットかしら、いいの、あとで拭きますから』

『今から腰巻濡らせちやって相済まん、序でにお肴が喰べたい』

『御免なさい、今よく噛みますから……蟹の甲殻が入っちやった、塩が効いてるわよ、ああ痛い、後手が段々締まる見たい』

『お七殿、眠く相成った』

『お床、展べましようか、困るわ、だって手無しの女中ですもの、どうしたらいいかしら』

『早ようせんか、拙者一眠り致し度いのじゃ』

随分御無理ナ注文デシヨウ、アタシノ両腕ヲ後手に縛ッテオイテ床ヲ展ベロナンテ。デモ、シナイトマダ痛い目ニ逢ワ



ス、責メ折檻ハ充分覚悟ノ上ダロウトへさあ
さあ、さあ、と詰メヨルオ役人様に背中ヲ突
ツカレテ縄尻取ラレタママ足袋ノ先デ押入レ
ノ唐紙ヲ開ケル、口デ布団ノ端ヲ啞エテヤッ
トノ思イデオ部屋ノ真ン中へ曳キズリ出ス、
裾ガマトイツイテトウトウ転ンジャッタワ。
『うむ、お女中、怪我はなかったか？』ナン
テ御親切？ ナ介抱！ ツケ玉が少々高クツ
イタノネ。

『御苦勞、御苦勞。あゝ一眠りしてよい氣持
に相成った。どれ、陽の落ちぬ間に鈴ヶ森へ
と馳けはせ参じよう。仕度はよいか？ 皆の
衆』

『あら、まだでしたの？ もう済んだかと思
った。随分念の入ったお仕置ですこと。もう
お馬は乗らなくてもいいんでしょ、歩いて行
きますわよ』

『此処が鈴ヶ森の刑場だ。どうだ。怖い処だ
ろう。あれが君がお仕置になる柱だ。コリヤ
お七、覚悟はよいだらうな？ 今際のきわに申
し残す事があれば何なりとも申して見い』
『ハイ、重々の御慈悲の程肝にめいじて有難
う存じます。お七、兼々の申出の通り女の最
期が飾り度う御座います。折角御遠路はるば
る御見送り頂いた江戸の皆さんの前にお七の
身体を、いえ、女の身体の隅々まで見て頂き
とう存じます。仮りの世の衣裳では御座いま
すが、どうぞ御遠慮なく帯を解いて下さいま

し、そして如何ようにむごいお仕置に逢いま
しょうともお七は喜んで皆様の前で、女の最
期を御覧に入れ度う御座います』

『ウム、流石は大罪人お七だ。聴き届けて置
くぞ、さあ、先ず小手調べとして、この儘磔
り付を申付ける。そうクスクス笑わないで、
もう一ふん張りだ』

『だって、この磔柱の十字の棒、箒の柄でし
よ、細くて奴舩見たいなんですもの』

『奴舩でもいいよ。特別誂えの大道具だ。一
応大の字に縛りつけられて江戸の皆さんに見
せなけや、それとも真ん中の床柱を諸ろに裏
に抱くようにして見るかな、脚は勿論広げた
方がよろしい』

『どうかしら？ じゃ後手の紐解いてよ、大
の字なのね、たもとはこのまんまでいいんで
しょ、ウフフフ……こぼれて？ 裾が長いか
らよ』

『しばらく、そのまま観賞するか。一寸芸
が無さ過ぎるね、やっぱり白装束いや長襦袢
にむかなくっちゃ駄目だ、帯を解き給え』
『そうでしょう、長襦袢でギユウギユウに縛
って御覧なさいよ、なんならお腰一枚でもい
ゝわ』

『しごきを解いて、と、随分長いんだね、そ
のまゝそのまゝ、両手を挙げて、あとでこの
お乳の処とこゝん処を槍で突いて止めを刺す
んだから、余りきつく縛らないで置こう。も

う一寸開いて、うんと脚をふん張るんだッ。
やっぱり赤い腰巻が出ておらんと色っぽくな
いね、この裾除けは化繊物だろう。鏡持って
来ようか、赤い長襦袢に桃色の裾除け、赤い
腰巻に君の白いふくら膝、と、これが歌麿調
なんだよ。歌麿描く八百屋のお七磔り付けの
場だ。出来れば島田の髷をちよい乱して貰う
と満点になる』

即席ノ床柱ノ磔柱ニ縛ラレタ、アタシ、云
ワレルママに両鬢ノ毛ヲクワエ、顔ヲ前ニウ
ツムイテ観念シタ、アタシヲ可哀イソウナ女
ダトオ思イニナリマセン？ コレハコノアタ
シノ日記ヲ御覧ニナル方ニ申上ゲル言葉ナノ
デス。デモ芸者トモナレバオ客様第一デスモ
ノネ、コノ上ハドノヨウニサレヨウトモ、純
ナ日本娘ニ、お七ノヨウナ昔氣質ノ女ニナッ
テ、ワタシヲヨンデ下サルオ客様ノ仰言ルマ
マニナルノガ一番ヨイコトダト思ッタノデス
——デモ何処カデ恋心ガ湧イテ、セツナイ氣
持ガコミ上ゲテ来テ、ツイ、アタシノ方カラ
エゲツナイコトヲオ喋リシタノヲ下品ナ女ダ
小便芸者ダナドトサゲスマナイデ下サイネ。
縛ラレタモデルニナッタ氣持ハ出来ルダケオ
伝エシタイト思イマスノデ——。

『奴舩の足の方を忘れてた。うんと出来るだ
け広げて御覧！ 両足の処を縛るよ。これで大
の字だ。さあさあお立合、これがこれから火
焙りになるお七だよ。いや、万菊姐さんだよ。

その長襦袢を剥いで呉れる？ 馬鹿抜かすもんじゃ無ねいぞ、何？ ただ脱がすんだって——あとでたんまり腰巻姿を拝ましてやらあコラコラ、棒の先で変な真似しちや困る、早く非人共に突かせろって？ 刺す処は何んべんも云う通りこことこだ。突けば赤い血が出るんだよ。この柔けいプヨプヨした処をぶすつと槍の突先が刺さったらもうお終いだ序でに紹介することがお腹だ。よく肥えてるだろう。この裏に見えなくてお気の毒だが、丸まっちいお尻がある。このお腹の下は素通りしてパツと末広がりひろがった部分がふとももの一番いゝ処だ。牛ならロースの次に美味い処だよ、あとはあんよに白足袋と」

『嫌よ、肉屋の宣伝見たいなこと仰言って、そんなに召上り度かったら生きがいゝか悪いか嗅いで御覧なさいよ、火焙りのお七が飛んだ召上り物になっちゃったのね、裾が開き放しで寒くなっちゃった。早く焼くなり殺すなりして頂戴！』

『じゃ、いよいよ本当の最期だッ、へい、へい、承知致しましたとも、おーい、留公に、ずん公に矢の吉の野郎共、お役人様からお許しが出たぞ、この女おまつちよのおべべを下さるんだとよ、裸にむいて薪をくべろって、へッへッへッ俺らあ、この赤え着物だ、貴様はこの細帯——伊達巻か、それ貰いな、留公の野郎は何んだ紐付の薄赤え湯文字一枚か、お土

産が無えよりましだ、ずん公は待った。ありや駄目だ、あれ取っちゃ女おまつ子泣いちゃうぞホレ、この腰紐で我慢しな、ふんどしの干し紐によからう。で、お役人様、これからどうするんで？ へい、へい、ごもつともで、女おまつ子の、後手に縛って、あの柱の上から吊す、乳の処は掛けない、お腹に一卷、へッへッへッあの——少々あけて、足の処はやつぱり、左様で、殺生で御座んすよ、あつしに首頭を取れて、火は付けますがね、そんな無茶な、お役目では御座いますよ、左様ですか、どうだ？ あとでたんまりお給金下さるとよ、眼つぶってやるか？』

『モシ、その非人衆さん、陽もたつぷり暮れましたによつて女子おなご一人や二人のお仕置が何んでその様に怖い？ 怖い処か早よう殺ろされたいのがこちらのたつての願ひ事、夜が明けますぞえ、一刻も早よう』

『仕方が無え！ 真ッ平御免なすって、ツレ野郎共この女おまつ子を始末するんだッ、痛いだろうが、もう一ッぺん後手に、捻じ上げて、留公！ お乳おっぱいの処は掛けるんじやない。ずん公はこの豆絞りの手拭で猿轡だ、世話のやける野郎だ、この赤え湯文字はこうやるんだ、縄かけて見ろッ、お腹の処はギユウと一締め締めて見ろ、それッ吊り上げるんだ、ぐるぐる廻らねえうちに早く足をくくってしまえ、馬鹿野郎ポカンと口あけて見上げる奴がある

か、暗くって拝めやしねえ？ それッ注意せんかい、吊り方が足らんのじや、留の野郎、湯文字の中へ頭を突込ませて何？ 床柱が滑りがよ過ぎるって？ 俺に聴いたって始まらねえ、待合大工に文句ふつ掛ける、香水の匂いがする？ この姐ちゃんはな、たんまり湯文字にしませてあるんだ。——あゝ、しんど』

『お疲れさま、とうとう吊り下げられたのね、香水って本当？ あたしまたお腰の匂いかと思つてヒヤッとした。足もこう縛られるとすぼめるのとても骨だわ、胸の処くびれてるわねえ、お乳のとこくくらないのはあとで突き刺すんでしょ、あら嫌だ。本当だったら氣絶しちやうわねえ。猿轡さるもつて慌てゝ咬まちや脱れちやうわよ、でも、こんなみじめな恰好かっこうってフッフ御覧になるの好きなんでしょ？』

『まあ、遊戯の一つさ。大人のお伽話と思えば、大した事はないよ。誰にも迷惑掛けずに君と遊べるんだから、お腰一枚の裸を心ゆくまで拝見出来たんだからすつとしたよ。そのまんまどれだけ辛抱出来るか、やって御覧』

『黒こげに焙られなくて助かったけど、このまゝ朝まで辛抱出来そうもないわ、もうかんにんして——磔はりだけ許して頂いたら、縛られたまゝ御自由になすつてもかまわないわ』

『それは兎も角、結局どうなったんだい。大の字が形を変えた吊しになっただけで君の云う女の最期が何処かに飛んじやったね、あの

セリフは君が云ったのだから責任上君が演る事になるんだが」

『あなたの前で云う女の最期は、本当は磔じやないの、判ってる癖に。いじ悪るねえ、だからお縛りになったまゝ、お寝みなさいって、申上げたじやありませんか』

『御遠路はるばる御見送り願った江戸の皆さんにお七の、いえ女の身体の隅々まで見て頂きとう存じます、は、しかと左様か』

『ハイ、ウフフッ、馬鹿ねえ、もう何んでもいゝのよ、お腰巻一枚で風邪を引きそう。もし、お役人様、お七は眠く相成りました、ホホホ』

.....
アタシハソレカラアト、トウトウソノ方ニオ目ニカカレナカッタヨ、オ別レスル朝、冗談ニ云ワレタ事ヲ真ニ受ケテソノ時ノ赤イメリンスノオ腰巻ヲ内緒デコッソリ小包デオ送りシタンダケレド端書一本ノオ礼状デソレツキリ音沙汰無イノ。

竹ノ棒ノ先デココヲ突クンダココモ刺サレ
ルンダ、ナドトフザケテオ突キニナツタ処ハ、
アトデ見ルト小サナアザニナツテイタシ、ピ
アノ線デククラレタ小指ノアトモシバラクハ
消エナカッタ。

波瀾ニ富ンダ映画デ、観テイルウチハドウ
ナルカト樂シミニ汗ヲ握ッテイタモノガアッ

ケナク、ソレモマルデ煙ノヨウニ喜劇ハ喜劇ナリニ悲劇ハ悲劇ナリニ『終』ノ字幕が出テシマッタヨウニ、アノ晩ハ終ッテシマッタ。

デモ一晚中アノ方ハアタシノ後手ハ解カナカ
ッタバカリカオ情ケガ過ギテ、ソレニオ喋リ
ガ過ギテ、『おい、お役人がお七になつて裸馬
が非人に混んがらかつてぐるぐる廻るぜ』ナ
ドト冗談ヲ仰言ツタノデスケド『ねえ、今度
お逢いする時はお座敷着でなくて、始めっか
らお女郎さんみたいな恰好で御挨拶しようか
しら』ニ『仲間を探してハイ今晚ハ、と来る
んだね、思い切つて女の逆立コンクールでも
やらかすか？アハハハッ、樂にしてるぜ』
ト笑ワレタノヨ。

愚ニモツカンコトヲ長々ト書イテ御免ナサ
イ、マタコノ日記ヲオ読ミニナル方モ、サゾ
下ラナイモノダトオ思イニナツタコトデシヨ
ウ。

恥カシイノヲ万々承知ノ上デ差上ゲタワタ
シノ赤イオ腰巻ガアノ人ヘノ唯一ツノ形見ト
ナツタト同シ様ニ、御披露申上ゲマシタコノ
ツタナイ数頁ハ花柳ノ巷デ生キル限り芸者万
菊ノ哀恋日記ダト御思召シ下サレバ、本当ニ
嬉シウ御座イマス。デハ皆様、サヨウナラ。

(この項 終り)

◎北原純子責画傑作選◎

〔女学生の羞恥責め〕 (略号女学生)

大中判印画紙焼付 四枚一組 五百円

純情可憐な花も羞らう制服の女学生が、
正面向いて、あられもなく後手に櫓に縛り
つけられ、片足を水平よりも高く無理矢理
上げられたり、スカートをまくり上げられ
たり、まことに大胆きわまりない制服の女
学生に対する責構図四態。

〔ハートの的、女体洗滌室〕 (略号はあと)

大中判印画紙焼付 二枚一組 三百円

ハートの的にされた全裸の豊満なうら若
き女性に対する奇想天外な責め、縛られて
身動きも出来ない全裸の女体の隅々まで、
余すところなく洗滌せんとしている構図。

〔緊縛ヌード十六ポーズ〕 (略号ぬうと)

大中判印画紙焼付 二枚一組 三百円

柱、棒、杭、石等の小道具を用いて緊縛
されたヌードのポーズに変化を求め、十六
の優美な縛りポーズの一つ一つが、平凡さ
を脱して私達の目を楽しませてくれる。



花魁『美吉野』の折檻

本田 由 郎

(一)

明和年間の頃、江戸は日本橋石町に伊豆藤という屋号の大きな荒物商があり、末ッ子にお浦と呼ぶ十七になる、小町娘と近所近辺に噂の高い娘がいた。

或る日、春ののどかに誘われて、乳母のお杉と共に向島に出向き、隅田の川辺に咲き乱れる桜見物の帰り、上野寛永寺山下に差し加かつて、上野の名所、不忍の池寄三橋を渡ろうとした時、大勢の人波に揉まれながら肩を擦れ違った一人の寺小姓を、お浦は一眼見るなり顔を赤らめて俯向いてしまった。

当時の寺小姓とは、女人禁制の山内に登り僧侶達に待ずき且つは慰安を与える役目をしていた。このため寺小姓は旗本の二男、三男か町家の美少年が年期を切って奉仕した。この嫌な奉仕を果した者は比較的有利な地位に

ついて将来、生活の保障がされた。殊に、上野寛永寺小姓は粒よりの美少年ばかり揃っていたので、江戸の娘達の胸を焦す原因となつた。

お浦は花見帰りに会った寺小姓の面影が忘れ切れず、それ以来、重い病いの床に就いてしまった。所も名も分らぬ小姓を慕っている事を知った家人は、八方を手を尽して小姓の所在を探したが、山内までは手が届かず、町人の身分では、これ以上どうすることは出来なかった。この事を知ったお浦は、家を出入する左官の金太郎が寺小姓と似ているところから、この金太郎と一緒に駆落ちしてしまつた。しかし、お浦の性質は日増しに荒んで行き、自堕落になって女だてらに立膝で茶碗酒をあふる様になった。そして金太郎の目を忍んで数々の男に身を任した。その挙句、我と我身を吉原の苦界に沈めてしまった。『美吉

野』の源氏名で多く客をとっている内に、或る夜、嘗ての寺小姓が客となって登楼した。多くの男に肌を許しても一度も恋心が起らなかったお浦は、この時だけは昔の純な娘心に返った。小姓の名は伊之助といって、もとは呉服店の次男であった。二人は日毎夜の睦言、詰る習いの里の金、二人の恋は常にたがわず逼迫してしまい、伊之助は登楼することにも思うにまかせなくなってしまうた。

(二)

この里では遊女が一人の男に思いを寄せることを極度に嫌った。主人の旨を受けたヤリテ婆の一人が美吉野に言った。

「これ美吉野、あの悪虫を思い切ったたら、どうだい」「いいえ、あの人だけは、どの様に言われても思い切る事は出来ません。」
「ふうん、見上げた根情だ。思い切った方が

よいか、思い切りぬ方がいいか、一人で暫く考えて見るがよい。」

美吉野は男衆の手で庭の立木に縛えられてしまった。しかし、このまま責折檻で死ぬ様なことがあっても、伊之助のことだけは思い切るまいと心にきめていた。降り出した雨も何時の間にか雪となり、縛られた美吉野の体に降りかかり、足元は一寸近くも雪に埋もれてしまった。

「美吉野、どうだ。伊之助を思い切る気になつたかい。」

「……」

「よし、お前がその気なら、音を上げるまで責めてもいいかい」

美吉野は雪の降る中で、長襦袢一枚に剥れて、手桶の水を頭からザブリとかけられた。凍る様な冷たさに思わず「うー」と呻き声を上げた。

「どうだ、美吉野。今、冷たい思いをさせたから、今度はあつれめてやろうか。」

青竹が振り上げられ、美吉野の背を強く打った。

美吉野は呻めき乍ら、その苦しみに耐えていた。

「これでもか。」

息をつく間もなく青竹は打ち下され、空を切つて美吉野の肌に激しい音を立てる。美吉野は悲鳴を上げ乍ら、立木に縛られた体をね

じつて逃がれ様とする。

「どうだ、少しは身にこたえたか、さつさと伊之助を思い切つてしまえ。」

美吉野は無言で首を横に振った。

「強情な女だ。こうなれば責めぬいてほほ面をかかしてやるぞ。」

美吉野は長襦袢も剥ぎとられ、身に纏う物は白い雪の肌に赤い腰布一枚となった。その美吉野の体に、青竹が雨と嵐と打ち下された。鮮血は美吉野の肌から吹き出し、雪を赤々と染めていった。それでも伊之助のことを思い切らなかつた。

「よし、この上は水責めに会わせてやれ。」美吉野の体は長い丸太棒に縛り直された。

「美吉野、これからたと水を御馳走してやるぞ。」

丸太に縛られた美吉野は池の端に連れて行かれて薄氷のはりつめた池の水の中へ浸けられた。足先から膝、太股、腹部と次第に水中へ隠れた。

「どうだ美吉野、思い切つてしまふか。」

「……」

「この女、まだ返事をしねえか。しぶといやつだ。覚えておれ。」

そして、美吉野の全身は完全に水中に没して、息をするたびに泡がぶく／＼と空しく水面に浮かんで消えていった。その泡も水面に浮んでこなくなると、美吉野の体は水中から

引上げられた。水を多量に飲んだために腹部が脹れ上った。やっと息を吹き返した美吉野は、矢張り承知しなかつた。

「それ、今一度水の中へ浸けろ。」

再び水中に全身が没する時、髪の毛が解けて苦しみ喘ぐたびに、水中で藻の様にゆらゆらと動いた。

(三)

美吉野の体は、折檻部屋に死んだ様に横たえられていた。

「えーい、しぶといやつだ。火責めにしてくる。」

今度は美吉野の体は天井に吊し上げられ、そしてローソクの炎で足の裏を焼かれた。

「うう、ううん」

美吉野はその炎の熱さに呻き声を出して苦しみを悶えた。

「どうだ、今度は充分身に滲みただろう。この辺で思い切ると云つちまえ。」

「い、いやです、思い切りません。」

「この女、まだ、そんな世迷言を抜かしやがつて。」

美吉野は天井から下されて柱に荒縄で縛られた。

「それ、この可愛い乳首を焼くぞ。」

炎はシリ／＼と美野の乳首を焼いた。

「それ、今度はこっちの乳だ。」

美吉野は呻き乍ら、身体を弓の様にそらして悶えた。そして辺一面に肌を焼く異臭が漂っていた。

「どうだ、思い切れ、今度はどこにするか、ここか、それともここか。」

無惨にも美吉野の身体は、所嫌わずローソクの炎で焼き続けられた。そして遂に柱に縛られたまゝ失神してしまった。

(四)

歓楽の不夜城と、その全盛を誇る吉原は、大勢の遊女にたわむれる客が呑めや歌えの大騒ぎで、夜の更けるのも知らずに遊びほうける。しかし、さすがに子の刻を過ぎると疲れを見せ初め、大分静かになった。丁度、その頃、一つの黒い影が美吉野の勤める店の裏木戸にしのび寄っていた。その黒い影はすーと

中へ吸い込まれる様に入ったが、やがて折檻部屋の前に立った。そしてあたりを見廻して人の気配がないのを見ると、静かに戸を開けて中へ入った。部屋の中では美吉野が裸で天井の梁から吊り上げられていた。その下では、つい少し前まで責め続けていたローソクが、残り少ない炎で憐れな美吉野の姿を照し出していた。

「美吉野、俺だ」

黒い影は声をかけた。死んだ様にぐったりしていた美吉野は、

「ああ、お前さんは伊之さん」

と、命までかけた恋の相手の伊之助だと知ると、思わず声を出して泣き出した。

「しー静かに、苦しかっただろう。今すぐ助けてやるから。」

伊之助は「ふう」とローソクの火を消し、

美吉野の身体を静かに下した。そして縄目はずすと

「さあー、これを早く着ろ」

と美吉野の身体に着物をかけ、美吉野が着物を着て帯を結ぶと、

「早く逃げ出すんだ、俺の肩につかまれ」

伊之助は美吉野を肩に担って裏木戸から外へ出ようとした時、夜番の見廻りに発見されてしまった。

「この野郎、とんでもねえ野郎だ。」

忽ち四人の男衆にとりかこまれて逃場を失ってしまった。伊之助は無言の内に、懐の短刀に手をやった。伊之助は寺小姓ながら剣術の心得があつたので、必死に振う短刀のため四人は傷き倒れてしまった。この隙に伊之助と美吉野は手と手を取り合って、日本堤から花川戸の方を目指して落ち延びていった。

シネマスコープになってからの東映は、

「縛り映画の東映」との定評通り、

第一回 鳳城の花嫁

第二回 第十三号棧橋

第三回 濡れ髪二刀流

第四回 地獄峠の復讐

と現在まで毎回縛りシーンがあるが、ただ単に女優の縛りがあるという形式的なものだけの淋しい限りである。

今後も

第五回 隼人賊の叛乱 長谷川裕見子

第七回 喧嘩道中 千原しのぶ

第八回 抜打ち浪人 中原ひとみ

と続いて縛りシーンがある筈である。第六回「多情仏心」だけはメロドラマなので縛りシーンはない。

「濡れ髪二刀流」

源氏九郎をおびきよせる囃の為、佐々木

孝丸一派にさらわれたお竜（千原しのぶ）は、細引で後手に縛られ土蔵の柱に縄尻を結びつけられ、床を転げ廻ってどうにかして此処から抜け出そうと腕く。二カットC級、お竜と一緒に捕われた桂小金治の方は、豆絞りの手拭で猿轡をされた姿で、駕籠から飛び出して逃げるシーンがあるが、千原しのぶの猿轡の姿がないのが残念である。

「地獄岬の復讐」

ウラン鉦の権利書を得る人質としてギャング一味に誘拐された美代子（小宮光江）は、地下室に手足を縛られて監禁される。一カット、C級

肉体女優として売り出した小宮光江の事であるから、ヴォリュームのある身体を締めつける縄目、その緊縛感を期待していたのであるが、たゞ細引が胸に二巻きかゝっているだけであった。

「武装市街」

富豪の令嬢に生れついたばかりに誘拐された盲目の娘（アリー・ロバーツ）は、ホテルの一室に閉じ込められるが、手探りで逃げ様としたので椅子に突き飛ばされ、平手打ちを喰わされた挙句、泣き叫んだ為口にタオルの猿轡を嵌められる。場面が変ると、深夜の街路に乗り捨てられた一台の自動車、不思議に思ったパトロールが扉を開けると、客席に蠢めく毛布に包まれた物体、毛布をはね除けて「あっ」と声をのむパトロール、それも道理、懐中電灯の光芒の中に浮び上った、ぐるぐる巻きに縛られ猿轡を嵌められた年若い娘の姿（アリー

緊縛映画速報欄

千葉栄市

ン・ロバーツ）は、緊縛という言葉がぴつたりあてはまるほど、きびしく縛られていた。

「柳生武芸帳」

天保四年——。徳川幕府の治世は安泰を誇っていたが、その安泰を左右する大事を秘めた三巻の柳生武芸帳をめぐる、龍造寺家再興を志す夕姫（久我美子）は流浪の旅の末、やっと江戸伝通院へたどりついたのも束の間、家臣達は霞の忍者、浮月齊にそゝのかされ、柳生屋敷へ夜討をかけ武芸帳を奪おうとする。必死に止める姫の懇願も、自分達の立身出世を夢見る家臣達には聞き入れられず、かえって「もう主でもなければ家来でもない」とばかりに土間に捻じ倒され、荒縄で後手に縛られてしまう。場面が変ると、柱に縛りつけられた夕姫の口へ家来の一人が鼠色の布切れで猿轡を噛ませ、三人、五人と寺を抜け出ていく家臣

達、「行っってはいけない、行けばかえってそなた達の身の破滅です。」叫ぼうとする言葉にならず、たゞ呻き乍ら縛られた体を空しく悶えるばかり、そこへ夜討を事前に察知した柳生の逆襲があり、乱斗の中に身をもむ姫のアップ三回、A級。

こゝで特筆したいのは、従来の映画の猿轡は、普通の手拭を四つ折にして使用するので布が部厚く、頬に喰い入る程強く縛つても、頬骨の高さと布の厚さが相殺してしまつて緊縛感が出ない。しかし、この映画では実に薄い布を使つてあるので、四馬氏の面を見ている様な錯覚を起す程、久我美子の顔がゆがみ頬がくびれる程強く縛つてあった。但し、最初のアップのみ、後はそれ程でもない。余り惨めなので布を取換えたらしい。同映画で、中頃に將軍家光の寝所で、白衣に赤い布で二巻き後手に縛られ猿轡を噛まされた腰元風の女。この猿轡も薄い布の上から歯と歯の間に噛ましてある。三船敏郎に抱き上げられて投げ出される時、本当に後手に縛つてあったらしく、肩のあたりを打って顔をしかめていた。このくらいオールスターキャストになると、俳優名だけで役名がでないのも、残念乍らこの女優名は不明である。



「アイデア」

フアンタジア

(新たな分野)

田^{でん}華^{はな}雄^を

ます。隣のミイ子やハア吉であってでもいいのです。僕らの想念は対象を通して至高至美至秘の境地へ飛躍するでしょう。僕らは探検家のようにとぎすまされた眼光を持ち、錬金術者の妖しい腕を持っているのです。

× × ×

「例一」

アイデアソースⅡ映画雑誌のグラビアはゾーンに魁けて水着スチールを発表しています。全身でコケットリイを発散している美女群の中から浅丘るり子のスチールを選びました。と云うのは、青い麦の世代から急速にメラマに成長しつつある伸び切らない肉体に僕の想念が根を下したからです。清純と官能との境界、七分咲きの花の華やかさ、そう云った魅力です。

この『アイデア』のソースは無限に存在し

フアンタジアⅡ1、旅館の二階の一室を思わせる構成。八帖間位。るり子がじっと眸をすえて正座している。向い合つてのあぐらは四十がらみ、不精鬚を生やしたボス風態の男。茶の色眼鏡、粗野な物腰。るり子は清そなセーラー服姿がいい。

2、じゃ、どうしても嫌だと云うのか——と云う様な男の口の動き。(此のフアンタジアは全篇パントマイムの方が効果的です。つまり演技の表現だけに依ります)嫌です——すつとるり子が立上り軽い身のこなしで入口に行く。すると男は驚く程素早く腕を延ばしスカートの端をつかむ。逃してなるものか、お前の身体は金のかたなんだ——男の口が憎々しくゆがむ。

3、引き戻されたるり子は羽交じめにされるが必死のものがきで男の手から離れる。だがス

カートは外されて畳の上に捨てられた儘。

4、おのゝく眸を上げて室の対角線の隅にうずくまるる子。フムム含み笑いの男。こんなシーンを重ねて、逃げ廻るる子。子は男の手に囚えられる度に一枚ずつ衣服をはがれて行く。室のあちこちに乱雑におかれた衣類。

5、今やブラジャーとズロースとだけの姿になったる子。子は、両手で胸をかばい祈るように天井を見上げ、お願い助けて——と絶叫する。だが誰もやっては来ない。防音装置の密室にいるかのように。中腰の白い裸身。ふり乱されたショートカットの髪。

6、やがて脂くさい男の口が顔に迫ってくる。あ、あ、止して、お願い——る子。口をつく哀願の呻き。

7、男が手をゆるめた隙に、子は脱兎の如く起き上り、男の追う手をくぐって逃げ廻るズロースだけの柔かな曲線。白鳥のような白さ。小猫のような敏捷さ。両手をひろげて機を伺う男の影絵のようなアウトライン。

8、再び右腕をとらえられ、ねじ伏せられたる子。子は左手をついてはい出そうとする。後からかかえた男の右手がネクタイを拾って、巧みに両手首を背中中で合せて縛りあげる。

9、身をよじって咽び泣くる子。子の耳元に悪魔の男の囁き——泣かなくなつたていゝやなお前が愛しいからこそ、こうしてるんだ。おとなしく写真をとらせねえから荒仕事になつ

ちまいやがった。もう写真なんかいらねえ。

そのかわりお前の身体は金のカタに貰つておくぜ。そしてよう、親の借金は棒引にしてやるっていうんだ。

10、る子。子の表情の変転大寫し。如何なる悪徳をも美德に変えて行く妖しい威力。大きく目を見開き口をあけて吐息を洩らす痴呆的表情。全身を震わせて表現する歓喜。

「例二」

アイデアソース製菓会社の広告。賞品の自転車にまたがって手を上げた北原三枝のスタイルが載っている。その均勢のとれた肢体と美少年的なマスクとは夙に僕らのアイドルです。ショートパンツのまゝサドルを挟んでいる姿を見乍ら僕はこう思うのです。女性のサイクリングは男性とは異種の体感がありはしないかと。そして、風を切って走って行く動作はマゾ的効果を持つていゝと。事実、戦前田舎の女学校では生徒の自転車通学を禁じていました。それは女性を發育不全にするとの見地からです。又、女子競輪選手は下半身が著しく発達していると云われる。両者相異なる結果ですが焦点は同じです。

フアンタジアサイクリング車に乗って北原三枝が快走する。誰もいないスタンド。唯一人でぐるぐるグランドを廻る。汗がセーターとショートパンツとをびったり吸い付けた

頃、彼女は自転車から降り立ってフィールドに衣類を脱ぎ捨てて。白い肌を日光にきらめかせつゝ風を切って走るからだの動き。ペダルを踏み切った時になめらかに伸びる場。曲げられた片脚の内股の柔軟さ。サドルに押し付けられてひしがれた様なお臍。日光をはねかえす胸の隆起のなめらかさ。

彼女の裸身を見守る眼が唯二つあった。貴方だ。フィールドの芝生に立っているのだ。その時の貴方の風態はそう、アナスタシアに出るユル・プリンナアの將軍その儘がいい。出来るなら容貌もその通りに。自転車がコーナーを廻って来た。白い幻が眼前を通り過ぎようとする時、貴方の右手が宙に躍ると見るや細い皮鞭が裸身に掴みつく。あつとのけぞりつゝ自転車は走り抜ける。一周、再び今度は風に乘って掠め去ろうとするのを、一瞬逃さず貴方の鞭は打ちすえる。機械仕掛の人形の様に自転車は駆け巡り、貴方は殆ど自動的に右手を閃かす。その度にみゝず張れが白い肌を這い、自転車がよるめく。幾度目かの鞭に両手を上げてのけぞった彼女のからだは、遂に車の揺れを抑え得ず諸共にフィールドへ倒れ込む。芝生は絨氈と紛うばかりに厚く密なクローバーの群生で、かすり傷一つ負わない女体は二転三転して太陽に正対した儘横たわる。貴方の眼に映じた白晝下の光景。デイー・プグリーンの芝生、乳白色に浮き出た裸身、

赤く皮膚に印した鞭跡、これだけの色彩の饗宴を前にして貴方は尚女体をさいなむでしようか？ 否貴方は鞭を捨て、膝を折り、愛撫のサディストになり代るでしょう。

「例三」

アイデアソース『現代の芸能界で都会的なセンスに溢れた美少女、となると先ず雪村いづみちゃんでしょう。いづみの魅力はその声よりもむしろ甘いグラマア振りでです。それについて割り切ったドライ性は正にユカそのもの。四十八才の抵抗ではユカに「お嫁に行けなくなるウ」と叫ばせたが、「わあお嫁に行きたくってたまらない」と云わせてみたらどうだろう。少くとも僕のフアンタジアにはその自信はある。

あるストックキングの広告ポスターにいづみは惜気もなく腿の付根まで脚線を出し切っている。幼な気な感じを湛え乍らどうして一人前の女としての魅力なのだ。此処からフアンタジアの霧が湧き上って行く。

フアンタジアいづみが部屋へ帰って来ると若い牝豹に変身します。誰もいない私室だから傍若無人です。尤も僕が、秘書兼ボーイ役の僕がいるのですが、男性として認めていないいづみ女主人のこと、ひろげた下肢の間にパンティが顔を出す位は日常茶飯事です。今日も今日とてソファに深々と腰を下してピ

ンと足を上げています。美容体操じやありません。絨氈に膝をついた僕がストックキングをおぬがせ申し上げている処なんです。毎日の役目です。頭の上をブンと洋モクのかおりが流れて行く。そしていづみのおきまりの台詞が始まる。

「あああ、世の中って、どうしてこんなにつまらないんだろ。手をかけない中にする／＼戸が開いちやうみたい。サタンがやって来て、あたしをぐっと圧倒しないかな。力で負けてもいいわ。どんなひどい目に会ったっていいんだ。サタンは全能だもの。ああ、あたしサタンが大好きよおっ」

ここで両足をバタ／＼させる。ピンクの実に派手で優美なパンティがばあっと眼の中へ飛込む。サタンならぬ僕の頭は柔い脚の鞭で打たれます。でも僕はそれで満足なのです。此の若き女王に奉仕することが最高の歓喜であり、それ以上の何をも考える事が出来ないのです。

処がある日、去勢された様な僕も流石に胸にぐっと来るシーンがありました。その夕は余程虫の居所でも悪かったと見え、ストックキングを脱がせ終らぬ中に立上りベッドにはね上るや否やドレスを乱して仰向けになり、足を宙に泳がせて訳のわからぬ言葉を叫んでいるのです。ヒスの状態です。その中に例の優美なパンティを脱ぐや否や窓へ投げ付けたの

です。彼女は丁度周期的にヒステリー期に在ったのです。

翌日、僕の日課のストックキング脱ぎを勤めていました。見るともなく盗み見ると彼女の眼はキラ／＼光っている。悩ましい時間がやって来たのです。一体彼女は案外に社交嫌いで一人で過す夜も多かったのです。僕は仕事の途中で、そっと室を辞しました。何時にない事です。果していづみの甲高い叫び声がしています。「ハナオ、どうしたのさ、ハナオ下駄の鼻緒っ」だが、彼女の呼声に答えてドアを開いたのは僕じゃなかった。いづみはピクンと身体を揃え、まん円い眼で見つめていた。やがて、あッと声を呑んで手の甲を口に当てるとソファの上で後ずさりした。それもその筈、入って来たのは真黒い布をピチッと身に着け小さい二本の角を生やしたサタンでした。筋肉を微動だにもさせない恐しい顔。すーっと近寄るといづみの腕を捕え全身の反抗をもとめずに抱き上げてベッドへ運びます。声も出せないで生きの良い魚の様にピチ／＼暴れるだけの少女をサタンはぐいと抑え付ける。あんなにもサタンの来訪と望んでいたのに、この抵抗振りは矢張処女性の恐怖と云うのだろうか、サタンはタオルで軽く猿轡をはめた。それから両手を頭の後で括ってその端をベッドに縛りつける。そして剃刀様のものを取出すとドレスを一文字に切裂い

た。生体解剖されるような感じなのだろう、猿轡の中で彼女は呻いた。構わずに下着も、卵の殻をむくように両側へ押し開く。白雪の肌が羞恥をこめて息づいている。いづみは身体をくねらせて抵抗する。あんなにも狂おしく暴れた足が今日は腿をびたりくっつけて開こうともしない。然しサタンは無表情に両足首にゴム紐を巻き付け真直に引張って頭部の支柱に結んだ。両足が上方へ引上げられ、必死に足をばたつかせるが強靱なゴムを弛める事が出来ない。驕慢で我儘な小さな女王いづみも遂に全能のサタンの前には責められる一個の女体としてみじめに投げ出されている。その屈辱の涙も、初めてサタンに教えられたマゾの深い味わいに陶醉して行く事であろう。冷酷沈静なサタン、実は変装の僕も、最初はいづみの苦悩を解きほぐす演出であったものの、遂には意識もしていなかったサデイズトの本性が露わになって行く――。

「例四」

アイデアソース！今売出しのカリブソ娘浜村みち子を僕は未だビクター入社以前から注目していた。歌手としてではなくグラマアガールとして。高校生のヌードモデル、と騒がれたそうだが、そのスチールの載った週刊誌を田舎の悲しさは遂に入手する事が出来なかった。僕は唯ユニークな彼女のマスクと髪と

のスチールから幻想を引き出して行く。

フアンタジア！彼女のモノローグ形式で表現しようと思う。だが演出の場合は迫真のパントマイムで行きたい。

あたしが初めて大きなステージに立って胸がどき／＼しなかったかつて？ 何ともないな。あたしって人が沢山いた方が張り合いがあつていゝよ。大ぜいの人と眼の前にして歌う時の気持の良さったら、ほら変な例えだけどみんなも覚えがあるでしょう。おしっこを貯めといてさ、やっと時間が出来てしやーと一度に出しちやうあの気持、おんなじさ。身体の中にある物を出すんだもの、唯どっちの口から出るかの違いよ。あたしってかくし事は嫌いだ。何でも人に出しちやう。え、露出症だって、そうかも知れないな。ヌードだってさ、二人の先生以外にはモデルにならないうし一回一万円だけどさ、それは商品だから。あたしは誰にでも見せて賞めて貰いたいんだ。からだには自信があんの。だって先生が「未熟なる完成」ってタイトルをつけて呉れたもの。あたし以外にはマルチニク島にしか無いからだ。だってさ。あたしのからだは先生の心をエキサイトさせて芸術を作るんだ。あたし時々だけどつともヌードになり度くて仕様がないうちがあるの。ステージに立ってゝもさ、ドレスを脱いじやってポオズを作つてかぶり付きの学生の頭の上におしこ

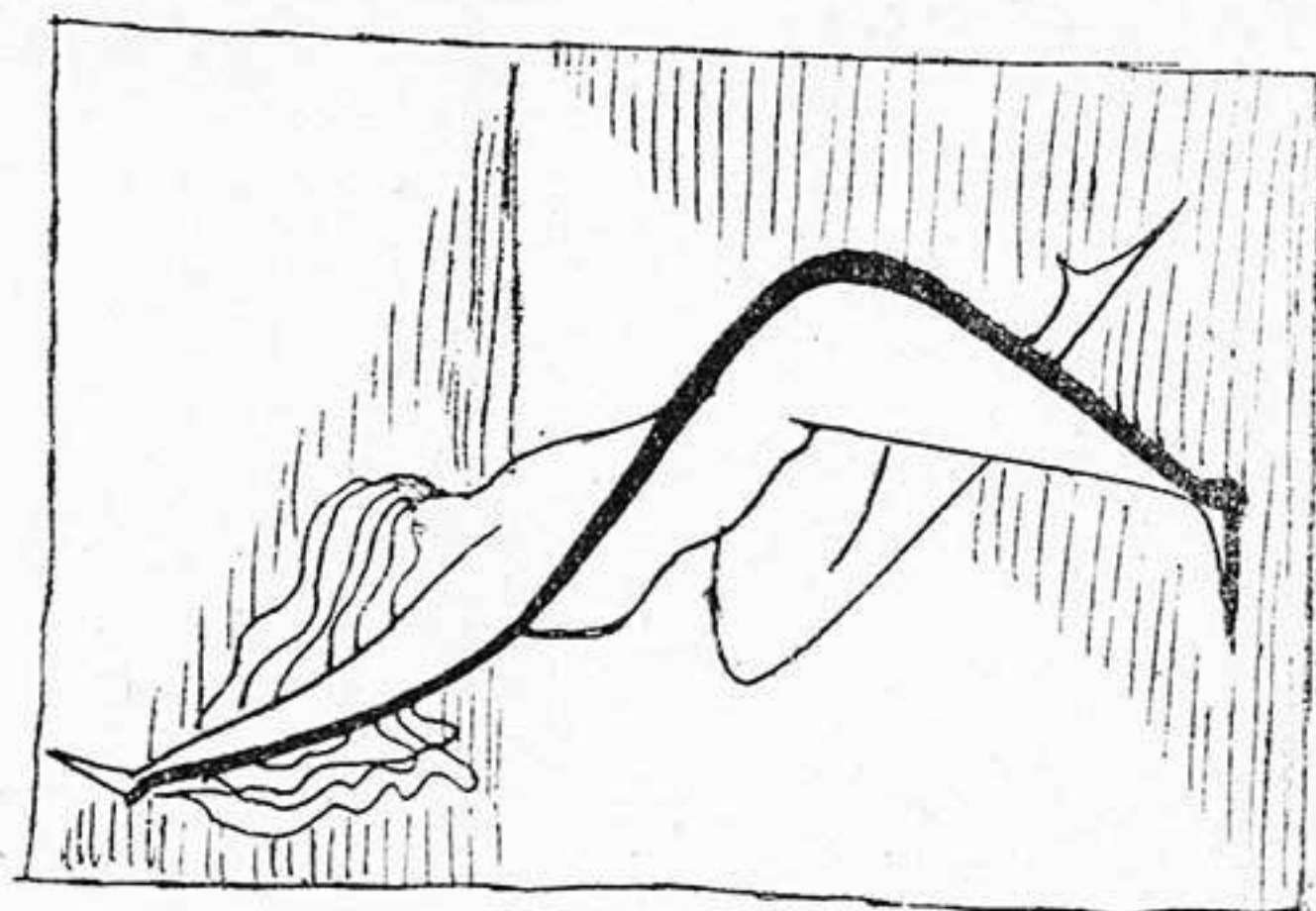
をかけたたりしたら愉快だらうなって思っちゃう。そんな日は楽屋へ帰つてもじっとしてられない。え、今日が丁度そうなんだ。ね、みんなしてあたしをいじめて呉んない？ そう、はだかに剥いてもいゝわよ。ブラジャーもパンティもいらないよ、何がさあ、生れた時はみんなヌードを見られてるじやないか。あたしをね、上半身を縛つて。腕ごとね、目かくしもして頂戴。そいでさあとはどんなにしてもいゝわ。いじめてよ。何さ意気地無し。思い切つてやつてご覧よ。見えないから何をされるかといつてもスリ、ソングよ。ああ誰？ 一寸勇敢ね。いゝわ。責められるって凄く快感だな。もっと強くてもいゝよ。さあ次は誰？ もっともっと強くいじめてえ。

この外に、まだまだ野添ひとみ・泉京子・沢村みつ子・戸倉緑子・杉田弘子等と幻想は続きますが長くなります故打ち切ります。スターを辣し来ったのはスポーツマン一刀齋の真似ではなく共感性を狙った迄です。真のモチーフは日常の生活の間に散在している筈です。尚此のフアンタジアは、サド×マゾの演技・写真・責め画等のシナリオとしても発展し得ると思います。

(了)

人間は誰でも欲のない人はいないでしょうが、私程、或る意味において欲の多過ぎる女もそうざらにはいないでしょう。時には自身で、私って何だろうと疑問に思ったりするからです。全く困ったものです。

私はサド趣味であります、又、他方レスボスの愛に非常に憧れていると書いたなら如何お思いでしょう。そしてロマンチストで少



—告白—

虹のかけ橋

皆川のぶ子

女趣味の女であり、ソドミアの世界に非常に興味を抱いている女であり、差しさわりがあつたら許して頂きたいのですが、セムシの人に非常に魅せられてしまう女であると書いたなら、全く私は何なのでしよう。奇クの愛読者なら、多かれ少なかれ異常な人達（失礼かな）に違いないと思ひますが、その人達にはつきりした一つの傾向があり、私の様な多情

な人は少ないのではないでしようか。でも、はつきり言えることは、マゾ的傾向は薬にいたくてもありません。従つて、サド以外のレスボスにしても受身は苦痛でしかなく、セムシの人に魅せられると言つても、その人の足下にぬかづくなんて事は飛んでもないことなのです。そういつて見ると、私は何だかんだと言つても一番強いのはサジ傾向なのでしようか。あゝ、何だか頭の中が混乱してきそうです。ロマンチストであることは、私の身近かにいる人でしたら誰でも認めることでありそれが応々にして少女趣味的な現われとなつて周囲の人達をして苦笑させることになるのです。でもそれは、美しい物に憧れる人間の本能として適當であると思うのですが、女のクセに（と云う云い方はイヤなんです）男同志の愛情、ソドミイの世界に異常な関心を持つてゐる私——全くそれは不思議に思われる方が多いことではようね。私はいわゆるゲイ・バアなる処へ行つて、実態をこの目で見たいとさえ思うのです。好奇心？そうね、そうなのでしよう。とに角、私は東京のどこのどの辺にそう云つた場所があり、店があると云うことを調べ上げました。笑うかも知れませんが、行ったこともあります。でも、男性同志の愛情の場所に女が入ることは、彼等の最も嫌う氣持を尊重して入りませんでした。（入れて呉れないかも知れませんが）

つい先日、上野の弁天堂の近くで「おねえさん、おねえさん」と云われている男の人に偶然、紹介された時は、（私の妹の知合の相手）本当に嬉しくなっていました。その人は一寸見た丈では普通と何等変りない男の人なのですが（男娼ではありません）「おねえさん、おねえさん」と云われている通り、女役の人なのでしょう。とても物当りのやわらかな人でした。私の様な鉄火的な処は微塵もなく「お兄さん、お兄さん」とXさんに侍ずいて、微笑ましいときえ思いました。もつと何か知りたいと思ったのですが、初めてのことでだったので、そのまゝ別れてしまったのは残念な事だと思っています。普通の女の人は、そういう人達を「いやらしい……」と云って眉をしかめて近寄りませんけれど、私は全然そんな気がしませんでした。何だか、男の姿をした、その「おねえさん」が極く自然に見え、女の形の奥様である私が、いやに不自然に思ってしまった様な、妙な錯覚を感じてしまいました。その気持が通じたのか、又、私を変った女だと早く探知したのか、彼は（いや彼女は……かな）「奥様、私は女でありたいと思っても、男としての生活を強いられる（恐らく彼女？はサラリーマンであろうと思われる）毎日でしょう。息がつまりそうになる時がありますのよ。」と話しかけたのです。私はそういう人達を垣間見る機会はある

っても、話を交わしたのは初めてですので、いささか興奮してしまい、彼女？の満足する様な答が出来なかったことは、返すくも残念に思っています。若し、この記事が活字となったとしたら、これを読むであろうソドミアの人達よ、女の私が貴方達の世界を探知したいと思う気持を御許し下さいね。決してそれは貴方達をあばき出すためではないのですから。強いて云うならば、私の慾深い気持から起る未知への憧れなのですから——。重ねて申し上げますが、これから書くことに差しさわりがあつたらお許し頂きたいと思っています。つまりセムシの人の魅力——。それも私の本領のサジストして、始めてある男に、そのことを話した時男は（彼は今の処、私の奴隷です）呆れて私を見つめました。「奥様の様な美しい方がそんなことを想っていらつしやるなんて……」と云ったのです。そして「恐ろしい方ですね。」と歎いてましたわ、でも、それは仕方のないことよ。美しいものにのみ執着するとは限らないし、醜い人だから醜いものゝみ愛すると云う定義はないのですものね。美しくても、けしの花には猛烈な毒があり、一見、グロテスクな蛇には、あんなにおいしい肉があると同じ様に——。

サジストンとしてのセムシへの責めは、余りにもむごいと思われるかも知れませんが、又、私もそれはとても筆では云い表わすことは不可能な位、幻想的なことですので書きません。（いゝえ未熟な筆では書けませんの）サジストンとして邪道であると怒られるかも知れませんが、私はレスボスの時には、そんな気持が全然起りません。一人のレスビアンとして、全身全霊を持って愛することの出来る女がいたら、私はこの上ない幸福を感じますわ。（それは私の夢の一つでもあります）そうね、年令は二十才位から三十二、三才位の方（余り若い人は戸惑いますし、私の好みではありません）顔は普通であれば結構だと思えますが、慾をいえばマリナ・ヴラディミタいな人（フ、慾張りでしょう）背は私が五尺位ですので、その位の人ね、あゝ、そんな相手がいたら私の生命を捨てゝも悔いらないと思います。まして愛することが出来るなら……。このことは私という女の持たない美しさにあこがれての所以なのです。と云いますのは、私は自分の美しさに満足していませんからなのです。人には「美しい」とか「素敵」だとか、お世辞半分にいわれているものゝ、私の持前の慾深かさからそれに満足出来ないのみならず、私程の女ならその辺にいくらでも存在すると思っているからなのです。一時は誰でも通過する自己愛の時期——。私もその例に洩れず、そんな時がありました。おかしな話ですけど、私の家（生家）に大きな鏡がありましたので、私は家人の目を盗んでは全

裸になり、「いとおしい、おん身よ」と、特別のロマンチックな想いに左右され、バイロンの詩集を口ずさみ乍らギョツと我と我身を抱きしめ、果ては接吻し涙を流してモノ云わぬ鏡の中の我身を責めたものです。或る冬の日、外は雪が積ってそれを見ただけで震えそうな時、私は家人の留守を幸いに、例によって全裸となり時の経つのを忘れ、とうとう風邪を引いて寝込んでしまったこともありました。でも、その時期は習性となることもなく自然に過ぎて、今ではそういう気持は爪の垢程も感じません。考え様によつては淋しいことです。話は横道に逸れましたが、真のレスピアンであるとは自惚れても云えないかも知れませんが、美しい同性に憧れる心は虹の様に、時には淡く、時には強烈に、一生持ち続けることでしよう。

私は幼時より加虐性であつたらしいのですが、例をとれば芸者さん達が（私は深川で幼年時代を過しました。その後、転々としまたけれど）折檻されるのをわざ／＼見に行ったり、学校の前の小山に登り、その頂上（と云つても現在見れば低いのですが、子供の頃は随分高いと思ひました。）で、デン／＼虫をつぶしてグニヤグニヤしたのを、弱そうな男の子の襟首にぬりつけたものです。その時から私は男の子をいじめるが、女の子には優しくしていた様です。（そういうと何だか変

に聞えますね。自分が女なのに、ホホホ）と云つて、別に私は以前も今もそうですが、男の人が憎いと云うのではありません。よく、レスピアンの中には（ソドミアでも然り）異性の顔を見ても虫ずが走るなんて人が多いのですけれど、私に限り決してそんな事はありません。でなければ、いくらなんでも結婚しなかつたでしょうし、子供だって生む氣になりませんものね。只、幼時からの私の性質云々は暫く置くとしても、私が男性をいじめても可哀想だと思わなくなつたのは（その前はいくらかそんな氣になつたことを覚えています）あの忌むべき事件があつてからなのです。それは大東亜戦争華やかりし頃、私が丁度女学校三年生になつた時、学徒動員で田舎の或工場に奉仕していました。あの頃は何かの話の中で「天皇陛下」と云う言葉が出るとキツチリ足を揃え襟を正したものです。そんなある日の昼休み、友達同志の話の途中、余り「高貴の方、高貴の方」と云う友達が（その友達達の知合にそう云う人がいたので、彼女は常にそれを自慢話にしていたのです。）癪にさわり、

「ナニサ、高貴の方、高貴の方って、うるさいのね。そんなに自慢したいのなら私のそばを離れて話してよ。私は目まいがしそうで氣にさわるわ。」

と怒鳴りました。彼女は軽蔑した目付で、

「アラ、ごめん遊ばせ……だ。そう云えば場所が悪いわね。」

と云つて反撥したのです。私も、その日は確に、どうかしていたのかも知れませんが、何時もそんな事は滅多にないのに、その時はカッとして、

「そうよ、場所も相手も悪いことよ。第一ナアに、高貴の方って……。同じ人間じゃあないの。」

彼女は氣色ばんで、

「マア、Tさん、そんな事いつていゝの。」と突込みました。戦時中の軍人がのさばっていた頃の事です。私も少なからずハツとしたのですが、こうなつては引込みがつかみません。

「えゝ、いゝわ、当り前ですもの。高貴の方高貴の方といつても人間だし、私に云わせれば、天皇だつて同じ人間、それが証拠には、私達と同じお米を召上つて、オミオツケだつて召上つてゐるでしょう。」

と云つてしまつて、「アッ、シマッタ」と思ひましたが、もうその時は既に遅く、そばにいた憲兵がつと側に來て鋭い目で私を見、「オイ、T、一寸来い。」

と私の腕をとりました。私は「何ですの、そんなに邪慳にしなくても参りますわ。」

と反抗めいた言葉を吐いた為、殊の他、その

憲兵の心証を悪くした様です。

「何だッ、それは、お前は学生の身でお上を恥しめて」

と云い乍ら片手で「ピシリッ」と平手打ちを喰いました。「アッ」と私は頬を押えましたが、口惜しさに涙も出ませんでした。生れてこの方、人にぶたれたことは父親以外になく、氣まゝに育った私です。それに、その頃は私の自己愛の猛烈な時でしたので、人をぶつても他人には指一本でも勝手な真似はさせませんでした。そんな私が今、見知らぬ只憲兵という丈の男に、人前で平手打ちを喰ったので、氣の遠くなる様な恥しさと口惜しさにその想いを二つの目にこめて、憲兵をにらみつけました。それは当時としては、学校の大事件に違いありませんでした。校長先生は呼ばれ、私の父母も勿論呼ばれました。あまつさえ、親類や身内の者は克明に調べ上げられたのです。(軍隊の名に於て、そういう点は極めてスピーディーに行われました。)今、考へるとお笑い草ですが、その当時、さすが呑氣で物事に余りくよくよしない性質の私もすっかり、今でいうノイローゼになってしまいました。と云うのは、それから半年の間、私の行く所、影の如く私服の刑事がついて来たからです。それは時には「ウアッ」と泣き出した程の焦ら立たしさを感ぜさせました。そして、とうとう私は父の郷里であるT市に

静養の名目で逃れました。けれども、腹立たしくも、そのT市の特高に連絡したらしく、

私が混乱した世界より逃がれたいと、叔母の家の近くにある海岸又はそれに続く松原で大空を仰ぎ、静かに詩集を繙いている時、

「東京のお嬢さん、今日は。勉強かね。ふん——何、読んでいるの、一寸小父さんに見せて、これ、みんな詩かい。」

と云い乍ら見知らぬ男が近寄って来るのです。時には、

「東京のお嬢さん、へへへ、誰か待っているの、手紙は来るかね。」

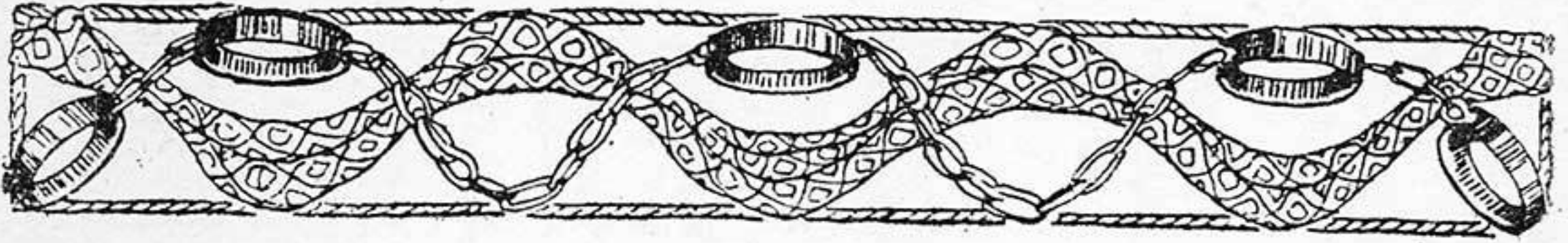
なんて、とても失礼な全く馬鹿げた事を云うのです。しかし私はじっと我慢して、口を聞きませんでした。そして誰も友達を作らない様、氣を配りました。だって、私と友達らしい附合いをする人は、その人の家族達まで調べられそうに思ったからです。恐いといえ、えばそう云える時期でした。私はその時以来今まで持っていた男への加虐の時に感じる同情心(ほんの少しですが)を捨てた様に思います。後で挺身隊として別の工場へ通った時の、風間と純子の事は、それから約二年過ぎてからの事です。今でも、あの頃のやせた自分を思うと、身の毛がよだつ程の口惜しさを覚えます。人間は、生れてから死ぬまで、色々な事がありますものね。これからだって、何がどうして起ることか判りませんわ。又、

わかってしまえばつまらない事です。広い世の中 of 事です。私にアブノーマルな女で、人一倍い慾深い女が一人や二人存在したからといって、何の邪魔にもならないことでしょう。再々、ソドミアを引き合いに出して恐縮ですが、よくソドミアの多情性と云うことが云い交わされて居りますが、同性から同性へと、より大きな期待をかけて求め合うあの切ないばかりの心をソドミアの多情性と割り切るならば、私の慾深い心を心とはっきり割り切って、説明して頂けないものだと思います。自分自身で整理の出来ない氣持、それは凍てついた月光の下で、冷たいリソゴを噛む時、何故となく頬を流れる熱い涙のあの感じです。

【編集長への私信】

皆川 のぶ子

昨日「奇ク愛読者」の会合が、或場所で行されました。座談会だけでプレイは行いませんでした。私は男性のMの多い事に大いに驚きました。(集った大部分は男性でしたので)いろいろと体験談めいた話から、私の為になる事を習得出来た様に思いました。私はサジスチンとして注目されましたが、場馴れせぬせいか、日頃の心臓を余り發揮出来ませんでした。だから皆に「ずい分口が重い」とか、「日頃はおとなしく見られているでしょう」とか、とんでもない事を云われて苦笑の連続でした。(以下略)



アブ・モード・オール・スクラップ

妻に嫉妬されたク性転換ク女性

ナイトクラブの刃傷

今年の二月下旬の土曜日の夜——
パリのモンパルナスで奇怪な事件が起った。

“プレヴリス”（汚職）という現代日本にとっていささか皮肉な名前をもつナイト・クラブのまえで、この家の女給と初老の客がある女に襲われ、男の方が刃物で顔面を斬られたのだが、急報に接してかけつけた警官がしらべてみると、嫉妬の果の凶行だという。こんなことなら何もワザワザ書きたることはないのだが、この下手人は一体誰のために嫉妬したのかと問い糺してみると、驚いたことに、
「勿論それは良人のためですわ」とい

いいながら、女給の方を指した。つまり下手人の女にと

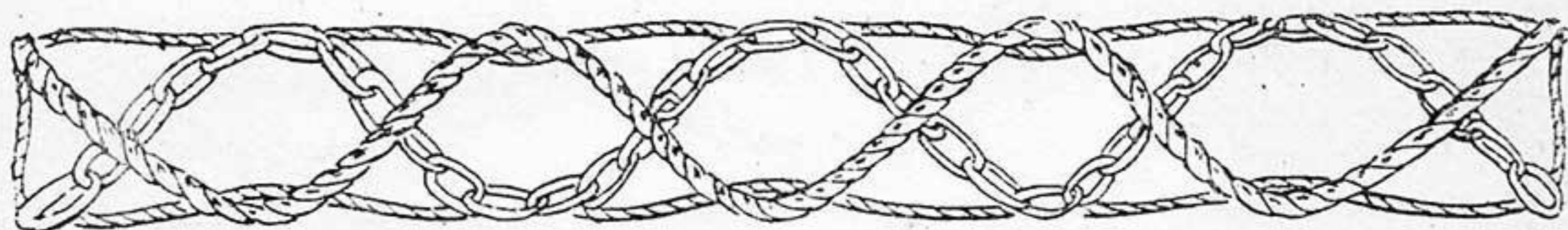
矢 桐 重 八

って女給が良人であって、この良人を執念ぶかく誘拐しようとしていた男が憎いというのである。女が女を良人よばわりするのはチトおかしいではないか、こいつは同性愛かなとなおも追求してみると、同性愛どころかこの女夫婦の間にはすでに二人の女の子まであることが分って、また警官たちを呆氣にとらせた。

この事件を契機に、女夫婦の世にも珍奇な生活がパット世間に知れわたることに相成ったが、一体どうしてこのような一対が生れたのか？

“性転換”の徴候

フランスのブルターニュ海岸の前方海上に浮ぶサン・マリタン・ド・レーというささやかな島——この住民はほとんどが信仰心のつよい漁民だが、かれらはある家のまえを通りかかるといつも怖ろしそうに、



「この家じや、悪魔がいたずらをしている」

と呟やいて、十字をきり、足早やにそこを立ちさってしまふ。他でもないが、この家には二人の子供をもった二人の女がいた、この二人の女のうちひとりはおもう一人の女の良人であり、子供にたいしては父親でもあったのだから。

ジャン・ジュゼロットは十五歳のときに指物職の許でその仕事を身につけ、一九四五年には海軍に志願して水兵となったが、退役して島に戻ると、十九歳で幼なじみのソランジュという娘と結婚をした。一年たつてベアトリスという女の子が出来た。ジャンは生来陽気なたちだったから村の連中に愛されたし、自分の家に仲間を招いて白ブードー酒をのんだりカルタをして遊んだりしたが、指物の仕事がなくなったために仏領モロッコへわたり、カサブランカの米軍基地の労務者となった。一九五一年に次女カトリヌが生れたが、その頃からジャンの身体に異変が起つてきた。時おりひどい憂うつに陥り、いらいらと神経質になる。重いノイローゼだ。

女房のソランジュは、良人の髪が次第に長くなり、アベコベに口や頬のヒゲは生えなくなってくるのに気がついた。それまでは男らしかったジャンの身体がやさしい円味をおびだした。

おどろいたジャンはいつも自分を可愛がってくれる米軍将校を訪れ、涙ながらに身心の異変を訴えた。すると将校は友人の精神科医ピアソンのところへジャンをつれていった。ピアソン医師は入念にこれを診察した上、

「これは君、性の転換がはじまる徴候だよ」

といつて、この傾向は阻止するよりむしろ促進するほうが自然だという考えから、ジャンを入院させ、六か月の間フオリクリン注射を打ちつづけたり、ある種の手術を施したりし

た。

二人のママ

その結果はおどろくべきもので、二年のちにはもうジャンはすっかり女になりきり、同時にノイローゼは消えた。

だが、この時から夫婦生活の愉しみはもう不可能になったし、女の子供たちは病院から戻ってきた美貌の父？ をフシギそうにみつめている。途方にくれた妻は、

「ねえあなた、私たちは、まだ若いのだし、お互いにこれからという時ですから別れましょう。私はもう一ぺん結婚するわ。子供たちは一人ずつ引きとってね」

「そんなことはできないわ」

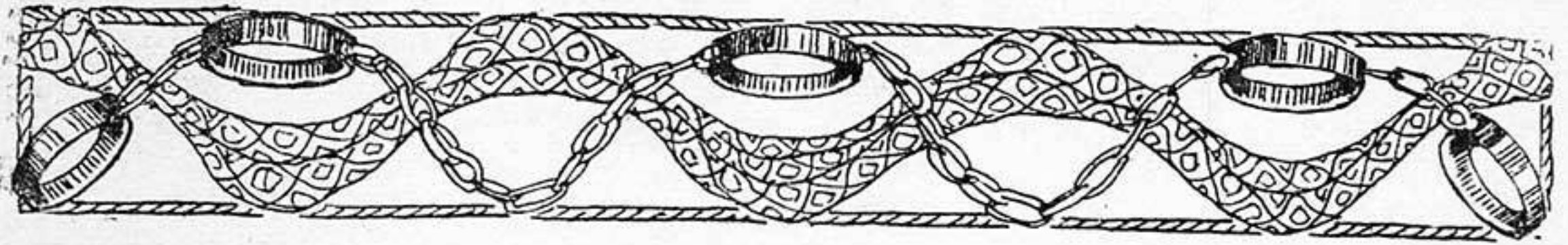
とジャンは女房そっくりの女らしい声で反対した。

「私はいまでもあなたを愛しているし、それに子供と別れるなんてイヤよ。できないわ」

それからジャンは、ラバーの市民裁判所へいって女の服をきる権利をうけた。

最初夫婦は、自分たちの間に起つた劇的な事件の真相を子供に感づかせまいと努力していたが、ジャンが婦人服をきこんで名実ともに女となった現在、このトリックは成功の見込みがなくなった。娘たちはテーブルに向きあっている二人の女をみてトチ狂ったような顔をする。ことに良人？の方が妻よりはるかに美貌なので、娘たちはどうかするとこの方が本当の母のような気がするらしかった。

島へ戻った夫婦はさし当り村の連中に自分らの秘密を感づかれまいとして、一まず妻の実家へ身をよせた。村の連中は顔なじみのソランジュが目ざめるような美しい女と二人の娘をつれて戻ったのをみた。小首をかしげ、



「お主婦さん、あんたの旦那はどうしたんかい？」
ときいたがその都度ソランジュは口からでまかせの口上を
ならべて逃げた。

秘密が洩れた日

そのうちに、秘密のパレル日がきた。

ジャンはフランス海軍に籍がある。で定期的に召集されて
訓練をうけねばならぬ。それでは困るから「性の転換」を軍
当局に届けでた。当局の目には、これが軍籍忌避と映り、事
実調べのために二人の憲兵が島へのりこんできた。

憲兵は出迎えた義父をつかまえて、ジャンに会いたいとい
った。因果なムコ殿をもった義父は肩をすぼめながら憲兵を
部屋にみちびいて、おりから、食卓についていた青衣のひと
を黙って指さした。

そのひとは栗色の髪をふさふさと肩までたらししている。た
じろいだ憲兵が、

「あんだがジャン・ジュゼロットかね」

「ええ、そうよ。正しく云うと、かってそうだったものです
わ」

フン、仲々うまく化けやがったじやないかと憲兵はますま
す疑いを深めたが、目のまえに新しい身分証明書や医師の診
断書や市民裁判所の記録写しをみせられると、事実を承認し
ないわけにはゆかなくなった。

こうしてジャンは、軍籍を離れたものの、かれら夫婦の本
当の受難期は、この頃からじまった。

憲兵出現によって、美貌の女のナゾはとけたと同時に極端
に信心ぶかい島民たちは「へえ、とんだ災禍が島にやってき
たぞ。あのキチガイ夫婦のうしろにや悪魔がくっついてい

にちげえねえ」

といって、誰ひとりとして交わるものがない。偏狭な島民
には、天の呪いとししか映らないのだ。

執念深い四十八歳族

島にいたたまれなくなった夫婦は、今年の一月、遂にパリ
へ出てアパートをかりた。

この大都会なら田舎はどうるさくはないと考えたのだが、
困ったことにパリの物価は高く、とても指物師の腕では一家
を養うに足りない。思案の末、幸い？ パリでも路上ですれ
ちがう男共が好色な目でふり返るほどジャンは美貌だった所
から、これを利用してモンパルナスのナイト・クラブに勤め
ることにした。

異常な夫婦には異常な状況がどこまでもつきまとう。

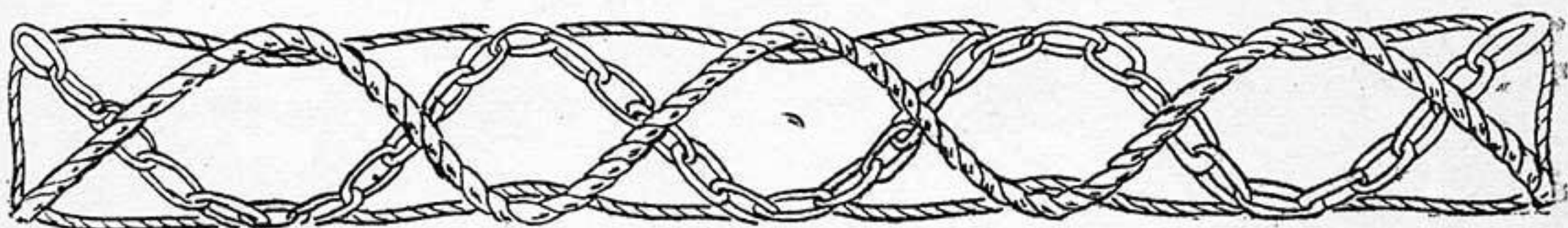
ジャンの類いまれな美貌に云いよる男の数しれず、ジャン
もはじめは、

「だってねえ、私には歴とした良人があるのよ。（妻がある
のよとは云えない）良人はとても嫉妬ぶかいんだから、あと
でどんな目に会うかもしれないわ。だから許してね」

などとゴマ化して誘惑に耐えた。ジャンとしては、世の亭
主が女房にかくれて遊蕩するのは大分違って、どうもそ
んな気にはなれない。第一、永らく身体の関係がなくなった
のちも、ずっと辛抱してきたソランジュへの、これが義理立
てというものだった。

こうして柳に風とうけ流すジャンにまたのぼせ上ったある
四十八歳族の官吏はどこまでも執念ぶかくかの女？ をつけ
まわした。

このため、ジャンは二三勤め先をかえたが四十八歳族はそ



の先まで追っかけてきた。

その結果ソランジュは、自分たち夫婦のうえに打重なる罰の重味にたえられなくなって、遂に半ば逆上気味で良人の勤め先に現われ、シヤンにつきまとっていた四十八歳族の顔にナイフをつきたてるといふ悲惨な結末にたち到ったのであった。（「週刊サンケイ」昭和三十二年五月十二日特大号）

○

（矢桐註）文中、「……良人の方が妻よりはるかに美貌なので、娘たちはどうかするとこの方が本当の母のような気がするらしかった……」と、あり、二枚の写真が掲載されているが複写が難しいので読者にお目につけられないのが残念だ。夫婦と娘二人が写っているが、確かに、良人の方が、はるかに美女？である。

文から察すると、この男は、極く自然のうちに性転換の徴候が現れてきたらしいが、事実とすれば珍らしい。

サディズムの新藤監督

女優をいじめぬく監督といえ、新藤兼人監督がそうである。これまでコンビみたいによく起用した乙羽信子「縮図」「どぶ」「銀心中」などで、一種サディズムに近いいじめられ方をしている。

「縮図」の乙羽は泣き、わめき、歌い、女中から芸者と流転の女を演じ、「どぶ」では頭のいかれたパン助にふんし、目をむき、口をとがらせ、格闘を演じた。「銀心中」では吹雪の中をカサひとつさずにさまよい歩かされ、雪山の山腹に顔を雪にうめて、長い時間ねかされっぱなしにされた。

しばらくまえ、日活で撮った「流離の岸」では、乙羽に加

えて北原三枝までが、いじめぬかれるハメに立たされている。例のごとく取っ組み合いを演じたり、雨の中をハダシでびしよぬれのまま歩かせられたり、まだまだ数えあげたらきりがない。

監督の女優に対するサディズムを診断する一つの例証だがもちろんこれは、画面に現わされる演出面での話である。

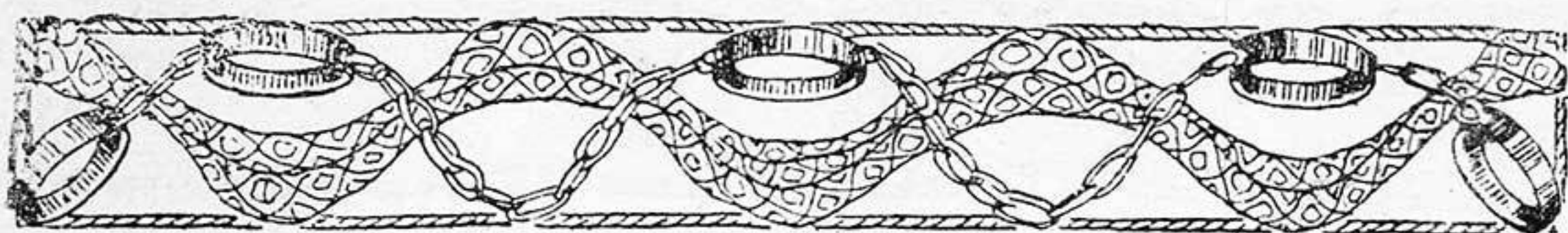
（「娯楽よみうり」昭和三十一年九月十四日号）

○

（矢桐註）なるほど、そういわれてみれば先頃封切された、森赫子原作の「女優」という映画も、女主人公が虐められる映画であった。新藤兼人監督は、虐げられた女性たちをヒューマニズムの眼をもって描いているのだろうが、同系統の作品がこのように並ぶと、やや偏執の趣きが感じられないでもない。

頬を切ったモモ切り魔

東京のある街にサービス軒という床屋が開店した。主人は二十四、五の美青年、いたれりつくせりの客扱いに押すな押すなの大繁盛、女客の多いのもこの店の特徴であった。サービス軒には壁に舌代がはりつけてある。大いにサービス本位をうたっているが、そのなかの一カ条に「誤ってカミソリでお客様の顔に傷つけたときは、深さ一ミリ、長さ一センチのキズを基準として金一千円也の率で損害金をお支払いたします」と書いてある。客にしてみれば、これほど良心的な床屋は日本中に一軒もないというので、ますます店は繁盛するばかりところが段々評判が高くなるにつれて、なんとか二センチばかり傷をつけさせて、競馬のソンを取りかえそうという不



心得な客もできてきたりする。わざわざクシヤミをしたり、アクビをしたりするのだが、主人もサルもの、なかなか、その手に乗りそうもない。いわば神ワザにちかい腕前のはずだが、いかなる天魔にみいられたか、ある日のこと〇〇小町のウワサも高い麗人のスベスベしたホッペタにチヨイとキズをこしらえてしまった。即座に、規定の千円を支払ったが、この事件があつて一週間もたたないうちに、またまた妙齡のレディーの顔に大きなキズをこしらえ、こんどは三千円の損害金か支払うという始末。それ以来、妙なウワサが立ちはじめたので、警察が、それとなく身元をしらべてみると、この男むかし新聞でさがれたモモ切り魔の更生した姿だった。

警官の尋問に「ヘイ、あの子のホッペタのふくらしたところを見ているうち、あらぬものを連想いたしましたして、つい昔のクセがでてしまいました。なんともハヤ」とペコリと頭をさげたというハナシ。（「小説倶楽部」六月号峰岸義一）

同性愛問答

同性愛は治せるか

【問】二十七歳の独身男子ですが、いわゆる性的倒錯症のような気がするんです。それというのは、異性に全然興味がわかないというのではなく、性衝動にかられることもあるのですが、その反面、同性の、筋骨隆々たる体の持主に変な興味をもったりするんです。結婚を前にして、これじやいけないと自覚し、何とか正常にしたいのですが、どんなことを心がけまた、どんな治療方法をとったらよいかご教示ください。

【答】普通の人間の性欲に反して、男性を愛し、女性でありながら女性を愛するというのは、本当からいえばすべてが性

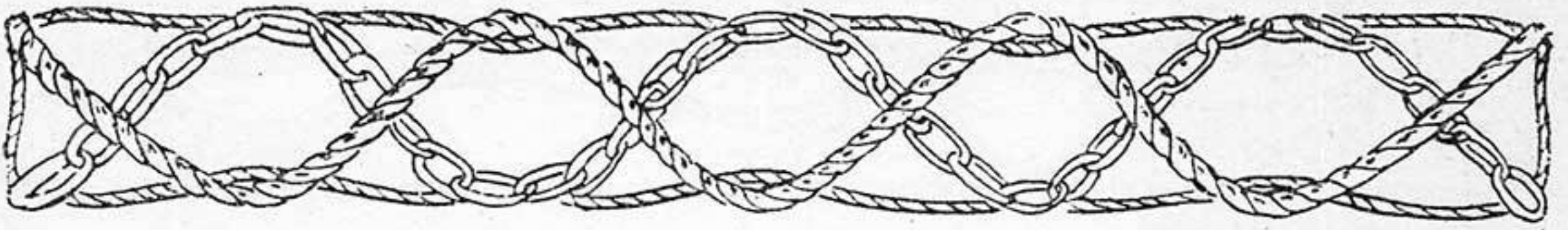
的倒錯というべきでしょう。しかし男女ともその心の中に、いくらかは同性にひかれる気持のあるのは一般にも考えられることです。ことに思春期のころには、この気持がとくにはなはだしくて、日ごろ親しく接する同性の友だちとか、あるいは教師に愛慕の情をいだくのは、その例が少なくありません。

人間にこのような気持の起る理由については古くからいろいろと研究されているのですが、一八六二年にウルリックスは同性を愛するものは両性体（半陰陽）の一種だといひ、一八九四年にルマタンジは、男女ともそれぞれの中に異性の芽が潜在するからだと言っています。説の当否はとにかくとして、同性を性愛する不思議な気持をこのように学者たちは古くから研究しているのです。

同性を愛する気持にも、同性にしか性的気持がまったく持てないという極端なのがあり、これが真の性的倒錯であつて一種の精神病にほかなりません。一般にわれわれが周囲に見る同性愛というのは、異性も愛することが出来るけど、同性にも強く気を引かれる種類のものです。あなたも、もちろんこの部類です。

このような心持を抱くようになるのは、すべて心理的のものであつて、体質、特にホルモンとの関連性はあまり考えられません。たとえば筋骨隆々たる男性らしい男性は、男性ホルモンの分泌も多いわけですが、このような人が同性愛に陥ることがあり、しかも受身の立場になるのです。その例でよくいわれるのは弁慶で、あの鬼のように男らしい彼が、義経に対して女性的立場になつていたといわれています。

さて、その気持に陥る原因ですが、幾分かはその人の性格にも関係するでしょう。しかし多くは環境と動機です。性欲



が非常に盛んな男性だけの集団で同性愛はしばしば起りますが、その時の立場が男女どちらになるかは、チョットした動機からです。そしてその時にうけた印象は、その人を以後その立場にしています。

性的のことは、これが育つ分化の途中でどうにでも影響されるもので、これが強く印象づけられてしまうと、本道に戻るのが大変なことになります。

ですから、あなたの場合も、いけないことと思ったならば極力避けることです。まだ行動に進んでない今のうちに、この努力が何よりも大切です。（「娯楽よみうり」昭和三十二年五月十日号）

○

（矢桐註）このような質疑応答は近頃では珍しいものではないが、このような記事が多いということは、いかにも現代の世相を反映していると思つたので載せてみた。この回答は医学博士金子榮寿氏がしている。

明るみに出た性の饗宴

逮捕された名指揮者

オリンピックが開催されていたところが初夏の候だから、三月ともなればオーストラリアには初冬の風が吹きはじめる。その三月の冷たい風に吹きさらされながら、八人の刑事が、シドニーのマスコット飛行場に網を張っていた。かれらは、世界的に有名な作曲家でありオーケストラ指揮者のユージン・グッセン卿（62）を待っているのだ。卿は数カ月の欧州演奏旅行をおえてその朝オーストラリアに帰国することになっていた。

ただしことわっておくが、八人の刑事はグッセン卿を歓迎の意味で出迎えたのではない。いまわしい不道德事件の関係者として逮捕するため外ならなかった。

やがて飛行機が着いた。予定通り降りてきたグッセン卿が、たちまちいんぎん無礼な八人の刑事によって別室に連行されたことはいままでもない。そうして刑事たちは、この「サー」の称号をもつ高名な指揮者のチョッキの下から、十分満足すべき証拠品を押吸することに成功したのである。なんと紳士中の紳士たるべきグッセン卿は、このこともあるうに左のような品々を携行していたのだ。

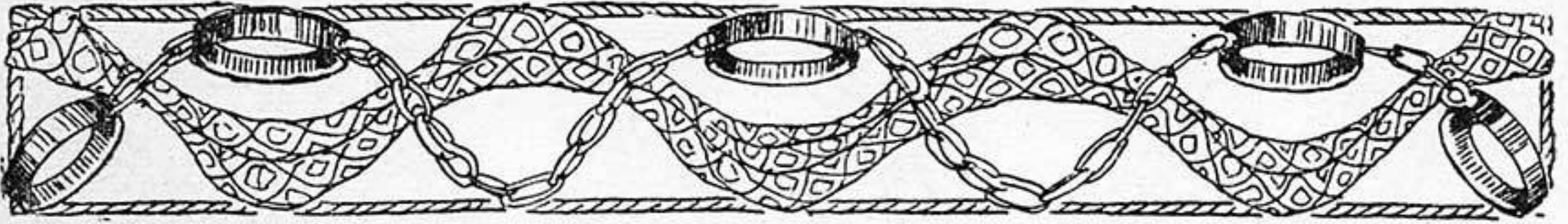
千百枚のエロ写真。三冊のワイセツ本。インワイなゴム製品四個。三巻の桃色フィルム。……

美しい犠牲

シドニーはオーストラリア随一の貿易港であり軍港でありしたがって一種の国際的歓楽街をもっていることはひろく知られている。とくにキングス・クロスという繁華街のあたりは、輝かしいネオンの色よりも、もっとあざやかでさまざまな秘密の快楽にみちている。どんな官能の冒険も、どんな種類の売春も、あるいはどんなに刺激的なロマンスも、ここに行けば簡単に買えるのだ。

だから当局としても、少々のことくらいで驚くことはなかった。が、いまから約六カ月前、警官の腕にすがって救いを求めてきた十九歳の女の告白は、がぜん当局の神経を緊張させたのである。アンナ・カリナ・ホフマンというその女は、ほとんど発狂しそうな有様でうったえた。

「私は殺されます。悪い神様のいけにえにされるのです！」
もっとも、こういう年若い女性が、チャンスを求めてシド



ニーにやってきて、あげくのはてに街の女に転落し、当局に救いを求めることはよくあることなので、ふつうなら当局もそれほど真剣にはならない。ところが彼女の口からは、シドニー社交界に君臨するソウソウたる知名士の名がぞくぞくと吐き出されたのである。その中にユージン・グッセン卿、女流画家のロザリー・ノートン女史、最も勢力のあるジャーナリストの息子ゲービン・グリーンリーズの名前があった。「この人たちが、私の血を吸いとうとうとしました……」十九歳の娘アンナは、社交界の名士たちの名を悪魔を呼ぶような戦リツとともに吐き出しつづけた。

性の教祖さま

アンナの告訴が恐るべき事実であればあるほど、当局としてはウカツに手出しのできぬ事件であった。何しろ相手は、シドニーの、いやオーストラリアの有力者ばかりである。当局は慎重の上にも慎重を期して内偵を進めて行った。それにしても、女流画家ロザリー・ノートン女史は、以前メルボルンで開いた個展の作品があまりにワイセツであったため罰せられた経歴があり、ゲービン・グリーンリーズ氏は麻薬常用者としてあげられた前歴の持主といったふうに、この二人がその道にかけての礼つきであることは、当局の捜査を容易ならしめた。

かくて、当局苦心の捜査のカイあって、ついにあわれなアンナの告白が、聞きしにまさる退廃と不道德の事件であることが明らかにされたのである。つまりロザリー・ノートン女史を教祖さまとして、まことにみだらにして残忍なる性教狂騒曲が、社交界知名士のあいだでかなでられていたという次第だ。

あらゆる美衣美食に飽満し、ゼイタクにもあきた連中が、こうした一種のワイルド・パーティーにうつつをぬかして、刺激の上にも刺激をかさねる様相は、しばしばこの国でも見られるところだが、この場合は不道德を通り越して許すべからざる犯罪といえた。

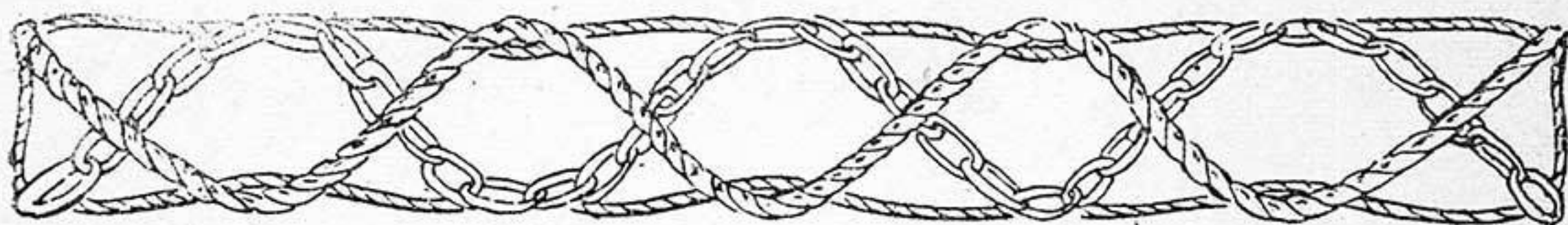
当局がロザリー・ノートン女史の豪華なアパートに踏みこんだ時、一室は完全に悪魔的な装飾品でかざり立てられていた。また、一方の祭壇には、銀の燭台、聖(性)水ハチ、象徴的な仕掛け絵、しやれこうべ、魔杖、仮面などが、物々しくしつらえてあり、官能を甘くそりたてるような香のにおいもたちこめていた。さらに一方の壁にはお教祖さまロザリー女子のあやしげな巨大な肖像画と、あわせて異様な偶像がかかっていた。

血の儀式

「われわれは、その奇怪な聖(性)堂で行われた儀式というものの内容を、くわしく発表することはできぬ。かく公言をはばからねばならぬ理由は、世間を悪く刺激することを恐れるゆえである……」

とは当局の言であるが、すこしく儀式の内容を『レイブ』誌の伝えるところによつてのぞいてみよう。

儀式は黒い祈トウ師風の衣装をまとったロザリー女史が三十八歳にしては弾力のある裸姿をみせるあたりから次第に狂的にインワイになった。つづいて会員男女ことごとく、黒い衣装を脱ぎすてた、一羽の雄鶏のノドが鋭利な刃物でサツと切られ、そこからほとぼしる血を会員の一人一人が手ですくい、祭壇の上に素っ裸でふしている教祖さまの白いハダにふりかけると、すでにその場のふんい気は名状しがたいシユ



ラ場と化した。歌ともうめきともつかぬ声が低くコウコツ状態の口々から漏れはじめる。……

ざっとこんな具合だが、非常にいけないことに、新入会員の年若い男女が、この忘我の儀式に加入して、墮落の美酒に酔いしれるのである。そうして、どうやらこのあやしげな儀式は、中世ヨーロッパ、ことにパリの乱リンをマネて、処女虐殺のおもむきを呈するかのごとくであった。アンナの恐怖の訴えが、このあたりの事情を暗示している。

気違い病院へ

以上、あたかも現在の狂気と文明社会の病状を象徴するかのようないきさつはシヤボテンを祭神としていたグループ、ガイ骨を守り神としていたグループ等々、ほかにも沢山あって、いまさらのように当局をリツ然たらしめたものである。

そこで最初のグッセン卿に話を戻せば、卿が所持していた数々のフィルムや写真等々はこれらの性教グループのあいだで製作されたものという当局の見解であったのだ。しかしグッセン卿の顧問弁護士シヤンド氏は、「卿がこれらのワイセツな品々を所持していたのは、かれらの強制脅迫によるものである。かれら不道德グループの者たちは、卿の名声を傷つけるために、無理矢理卿を共謀者にしたのだ」と弁明これつとめている。

いずれにしる当局は、事件の内容をあまり公けにしない方針をとったし、それというのも社交界有力者に対して所セン弱い立場にあったからで、グッセン卿は罰金わずかの八百ポンド（豪州ポンド約八万円）ですんでいる。とくに愉快なのは、お教祖さまロザリーン女史ほか性教グループのスタッフ

に対して、

「これは到底常識では考えられぬことである。よってもって、女史以下精神異常と認めるほかない」という判決が下されたことで、じっさい女史は一応精神病院行き、その他は自宅療法という措置がとられたのである。つまり一人も刑務所にはつなげなかったのである。

粹な取りはからいというか、皮肉な判決というか、それとも当局の苦肉の策というべきか、けっきょく現代の狂気のサタが生んだ事件の落着が、精神病院であったとは、これまたきわめて現代的というほかない。

○（「週間新潮」昭和三十二年四月一日号）

（矢桐註）日本でも桃色の新興宗教が、時々新聞の三面にぎわすが、宗教とセックスが結びついて問題をおこすのは洋の東西を問わない。聖（性）の儀式の内容がくわしく述べられていないのが残念だが、どうせ人間の頭で考えること、私どもの空想するところとたいして違いはないと思う。しかし、それが空想をはなれて現実に実在するとなると、なんとリョウ奇性を帯びてくることか。

全くこの報道には驚く外ないが、それは、これが現実に行われていたということからであって、空想の産物としては、即ち、小説や創作の間では、こうした趣向は、さして珍しい題材であるとは云えない。私たちの潜在的な欲求が空想という形で現れる間は、単なる話題として見過されるのであるが現実に存在したということは、彼等グループが総て著名人であったということと共に、考えさせられる事件である。

續・潰滅の前夜

へ「潰滅の前夜」(私は悪いことをしません)は本誌31月7月号
 並に8月号に、「続・潰滅の前夜」(晦冥の悲歌)は32年3月号
 に「同じく」(惑乱の犠牲者)は32年4月号並に6月号に掲載

土 路 草 一

一、鞭の愛人

可奈子は共に捕獲された乙女達数人と一緒に鎖で連結され、丁度
 羊や牛を整理する為に作られた柵道そっくりの、金網で両側を枠取
 っている一帯ほどの幅の家畜通路を追立てられていた。

「早く歩けッ」

さも憎々しげな疾呼の聲が無慈悲にしたかと思うと、鞭が空気を
 をきって振り下される。新しい家畜達は、余りにも急激な境遇の変
 化に心も動揺して、懸命に駆けようとした。が、しかし、始めて纏
 わされた家畜衣裳の一つ、短い足鎖で、機能の揮えない悶えを見せ
 た。

可奈子のすぐ前のクリーム色のねっとり艶のある肌の女体が、
 足首を絡めてつんのめるように跪き、その情性で、支えることの
 出来ない後手の肉体を激しく転倒させた。可奈子は周章で踏みと

どまろうとしたが、時すでに遅く、鎖に拘束されて儘にならない
 が仲間の柔い肌理でたたらを踏んで這いつくばってしまった。あと
 に続いて次から次へと、連結された鎖は、文字通り連鎖反応を起し、
 類は類を呼んでばた／＼と将棋倒しに床に鈍い音をたてた。

「愚図女等！何をしとるんだッ」

忽ち、痛烈な足蹴と鞭が折重なった裸像の上で舞った。

「あつ、ああッ！」「う、ううッ！」

捕えられるまでは、手厚く衣服で保護されていた柔肌の上に泥靴
 が踏みにじり、ところ嫌わず、面白半分叩き、突き、蹴りまくる。

乙女達は恐怖で感覚を霧散させて、立上ろうと跪く。が、それ／＼
 の勝手な行動は連結した鎖が許さない。一人が自分だけ立上ろうと
 しても前や後の者が倒れておれば、連鎖が邪魔をして中腰から膝を
 伸せないのだ。だが、それと知りながら、引卒者達はその家畜にも
 鞭を揮う。家畜は自分の立場と努力を訴えようにも言葉を持たない。

恨みは結局、立上らない家畜へと注がれる。

「貴女の為に私は鞭打たれてるのよ、何してるの？ 早く立ってよ」

そして、肌を裂く痛みは慇懃も思いやりも消し飛んでしまい、強い憎悪に変わってゆく。

「立って！ 弱虫！」

不自由な足で鎖をじやらじやら鳴して友達の腰を蹴る。家畜同志の憎悪。それこそ調教師達のつけめなのだ。

嫉視、媚、それは女特有なものではあるけれど、それを更に亢進させて摩擦を殖やし、互いに競争心をあふりたて、主人に銜う家畜に推進させてゆくのだ。かつて都会の街角で、それ／＼人目を見張らせていた優美な女性達は哀れなシルバを踊って、異国人の眼を楽しませていたが、やがて隊列を整え終ると又追われて行った。

通路が切れると調教馬場であった。

円形の室内運動場のような広々とした床は随所で盛上って小高い丘を作り、逆に又、急坂で凹んで谷間を形成している。

競走路らしいものが一応区劃されてはあるが、惰円で廻るという普通の形式を超越した様々の曲折を持っていて、その途中には丘や谷や濠が遮っていた。

室外だったら通常芝生になっている場所には、奇妙な運動機械が置いてある。そして幾匹かの家畜達が肉皮の組織を崩して、弛張の体操をしている。段違い平行棒らしい器具では、腹を下にしてハシモックのように垂れ下った秀麗な肉体が、幾秒かの間を措いてぐいと手足を突張って半円に盛り上る。棒の間隔が縮まるように傍で操作しているのだ。その儘で垂れ下っていると棒が行き違ってしまうので、手と足が背で交叉して、附根が激烈に彎れるのである。家畜は氣力を絶え／＼に使い尽して、手足に軀を托し持ち起さねばならない。

鉄棒では足首を括られた家畜が逆吊りになっている。

「いち／＼にっ／」

調教師の号令で、尾を持たれた蛇が鎌首を抬げるように首を一定の高さ迄抬げる。そして、ガクンと力を抜いて伸びる。その苛烈な運動の反復なのだ。

調教とは素敵なものだ。最初は直ぐ失我の境に陥ってしまったものが、徐々に耐度を増し柔軟な肉質筋骨に育ってゆく。

「お願いします」

引卒者は可奈子達の尻を蹴って一列に坐らせると調教師に納品書を渡した。

納品書

No 423

管理部調教課殿

仕入部審査課印

昭和3×年12月×日

下記の通り納品致しました。

品名	家畜番号	数量
特殊家畜	R165~173	8
別紙各匹の調査書添附		

調教師はウエーヴした漆黒の頭数を眼で数えて、「OK」と、さ／＼とサインして受領書を渡す。

「今日のは粒が揃っているでしょう？」

受取って胸のポケットへ紙片を蔵いながら仕入部員が云う。

「そうかな？、一応当ってみないことにはね」

調教師は疎みきって首垂れているミルク色の列を、ぐるっと見渡

してから、手前の富士額を鞭柄で突き上げる。

「顔を挙げるんだ！」

愁を宿した日本風なフエースが、おどろくと真面に見れぬ怖れで清眸を伏せて優貌を起す。

「ふうん？ 割合と唇が良いな」

受け口と云うか、ほんの僅かに下唇がつき出っていて、結んだ口許が半月に円い線を出している。それがいささか冷やかな感じの容貌を救って、こよない魅惑を発散させているのだ。

「お前の恋人にベーズさせてやる」

え？と不審気に瞬いた眼前に革鞭を垂らして調教師は、

「舐めろ！ この鞭は、これからお前とは切っても切れない縁を持つのだ、お前の肌を愛しんでくれるのだぞ、だが、他の統肌や餅肌とも随分昵懇にして来たし、これからだって、お前オンリーと云う訳にはゆかないのだから、まあ、ドンファンだけど……」

可愛い紅唇が屈辱にひくくと脈打つ。

「嫌なのかい？ 撫で廻した肌の数は解らないくらい汗と脂が浸みこんでいるのだから、滅法良い味と香りがするぞ、ほら！」

唇へぐつと押しつける。清らかな家畜は思わず顔をそむけた。

「そうかい、私の肌も撫でてくれないで、ベーズなんて、あんまり情が無すぎるって訳かい？ そりや済まなかったな」

勝手な弁を並べて赤ら顔の男は鞭を大きく振りかぶった。

びしっ！ 黒い細長い恋人は新しい家畜の背肌に歓喜の響きをたてて絡みつく。

「あ、あっ！」

残酷な愛撫に乙女は悲鳴を吐いてのけぞる。

「次は、おっぱいを撫でたいってさ、そらっ！」

びしっ！ 狙い違わず、微瑕もない充ち張った上乳部に愛人の鞭がまつわりつく。

「今度は腿がいいとよ」

「あ、あっ！ ああっ！」

ぴったり合わさった純美な腿に、赤い痕跡が印される。

「お次は腰が御所望だとさ」

真白な躰が前後左右に揺れる。のけぞれば前、伏せ身になれば後、右を隠せば左へと。練達した鞭は空所を狙って、自在に打ち捲くる。麗身は呼吸を乱し、ぷつ／＼と汗の玉を浮べる。そして唇の中から悲愁の絶叫が尾をひく。やがて、躰の揺れが止った。避ける氣力を失った肉体は、ぐつ／＼と無防備で攻撃を甘受する。鞭の当る度に全身が力を張って痙攣し、叫びが呻きに変り、ぎり／＼と口惜し涙を噛み殺す。

「はっはっ／＼／＼」

と傍若無人の哄笑を拉がれた美形の上へ浴せて、

「これで、この鞭の愛情が解ったろう。さあ、キスしてやるんだ。こんな弱い家畜ですけど、貴方のお氣に入るように努めますから見捨てないで抱きしめて下さい。末永く馬鹿な家畜の肌を撫でて下さい。……と心を籠めてな」

日本の美貌は眉宇を寄せ、荒々しく息づきながら、雲のように湧くレジスタンスを押えて、只薄黒い皮に唇を当てる。

「馬鹿野郎！ 舐めるんだ」

調教師は口の中へ押しこむ、家畜は夢中で頬張る。

「噛むんじゃないぞ、よし！ よく味え、どうだ、お前の背中や腿や腰の味ってのが解ったか？」

塩味が舌を流れた。幾匹かの無垢な美しい女達の汗の味、若い凝脂の味、その一匹である美畜は今や惑乱の中でその味を味った。

二、蝸牛競争

甲二十一号の心は憤怒で沸立っていた。

余りにも残酷、余りにも非業、次々と展開してくる、このむごたらしい光景に、胸の内は煮え沸っていた。

裸になることも、敵に身を任せることも諜報員としてはすでに、この任務を受けた時から覚悟の上であった。だが、真の恋はしてはならないし、無情非情と罵られようとも自分の生命は保っていて情報 は確実に送らねばならない。が又その反面、どたん場では自らの手で毒を呷らねばならない事もあるだろうし、殺人者になることも遅疑してはいけなかった。

その為の薬も現に身に着けているのだ。(一糸纏わぬ体で、何処に隠しているのか？ 読者には不審かもしれないが、暫く伏せて置くことにしよう。) だが、何の罪咎もない、純真無垢な女達の、この惨状は何としたことであろう。彼女は自分の身を顧みることを忘れようと思った。そして、努めて冷静に、興奮することなく相木諜報員と打合せたことを手落なく実行することだと心に云いきかせた。

「これは今日の獲物の中では良品だな」

可奈子の前に立った調教師は顎をしやくって云った。そして脇へ廻って、靴先で臀部を蹴り、腕の附根に鞭の柄を突込んで抉り、盛上った肩の肉を摘み、哀痛を洩して伏身になった背を踏みつけて、二の腕の柔かさと形を見た。続いて今度は、ベルトと床を結んで腰を上げ、手を禁じ、手錠をベルトから離し、後手の儘、前へ引く。良品は首を股の間へ突込むようにして前のめりになる。腕は屈折の限界、背と五十度位の角度を示して直立する。調教師は手錠を引張っている鎖を前の床へ留めた。丁度、手を背中へ突立てて、お辞儀をしている恰好である。

異国人は、その動物的なポーズの周囲を繞って筋肉の張りを調べ

る。

「君、その鎖を踏んでみてくれ」

助手が、手を引張っている鎖を踏みつける。弦は更にぐいと張っ

て、白い動物の関節が鳴った。

「う／＼う／＼」

新品は肩の痛さに麗貌を充血させて呻く。

「うん、こいつは大分柔いぞ」

そうだ、諜報員は忍術者めいた身軽さも要求されて訓練を受けてきたのだ。男は腰を撫で擦っていた手を脇腹へ移して揉み始める、擦りだ。

「うっ／＼」

美畜は途端に身を縮めようとする。が、肩胛骨に激痛が走って

「あっ／＼」

と力を戻す。男はそんな悲鳴を楽しむかのように指を小まめに動かす。

「うっ／＼ あうっ／＼ ああう／＼」

可奈子は痛さと擦ったさに、じっとり脂汗を滲ませ、昏迷の唇を噛んで唸え続けようとする。調教師の眼は嗜虐の輝きに一層冴えて、家畜の筋肉の動きを観察する。動物化させた美女の艶やかな肌と肉の耐痛活動を冷やかな眼で見守る。

「苦しいのか？ お前は家畜の癖に人間として生活して来た。大きな罪だぞ！ 二十年間違った生き方をしてきた。即ち、二十年間罪を犯し続けてきたのだ。法は正しく生きる者を護る為にあり、刑は不正な生き方をした者、罪を犯したものを制裁し矯正する為にある。不正な生き方をしたお前は当然、刑を受けなければならぬ、だが我々の慈悲は、お前達を制裁しようとはしない。正しい生き方を教え、正しく矯め直すとするだけだ。これだって、お前達を苦しめているのではない。お前達の家畜としての用途を調べているのだ。お前達が苦しいと思うのは人間心だ。家畜にとっては当然の処置だぞ。他の奴も聴いているな！ だから、お前達は犯した罪を自覚して、本来の家畜に戻るよう努めることだ」

肩を慄わしているのもいる、肩を波打たせているのもいる、腿がちくちくと床を打っているのもいる。選りすぐられた麗しの女身達は、一様に身の毛もよだつ思いに首を垂れていた。

「お慰さみに蝸牛競争をやらせてみようか？」

調教師は、暇らしく戻ろうとせず見物している引卒人達を顧った。

「いいですね。今日は煙草を賭けることにしましょうや」

「よし、それでは、すぐ選り給え」

それ／＼は自分の賭虫を決めようと怯えている麗しい家畜の列に群がった。可奈子は突転がされ、俯伏せにされた背に金属の荷物を背負わされた。重さは十数貫は確にあるだろう、ずしりとした重量感が背骨を圧迫して、乳房が床で潰れるように押された。足鎖が締められ、間隔のあった足首は錠だけで密着する。

「競争路を一周するのだ。ゴールは出発点だ。立上ることは許されない。その姿勢で這うのだ」

立てと云われても、これでは立つことは覚束ない。立った処で足首を括られている以上歩く訳にはゆかない。と云って這うにしても揃えさせられた膝を、平行に手操ぐりこみ伸ばすだけの動作でしか前進することが出来ない。正に重い殻を背負った蝸牛である。

「一着になった奴には水をやろう。ビリはその証明に、のろま」と烙印してやる。」

一着に与える水は兎も角として、ビリの焼爇の罰にはぶる、と麗身を慄わせた。女の生命である顔に烙印を押される。今迄繰展げられた光景から推して、彼等は平気でそれを実行することを知り始めた鮮麗な家畜達は、人一倍誇っていた容貌を焼き爛されることに、強烈な本能の畏怖が走った。

「用意！」

ぴしっ／＼ 鞭が床で鳴った。

優美な姿容は一齊に這い出しはじめた。

ずるっ／＼ ずるっ／＼ と、むっちりした白腿と、すらりとした脛を屈伸させて婀娜やかな肉体を進める。その度に豊満な臀部が小山のように盛上り、なだらかなスロープになる。

「もっと膝を深く折るんだ！」

「爪先を立てろ！」

賭主達は、自分の賭けた蝸牛にまつわって声を荒げる。

服飾研究生も婦人記者も負うたことのない荷重で、肩の肉色をなくし、喉笛を忙わしく吹き鳴しながら、一屈一伸、惨めな恰好で匍匐する。今までスカートの裾を小粋に飛えしていた膝頭がざらついたコンクリートで擦れ剥けて、赤く滲んでくる。前方に丘が見えて、コースが登り坂になった。家畜の息使いが俄然荒くなり、それについて行動が鈍くなる。

「もっと顔を起せ！」

賭主の靴が女記者の横面を蹴る。乳房が千切れるように擦れ痛んだ。汗がぽた／＼と腹部へ滴たり、通跡に黒いシミを残してゆく。

特種を漁り、人の世の悲劇を糧にしてきた女探訪記者にとって、これ程、身につまされる記事の種はないであろう。自分の悲劇、それは何物にも勝るスクープに違いないのだが、併し、その反撥も義憤も、記事となる前に彼女の心は自分が家畜であることを肯定せざるを得ないであろう。抱いていた社会的反抗は泡沫のように消え失せて、やがて桎梏の下に呻吟する家畜の生活を根っからの生き方のように心に記事することであろう。

首筋を厳しく打たれて、服飾学院の生徒の丈長い髪が頬で乱れる。あどけない顔は満面で息張って峻酷な勞怱に耐えている。彼女にしてもそうだ。自分の今迄の学業の如何に徒勞であったことが思い知らされることであろう。家畜にとって服飾は考えるだけでも無駄なのである。寧ろ、今後は自分が纏い飾りつける手錠や足鎖をデザインした方がいい。

この調教馬場の

真上、即ち神宮外苑に思い出を持たぬ女は数少いであろう。胸一杯の感激を高らかに歌いあげる野球場で、黒髪を風に靡かせながら手を打振り小躍りして試合に熱中したこともあったろうし、ショート・パンツ姿で軽やかに胫を躍らしラケットを握りながら手の甲で爽快な汗を拭ったこともあっただろう、又静かな歩みを絵画館の歩廊に運びながら、名作の深みに心を洗われる思いをしたこともあっただろう。そして森の木蔭を並木道をランデヴーの場として、緑の薫風に頬を染めながら恋人の腕に青春に充ち溢れた肉体を托し、甘い囁きに酔ったことも再三であったに違いない。

その幸福に弾んだ夢多き乙女達が、地上と地下だけの相違で、意志も身体も生命も総て我物ならず、犬猫に等しい玩弄物となり果てようとは誰が想像したことだろう。秀抜な青春の象徴を残らず曝け出し、勝手気儘に傷^{イタ}ぶられようとは――。

まだ覚めやらぬ夢を追う新しい家畜達には森の緑は忘却を誓えぬ



傷心の幻であつたろう。

富士額の眼に緑の幻覚が映じて、意識が昏濁の淵へ沈んだ。

「このナマケ野郎！」

鼻鎖が賭主のごつい手で力に任せて引かれ度を失った思考の片隅が激しく刺激されて、ぶく／＼と口角から泡を噴いた。

喘ぎながら家畜は蝸牛さながら登り路で犇めいている。

「どう？ 私の仕入れた品は一応品質は確かでしょう」

得意気に話しかける声がして、鍛えた強さに物を云わせて先頭をきっていた可奈子の眼前に、チュニツク・コートが揺らいで、見覚えのある赤い紐皮のヒールが立った。余裕を残した眼色で、その靴を追った甲二十一号の頭脳にチカッとする考えが閃いた。

ピリはやっぱり富士額の乙女だった。激動に喘ぎ、動悸に大きく息をする肩を掴まれ、ずる／＼と引きづられて傍の定着機に緊縛され、額を動かせぬよう頭部と耳を固定された。

「のろま」と彫った電気鰻のソケットが差込まれて電流が鉄塊を熱し始める。

「よく見て置くのだ！ 能力のない奴はそれだけの待遇しかされないことを……」

器械の前へ整列させた家畜達をじろっと見渡してから

「此処ではお前達の存在は牛馬と同じなんだぞ、家畜の機能がなかったら、潰しにするより仕方がない。この顔だって乳房だって価値に応じて斬り刻むのだ。二級品には二級品のような表示をしとかなければ飼主の方達に解らないからな」

調教師は真赤に燃えた鉄を無造作に取上げると、ぷうと灰を吹いてから、動かぬ顔で必死に悶えている富士額にかざす。

「ああー」

眦を張って、失われようとする美貌に哀切の金切りを上げる。男の武張った手が透き通るような白い額を撫で、捺所を計ってから、鰻を握る腕に力を籠めた。可奈子は思わず顔を背けた。他の虜婦達にしてみても同様だったのだろう。

「眼を外らすな！」

怒声と共に横面を鞭柄が叩き、肌が鳴った。無理に正面を見た可奈子は、瞬間、やっぱり眼は開けてはいられなかった。

「ぎやあ！」

動物的な悲叫が耳をつん裂き、鼻先をきな臭い皮の焦げる匂いが漂った。

三、多穂子の役目

喫茶店ラムールには柔らかなムード・ミュージックが流れていた。多穂子はコーヒを注文するとネッカチーフを脱った。室内はむっとする程、暖房が利いていたが、ウィンドガラスを通して見えるペーブメントでは落葉が冷い師走の風に舞って、人々は寒々とオパーの衿を立てて歩いていった。

「この寒空に姉さんは、どうしているのだろうか？ あれから四月近くになる、夏姿の儘だった姉さん、風邪をひいていないかしら？」
妹の考えは自然、其処へ行ってしまう。

「やあ、待たせたね」

相木研一の張りのあるバスが響いて、頼もしい笑顔が見下している。

「十二分遅刻よ、淑女を待たせるなんて、いけませんわ」

弱やかな手首を挙げて腕時計を見ながら微笑で怨ずる。甘えてみたい多穂子の淋しさなのだ。

「済まん／＼、その代り、今日は嬉しい情報が入ったんだよ」

研一は幾時間も断っていたように、もどかしげに煙草を点けると深々と吸いこんだ。

「忙しそうね」

と恋人の精力的な姿に見惚れながら

「嬉しい情報ってなに？ 姉さんのこと？」

「うん」

旨そうに煙りを吐き出す。多穂子は思わず躰を乗り出して、

「無事なの？」

「うん」

「それじゃ、やっぱり彼処？」

多穂子は眼を輝かせてY国資源幹旋会を暗示する。

「うん」

研一は今度、手許のコップの水を一息にあふりながら生返事する。

「はつきり言つてよ」

多穂子はじり／＼して語尾を上げる。

「そう、じれるなよ、今話すから」

にやっと笑いながら、水を飲み干してしまふと声を潜めて、

「多穂ちゃんだけに云うのだから誰にも話しちやいけないよ」

と前置してから真剣な表情に返って

「姉さんは無事だ。彼処に捕われている。他にも多数誘拐されているらしい。」

「可奈子さんからの情報？」

「そう」

とポケットから葉書を出す。

「これは甲二十一号からの便りだ」

「これは甲二十一号からの便りだ」

急に都合が出来て一週間ばかり旅行します。我儘を許して下さい。

旅先から又便りします。

津久の伯母さんにお見合は出来ないとお詫びしておいて下さい。

かな子

読んだ多穂子の眼が見上げて説明を求める。

「甲二十一号と打合せてあったことは、漢字で可奈子と書けば君の

姉さんは居ない。片仮名でカナ子と書けば、解らないが居るらしい。

平仮名でかな子と書けば無事でいると云うことだ。だから、この場合、君の姉さんは無事で居るのだ」

ぱつと多穂子の顔に喜色が刷いた。

「それで多穂ちゃんにお願いがあるんだ」

研一は口許を引締めて、眼を改めた。

「なあに？」

「難しいことかもしれないが、この仕事は多穂ちゃんではなくては出来ないことなのだ」

「何でもやるわ、姉さんを救い出す事に役立つのだったら。」

恋人の眉宇の強さに気押されて、温和な乙女の心は震えを声に送った。

「この葉書の末尾に津久の伯母さんと書いてあるだろう？」

「ええ」

「これを逆に読んでごらん？」

「津久の逆なら久津じやないの」

「そう、クツだ。即ち靴なんだよ。今後の情報連絡は緑川百合子の靴なんだ。」

「えっ？、緑川先生の……」

「確証を握る迄は緑川百合子は泳がせて置くのさ、だから、多穂ちゃんに頼みと云うのは百合子が外出から帰って来たら、必ず、履いていた靴を探って貰いたいのだ。敷皮の下、踵と半張り間に何か貼りついてないか。それから修繕に出したり、新しく靴を注文する場合、直ぐ知らせて貰いたいのだ。そうすれば此方で靴に細工して物の入場所を拵えさせる。」

「やってみるわ。先生はいつも靴は脱ぎ放しだから案外楽かもしれない」

「でも、慎重に用心して掛つてくれよ。今の場合、これが唯一の頼みの綱なんだからね」

「はい、充分に気を付けてやってみます」

多穂子は笑みを含んで、先生に答える生徒のように鯨張って云ってから、ふっと瞳を変えて

「だって、私も姉さんを救えるか救えないかの瀬戸際ですもの、一生懸命やるわ」

と顔を愁いの顔を伏せる。研一は、その肩を軽く撫んで、いとしむように、恋する者のみが持つ情感を滲ませて、

「頼むよ」

やさしく声に力を籠めた。

その時、都田が入って来て、研一を認めると足早やに寄って来た。

「やあ」

と多穂子に挨拶すると隣へ坐って、

「話は済んだの？」

と等分に見比べて

「似合いの夫婦だ」

とひやかす。

「いやな都田さん」

多穂子は照れて、清新な頬を染める。

「今、多穂ちゃんに引受けて貰ったところだ」

研一は職業意識に返って云った。

「頼みます」

と都田は軽く親友の婚約者に頭を下げて

「甲二十一号や、その他からは便りが来たのに。奴等は何故、伶子さんに葉書を書かせなかったんだらうな。気紛れにしても多穂子さんを悲しませないで済んだのに……」

心に浮んだ疑問を吐き出す。

「奴等は続いて多穂ちゃんも拐うつもりだったのさ、それに殿村家のような有名人じゃなし、二人きりの身寄じや何処からも故障の出

る心配はないと高を括ったんだらう。まあ、それが、たま／＼此方の手掛りになって了ったんだがね」

研一は端緒になった伶子の失踪を聴いたのも、この喫茶店ラムールだったことを思い出す。

「手掛りって云えば、今入電した報らせだけど、これも、きつと、この事件に繋がりがあると思うのだが」

「何だい？」

研一は咬られて身を起す。

「豊橋市外でトラック同志の衝突があったんだ。一台は岡崎の繊維会社のトラックで、他の一台は東京大阪間の定期便トラックなんだ。

曲角の正面衝突なんで両方共大破の状態さ。ところが問題は、その定期便トラックなのだ。何か可燃物を積んでいたらしく、衝突すると間もなく火を發して殆んど燃えて了ったが、焼残りの中から手錠

を嵌られた女の焼死体が三個出て来たのだ」

「えっ？ 定期便の会社は？」

「YY運送だ」

「余り聴かない名だな？ 焼死体の身元は？」

「わからない。着衣を脱がされて布切れで包まれ、手錠足枷で箱詰されていたらしい」

「その箱の送り主と荷受人は？」

「局の大阪本部でYY運送の大阪支店を洗っているよ」

「そうすると大阪から東京方面へ運ぶ途中だったのだな。屍体は解剖に廻っているんだな？」

「と思うが身元調べをしてからとも云っていたから……だが、死体をわぎ／＼手錠して自由を奪う必要がないから、多分、トラックが走っているときは生きていたんだらうね」

「よし、調査だ、直ぐ豊橋へ発つよ」

研一は闘志の塊となつて腰をあげた。

四、図編家畜飼育詳説

「諸君に今配った本は、その標題に示してある通り『図編家畜飼育詳説』即ち家畜の調教方法を主に述べた本であります」

新しい調教師の卵達は机上の部厚い頁をめくって熱心な眼を注いだ。

六太は壇上から得意気に話を続けた。

「先ず目次を見て下さい。第一は品種です。品種は姿、形及び性質で区別されます。顔や姿体が整っていないければならぬことは勿論ですが、性質が粗暴だったり反抗心を有する奴は一等品とは云えませんが、この項には標準畜体の説明とその鑑別法があり、畜性の識別及格付の爲の血統、出産地の通性、姿態動作の程度を記述してあります。例えば、出産地が東北であれば表面温順で諦感性を有しているが心底では人間に帰趨することを忘れていないし、又指の型が根もとが太く、尖端に向って細く伸びている奴は享樂性に富み、意地張りに見えるが性質は弱く忽ち潜伏する等と云う判別規準を詳述しています。」

第二項は審査。これは前項の品種と関係があるのですが、畜体及び畜性の検査方法です。

先日、強度試験をお見せしましたが、あのような畜体審査の方法とその極限、即ち肉体の耐久度の段階を呼吸回数や脈搏、皮膚色その他によって示してあり、畜性は血統、出産地を考慮に入れて、悲鳴の音程、回数、及び眼や口など表情の細部変化から判断する方法が記されてます。

この審査に依って最初の価値判断をし、一等品、二等品と等級を付けるのです。

第三項は管理です。

この管理は第一、第二、第三期と三段階に分けられます。

第一期は家畜として自覚する迄、第二期は家畜であることを肯定はしたのだが積極的でない期間、即ちどうにもならない、人間生活を諦めたと云う時期。第三期は全く家畜になり、進んで主人に仕え、愛撫されることを願う時期。管理方法はこれに依って違って来ますし、調教も又違って来ます。諸君達には第三項管理と第四項の調教については一番重要ですからゆっくり説明しましょう。その前にちよつと休憩します」

一瞬、緊張が解れて、部屋がざわめいた。

要員の一人が好奇に駆られて次の目次を見る。

第五項飼料、第六項疾病、第七項其の他、附記、革鞣し及び肉加工法と結んである。

六太の後方に五匹のテスト家畜が首垂れて坐っていた。所謂教材である。

先刻から命ぜられた通り身動きもせず、濡れそぼった花々の如く、一様に愁いを豊かな肩や項に見せてしよんぼりと置物のように並んでいる。布地の奥深く秘めていた美肌を白々と光灯に映えさせて……。

夢多き青春と云おうか、多感な憧憬を夢見ることを許された唯一の年頃である。そして、奔放にその夢を托すことが出来るような咲き香っている秀抜な肉体でもある。夢は幽冥に閉され、肉体は教材に供給される。ああ、なんという境遇の激変であろうか。

伶子は十二月の寒気を剥ぎ肌を受けて、小刻みな震えを押えきれなかった。ジャンパー姿の六太は振り返って、その態を認めると

「始めての冬だと思って暖房してあるのに、まだ寒いのか？」

暖房と云っても自分の股焙りに電熱器を点けているだけなのだ。ペロは慌てて黒い髪を振った。寒いなどと云えば電熱器で肌を焼き兼ねないからだ。

六太はぶうっと煙りの輪を智貌に吹きつけて、

「早く肌を慣らすのだな、そう云えば去年は良いオーバーを着ていたな」

モヘア・パイルのスリムなコート。とても気に入っていたオーバーだった。今頃はアパートの洋服箆箆で華やかに吊下っていることだろう。そして、幾枚かのジャケットもスカートも只空しく、主人の体臭を追想するよすがとなり果てて了っているのだ。

「クリスマス・プレゼントだと云って俺にセーターを贈ってくれたっけ？」

と云いながら思い出して、

「あ、そう、これだよ」

とジャンパーのチャックを脱して、ふか／＼して暖かそうな茶のセーターを見せた。

そうだ。ボーナスの中から銀座のデパートで買ってやったものなのだ。伶子は床に冷え冷えと坐っている自分のふくよかな白腿に眼を落して、きゅっと胸が締めつけられた。

「暖かくて具合がいいよ。だが、お前は裸の方が躰の為にいいのだぜ」

嘗ての女秘書は頷く、六太は凍えている女の胸の谷間を突きながら

「家畜ではお返しにセーターを贈る訳にはゆかないから、この肌が早く耐寒力をもつようにせいで鍛えてやろうよ。せめてものお礼心だ」

伶子の肌を責める口実が一つ出来たことになる。電熱器を抱えこんで手焙りしながら六太はほくそ笑んで、唇を紫色に変えて冷気を耐えている優雅な女身を眺めた。

「淘汰と云う言葉があります」

六太は又話し始めた。要員達はノートを執る。

「不用のものを除くと云う意味ですね。家畜調教にはこれが必要なのです。仮に東京だけを例にとってみますと概算八百万の人口があ

ります。その半分四百万は女です。この四百万の内、我々の対象になる十五才から二十五、六才迄は、どのくらいかと考えて見ます。平均寿命を六十才としますね。そうすれば年代の中が十年ですから六分の一が該当する訳です。約七十万ですね。この中に女なんてものがやない醜怪なのが沢山いますから十人並として十分の一にしますと大体七万です。更に選別すればその半数ぐらいにはなつて了うでしょうが、これが我々の家畜となる為に生存している所謂牝なのです。この他にも横浜、埼玉、千葉、それに大阪方面、これだけ放牧してあるのですから調教は相当嚴重にやっつて、不用品はどし／＼潰すか、別途へ振向けることです。そして、選抜したものは最良の家畜に仕上げることです。不良品は飼料が丸損ですし、それだけに早く処分した方が皮や肉や骨の売上げで利益を生むことになるのです。だから、人間脱却と云う調教根本を実行するのに、どんな手法を使っても苛酷過ぎることはありません。遠慮せず徹底的に叩きのめして下さい」

六太は一息抜いてから更に講義を続ける、

「次に調教要諦の一つを話しましょう。これ達は第三期家畜ですから、このようにじつとさせといてよいのですが、一期二期の家畜は常に動かして置かねばいけません。所謂退屈させてはならない、人間生活を回想したり、現在を批判したりする時間を与えてはいけません。しやにむに、躰を使役して、思考の余裕を無くすることです。例えば……」

六太は五匹牝を立上らせると自分が講義する為に乗っていた二間四方の壇を部屋の隅へ移動させることを命じた。家畜達は一斉に壇の裾に附いている鉄輪を踢んで啞えると、

「う／＼ お／＼」

息張って持ち上げる。且つては唇の端から瑞々しい魅力を零した皓齒で——。ジュースのストローを挿んだ紅唇が重量を彎って裂け

歪んだ。恐らく、この中で令嬢時代にこんな重い物を手ですら持ち上げたものは無かったであろう。女達はスマートな脚を踏張って、腰をふらつかせながら、それでも隅迄運んで静かに置いた。

「よし、もう一度、此处へ運べ！」

六太は反対側の隅を示す。家畜は又赤錆の鉄輪を噛みしめて腰を伸した。よろ／＼と蹣跚めきながらも、五匹の美しい群像は運び終える。

「今度は此方だ！」

六太の鞭は何のことはない元の位置を指し示す。家畜達の凍えていた肌から汗が滲み出てくる、肺臓が荒く膨れあがった。

「次は向うだッ」

齒茎の鈍痛が抜けそうな痛みになってくる。腰つきも前こゝみにゆら／＼と今にも崩れそうな歩みに変わってくる。

一匹が、がく／＼と膝を折った。

すかさず、講師の鞭が華奢な背で鳴る。家畜は反対的に力を入れて脛を立てた。

「どうだい？ ペロ、寒くなくなったろう」

六太は脚筋を張り豊かな臀部を突き出した動物的な姿容で、後手の掌を固く締めている豊麗な愛畜を眺めて云った。

「う、う」

放すまいと深く頬張った鉄輪の合間から、苦乱の肯定をする。シヤケットやオーバーを許されない撫子の肌から円い汗が雅致ある曲線に沿って滑べり落ちていく。にきび面の飼育者は、この眉目麗しい女性の前身も、自分の給仕だった身分も、記憶の隅にも留めないような非情の冷い声音を、当然のように叩きつける。

「もっと腰を伸せ！ 胸を起すのだ！」

そして、シックなオーバーや趣味のよいスカートに包まれているべき肩や臀部に。自分にセーターを贈ってくれたやさしい思いやり

を秘めた胸に痛烈な鞭を当てた。

「これは無駄なことのようにです」

講師は生徒に向き直る。

「同じ処を運ばせているだけで、ちっとも生産的ではありません。だが、家畜にとつては決して無駄なことではないのです。一方の水を他方へ移し、又元へ移し代える。穴を掘って、又その穴を埋めさせる、仕事自体から云えば何の益もありません、併し、我々の目的である家畜調教の点では重大な意味を持つのです。人間の最大の拷問の一つは、こんな無目的な仕事をさせられることだとドストエフスキーがシベリアの流刑生活を綴った『死の家の記録』の中で云って居ります。これは水の汲み移しですが朝から晩迄繰返されると気が狂ったり自殺したりするようになる」と書いてます。人間の生存意義を破壊して下からでしょう。だが、これ達は家畜です。人間心を脱皮させるには非常にこの仕事は効果を与えてくれます。人間としての生の意義だとか目的を取り除いて家畜の実体を認識させてくれるからです」

伶子達は昏迷の淵を彷徨しながら、輓牛のように垂涎して、ずずっと壇を引き摺っていた。

五、東京攻撃確定

緑川百合子は可奈子を馬にしていた。

車輪をつけて木馬のように組んだパイプに、両手を上に固定し、丈長い髪を手綱にして百合子は跨っていた。

「その角を右へ曲るの！」

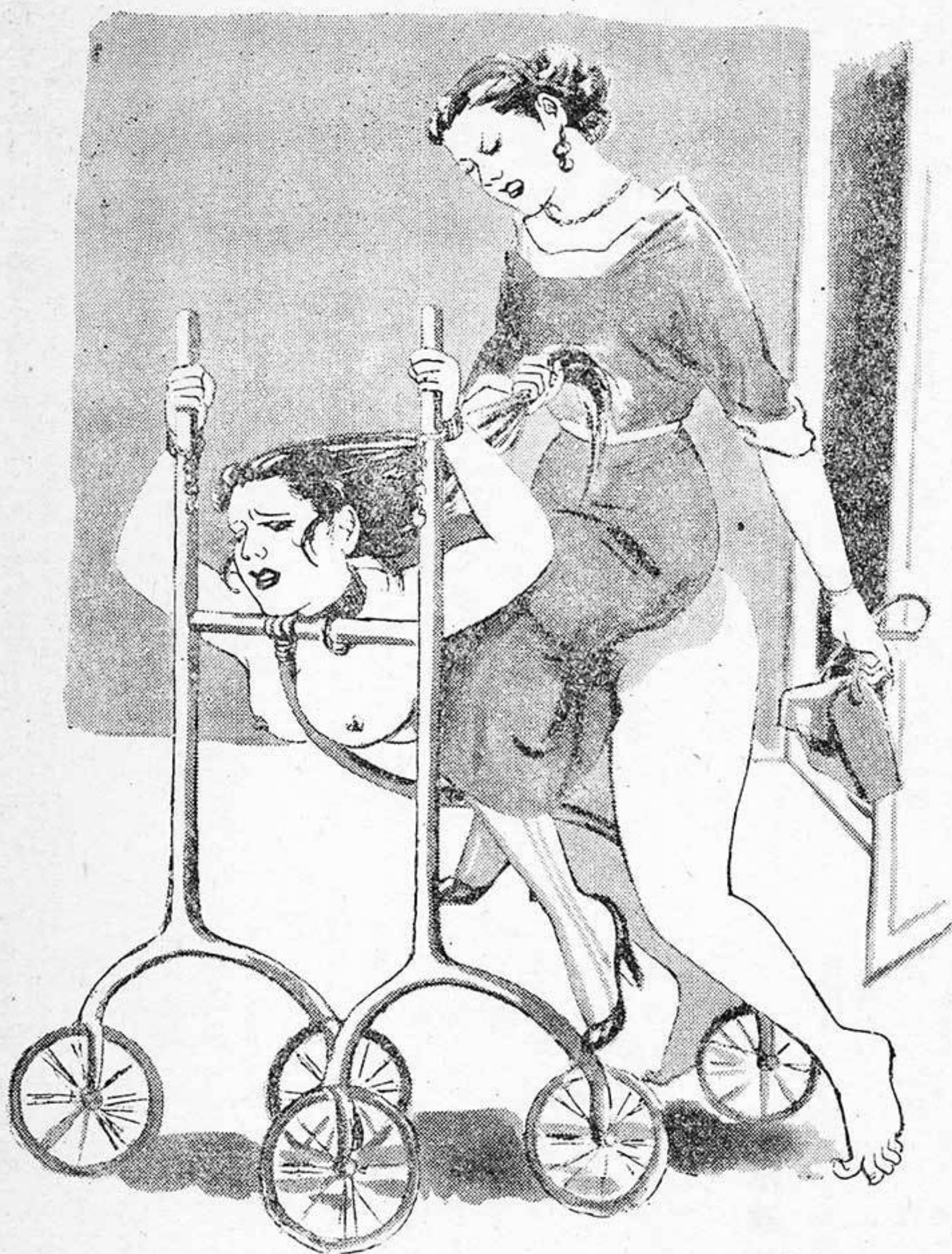
可奈子の柔軟な背が彎屈し、パイプの吊手を握った手で慚く乗手の重量を耐えている。

「もっと乗り心地よく出来ないのかい？」

片足を跳ねて白眉の太腿を蹴った。家畜はその術を知らず、只管

足を突張る。

「そんなにどた／＼歩くんじゃない！ お尻に響くじゃないか、とんま！ もっとスムーズに歩くんだよ」
新品馬は踵をつけるのを止めて、爪先で廊下を踏んだ。



「そう／＼。乗り手を楽にして運ぶのがお前の役目なのさ。どう？ 重いかい？」

可奈子は歯を喰いしぼりながら僅かに首を振った。胸に固い決意がなかったら、甲二十一号にしても、溢れる涙腺を留め得なかったに違いない。磨かれた肉体を撓やかに躍動させて駿馬の務めを黙々と果している。

「これがお前の本当の姿だよ。家畜の癖に代議士の娘だなんて、御乳母日傘で育って来たのだから罪は重いし、それだけ厳しくするよう調教師さんに頼んどいたよ、私も仕入れた責任があるから、精一杯、鍛えてやるわよ」

百合子は形よい可奈子の耳朵を弄りながら云ったが、思いついたように牝馬の首に掛けといたシヨルダーバッグの中から洋裁用の錐を取出すと「お前に耳標識をつけてやろうと思っていたのよ」

まるで紙か布にでも穴を開けるように、ぶすつと耳朵に突き通した。

「あっ！」

瞬間、激痛が脳髓を抉り、思わず、歩みを忘れて玉の肌を硬着させた。

「何故停るのだい！ 自分の所有品に標識をつけようとするだけじゃないか！ 馬鹿牝！」

抜きとった錐を、キングサイズのヒ

ツプへ突き立てる。

「あ、あっ！」

再び悲鳴を迸らせて、家畜は無我夢中で腿を挙げた。

「緑川さん！」

丁度、擦れ違ったボギー車からリーレの声が響いた。

「お話があるの、すぐ部屋へ来て下さらない？」

百合子は急いで黒髪の手綱を引いて回転させる。可奈子の首筋が捻れて

「ううっ！」

と苦鳴が洩れた。

「東京攻撃が確定しました」

リーレは和歌緒鮎子の背に坐って、髪を五、六本、指に捌めて、
ぷっ／＼と抜きとって丸めながら、昂然と云った。

甲二十一号はぎくりと聞耳をたてる。

「日時は二十日以内、確定時は十二時間前に通告されます。ですから大体、年末か、新年になりますね。攻撃方法はミサイル、ICBM、即ち大陸間弾道型飛行兵器に依ります。続いて我軍は落下傘降下をして急速に要点占領をする予定です。同時に輸送船団が相模湾から上陸、進撃を開始する筈です。今度は確実に実施されますので、只今、会議の結果、家畜収集は非常手段を使っても大々的に行うことに決定致しました。貴女も此処に移って貰って結構ですから、身辺を顧慮することなく、目星のつけてあるものは、どし／＼送りこんで下さい。只、洋服店は畳むと麗々しくなりますから旅行でもすることにしたらいでしょう。」

と言葉を切って、又、女優の艶々した髪を引き毟りながら、声を落して

「それで、今度は私のお願いですが、多穂子は是非頼みます。相木を捕える罔にもなりますし、ペロをモデル品に仕込むには、どうし

ても必要なのです」

「はい。承知しました。直ぐやりますわ」

百合子はリーレの言葉に興奮して、可奈子の鼻面を引き起す。

「御入用でしたら、人手を貸しますよ」

リーレのてきぱきした声を聴きながら、甲二十一号の頬は蒼褪めていった。早く相木さんに知らせなくては——。心は矢猛に走るのだが、競い立って帰宅しようとしている百合子の靴底へ通信を貼りつける隙も、又、文を書く間も無かった。遂に来るべき時が来た。Y国の日本襲撃、それもミサイルに依るといふ。究極兵器に近い、この水爆弾頭をつけたロケットを防ぐ方法は、今の処皆無なのだ。レーダーもジェット機も対空誘導弾も、音速の十四、五倍で飛ぶ、この兵器には役に立たない。成層圏を流星のように飛んで、一挙に東京を溶かしてしまうであろう。ビルも住居も人々も、跡形なく焼け流れてしまうことであろう、そして、きのこ形の爆煙の消え去った空を点々と覆って、冷酷無残なY国の落下傘部隊が、哀れな生き残りに自動銃を掃射しながら降下してくるのだ。

小田原、江の島沖から、銃剣を閃めかせた悪逆無道の侵略軍が、草木を刈るように残虐な殺戮を行いながら、上陸進撃してくるに違いない。

六、姉の实体

横なぐりに降っていた雲まじりの雨が静岡辺であがって、沼津を過ぎるころには富士の銀峯が、くっきりと夕陽の空に聳えていた。相木研一は大阪からの帰途の車中であつた。車内はスチームと人いきれで蒸れきっていたが研一には先刻から気になることが一つあつた。四、五米離れた座席の男が盗み見るように視線を自分に注いでいたからだ。

はて？ 誰だったかな？ その顔に確か見覚えがあつたが急に思

い出せなかった。研一は腕を拱いて、隣席の部下の話掛けを無視して瞑目した。

彼の頭脳は、めぐるましく豊橋と大阪から得た収獲を整理し、次の策戦を練り始める。着衣を剥がれた真黒な焼死体では身許こそ解からなかったが、解剖所見では肺及気管に煤煙を発見、煤煙に依る窒息死であることが確認されると共に、尿からバルビタール系の麻醉剤が検出された。そして、これ等の屍体は二十才前後の妙齡な女性で、非火傷部分の所見によると皮膚や毛髪の栄養度は良好で、高価な化粧品成分が附着していたし、それに揃って処女であることが証明された。

この結果から判断すると良家の娘で、麻醉され箱詰になっていたことが推察される。

次に、情報局大阪本部員の手になる発送人及び荷受人の調査は嚴重に進められていたが、現在までのところ適確な証拠は擲むに至らなかった。送状の住所氏名は勿論出鱈目で該当者は見当らなかったが、木箱の材質、女を包んでいた布地の出所を追求しているから、時日を待てばそこから何かはぐし出せるだろう。

荷受人は東京残留の都田に頼んであるから、帰京すれば結果は得られる筈だがこれも大きな期待は出来ない。だが、YY運送の発送名簿を何気なくめくって、荷受人欄を眺め、はっと眼を凝らして了ったのだ。其処には日天産業株式会社資材課の名がはっきりと記載されてあったからだ。

研一は更に推理を推し進める。

伶子が単に飜いていたというだけで彼女の誘拐事件とは何ら関係はないと、うっかり見過して来た日天産業株式会社の背後に何かあるのではないだろうか？ Y国人との繋がり、組織が喰いこんでいるのではないだろうか？ そう云えば日天産業は兵器を作る会社なのだ。

「相木研一さん！ いらっしゃいませんか？」
入ってきた乗務車掌が入口のところで大声で呼んだ。研一は瞑想から醒めて手を挙げる。

「電報です」

車掌から紙片を受取りながら、ふと自分に注れる視線を感じて鋭い眼光を返す。例の男だ。男は周章てゝ眼を外らしたが、途端に、はっと研一の脳裏に記憶が甦った。嘗て、多穂子を庇ってピストルを射ち合った当の相手ではないか、す早く部下に眼配せせすると、つか／＼と歩み寄った。

「逢坂さん？ 逢坂辰一さんでしたね」

切返す間も与えない、威圧的な口調だった。

「い、いゝえ、違います。わ、私は……」

男は狼狽して、尚一層、舌が縄れた。

「そうですか？ でも、私を御存知でしたね」

「知りません。私は只、富士を富士山を見ていただけです」

「成程。富士をね、Y国の人でも富士は美しく見えますかね？」

その男の顔に起ったたじろぎが次第に苦渋に変わっていった。

「東京迄御一緒させて頂きますからね」

研一は、臨機応変の構えを全身に見せて、強圧的に押被せて向席に腰を下す。

コウニ一レンアリ、ラムールニテマツ」ミヤコダ

電報に眼を通すと注意深く、相手を監視していた。大阪発東京行九一四列車は夜の東京へ滑り込んだ。逢坂を部下に連行させると研一は新橋駅から約束の喫茶店へタクシーを飛ばした。

「やあ、今着いたんだ。待ったかい？」

都田と多穂子に快活な微笑を浴せて、どっかりと腰を埋める。

「お疲れになったでしょう？」

心配そうに多穂子は恋人を労わる。

「御苦労さん、調子がよさそうだな。何か掴んだな」

活気溢れる態度に都田は首尾を推し計った。

「うん。まあ、それは後で話そう。それよりあの連絡は何だ」

都田が薄い紙片を展げる。細字でぎっしり数字が羅列している。

乱数式暗号なのだ。軽く注いでいた研一の瞳が、ぎらと煌いてきて、

終いには唇を噛み、紙片を持つ手が傍の人にもわかる程震え出してきた。

「局長に話したか？」

読み終ると怒りを含んだ調子で訊いた。

「うん、信じられないと云うのだ。君の説明を聴いた上で対処したいと待っていたのだ。」

「馬鹿な！」

吐き捨てるように云ってから

「ひどい、まったく、俺だって甲二十一号の情報でなけりや信じられないよ」

無意識に椅子から立ち上りながら髪を掻き毟った。それには、東京攻撃は記してなかったが、日本娘家畜化の状態が刻明に説明してあったのだ。

不安そうに見ていた多穂子が、

「姉さんがひどい目に合っているの？」

と泣きそうな顔を二人に向ける。思わず研一は都田と顔を見合わせた。都田は静かに臉を瞬かせて、多穂子に何も話してないことを示す。

「いや、心配ないのだ。姉さんは元気なのだから」

「じゃ何故、ひどいなんて云うの？」

「それは、甲二十一号の……ことなのさ」

「嘘！ はっきり云って頂戴！」

多穂子の臉が涙に緩んで、喉元が嗚咽をこらえていた。

「……………」

「私は戦うつもりよ、隠さずに云って！ 姉さんは辛い苦しみをし
てるのでしょうか？」

「うん」

研一は仕方なく頷く。

「どんなにされているの？」

姉の身の上を思った多穂子は一刻も惜しいように追求する。

「中世紀の奴隷のようにされているらしい」

「じゃ、殴られたり、鞭打たれたり？」

「そう、もっとひどい事もね」

多穂子はがばとテーブルに顔を伏せる。

「多穂ちゃん、でもね、姉さんは甲二十一号と一緒に元気で僕達の救いを待っている。もう少しの辛抱だ、ね、それまで僕達も頑張るんだ」

泣きじやくっている婚約者の悲しみが浸み入るように研一の胸にも移ってくる。沈み勝ちな心をかり立て、やさしく肩に手をかける。

「泣くのはやめて、さあ、そんな弱い心でどうするんだい、君は緑川百合子を監視する重要な役目を持っているんだよ。」

赤いスカーフの下で情純な項が痙攣を続けている。

「さあ、元気を出して！ そんなんじや、姉さんを助け出せないぞ、泣くのはやめて……」

多穂子は涙ながらの面差をあげる、研一は濡れた頬をハンカチで拭いてやりながら

「大きな赤ちゃんだね」

とにっこり揶揄する。多穂子は照れ臭そうに無理に眉をほぐした。

やがて店先で多穂子一人をタクシーに乗せてから、研一と都田は別の車を拾って部長室へ走らせた。一瞬の油断が九仞の功を一簣に虧くことがある。今の場合がそれだった。多穂子に配してあった部下を、先に帰してしまった不用意さも忘れて、部長を説き伏せ、彼等Y国人一味を一網打尽にすることだけを熱心に話し合いながら、研一たちはネオン瞬く都内を疾駆していた。

多穂子を強引に誘拐しようとする百合子を含めた数人のY国人達が、彼女のアパートの周辺で、獲物の帰宅を手ぐすねひいて待っていたとはつゆ知らずに……。

(未完)

△次号にて完結▽

昨年の七月号と八月号に掲載しました「潰滅の前夜」は、筆者土路草一氏の御努力により、引続いて「続・潰滅の前夜」として続稿の執筆を頂き、その間、読者の方々の熱狂的な声援により、予定の完結が延々となり、こゝに、第六回目の掲載を迎えました。

Y国人の日本娘に対する家畜化は益々激しくなり、東京攻撃も目前に迫ってきました。しかし、一方情報局の相木諜報員達の反撃も着々効をおさめ、諜報員甲二十一号を敵陣営へ送り込み、逢坂辰一の逮捕に成功しました。次号の完結篇では、八十数枚を一挙に掲載の予定です。どうか御期待下さい。



婦女子襲撃事件の頻発

岸 本 青 柳

「アレー、助けて……」

昭和卅一年八月十四日、午後八時四十分ごろ、夜のしじまを破って茲秋葉山麓で突如、若い女の悲鳴が起った。これは旧幕時代には徳川親藩の城下町で起った椿事であった。旧城下と云っても茲の秋葉山麓は、旧市街の中心地から一里余も距てた新市街地の淋しい閑

静な住宅街の南端であり、住宅と住宅との間隔は約二町も離れて、いる秋葉山とその北に位置する高瀬山との中間の細い秋葉街道の一角である。北側の小高い高瀬山麓の地藏堂の真下に当る、旧家と旧家との間の露路から約十間ほど道路から奥へ這入ったところで、夏の宵とは云いながら人の通行も極めて稀で、こ

の女の悲鳴は誰にも聞かれなかったが、この椿事から約半時間も経ったと推定される九時ごろ、附近の染色工場から夜業を終えて帰宅する三、四人の男工の一人が、暗い露路口で立小便をしながら何気なく露路の奥の方を覗くと、誰か倒れているように思われたので、小便もソコ／＼にして奥へ這入って見て吃驚

仰天した。無理もない。一人の若い女が口にハンカチーフで猿轡をはめられ、両手を後ろ手にバンドで縛られ人事不省に陥っていたのである。驚いた男工は友達他の男工を声限り呼び寄せ、三人が力を合わせて介抱すると、その若い女は漸く蘇生して、顔を赫めつつ感謝の言葉を述べるのであった。

この若い女は現場から東へ約二町の鶴ヶ岡の自宅に帰る途中に、多分電車道から尾行して来た男に危難に遭ったもので、同市内本町筋の某証券会社に事務員を勤める美貌の浦野文子という二十三才の女性であることが判明。四人の男工はその娘を自宅まで送り届け近くの交番所へ届け出たので、本署では直ちに全市に非常線を張ると同時に十数名の正私服警官が現場に駆せ付け、文子嬢に就いて遭難模様を聞いたが、暴漢に突然背後から猿轡をはめられ両手を縛られ人事不省に陥ったので、犯人の人相など一向存じませんとのことであった。しかし、ハンドバッグは奪われており約千円在中のガマ口が盗られていたが、幸いにも暴行されていないことが判然としたので本人も両親も兄妹も一先ず安緒の胸を撫で下ろした。一方警官側はその夜から翌日にかけて手分けして附近住家の人々に、この椿事に就いて聞き込みをしたが、誰一人として知る者がなく、今なお犯人も挙がらず遂に迷宮入りの形となった。勿論今日まで附近の変態性の

若者や、この種の前科者ら十数人を取調べたが依然真相が判明しなかったのであった。

その直後の晩夏ごろ、その附近をはじめ一里以内の数軒の住家の便所汲取口から棒ようのものを突き出して、婦女子のお尻を傷付けたり、夜遅く帰る婦人達を脅やかす者が屢々現われたので、附近一帯の婦女子は夜の外出を怖がり、万止むを得ず外出する場合には屈強な男子が附添うという恐怖時代を現出した。本署は各派出所と一体となり、犯人検挙に躍気となり昼夜の別なく大々の活躍を続けたが之れまた犯人は未だ検挙されるに至らない。

この二つの忌々しい事件発生に鑑みて町内会や青年団の人々が自警団を組織して、交代で夜警に当るやら、町内の街燈を俄かに増設するやら、警民一体となって防犯に努めたため、治安も維持され従って婦女子の恐怖心も一応は解消するに至ったのである。然るに昨年暮ごろ、附近の洋裁学校に通っている生徒で、旧市街の中心地へ帰る妙齡の一人の娘が県庁前の大通りで、暴漢に襲われハンドバッグを強奪されたり、秋葉山麓の池の畔で宵の内に、淡い月影を踏んでこれも帰宅途中の或る商店の女事務員が、待ち伏せを喰って山中に連れ込まれ、あわや暴行されんとする危機一髪を、大声で救いを求めたため、その声を頼りに折柄通行中の、自転車屋の店員に危難を助けられたこともあった。

越えて今春に入って復亦一つの椿事が起った。今度は昨夏以来頻発した暴行事件の犯人であるか否かは判明しないが、類似点を持った事件ではあった。最近谷町々内会の運動会が、暖い日の高崎山公園で催され、薄暮ごろ盛會裡に万才を三唱して三々五々家路に人々の帰り去ったあと、三味線屋の若い妻女が便通を催し、共同便所で用便を済まして手洗いに、背後から一人の怪漢が細君の口に手拭を押込み、両手を後手に自分の兵児帯で縛り上げ、便所の中に無理矢理に連込み暴行に及ぼうとしたので、細君は必死となって抵抗、暴漢は稍々持て余している間際に生じて、細君は便所の戸に身体を打ち付け外に転がり出た。暴漢は周章狼狽の極、雲を霞と麓の方へ逃走して終った。氣丈夫な細君は身体を藻掻いて猿轡を外し、両手を縛られたままの姿で、麓のうどん屋へ飛び込み、その屋の店員に縛りを解いて貰い、早速交番所へ届け出た。お巡りさんは附近の人々の協力を得て現場やら附近一帯を搜索したが、既に犯人が逃走した後であったので本署に連絡して、嚴重な搜索網を張ったが、今日まで未だ犯人が逮捕するに至らない。然し何れは変態性男の仕業だろふとの見込みで根気よく、犯人捜査を続けられており、其の努力に対しては自から頭の下がる思いがするのである。

新作切腹写真『女体自決悦虐図』(略号(えつ))

△血紅使用極鮮明実演切腹モデル写真▽

大判判印画紙 (タテ十八糎 ヨコ十二糎) 焼付 七枚一組 千 円

うら若きモデル嬢が自らの腹部の柔肌に刃を当てて、一文字腹に十字腹に、或は又、臍の上と下二筋に、きりりと割つさばいて苦悶の表情も真に迫った切腹実演のフオト。苦痛に喘ぐ緊迫した表情、自らの手で我が腹を切る恍惚の表情など、すべて血紅を使用して一段と凄惨さを加えました。女体切腹フオトの決定版としてマニアの方におすすめる女体自決悦虐図。尚、従前代理部より分譲していました切腹写真は目録品切を機会に全部打ち切りとなりましたので悪しからず御諒承願います

【新版】女体緊縛フオト ◎分譲◎

R組 四十組 (印画紙の大きさ 9×13cm)

各組一枚一組 (全部送料共)

一組一枚	一〇〇円	R 1	柔肌と荒縄 (須川令子)
五組五枚	四〇〇円	R 2	海浜の緊縛 (萩千恵子)
十組十枚	七五〇円	R 3	床間の飾り (佐賀美智子)
二十組二十枚	一四〇〇円	R 4	高手小手 (花坂道子)
三十組三十枚	二〇〇〇円	R 5	海老縛り (萩千恵子)
四十組四十枚	二四〇〇円	R 6	後手猿轡 (須川令子)
五十組五十枚	三〇〇〇円	R 7	後手足縛り (村田那美子)
六十組六十枚	三五〇〇円	R 8	鏡うつし (伊吹真佐子)
		R 9	股間しぼり (須川令子)
		R 10	鎖縛晒責 (萩千恵子)
		R 11	股間縛正面 (伊吹真佐子)

責められる女、責められる場面八態

北原純子画『風流女体アラベスク』(略号(ふう))

大判判印画紙 (タテ十八糎 ヨコ十三糎) 焼付 八枚一組 八百円

一、嫉妬の炎

自分は唯一の愛人だと思っているのに、彼には自分にかくして、こんな美しい隠し女があったとは恵美子の物差しを持つ手は思わずブルブルと慄えた。

「かまわないから、啓介、もっとひどく叩いておやり」

五月雨の降りそぼつ庭には十八九の肉づきのよい娘が全裸のまま扱帯で後手股間縛りにされて、ころがされている。下男の啓介は棒切れを持ったまま、この白蠟のような女体に、しばし見惚れるのであった。

二、新妻鑑

新婚の夢まだ覚めやらぬ若妻はピチピチと張りきった鮎のような全裸の肉体に、ひしひしと乳房に喰い込む腰紐を掛けられ後手高小手のまま寝具の上に仰向けに転

されている。

「どうだ文子、そのまま起き上がることが出来るか。」

「ええ、貴方のお望みなら」

彼女は縛られた手首を真紅の腰巻について必死に起き上ろうとする。夫は冷やかな眼で新妻の全身を見つめている。

三、深夜の侵入者

寝苦しい夏の夜、姉妹は昼間の疲れにやっと、うとうとしかけた時だった。カタリと雨戸をはずす音がしたかと思うと、覆面をした一人の労働者風の若い男が入ってきた。派手な色模様の寝巻を脱がされて、はっと気がついた時には寝巻の紐が手首にからまり、強い力で後手に捻じ上げられていた。「何をするのよッ」うつ伏せになった顔を左へ廻したとき、腰巻一つの姿で後手に縛られ猿ぐつわま

R 38	後手首縄締(加賀利江子)
R 37	仰向悦唐責(川端多奈子)
R 36	和装責め(藤田節子)
R 35	手足逆吊り(伊吹真佐子)
R 34	首縄股間縛(坂口利子)
R 33	股間縦縛り(中富綾子)
R 32	薄羅の緊縛(加賀利江子)
R 31	くさり責め(伊吹真佐子)
R 30	松樹後手縛(村田那美子)
R 29	変型しぼり(萩千恵子)
R 28	高手小手(加賀利江子)
R 27	逆海老責め(伊吹真佐子)
R 26	股間縛後手(中塚文子)
R 25	後手吊責め(伊吹真佐子)
R 24	逆さ吊り(伊吹真佐子)
R 23	椅子責め(佐賀美智子)
R 22	強烈梯子吊(伊吹真佐子)
R 21	帆立縛り(萩千恵子)
R 20	いたぶり(春日、伊吹)
R 19	足揚梯子責(伊吹真佐子)
R 18	緊縛横臥(厚狭春江)
R 17	立木しぼり(村田那美子)
R 16	トイレ縛り(須川令子)
R 15	猿轡の魅力(伊吹真佐子)
R 14	開股しぼり(川辺砂登子)
R 13	尻立縛り(萩千恵子)
R 12	女学生縛り(須川令子)

R 39	乳房下緊縛(村田那美子)
R 40	肉体美誇示(伊吹真佐子)
R 41	お灸責め(春日、伊吹)
R 42	後手猿轡(萩千恵子)
R 43	松樹しぼり(村田那美子)
R 44	コルセット(中塚文子)
R 45	股間しぼり(萩千恵子)
R 46	手足緊縛(萩千恵子)
R 47	後手しぼり(加賀利江子)
R 48	御開帳(萩千恵子)
R 49	くさり責(川端多奈子)
R 50	折檻の魅力(須川令子)
R 51	雁字搦目(津森静子)
R 52	股間緊縛(津森静子)
R 53	のぞき見(津森静子)
R 54	引き裂き(津森静子)
R 55	後手しぼり(津森静子)
R 56	猿ぐつわ(津森静子)
R 57	苦悶の表情(津森静子)
R 58	あきらめ(津森静子)
R 59	強烈しぼり(津森静子)
R 60	トップモード(津森静子)

新人モデル譲登場!

津森静子譲の新作

今回本誌モデル陣に加った新
人津森静子嬢のニユースタイル

で囁まされた姉の姿があった。妹の太股がまるで生物のように跳ねて男をはねのけようとした。

四、古寺の怪

人里離れた古寺の庫裡では、この寺にたった一人住む生臭坊主の念海が、昨日町から拐ってきた小町娘の黄八丈の衣裳から腰巻までむしり取ってしまい、手と足を一緒に麻縄で括ると梁から縄に結びつけ、鳥の羽を手にするると娘の足の裏からお尻へと、その触手を伸べていった。

「ウウウ、ムムム……」

囁まされた猿ぐつわの間から娘の呻き声が洩れる。ゆらゆら揺れるローソクの火に照らされて尙も擦り責めは続く。

五、雪中の折檻

「やいやいやい、よくも俺の顔に泥を塗りやがったナ、俺のいいつけの聞けねえ奴は、こうしてやるんだッ」

仏の権三は、その名前に似ぬ凄惨な形相で女の頸すじを下駄のままで踏みつけた。二十二、三の小股のきれ上ったいい女だが降り積つ

た雪の上へ、腰巻一枚で後手に雁字搦目に縛られてころがされていく。三下は竹の棒を女の左足にからませて捻じ上げた。女は痛さに思わず足の指をくの字に曲げた。

六、ガール・フレンド

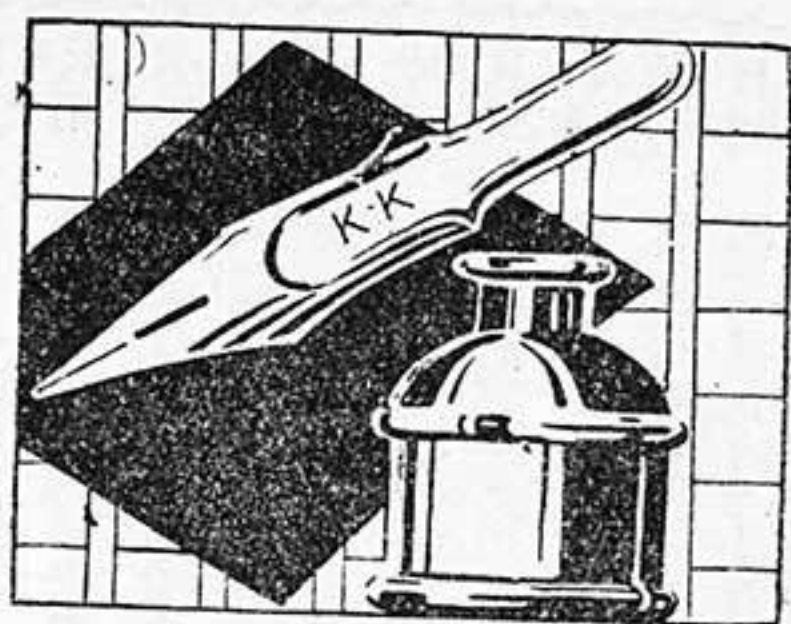
今日は珍らしく家には誰もいない。大学生の森川はガール・フレンドの緋佐子を誘って、ストッキング一枚の裸に剥いて柱に後手に縛った。箒を持ち出して両足首に括りつけて……

七、ズベ公のリンチ

「掟を破った者は、どんな目にあうか知っているだろう。」
首から足首までグルグル巻きに麻縄で縛られ猿轡をかまされたミチは、全裸のまま浴室のタイルの上に放り出されていた。

八、縁側の夕顔

庭の泉水では蛙が鳴いている縁先にぽっかりと白く浮かび上った夕顔のような全裸の縛られた女、荒縄が乳房の上と下は二筋、肌もくぼむばかりに喰い込んでいる。



読者通信

先日藤田節子嬢の写真、有難く受理しました。実に見事な写真で申分なく、特に第二集は色気が漂い満足した作品です。今後の御活躍を祈ります。御誌を拝見して約一年余、未だ発言すべき時期に到っていない私ですが、女性の責め縛り等に余り色気がない様に思われます。責めそのものに残忍さやグロがかった読物が多い様に思われるのですし、マニアの方から見れば刺戟があつて喜ばれるのかも知れませんが、私の場合、露骨過ぎて嫌な感じを受けるだけ、まして男の縛られたのや責めを見ると虫が走る位です。スイマセン！前にも書きましたが、和装の女性を縛る事に喜びを感じるだけ、無論、長縄絆一枚で扱帯や腰

紐で色気を失わない縛り方をするのですが、猿ぐつわは絶対と云つて良い位必要に思います。ぶつたり傷つけたりする必要が何処にあるのでしょうかと云つても、或る程度、相手に苦痛を与えて悶える姿を見るのも又良きもの。併し手足を縛り猿ぐつわを咬ませば、それだけで女性は苦痛を感じるでしょう。まして着物が乱れ且つ長縄絆一枚のしどけない姿であればある程、羞恥を感じるのが当然、マニアならず共、世の男性はたまらない程の色気を感じて、奇巧の愛読者になるかも知れません。本当の話！私自身遊び半分戯れに相手の女性を縛り、それまで余り身を感じなかった女のなまめかしさにたゆまざる色気を感じて、病みつきとなつて時に頼んで縛らして貰っているが、最近では結婚しても良いと思つて位、惚れてしまつた。だから現在の私は、洋装であれば如何なる美女にも興味を感じなくなつています。和装マニアとでも申しましょうか、何と申しましょうか。色気の無い縛りは、汁の無いざるそばと同じで、喰えたものではありません。以上は御社に對するフアンの一意見！同封しましたのは小説らしき私の拙作、大

衆雑誌に応募するため書いた作品の完成せぬ内に、思いきつて奇巧向きに書いたものです。娘の縛りに重点を置いて書いたため、筋書は全然なつていません。果して色気が出てくるかどうか気になりましてが載せて下さるなら三百枚位の作品にして毎月お送りします。当分の間、外航はなく北海道航路です。すから一度に書けない事もないのですが、応募作品を書かねばならないので、毎月三十枚お送りするのがせいぜいです。次回からは或る程度、筋道を立てますが、それでもやはり毎月責めか縛りを半分以上載せねば興味が無いと思います。取ますので五十歩百歩でしょう。取縄小町の責場を目下考慮中で、あと一人柳橋の芸者を登場さす予定。由比正雪の隠した十万両の隠し場所を三人の娘の誰かに白粉彫りしてあり、色と慾とで三人娘をめぐる悪旗本、及び悪同心、怪しい浪人者に白浪男が娘達を責めるわけですが、私は私なりに色気のある責め方をしたいと思ひます。読んで興味が湧いたら毎月連載して下さい。どの様にして三人娘を関連さすか私にも未だ解つていません。皆様の健康を祈つて。(藤井拜)

二十九年一月よりの愛読者です。最近の誌上に多くの女王様方や男性マゾの方が現れてきたのは、同様な性癖の私にとつては誠に喜ばしい事です。本誌のバックボーンは男性サドであろうと今迄特に最近ひがんでいたのですが、これからは大いに期待が持てます。その上それらの女王様方が乗馬が御趣味とは、万々才です。更に男性マゾの方でも、女性の乗馬に関心を持たれる方が、最近目立って来ているのですからこの上、申し分もありません。私もこの方に関して是最も熱烈な者の内の一人なのですから。本誌でも前に「ダイアナ夫人」等乗馬の好きな女性サディストの方の告白記事以来、時々読者欄で見かける位でしたが、今後はひとつ新しい女王様方に何かの序で結構ですから、乗馬の事、例えば乗馬の気分とか馬の責め方について書いて戴ける様お願い致します。男性の方で女性の乗馬に関心を持たれ、色々記事写真を集められていく方に、今迄本誌に発表されてない中、私が見つけたものを羅列して置きましょう。これは古本屋等でも時折見受けられるものです。(1)「婦人面報」昭和三十年八月号グラビア。(2)「主婦

と生活”昭和三十一年七月号グラビア。(3)“新婦人”昭和三十一年十月号グラビア。(4)“週刊東京”昭和三十年十月十三日号グラビア(5)その他娯楽雑誌等には小さい写真等沢山ありますがここでは省略します。亦記事では、いずれも映画女優“前田通子さん”のもので昭和三十一年十月号“映画ファン”には“馬と私と”と云う題名で彼女自身書いておられますが勿論普通に書かれていたわけでは、向この女優さんは非常に乗馬が好きだそうで“明星”の座談会でも「ひまさえあれば馬に乗っています。云々」と云って居ります。勿論私は、このような特別の意味で彼女の大ファンなわけでは、その他淡島千景、青山京子等皆同様です。(東京・馬化生)

○ 奇クの発展を心からお祈り申上げる愛読者の一人なのでございませう。私もマゾヒストとして貴誌の読者通信欄を利用させて頂きたくペンを取った次第です。鷹野めぐみ様、僕も貴女に憧れる男の一人であります。貴女の「サジスチン半生記」とても興味深く読まして戴きました。なによりも、貴女の手記が事実に基づいて書かれてい

るところに親しさと身近さを覚えた事でした。そして貴女と云う人を想像し、そのイメージを頭の中に描いては、自分も明男君や勇一君にあやかれたらどんなに素敵だろうと、心をとめめかす事もしばしばあります。めぐみ様、僕のこの夢を叶えさせて下さらないでしようか。我が儘なお願いではありますけれど……。(和歌山市中松江十区、吉野平四郎)

○ 私は憐れな奴隷です。毎日の労働に身も心も疲れ果てて仕舞い動けなくなつた時、女主人は見向きもせず市場へ売り飛ばすのです。同じ境遇の奴隷達が買主を待つてお互に楽な位置に坐ろうと醜い斗争をしています。「お前は可愛い顔をしているから私のペットにしてやろう。」私の新しい女主人はこういつて、私の首の鎖を引きながら尻をポンと蹴りました。私は喜びこび勇んで御主人の後に引かれて行くのです。御主人の家に着いた時、私の考えが甘かつた事に気がつきました。「お前は今迄教育されていたの、畜生のくせに生意気だよ。今日からはそうはいかないよ、ビシビシしつけるから覚悟を、おし、奴隷が必要なのは訓練だけ

だ。」私は憐れにも両手両足を縛られ、首縄までされお庭の杭に身動きの出来ぬ様にながれて命令通りに動き廻る家畜だったので。「さあ、朝迄、綺麗にしなさいや承知しないよ。」あゝ、又、例のお仕事です。(東京 佐伯)

○ 六月号にお二人のサジスト女性のお便りを拝見しまして大変嬉しく思いました。それに思いがけなく、お二人とも東京の方であらせられるのが、東京在住の私にとつてこの上もない喜びでした。服部みどり様、貴女様は身長にせよ体重にせよ理想的なサジスト女王様としての体格ではないでしょうか。貴女様御自身で呆れられるほどの太股に首を挟みつけられたり、十六貫の重みのある高貴なお臂に、息のつまるほど顔を圧しつけられたらどの様に幸福であらうかと、私にとつては女神の様なサジスト女王、服部みどり様に哀願のお便りをする次第です。どうかお情け深いお言葉を下さる様に心からお待ちしています。(東京・森生)

○ 小生、貴誌の大判以来の愛読者ですが、現在の社会状況の中で発行を継続せられて居る御努力を深

く感謝します。新年号辺りから又元通りの調子を取り返された様で喜こんでいます。なお今までずっと期待していたのですが、日本の文献の中で、ある意味では最もサジ的と思われる女性、大阪屋花鳥についてのレポートが全く見当たらないのが残念です。幸い、明治時代に刊行された秘本(いつの時代にも物好きがあつたのですなあ)を所持して居りますので、差支えない範囲でレポートさせて戴きたいと思ひます。娼妓上りの島抜け人殺しの女囚である彼女が、伝馬町の女牢の中で女牢名主として、悲嘆にくれる若い素人娘の女囚達を全裸にして加えた淫靡で残酷な数々のリンチは、或る程度御参考になると思ひます。(大阪・島原生)

○ 小生はサジストにして鼻に関係あるフェチスト、云うなれば鼻に対するサディズムを最も歓迎するものですが、最近鼻に関する記事がとんと掲載されず、又、読者通信にも真鍋氏、北谷氏等、鼻のペテランの御便りも見られず、淋しく存じていました矢先、一月号の甲斐氏の「電気責に関するノート」には圧倒されました。特に五

十頁下段の「……マダムは髪を撫
んでいた左手を離すと、女の涙と
鼻水に濡れて光っている鼻をギョ
ウとつまんで……」及び三月号の
同じく「電気責」の鼻腔に電気棒
を挿し込む場面等、甲斐氏の今後
の記事には大きな期待を持って居
ります。大体、責めの場面で責め
られる側は必ず泣きわめいている
筈ですから、涙と共に鼻液の出な
い筈がなく、今迄その描写がない
のに、実は物足りなさを感じてい
ました。ところが、甲斐氏のこう
したりアルな表現を読み、思わず
快報を叫びました。それと同時に
私を喜ばしたのは、土路氏の「
続・潰滅の前夜」の連載です。三
月号の「鼻腔からは半透明な液体
が流れ……」……伶子の鼻腔か
ら粘液が流れ出し……」又、四月
号の「家畜灰皿の鼻腔へ嗅い残り
のシガレットを……火は中の粘液
を吸い……」又、百二十
五頁上段「……涙が汗が鼻液が顔
中を濡らす」等々、いずれも小生
を有頂天にさせて呉れる描写でし
た。口絵に四馬孝氏の麗筆の見ら
れるのも嬉しい。鼻腔描写の得意
な同氏の口絵を今後も毎号欠かさ
ず載せて下さい。甲斐氏案、文、
四馬氏画の「涙のダイヤモンド」

なる画集、発売予定の由、期待し
て御待ちしています。

(岡山・江藤恵夢)

六月号を読みましたが、相変ら
ず切腹記事は寥々たるものであり
ますが、会津波羅木利会一同の切
腹通信は異色の有るもので、男性
切腹の須藤氏の「中康弘通氏に寄
せて」の切腹随想と法谷氏の曼陀
羅図絵の力作二篇、共に有難く読
ませて頂いた。会津は少年集団切
腹の白虚隊や少女集団切腹の磨上
原等、悲史に飾られた土地だけに
切腹願望の波羅木利会が存在する
のも宜なるかなである。同会の規
約や行事等を知りたいものだ。道
子氏の「白妙」の二首は特に感銘
を受けた。久子氏の壮挙をお祝い
申上げる。是非その体験談を发表
して頂きたい。小生の様な柔弱者
は会津女性の心意気を聞かして頂
いて少しでも鼓舞されたい。須藤
氏は男性切腹愛好家で今は自分と
は肌が合わないが、私は最初と同
じ男性切腹マニアだったので共鳴
は感じている。記事中、裁断鉄に
よる婦人の割腹の話は珍らしい。
又小姓姿の女性の立腹の挿画はも
うけ物だ。法谷氏の唐獅子家に
まつわる切腹譚の数々は太いに期

代理部分譲品総目録中、左記
の組のみ当分分譲を続けま
すG組 大中判印紙画焼付

各組	一枚	一枚
1組	五枚	六〇〇円
	十枚	一〇〇〇円
		(送共)

G1	鉄鎖と柔肌(高瀬 忍)
G2	股間縛正面(高瀬 忍)
G3	海老晒し(萩千恵子)
G5	羞紅の椅子(菅登紀子)
G5	量感の帯(伊吹真佐子)
G6	アイデア(萩千恵子)
G7	叫喚の森(伊吹真佐子)
G8	全裸目隠し(村田那美子)
G9	優すがた(花坂道子)
G10	開股一番(萩千恵子)
E組	(9×13cm印画紙焼付)
ES1	ヌード緊縛集(佐賀)

ES2	三枚一組 全裸悦唐集(須川)
ES3	四枚一組 腎 羞(佐賀)
ES4	三枚一組 酒宴の弄者(佐賀)
ES5	二枚一組 脱がされる娘(須川)
ES6	五枚一組 あわや寸前(佐賀)
ES7	二組一組 剥れたズロース(佐賀美智子)
ES8	七枚一組 乙女のすべて(花坂)
ES9	二枚一組 女学生の縛り(須川)
ES10	六枚一組 緊縛のベッド・シーン(佐賀美智子)

最後に、誌面の少いところを無理
を云って済みませんが、時々、女
体切腹写真も載せて頂きたいと思
います。(兵頭庫一)

鷹野めぐみさんの「サジストの
記」を読んで、S及びMの傾向を
持つ人は多いでしょうが、大抵は
相手を得られぬまゝに内攻し、忘
れるか(この場合は問題外)苦し

むか、どちらかでしょう。相手を求め、そして得てそれを行動に移すことは難かしい。単なる性衝動ならば処理する方法もあるでしょうが、いわゆる隠れたものとなると、そう簡単にはいかない。一人でいたずらに悩み苦しむわけです。(これ等の内攻性の傾向に一種の発散作用をしているのが奇巧ですか、大切に育て、戴きたいものです) こういうことを考えると「サジストの半生記」の「私は秋子に自分の必要でなくなったものを飲ませました(中略)今でも一人の男に対してやっています」や「サジストの記」の「私に呼びかけて下さった方へ(中略)近々必ず何等かの方法で御返事申し上げます」ははつきり行動に移し、自由奔放にぐいぐいと生活していること、なか／＼出来ることではあります。鷹野さんの、自分の傾向に適した生活態度を誌上で拝見している、自分自身の生活態度が歯がゆくなってきました。最近、読者通信にS傾向の女性が堂々と名を連ねているのは、M傾向の男性にとつては有難いわけで、私も誌上を借りて呼びかけてみたくなりました。鷹野めぐみさま、服部みどりさま、三木恵子さま、森山美

歌さま、その他のS的御婦人の皆さま方、気が向いたら何等かの形で御連絡下さい。(東京都港区芝白金三光町二六九、砂塚啓三)

○ 活発なる読者通信を拝見し御同慶にたえません。これだけ同好の士がおられるということは心強い限りです。灰色の人生に退屈した小生に、鮮烈な美の世界を啓示してくるのは奇巧だけです。小生はサジストですので、特にこの傾向のものを好みます。しかし、サジズムとマゾヒズムとは表裏一体のもので、この点、サド、マゾヒズムという呼称は適切だと思えます。サジズムの最も洗練されたものは心理的サジズムだといわれますが、確かにそうかと思われまう。けだし、女性にとつて最大の苦痛は羞恥でしょうから。同好の方々、が相協力してアブノーマルな美を追求し、これを現出しようではありませんか。なお、以前「女囚体験記」を發表された小坂多美枝様おられましたら、誌上で御返事下さい。(横浜、K・S生)

○ 待望の素晴らしい責画「涙のダイヤモンド」御送附下され有難う存じました。責めに関しては、奇想

天外の案を持たれる甲斐氏のアイディアに、加えるに艶麗なる近代女性責画の権威、四馬画伯。このコンビには絶対の期待を寄せていました。案にたがわず充分に堪能させて貰いました。先ず、その豊かな肉体の描写の水々しさ、苦悶の表情の生々しさ、ウットリと見とれました。「ヒマシ油責」ではゴムのスポイトを挿入された側の鼻腔が拡張されて、小鼻が盛り上っている所等、些細なデテイル迄描写された四馬画伯の神経の憎らしい程のこまやかさ。続けて(四)以外のシーンの責画の分譲されん事を待っています。七月号にて「続・潰滅の前夜」の休載、残念でなりません。甲斐氏の「水責めに関するノート」は楽しく読まして戴きました。同氏の「〇〇責のノート」シリーズ、続けて執筆されん事を切望します。(江藤恵夢)

○ 奇巧を読んで、浣腸マニアの方がいらつしやつたので、心強く思いました。同好の方と文通やお話をしたいと思えますが、お便り下さいませんか。それから、小生から月岡映子様、貴女の作品は小生の空想していたことと同じです。御住所をお知らせ願いたいと思いま

すが如何でしょうか。(東京都墨田区千川橋二ノ八、田中敏雄)

○ 小生も愛読者の一人です。毎月素晴らしい体験や告白等を誌上に載せて下さいまして、胸がときめく思いです。特に切腹の方では、藤山秀緒氏の乗馬服や飛行服での女腹切は、小生の切腹願望に対してエンピリーションを起して下さいました。法谷四郎、田谷敬生、中康弘通の諸先生方、河合伊都子様瀬川泰子様、今後共、素晴らしい作品を書いて下さい。六月号の会津波羅木利会の切腹の短歌は素晴らしいもので。久子さんは、よく女の身で思い切ってお腹を召された事と感心しました。

○ (山形・高橋孝郎) 七月号の北原氏の口絵は、従来のどちらかと云えば静的な縛り絵から、動的な責絵に新境地を開かれた傑作として、その異常な迫力と耐らない被虐美に感服致しました。涙をたゝえた惱ましい目、呻き声の聞えて来る様な可愛らしい口、肉感的な乳房からふくよかな腹への曲線、更に唇、首縄、算盤木に彩られた血の凄まじい魅力、更に素晴らしいもので御座居まし

た。読み物では「マツトに生きる夢」「黒いベチコート」「L.T.商会」「南支那海の鬼」等、極めて興味深く何度も繰返して楽しく拝見致しました。土路様、貴兄のイメージ、面白く拝見致しました。

しかし「潰滅の前夜」がもうすぐ完結とは、何とも淋しい気持が致します。引続き御作品に接するのを熱望するのは、小生のみではないと思います。又、小生の愚作に過分の御言葉、有難うございました。御目に掛かれる日を楽しみに致して居ります。H様、御言葉痛み入ります。流腸責もそのうち纏めたく思つて居ります。今後共、御鞭達の程願ひ上げます。南川和子様、何か御参考になるものもあるかと存じますので、御親書戴ければ幸甚で御座居ます。小生のアド

三条春彦・画

未製本 時代物責絵巻

八枚一組 百五十八円（送共）

【内容】一、山法師と静御前、二、女スリと岡引き、三、淀君と千姫、四、犬公方と侍女、五、八百屋お七の最期、六、新選組と芸妓、七、十郎左門と腰元八、小紫と悪旗本、以上八場面

レスは二月号の読者通信欄の末尾に御座居ます。（甲斐仁参）

○ 四月号読者通信欄の「失念」様当方の不行届から御迷惑を掛け、申訳ありませんでした。やがて都合により、神奈川方面に移転の予定で。しかし、それまでは御承知の番地の「早川」方ですから念のため誌上より報告とお詫びを致す次第です。尚、転居後は、直に其の旨、関係箇所へ通知する事に致しますから、今後共、宜しくお願い致します。読者通信欄を拝読する時、どなたの場合でも意見や傾向が一致する事は仲々むづかしい事と思えます。しかし、当欄に於て量的交友を計りたいとは殆んどの方が考えられる事でしよう又、同好の方に限り本名が記載してなくて残念至極です。

（原俊行）

○ 風薫る初夏、類誌復刊の此頃、奇巧の内容の充実を喜ぶ次第です。巻頭口絵を十頁にされては如何です。最近では四馬氏一辺倒の感があります。北原、滝、両氏の画もお願い致します。佐川氏へ、「L・T商会」の内部の紹介がすめば、買取先に於ける品物の取扱方（生活）

について書いて下さい。復刊以前の本誌の作者の御寄稿を御待ち致します。又、来年の一月号より本誌を増頁されてはどうですか。（大阪T・A生）

○ 近藤一様へ、私への通信をありがとうございました。実は近藤様からの御忠告を頂戴する前に丁度先々月の最終日曜に、従兄が東京から帰つてまいりまして、思いがけない事から秘密で本誌に寄稿してあります事が知れて、案の定、叱られてしまいましたので、本当は先月限りで奇巧とはお別れする筈でしたが、長い間、お世話になりましたのでお礼奉公のつもりで、もう暫く、枯木も山の賑いの存在を続けさせて頂く事にきまりました。佐々木様への回答文は、私は従兄の事だけをお話したかったもので、そのためにそんなに何人もの「健」と仰言る方が迷惑なさろうとは夢にも考えて居りませんでした。たけれど、これはうっかりでございました。今後もある事です。で、御注意頂けた事を身の幸いと思つて居ります。「じょうらんかい」という同窓会員名簿の事は存じて居ります。尚、従兄と申して居りますが、本当は天にも地にも

唯一人の兄でございます。この事の訳をお話してきますと、それこそ日本中の原稿用紙を買い集めても足りない程の、身の上話を申し上げなければなりませんので止めて置きます。近藤様が、私の性格に就いて御指摘下さいました御 Кей 眼にはオドロイてしまいました。敏感なる頭脳をお持ちなんですからね。批評家になられたら御立派なのだと思います。（京都・北原純子）

（京都・北原純子）

○ 私は二月号のこの欄に一度掲載して頂きました一女装愛好家であり且つ洋装責マニアであります。その時、映画「魔の花嫁衣裳」のシーンについて、私の意見を述べさせて頂きましたが、その写真を載せて下さいませ。純白のワンピースに真珠の首飾りをした一女優が、折檻を受けている場面です。私は洋装で好きなのは、首飾りと耳飾りをつけることです。耳飾りのネジを強くしめると非常な痛みを受けますし、首飾りは首環をはめさせられている様な冷たい感じを受け、何とも云えぬ気分になります。但し、首飾りは垂れ下っているのではなく首の周りに固定したもので、一重でも二重でもよろし

いが、必ず真珠か練り玉の様なもので、細い鎖は駄目であります。写真のモデルには出来るだけ、この様なアクセサリーをつけて下さいます様お願いします。

(大阪・森田二郎)

○ 遂に出た六月号「潰滅の前夜」のアクロバット応用の肉体機能検査のシーン。膝をついて肉体を後に反らすのは、絵でも実演でも格別、奇とするに足らぬポーズであるが、両手を後に縛られ頭に拘束具を冠され、之に繋がった紐が股の間を通して前のクロロへ巻かれるに従って、やがては完全に肉体が丸く曲げられ頭が尻につく。この絵こそ我々のアクロバット・マニアが求めに求めていたものであり久しぶりに渴を慰したものと云えよう。説明も「少しトウが立っているが曲るかな」と無難作に女の肉体を扱い、検査する処は甚だ好い。前編に、元スチアーデスが皮鞭の下で、アクロバットを仕込まれる描写が出て大いに期待したが余り長い場面でなく惜しく思っていたが、この創作のテーマより、捕われの女性を家畜同様、愛玩用に仕込んでゆく意味から、アクロバットの訓練場面は当然、採り上

げてもよいものと思っていただけに、全く快哉を叫びたい。滝氏の挿画も亦、仲々よい。これ等に題材を求めれば「潰滅の前夜」もまだく変化に富んだ続稿が期待出来る。足を前後、又は左右に引きのばして、股を床へ密着させる。足首を台へ金具で固定して、頭を前、又は後に引いて股の間に入れさせる。左右に足を延して股を床へ密着させ、足首と首に棒を通して、上った棒の片端を踏みつけ別の足首を通して、両足首と首とを一本の棒で通す。更に俯伏にさせて両足を上へ反らさせて首の前の床へつけさせ、その股に男が乗る。両手と両足で仰向けに身体を支えさせて腹に男が乗る。これを二組作って早くつぶれた方を、罰として責める。これ等のシーンは、アクロマニアの待望のものではないでしようか。同時に必ずこれ等のそばに鞭を持った男とか、責めの道具とかを添えて貰いたいと思います。

(東京T・U生)

○ 御誌愈々隆昌充実、本当に嬉しく思います。殊に本年に入ってから我々の期待を一步一步満たしてくるようであり、六月号、七月号は殊の外によかった。先日

日曜日、はからずも蔵書整理中のところ、御誌の大判時代のものが十数冊出て参り、まことになつかしく拝見、その中、岡田咲子氏、緑猛比古氏、片矢薫氏の作品なんかは、今読み返してみても全く素晴らしい悦虐小説で、思わず知らず日曜日の午前中を、それら御誌旧号の読書に過してしまった。それで考えたことだが、大判時代の御誌は現在の読者の中でも読んでいない人も多かろうと思うので、この中で傑作の小説に挿絵を新しい北原純子さんにでも書いて貰って別冊として発行されてはどうだろうか。実は私も、はからず旧号を読み返してみても驚いた次第で敢て、ここに提案してみようと思う

(静岡・間々生)

○ KK七月号についての感想。藤見氏に代って登場しました星光一氏の「私の本箱から」は非常に貴重な文献資料だと思えます。次回の探偵小説のしぼり場面は大いに期待しております。切腹物は余り好きではないのですが、本月号の伊藤晴雨氏の「女血だるま」の挿画は迫力もあり、すばらしいものです。尙アート紙上の花坂道子嬢の艶姿集もたまりません。可憐で

痛々しいポーズが何とも云えませんが、此の四枚の写真が入っただけで口絵に一層のポリウム感が加わりました。私も約半ケ年にわたって誌上を汚させていたきました。が、その間の編集部の方の良心的な指導には全く感謝せずには居られません。今後は再び読者として愛読して参ります。最早や私にとつて「KK」は引続いて愛読せずにはいられない程の存在となってきたようです。

(東一郎)

○ 貴誌七月号拝見、伊藤晴雨先生の「女血だるま」は歌舞伎に詳しい先生のおかげで貴重な資料を拝見出来ました。小生、健康に恵まれず芝居を観て研究する余裕がなかったため全く芝居の方は不案内ですが、三方と供養に就いては切腹口決とか、自刃録などの古い文書では、三方というこつて居ります。何れも図が示されています。将が、やはり穴が開いています。将来機会を得られれば芝居もよく調べたいものです。恐らく機会に恵まれますまい。此のところ、ハワイの二世観光団が「白虎隊自刃図」に感激して買って帰ったとか、日本専門店会の全国大会で若松のパレードが少年白虎隊と女白虎隊

の踊りであつたとかの資料を寄せ
て頂いたところを見ても白虎隊の
壮烈悲愴な最期が深い感銘を今日
に伝えていゝことがわかります。
それに就いても小生の拙い文章を
読んで下さった方々の中に、永く
筆を絶つた今日も尚、こうして資
料を寄せて下さる方があるのは誠
にありがたいことだと思ひます。
写真を送つて下さった方もありま
す。尤も是は小生の努力というよ
りも、日本武士道の発露として切
腹の精神が日本人の心奥に深い感
銘を与えるからであらうとは存じ
ますが――。

(中康弘通)

復刊以来、着実な御発展をなさ
れつつある御様子、殊に嬉しく思
つて居ります。七月号のグラビヤ
は特に鮮明で、殊に立派な出来映
えでしたが、記事の方は何となく
一方に片寄つた編集の様に思われ
ます。今までですと、各分野に平
均に記事の割当が出来て居りまし

たが、七月号ではこれが不公平と
なり、コルセットに関するものが
皆無であるのは、残念に思われま
す。貴誌とされましても色々御都
合があることと思ひますが、多く
の者が満足出来る様な編集を望み
ます。例えば女装に関するものが
二編あれば、一編は全部発表し他
は二ヶ月に分割して連載すれば、
少しでも頁の都合がつくと思ひま
す。同一のものが重複することは
数多い読者に対して殊に不親切と
思ひます。それでなければ同一で
あるという理由で、オラミの連載
を中止しヤプー一本槍にされた努
力が無駄にならないでしようか。

(松本生)

服部みどり様、七月号の読者通
信にてお便りをお願い致しました
が、未だ頂戴出来ないので大変悲
観して居ります。東京、新橋局止
にて、是非是非お便り下さる様御
願ひ致します。小生については、

◎次号の本誌は七月上旬発売です

本誌は今後毎月上旬発売の予定です。三ヶ月分、半年分予約の
方々へは出来次第お送りいたします。毎月お申込の方は、下旬頃
までに誌代のお送りを願ひます。

奇ク本年三月号、百七十五頁、四
月号、九十六頁、六月号、百五十
一頁、七月号、四十二頁を御参照
下さい。沼正三様、お元気の事と
思ひます。七月号の読者通信にて
貴兄と一ヶ月交替で、雑報欄を書
こうと御提案申しましたが、よく
考えてみると、雑報というものの
性質上、一月交替ときめてしまふ
のも、少し無理ではないかと思わ
れます。幸い今日から小生も「生
活と意見」という欄が頂戴出来た
ようなので、ここでは小生は時評
雑報をさせて頂くことにしますか
ら、貴兄も貴兄の雑報欄をお続け
になつては如何でしょう。貴兄と
小生は読書範囲が可成違ふよう
すからいつも小生は貴兄の雑報を
楽しみにして居りますし、報告が
ダブつて困る事もまずあるまいと
思ひます。何分にも誌上を借りて
のみの御相談は全く靴の上から足
を搔く思ひです。御健筆を祈りつ
つ期待します。

(麻生保)

○

四月号を拝見しました。貴誌の
復刊を心から喜んでおります。恥
しいけれど以前から誰かに縛られ
責められる事を望み空想して居り
ました。でもこういう事は人にも
言えず唯小説等によつて僅かに自

分を慰めていました。でも、貴誌
を通じてサジストの方と文通する
事が出来たらと、四月号の読者通
信を拝見しましたが、皆様が東京
や関西ばかりなので、がっかりし
ました。仙台の近辺の方でしたら
すぐにもお目にかかりたいと思
つておりますのに。できまじたら
どなたか誌上で住所姓名を御発表
願ひしないでしょうか。此の様なお
便りをしたことがないので、胸が
どきどきして居ります。私は二十
八才の女性で五年前に一度結婚し
ましたが、二年程前夫に死別しま
した。現在レジスターのセールス
マンをやつております。どなたか
お友達ができたかとそればかり望
んでおります。どうかよろしくお
願ひいたします。

(仙台市 花村ミチ子)

○

△本便には住所本名を明記してあ
ります。御本人の希望により特
に伏せておきます。▽

私は数年前から奇クの愛読者で
す。遅ればせながら復刊を心から
お喜び致します。今日迄、読者通
信を通じ友を得たいと何度思った
かもしれませんが、心弱くも今迄
思い留つておりました。通信を出
すのは今回がはじめてです。私は

何時頃から此の様な性格に転じたのかよく解りませんが、年若くして海軍に入り、二十才前には下士官に進級していました。(現在満二十八才)その頃から奴隷の立場にある者をムチ打ち責める立場になることを望んでいました。健康美溢れる同性を足下に屈伏させ、ムチ打つことによって私の異常な心理は満足させられました。別に理由といったものはありませんが、男性の裸体には特に興味を持ち、ポディビルさえ全裸でやったらと思う位です。従って女性には全く

無関心で、健康な男性を思いのまゝ両手両足を縛りムチ打ち、再び以前の夢を呼び起すことができたらと空想しただけでも胸が躍ります。この様な異常な私の性格に同調される読者があるかどうかは疑問ですが、只傷付いたりすることは望みません。従って六月号誌上青葉氏の加虐送別会の人物、堀川先生や四月号の読者通信にありました同性に責められる事を希望する失念生氏の如きは、小生のよきパートナー的存在です。年令には無関心ですが、もし、そのような

読者がありましたら、せめて文通だけでもしたいものです。

(山口 松田生)

△指定通りの匿名です▽

○ 小生、女斗美の大ファンです。

現在女斗美を扱う雑誌は奇巧しかないので毎号読んでいますが、最近記事が少いので嘆いています。是非女斗美の記事を沢山のせて下さい。特に女子高生生の相撲に興味を持ち自分でもいろいろ写真を撮っています。読者のなかにも女斗美の写真か絵を持っている方があったらおゆすり頂けません。か、小生の作品と交換でも結構です。(東京都大田区池上徳持町一の十一白石和夫)

○ 小生、本年三十四才、五才二寸

十四貫、某大学出身の公務員です。実は小学校の頃から女性によって馬乗りになられ、又は仰向けの姿勢で顔の上にべったりお尻を乗せて坐られる等、とにかく女性の下敷になることに興味を持ち続け現在まで人知れずこの悩みに悶々としております。勿論正常なことには全然興味なく、小生の社会的地位等からして随分今までに結婚

話もありましたが、もしこの様な性格の小生に対して妻から離婚問題を出されてはと、結局現在まで独身で通してしまいました。たまたま東京へ出た折など赤線地帯の女を相手にプレイを要求してみましたが、なかなか思ったようにしてくれません。読者のサド女性のうちで(二十歳台)小生のような者でも希望をかなえてやりたいと思うお方がありましたら文通なり交際なりを切願致します。(下敷男)

○

私は当年二十八才、あるキャバレーのダンス教師をやって居ります。子供の頃からマゾの素質が有りまして、よく女の子に泣かされたものでした。現在のお店は若くて美しいオキヤンな女性が多く、その点では恵まれて居ります。でも私のマゾであることはつとめてかくして女の前ではわざと元氣よく男らしく振舞っております。仕事の性質上そうしないとやりにくいです。鷹野めぐみ様、僕とおつき合い願えないものでしょうか。貴女を幸福にする自信はあります。つき合ってみて僕がお氣に召したら結婚していただきたいと思います。

甲斐仁参案 四馬孝画

『涙のダイヤモンド』

(略号
(なみ))

大中判印画紙焼付 二枚一組 三百円

胃の洗滌

彼等に手取り足取りされた娘は真白い肉体を梯子の上に仰向けに固定され、両腕は後手に梯子の下で縛られ、両足首はそれぞれ梯子の横に縛りつけられた……ゴム管の端についた漏斗からは、幾杯もの水が次々と注ぎ込まれ、胃が水で一杯になるとゴム管を引き出し、梯子を逆さ

ヒマシ油責

マダムは娘の手足を奇妙な椅子に縛りつけさせた。尻当てのない骨ばかりの罪の椅子に全裸のまま坐らせられた娘は……△詳細解説は本誌七月号一六四頁に掲載してあります。▽

貴女は若くて美しい方に違いありません。僕はマゾですが十人並以下の女性にはマゾを感じません。痩せこけた、世間一般の男からは見向きもされない。只サドだという丈で大きな顔をしている様な三十女には興味がありません。やはり女性の魅力は若さが第一です。又、私自身も決して貴女を失望させない自信があります。(五尺六寸五分、十六貫)頭にチョンマゲをのつけたら、そのまま国技館でフンドシカツギ位には通信しそうなフトツたオジサンではありません。(貴女のお尻でつぶされたい男より)

△末尾に住所本名を記入してありました、発表してよいという指定もありませんでしたので省きました。

○

以前からの愛読者で現在も引き続き愛読いたして居ります。休刊で姿を消した時は本当に淋しゅうございました。休刊以前はとびとびに七、八冊所持して居りました。が今から考えますと、まったく馬鹿馬鹿しい羞恥心から転居の際のゴタゴタで全部焼却してしまいました。併し一度味った禁断の木の実は忘れるどころか、いや増す

欲望をそそのめるのみでございす。見落した号の記事、フォト、あゝこんなにも読みたい見たいという気持ちを抱いていながら、何故全部購入して保存しておかなかったかと後悔の念で一杯でございす。復刊号は前例にこりてバックナンバー全部を揃えておりますが、なんとかして豪華な休刊前の旧号が読みたい、とても入手出来ぬと思えば尙更に、のどから手が出る様な欲求にかられるのでございす。読者の皆様の中で、御不用の旧号をお持ちでしたらお変り下さい。皆さまの手放したくないお気持ちよくわかるのでございす。どうぞ、マゾの一女性の切ない願いを叶えて下さいませ。読者らんに浜田佳子宛、皆さまの御住所だけ教えて頂ければ早速お便りさせて頂きます。恥しいので住所は伏せさせて頂き申訳なく思うのですがお許し下さい。(千葉 浜田佳子)

○

三月号より奇クの愛読者です。初めてお仲間入りさせて戴きます。小生身体強健、二十四才になる大阪の一青年です。近頃サデマゾ半々に興味があり、小生の同じ性質の方があれば文通して出来れば色々の緊縛プレイを楽しみたいと思

っています。それに揮、浣腸にも少なからず興味を持っています。同好の方は左記へお便り下されば御返事いたします。最後に奇クの発展を祈ります。(大阪市東淀川局私書箱二十号)

○

KKは相当以前から愛読して居りますが、読者通信欄を見て居ますと福岡在住の方々が殆ど見当りません。大変寂しい事だと思ひます。当地に於ても本誌が相当数販売されて居る様子である以上、SにしろMにしろ多数の同好の男性や女性が居られる事と思ひます。

○

いた経験がありますが、何れもまだSとしての自分の満足を完全に充す迄にはゆきませんでした。其の他仕事の面を通じて相当広い範囲の各職場にある女性達にそれとなく服装の面等でMの方向へ誘導したことがあります。通信欄に於て相当経験豊富な方々が居られる様ですが、うらやましい事だと思つて居ります。今後も本誌を愛読して行く上で皆様方の貴重な御意見をお聞きするのを楽しみにしております。(福岡 K・S)

東京や大阪方面では既に各々同好の集いが出来て、文通、資料交換研究会等活発に動いておられる様です。是非福岡在住の方々にもどしどしこの通信欄を活用して大いに団結を図ろうではありませんか。私は数年前まで、職場の若い女性達に軟式テニスのコーチとして徹底的に激しい練習を強いて自分のSを或程度満足させていました。それと共に一方に於て戦後急激に隆盛になり大衆化した摩登バレィや特にアクロバット等に知人の紹介で深い興味を持つと共に職場の女子職員から同好者を集めて舞踊の本筋を失わぬ程度に無理を強

奇ク七月号を拝読いたしました。いつもながらの素晴らしさです。今後ともしつかり頼みます。奇クのある限り永久に我々は生甲斐を感じます。森山美歌様、恋しい森山美歌様。七月号の読者通信拝見いたしました、まだ見ぬ女王様への手紙を書いた次第です。私は今年廿三才になる空想好きな青年です。私が初めて奇クを読んだのは、廿八年の九月号でしたが、美歌様の「続悩ましのサディズム」を読んだ時の切ない胸のときめき、何度繰り返えて読んだことでしょうか。

(東京渋谷生)